スラブ研究センターの40年

札　幌
北海道大学スラブ研究センター
1995

はじめに

本書は、北海道大学スラブ研究センターが1995年7月に創立40周年を迎えるのを記念して、これまでの活動の記録を集めた資料集です。

40年は人間で言えば不惑の境ですが、旧ソ連・東欧という複雑な性格を持った地域の多分野にわたる研究を目的とし、また国立大学に属する全国共同利用施設であるという、多重のアイデンティティを持つスラブ研究センターは、安定という概念とは遠いというのが現状です。むしろセンターは、内外の様々な研究者がそれぞれの目的を持って集う、不定形の開かれた場所であることを理想としています。

本書に収録した文章や資料に見られるように、センターに直接かかわった諸先輩の仕事の性格も、またセンターに対する考え方も、じつに多様です。一貫するものを求めるとすれば、それは研究対象についてできるだけ多くの資料と証言を集めようとする資料重視主義、および複数の観点からの議論を通じて認識を深めようというフォーラムの精神と言えるでしょうか。歴史の中にそのようなことを学ぶことができたという点でも、本書の編集は我々にとって有益なものでした。

わずか40年の歴史とはいえ、80年代半ば以降の着任者が多い現在のスタッフにとって、正確な事実を集めることはなかなか困難でした。とりわけ事務系の仕事でセンターを支えてくれた方々について、調査の行き届かなかったところがあるかもしれないと恐れています。今後の記録のためにも、読者の皆様からの補足や訂正を歓迎いたします。

最後になりましたが、センター史に関する文章の転載を快くお許し下さり、また50年代の写真をはじめ貴重な資料を御提供下さった、鳥山成人先生、外川継男先生に、深く感謝申し上げます。

スラブ研究センター創立40周年記念資料集編集委員会

スラヴ研究室会議
1953年11月23日
於東京女子大学

スラヴ研究室会議
1954年10月 9 日
於宮部会館

石造のスラブ研究施設図書館
(旧札幌農学校昆虫標本室)
1962年頃

旧スラブ研究施設棟玄関
1962年 2 月

旧棟会議室風景

1962年頃

スラブ研究施設会議　1974年

会議風景　1975年頃

施設設立20周年記念祝賀会
1975年

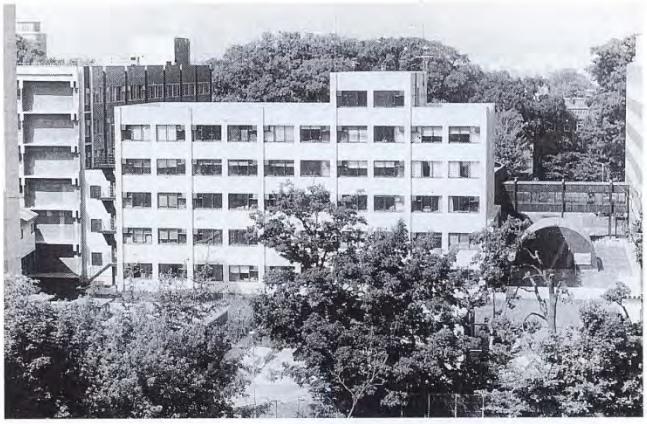
施設設立20周年記念祝賀会
1975年

スラブ研究センター設立記念祝賀会
1978年

研究棟の変遷

初期の頃
(ロシアの百姓小屋に似ていたのでイズバーと呼ばれた)

1978年センター設置の頃



1981年増築された研究棟
(2・3Fは法学部)

現在の研究棟玄関

スラブ研究センター研究棟落成式
1981年

ソ連の通信社一行の訪問
1989年 6 月

ラウンジとソ連テレビ受信機
1988年

夏季研究報告会　1988年

国際シンポジウム　　1993年

シュミット元独首相を迎えて
1987年 5 月25日

公開講座風景　1989年

全国共同利用施設
設置記念特別講演会
1991年１月24日

現在のセンター・スタッフ
1995年６月19日

（70年代までの写真は鳥山成人氏、外川継男氏にご提供いただいたものです）

目　　次

1. センター史を振り返る 1
スラブ研究センター40周年によせて 3
スラブ研究施設史 15
ファーズ博士のこと 18
木村彰一教授と北大のスラブ研究 22
スラブ研究施設回想 28

2. 研究員リスト 33
センター長・施設長・主任 35
専任スタッフ 35
客員教授 37
外国人研究員 37
共同研究員・兼任研究員 41
協議員・運営委員 43
事務官 45

3. 研究報告会リスト 47
夏期・冬期研究報告会/国際シンポジウム 49
特別研究会・北海道スラブ研究会・昼食懇談会等 81
専任研究員セミナー 96

4. 出版物リスト 99
和文紀要『スラヴ研究』(1957-1995年) 総索引 101
欧文紀要 *Acta Slavica Iaponica* (1983-1994) 総索引 113
その他出版物タイトル 121

5. 図　　書 125
スラブ研究センター図書室の歩み 127
図書室の現状 149

6. その他 151
海外の研究機関との協定 153
協定に基づく交換研究者名一覧 154
公開講座 154
鈴川基金奨励研究員 157
文部省科学研究費補助金 161

7. 年　　表 165

1. センター史を振り返る

望月哲男　スラブ研究センター40周年によせて

出典『スラヴ研究』No. 42 (1995年 3 月) 1-13頁

外川継男　スラブ研究施設史

出典『北大百年史　部局史』(1980年 3 月) 329-334頁

岩間　徹　ファーズ博士のこと

出典『スラヴ研究』No.20 (1975年3月) 215-219頁

外川継男　木村彰一教授と北大のスラブ研究

出典『スラヴ研究』No. 33 (1986年 3 月) 109-115頁

鳥山成人　スラブ研究施設回想

出典「座談会　鳥山成人先生を囲んで」『北大史学』
第25号 (1985年 8 月) 4-8頁

スラブ研究センター40周年によせて

望月哲男

はじめに

スラブ研究センターのもとになる組織は、1953年6月に官制によらない北海道大学学内共同研究機関「スラヴ研究室」として誕生し、2年後の1955年7月に、国立学校設置法に基づく同法学部附属「スラブ研究所」として正式に発足した。この組織は後に「スラブ研究室」さらに「スラブ研究施設」と改称され、1978年に北海道大学学内共同教育研究施設に改組されるとともに、「スラブ研究センター」と命名された。1990年には全国共同利用施設へと改組されて現在に至っている。今1995年は、センターの制度化以来40年目にあたることになる。

フルシチョフ時代から社会主義ソ連・東欧諸国の終焉後までを含むこ;の40年間に、世界の政治、経済、テクノロジー、コミュニケーション、学問、思想などのあり方が大きく変化し、日本のスラブ研究もまた変化を遂げた。これを機にセンターの歴史を振り返ることは、戦後のわが国における外国研究の推移を知るうえでも一定の意味を持つと思われる。

しかしその意味で残念なことに、センターは最近十年ほどの間に頻繁な専任研究員の交替を経験しており、現在の研究部門には創立期の事情はおろか80年代前半の雰囲気をじかに知る者も存在しない。したがって以下略述しようとするセンターの経緯も、その多くの部分が間接資料に基づくものとならざるを得ない。

幸いセンター史に関心を持つ者のためには豊富な資料が残されている。学内共同教育研究施設「スラブ研究センター」が発足する78年までの経緯については鳥山成人、岩間徹、外川継男各氏による複数の歴史的な記述や回想[1]があり、また70年代の施設のパンフレットや紀要『スラヴ研究』などによって、その活動の概要を知ることができる。それ以降の経緯についてはまとまった歴史記述は存在しないが、センターへの改組と同時に発行され始めた『スラブ研究センターニュース』、『スラブ研究センター研究報告シリーズ』などの出版物が、活動の内容をかなり詳細に伝えている。

本稿は以上のような資料を踏まえてのセンター略史であるが、前半20余年に関しては上記の諸先輩による詳しい記述が本誌にも収録されているので、筆者としては主として施設の設立期に関する重要事項を整理するにとどめ、80年代以降の出来事に重点をおくこととする。また組織としてのセンターの経緯を語るという性格上、研究活動の具体的な内容、成果や、個々の研究員のプロフィールといった事柄には立ち入らない。その意味で以下の文章は「顔のない」センター史となっているが、センターにかかわった人々やその活動の詳細については、本誌の資料部分を参照いただければ幸いである。なお図書については、1966年以来ライブラリアンとしてセンターの図書業務全般に携わってきた秋月孝子助教授が本誌に寄せた文章をお読みいただきたい。

本文中で個人名に言及する際は敬称を省略させていただいた。肩書や組織名称等は断わりのない限り当時のものである。年号の表記は西暦に統一した。なお1955年に発足して77年度まで存続した組織は、前述のように2度改称されているが、今日では62年以降適用された「スラブ研究施設」という名称が一般化し、外川継男の記録も大学の記録もそのように統一されているので、以下の文章においてもそのように総称することとする。

1. スラブ研究センター前史(1953-78)

北大にスラブ研究のための施設が設立された1950年代は、第二次大戦前夜に日本の学術機関における制度的な足場を喪失していたスラブ研究が、再び大学に定着しようとする時代であった。国立大学の中では北海道帝国大学が戦後最も早く1947年に法文学部にロシア語ロシア文学の講座を作っており、同年に赴任したスラブ言語・文学研究者木村彰一が、スラヴ研究室およびスラブ研究施設の生みの親の一人となった[2]。

多くの組織がそうであるように、スラブ研究施設も当初から明確なアイデンティティを持っていたわけではない。外川継男の記述によれば、官制化される以前のスラヴ研究室創設にかかわった少数の人々の間でも、組織の性格に関するイメージは必ずしも一致していなかった。すなわち一方に言語・文学・歴史など人文系のスラブ学の場を国立大学に作ってゆこうとする木村彰一文学部教授(スラヴ研究室主任・スラブ研究所初代主任)や鳥山成人文学部助教授(同第2代主任)の意志があり、他方に北大のユニークな研究施設として、戦後のアメリカで急速に発展した人文・社会科学の諸分野を組み合わせたスラブ地域研究の組織を作ろうとする、尾形典男法学部教授や杉野目晴貞学長のアイデアがあった。さらにこの底流には、当時の日本の国立大学で唯一ロシア文学科を持っていた北大にソ連・東欧の研究機関を作ることを支援しようという、アメリカのロックフェラー財団の意向があった(同財団はスラヴ研究室設立に先だって約500万円相当の図書・文献等を寄贈し、これが同室の資料の基礎になった)[3]。

こうした様々な意図が現実の場で折り合っていった経緯については、ここに記すだけの資料がない。ただ明白なのは、①設立されたスラヴ研究室の部門(専門)構成が、「文学」「歴史」「政治」「経済」「国際関係」という、人文系のスラヴ学の枠を越えた地域研究的な性格を持っており、この体制が施設として制度化されて以降も継続されたこと、②組織が学内だけでなく他大学の研究者をも交えて構成されていたこと[4]、および③当時のアメリカのソ連・東欧研究にありがちな国策学・戦略学的なニュアンスは最初から意識的に敬遠され、運営も純粋に学問的な共同研究をめざす自治的なものであったことである[5]。

53年に誕生したスラヴ研究室は、学内外の兼任研究員のみからなる組織で、予算的な裏付けもなかったため、その活動費の全額を文部省科学研究費にたよっていたが、その事情は55年に制度化された後にも本質的には改善されなかった。すなわちこの時定員化されたのは助教授1、助手1という半講座であり、部門の大半は依然学内・学外の兼任研究員によって構成されていたのである。運営は主任研究員がイニシアチヴをとり、年2回開催される研究員会議の場で施設の運営、組織、予算、人事その他の重要事項が審議されたが、規模的に独立した研究機関としての活動が不可能であったため、当分の間法学部附属の施設とするという措置がとられた[6]。

このようにささやかな規模の組織ではあったが、スラブ研究施設は発足当初から政治史、思想・文化史、経済史などを基調に現状への関心をも盛り込んだ、次のような一連の興味深い共同研究を展開している。

*「ロシア及びソヴェト社会における中間層の役割に関する研究(ロシア人民主義の研究)」(1953~58)
*「ロシア革命の研究」(1957-59、68-69)
*「ロシア社会の近代化に関する研究」(1964-65)
*「東欧におけるフェデラリズムの研究」(1965-66)
*「ロシア・東欧におけるナショナリズムの諸問題」(1970-73)
*「ソ連社会の変遷と対外関係」(1973-75)[7]

これらの共同研究は、主として文部省科学研究費補助金によるもので、補助金の大半は基礎資料の整備と旅費にあてられた。研究発表と討論の場としては、発足当時から定例化した「研究報告会」(年2回、研究員会議を兼ねて3日間にわたって行われた)、および1970年に組織された「北海道スラブ研究会」(北海道地域の関連専門家の集団で、ほぼ月例の研究発表を行った)などが用意された。成果は主として紀要『スラヴ研究』(57年創刊)に発表された。1957年に発刊されたこの紀要は、文字どおり学際的な媒体であり、83年に欧文紀要が発刊されるまで、諸言語の論文を混載していた。同紀要は単にセンターの歴史を語っているだけでなく、わが国のスラブ地域研究の変遷を概観するためにも貴重な資料となっている。

研究員の努力と周囲の協力により施設の規模も徐々に拡大された。それは専任による講座の形をとっていない研究部門が、段階的に実体化(官制化)されてゆくプロセスであった。すなわち1957年には経済部門が、64年には歴史部門が、77年には政治部門がそれぞれ官制化され、最終的に専任研究員6名、客員教授1名、研究部門も法律部門を加えて6部門(うち官制化された部門は3)となっていた。

しかし研究の守備範囲の大きさに比べた場合、組織の規模は依然小さなものであり、恒常的な共同研究や現地調査、国際交流のための経済基盤も持たなかった。一方この間に他の国立大学に設置された地域研究施設—「アジア・アフリカ言語文化研究所」(1964年創立、東京外国語大学)、「東南アジア研究センター」(1965年創立、京都大学)—は、後発ながら研究員数においても資料の規模においてもスラブ研究施設をはるかにしのぐものとなっていた。

スラブ研究施設の整備が相対的に遅れたことには、この地域の組織的・総合的な研究や教育の必要性に対する認識が、社会にも専門家の間にもいまだ強いものではなかったという事情が反映されているが、同時に、事実上独立した組織でありながら法学部附属施設であるという位置づけの曖昧さも、施設の飛躍を妨げている一因と考えられた。

すでに1969年、百瀬宏施設長の時代に、施設を北大の独立した部局としようとする「ソ連・東欧研究センター」設立の原案が練られていたが、施設が20周年を迎える70年代中盤以降、外川継男、木村汎施設長のもとで北大および文部省に対する積極的な働きかけが行われ、ついに78年春に学内共同教育研究施設「スラブ研究センター」が設立される運びとなった。

2. 学内共同教育研究施設時代(1978-90)

新しく発足したスラブ研究センターは、従来の部門(実際には講座)形式を取り払った大講座体制となり、文化系・経済系・政治系の3つの系に教授7、客員教授1、外国人研究員2のポストを有する組織となった(翌79年にはさらに情報資料部が加えられた)。運営組織としては、専任教官と学内文系諸学部の若干名によって構成される「運営委員会」が置かれ、人事、予算をはじめ組織と運営に関する事項を審議することとなった。同時に附属施設経費として講師等旅費、外国旅費も予算化され、いまだ十分とは言えないながら、共同研究や海外調査研究のための基盤も整備された。また81年には法学部研究棟の一部が増築され、3フロアー強の研究・図書・情報資料・管理・共同利用スペースが確保された。

この一連の改革により、センターの活動は大きく前進することになった。従来から行われていた共同研究、研究報告会、各種研究会・談話会、他学部・教養部での講義、紀要『スラヴ研究』の発行などの活動に加えて、以下のような活動がこの時期以降新たに導入され、基本的に現在まで継続されている。

*『スラブ研究センターニュース』(79年3月創刊。当初年3回発行、のち季刊となる)

*『スラブ研究センター研究報告シリーズ』(研究報告会、各種研究会の報告・討論集。79年創刊、95年5月現在57号までを刊行)

*『Acta Slavica Iaponica』(年刊の欧文紀要。1983年創刊)

*『公開講座』(85年以前に試行的に行われていたものが86年から制度化された。年1回7~8講程度)

*『鈴川基金奨励研究員制度』(鈴川正久氏よりの委任経理金の果実を利用した大学院生等若手研究者招待プログラム。87年発足、94年度までに69名を招待)

*『学術交流協定』(「パリ第三新ソルボンヌ大学国立東洋語東洋文化研究所ロシア研究センター」との協定(83年)をはじめ、現在5ヵ国の6つの研究機関との間に協定がある)

*『ソ連東欧研究文献目録』(従来『スラヴ研究』の巻末に収録されていた国内研究文献情報が、78年から独立の冊子として年次別に刊行され始めたもの。89年度版まで発行され、以降の分はデータベース化が進行中)

*『書誌情報サービス』(70年代から行われていた施設の書誌情報のまとめに加えて、国内および外国の書誌・図書館情報の紹介が欧文・和文で継続的に行われるようになった)

*『基本図書整備計画』(81年度から、当時約55万冊の蔵書を有していたイリノイ大学ソ連東欧研究センターの5分の1の規模を目安に、特別設備費による基本文献の収集が開始された。現在第3次計画を遂行中。蔵書数はこの間約4万6千冊から約10万冊に増加している)

また外国人研究員が常時滞在することもあって、この時期以降の研究会は必然的に国際色を強め、とりわけ80年代後半からは、文部省科学研究費国際学術研究経費や部分的には在札アメリカンセンター等の援助を得て、夏期研究報告会を国際シンポジウムとすることが多くなった。こうしたシンポジウムの成果は、『研究報告シリーズ』に収録される以外に、単行の欧文論文集としても発行されている。

この時期にはまたいわゆる「昼食談話会」という形のくつろいだ雰囲気での議論の場が生まれ、さらにセンターのラウンジにソ連の衛星放送の受像機が置かれて、ソ連からのニュースを見ながら研究員と滞在中の外国人たちがペレストロイカを論じ合うといった雰囲気も生まれた。

私事ながら86年にセンターに赴任した筆者は、それまで所属した大学文学部の雰囲気とセンターのそれとの落差に愕然としたのを覚えている。外国人研究者や専門を異にする者たちとの接触の多さ、内外の専門家による研究会の頻繁さ、日本語や外国語で行われる研究会での、歯に衣を着せぬ相互批判などもさることながら、毎週月曜日の午後一杯を費やして行われる教官会議[8]が驚きの中心であった。そこでは予算、人事など運営上の問題、組織の拡充や大学院構想など機構上の問題、研究報告会の日程や科学研究費の申請、出版物の編集など研究活動上の事項、各種学会情報や海外研究者の動向、外国人研究員への対応や、ひいてはレクリエーションの日程に至るまで、およそセンターに関係のあるありとあらゆる事柄が全員参加のもとで議論されていたのである。専門を異にする者たちがひとつの組織の運営を論ずる以上、専門外の事に立ち入らずという態度ははじめから許されなかった。したがって、例えば外国人研究員の人選に際しても、自分と専門がかけ離れたA教授とB博士のいずれが適任であるかについて、資料を理解できる範囲で自分の意見を持つことが要求された。理念的な対立から、午後1時半に始まった会議が7時を過ぎることも希ではなかった。新任の文学研究者はあたかも中小企業の経営会議に紛れ込んだ様な違和感を覚えたものであったが、10年後の現在、大学改革の流れの中であらゆる大学教員が多少なりと学際的な考え方や経営者的な発想を迫られている状況を前にして、この違和感自体が懐かしく思い起こされる。

3. 全国共同利用施設へ

このような研究活動の傍ら、組織の一層の充実に向けての努力も続けられた。70年代までの目標が、スラブ地域研究を学問として定着させること、そしてその基盤となるべきスラブ研究施設の足場を堅めることに置かれていたとするなら、80年代の目標はわが国の諸分野のスラブ研究の連携を計り、国際的なレベルに高めるために、全国的な規模の共同研究・共同利用の中心組織を作るという、遠大なものとなっていた。

すでに82年に伊東孝之センター長のもとで、「ソ連・東欧研究所」設立構想[9]が発表されているが、これは単にわが国だけではなく、東アジア・環太平洋諸国のスラブ地域研究をリードするような全国共同利用施設を北大に設立しようというものであった。伊東はこの研究所の活動として、従来からセンターの活動に含まれていた共同研究プロジェクト、研究集会、共同研究員制度、資料収集と共同利用などを充実させることの他に、定期的な海外学術調査、若手研究者の現地研修、国内の若手研究者を対象とした夏季セミナー、大学院生や研究生の教育など、国際交流や後継者教育にも踏み込んだ提言をしている。想定された研究所は、文化部門・政治部門・経済部門からなる研究部を主体として、共同利用部、情報資料部、事務部を配し、管理運営組織として教授会の他運営委員会、専門委員会を持つ、総勢42名の大組織であった。そこには研究体制自体への反省もさることながら、研究補助や共同利用のための人的基盤の圧倒的不足に対する強い危機意識が反映している。

このようなアイデアを現実のものとするために、以下のような方向での努力がなされた。

①日本のスラブ研究の実態調査:

国内の研究環境を把握するため、上記の書誌・図書館情報や年次別の研究文献目録の仕事に加え、研究の現状調査が行われた。わが国の専門家に関するアンケート調査はすでに1971年、75~76年の二度にわたって行われ、それぞれ研究者名簿の形で発表されていたが、86年度にはさらに大規模なアンケート調査(北海道大学教育研究学内特別経費「日本におけるソ連・東欧研究の歴史、現状、改善への提言の基本調査」)が行われ、1202名の研究者の研究主題、業績、所属学会情報などを盛り込んだ名簿が作成された[10]。またこれに先立って外川継男、伊東孝之、長谷川毅らはそれぞれ日本のスラブ研究の歴史と現状、問題点を論じた文章を発表している[11]。

②外国の研究状況調査:

センターの研究員は自己の留学経験や外国人研究員との交流を通じて、それぞれ外国でのスラブ研究事情を知る努力をしていたが、87年度には木村汎を代表者として組織的な海外調査(文部省科学研究費国際学術研究「ゴルバチョフ改革のインパクト」及び「西欧におけるソ連・東欧研究の今後」)が行われた。木村らはフランス、イスラエル、ベルギー、イギリス、西ドイツ、アメリカの総計32の研究・教育機関を2回に分けて訪問し、それぞれの特徴と将来の可能性を調査した[12]。またこれ以前に秋月孝子は、欧米のスラブ関係図書館の調査を行っている[13]。

③検討会:

上記のような調査と並行して、全国の諸分野の専門家を交えたスラブ研究発展のための検討会が継続的に行われた。84年7月と85年2月のセンター研究報告会においては、「わが国におけるソ連・東欧研究のあり方」と題する談話会が、それぞれセンターの長谷川毅、木村汎を話題提供者として行われ、欧米の研究・教育事情との比較におけるわが国の問題点が議

論された[14]。また87年7月、10月、88年1月の3回にわたって、科学研究費プロジェクト「スラブ研究の推進の方法に関する検討」に沿った検討会が札幌と東京で行われた。

84年7月の談話会において長谷川は、各種学会を包括する組織の設立、国際交流の進展、後継者の計画的養成、図書購入の組織化など10項目にわたる提言をしているが、これは後にいわゆる「長谷川ペーパー」[15]としてまとめられ、87年度の一連の検討会の土台となった。

87年10月神田学士会館において行われた検討会は、スラブ研究の現状に関する諸分野の代表者の問題意識が表明されたという点で、特筆すべきものであった。すなわち「学会組織」に関して気賀健三(ソ連東欧学会)佐藤経明(社会主義経済学会)山口巌(JSSEES)越村勲(東欧史研究会)和田春樹(ロシア史研究会)佐藤純一(日本ロシア文学会)塩川伸明(ソビエト史研究会)が、「図書館情報体制」に関して、加藤一夫(国立国会図書館)秋月孝子(センター)松田潤(同)が、「教育問題」に関して、藤本和貴夫(大阪大学)下斗米伸夫(成蹊大学)和田春樹(東京大学)が、「国際交流」について、川端香男里(東京大学)竹浪祥一郎(桃山学院大学)が、それぞれの立場からの提言を行い、他の諸方面の参加者を交えて充実した討論が展開されたのである。この検討会の後、参加者一同の連名で「スラブ地域雑誌センター設立に関する要望書」、「日ソ文化交流協定に基づく国費交換留学生制度に関する要望書」が関係当局に送付された[16]。

一連の検討会の締めくくりとして88年1月センターにおいて行われた検討会で、伊東孝之は日本のスラブ地域研究の改善の方法を、①「日本スラブ学会連合」(仮称)の組織、②「スラブ地域文献センター」、「スラブ地域雑誌センター」の設置、③「日本スラブ学委員会」の任命、④国際交流の窓口」の開設という4点に絞るという、暫定的な総括を行った。そしてこれらの機能のいくつかを果たすことができる有力な既存の機関のひとつとしてスラブ研究センターの名をあげるとともに、センターがこのような全国的な研究サービスの役割を担うためには、抜本的な組織改革が必要であることを訴えたのである[17]。

センターのこのような運動が概ね各界の支持を得ることができたことには、無論80年代中盤から始まったソ連および東欧での大変動が大きく影響していた。社会主義圏の改革への動きは、一般社会や学生の間のスラブ地域への関心を高めると共に、情報の多元化、現地研究の可能性の拡大、国際交流の進展、学際的なアプローチの必要性といった数々の点で、研究者と研究体制の体質改善を迫るものであった。とりわけスラブ諸国との文化・学術的な交流上の障壁が取り払われ、情報と人間の往来が始まると、わが国の内部における研究の閉鎖性、資料収集の遅れ、研究機関や学会の間のコミュニケーションの希薄さ、教育・研究の分野や対象地域の偏りといった問題点が明らかになった。これはあながちわが国ばかりの問題ではないが、例えばスラブ圏の研究者や学生、資料などの大規模な流入に柔軟に対応した欧米の学界に較べ、わが国の研究体制の硬直性は明白であった。日本にスラブ地域に関する研究・情報収集・国際交流・専門家教育の全国的な規模のセンターを作ろうという理念は、80年代前半と後半とではまったく異なったリアリティーと緊要性をもって感じられた。

このような状況を背景に、80年代末にかけてセンター改組のための歳出概算要求が続けられ、そしてついに90年6月、原暉之センター長のもとで、全国共同利用施設スラブ研究センターが誕生することになった。

4. 全国共同利用施設としてのセンターと今後の課題

新しいセンターは大講座としての4部門(地域文化・国際関係・生産環境・社会体制)と情報資料部、事務部からなり、運営組織として組織や人事、予算などに関する事項を審議する協議員会(学内組織)と、研究・事業計画等を審議する運営委員会(学外各界代表者を含む)がおかれた。さらに93年、皆川修吾センター長のもとで民族環境部門が増設され、専任教授11、

客員教授3、外国人研究員3、情報資料部助教授1、助手2、事務官3という現在の定員構成となった。また施設のスペースも見直しの対象となり、94年には増築の結果として、従来法学部とセンターとが同居していた法学部研究棟の一角の5フロアー全部が、センターの研究空間として利用できることになった。

この改組を機にいくつかの新しい活動が導入された。90年にはソ連科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所、91年にはソ連科学アカデミーアメリカ・カナダ研究所との間に学術協定が結ばれ、毎年度の研究者の相互派遣が始められた。91年には各研究員の活動の相互評価のために、研究員の提示する論文を専任全員と外部のコメンテーターが合評する「専任研究員セミナー」が行われるようになった。部門の位置づけも検討され、90年度からセンター全体の共同研究に加えて、各部門(専門)単位の共同研究プロジェクト[18]が開始された。これにともなって共同研究員も、いずれかの部門に所属して研究プロジェクトに参加するという理念が打ち出された。

日本の研究状況の検討も継続され、92年2月の冬期研究報告会では川端香男里、木戸蓊、和田春樹、佐藤経明をパネリストとする円卓討論会「ペレストロイカとわが国のソ連東欧研究: 反省と課題」(司会伊東孝之)が行われて、ソ連邦崩壊後の視点からわが国のスラブ地域研究史への反省的検討が行われた。同会での伊東の問題提起には、情報システムの貧困といった研究体制の問題ばかりではなく、従来の日本のスラブ研究におけるイデオロギー的な呪縛、研究対象の枠組み設定における保守主義的傾向、研究の方法論の硬直性など、ペレストロイカ以降の動きによって改めて突きつけられた研究者の姿勢の問題が盛り込まれている[19]。またこの時期以降センターは文部省管轄の研究機関の全国組織「文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議」の構成員となり、研究所が一般に持つ問題、あるいは諸方面の地域研究機関の協力の可能性といった具体的問題について議論する場も開けてきた。93年度からはセンターの活動を総合的に見直す自己点検評価活動が開始され、2年毎に報告書を発表することとなった[20]。

94年には、センター40周年記念の一環として、原暉之を編集代表とする全8巻のスラブ地域に関する論集『講座スラブの世界』[21]が弘文堂から出版され始めた。延べ105名の執筆者による同講座は、日本では初めての総合的なスラブ地域紹介文献となるであろう。また95年度からは皆川修吾を代表者として3年度にわたる重点領域研究「スラブ・ユーラシアの変動: 自存と共存の条件」[22]が始動している。これは全国の数十名の研究者による10を越える研究チームにより、旧ソ連・東欧諸国の現状と歴史的背景を、政治・経済・文化の各視点から分析する企画である。この総合的な共同地域研究は、スラブ世界の現在を照らし出すと同時に、センターの今後の活動と組織改革のための指針を与えるものと思われる。

さらに95年度から、センターは文部省「中核的研究機関支援プログラム」の対象となり、「研究高度化推進経費」「外国人研究員経費」「非常勤研究員経費」などを利用した、新しい研究活動に挑戦する可能性が開けてきた。

現在のセンターは82年の伊東プランの半分の規模ではあるが、研究活動をはじめ研究者の組織、資料収集、情報サービス、国際交流等の面で、わが国のスラブ研究のひとつの中心として内外に認められるようになってきた。とりわけセンターの国際シンポジウム[23]は、課題設定、報告者の人選、運営等において、外国人の参加者からも好評を博し、欧米の研究情報誌にも紹介されるようになっている。94年7月に行われた国際シンポジウム「帝国と社会: ロシア史への新しいアプローチ」に参加したコロニツキー教授(ロシア科学アカデミー)は、ユーモアたっぷりの表情で、センターを「よきコルホーズ」と評したが、同氏には、設定されたノルマを「過剰達成」しようとしてけなげに頑張っている小さな「突撃作業員」グループという社会主義世界の神話的イメージが、この東洋の小さな研究所の姿にダブって見えたのかも知れない。いずれにせよ現在のセンターの活動は、それぞれのメンバーが自己の研究

や共同研究活動のみではなく、管理運営に大きな労力を注ぐことによって支えられているのである。

とはいえ現在のセンターの組織と活動のあり方は、いまだけっして理想的なものではない。広大なスラブ地域の総合的な研究という理念に照らした場合、現在のセンターの部門構成及び定員は、専門分野(ディシプリン)の面でも個別的な研究対象地域(フィールド)の面でも、十分な規模とは言えない[24]。教育学、法学、人口学、言語学、フォークロア、芸術学、思想史などといった本質的な分野、あるいはウクライナ、ベラルーシ、旧ユーゴスラヴィア等々の重要な地域の研究が、現状のセンターではカバーされていない。また活動上も、学術交流協定等による研究者交換に対する経済的基盤の不足、現地での恒常的フィールドワークのベースとなる施設の不在などの限界性を持っている。

情報資料部と事務部もそれぞれ定員不足からくる問題を抱えている。センターが収集すべきスラブ世界の基礎情報はますます多元化・大量化しており、また国際交流や共同研究のための事務処理、研究情報サービスなど、総じて研究補助・支援面での仕事は、現在の体制で処理しうる規模をはるかに越えている。80年代の検討会で示唆されたような「日本スラブ学会連合」「スラブ関係雑誌(図書)センター」「国際交流の窓口」といった役割をセンターが担ってゆくためには、研究者定員の増大と共に、この点での見直しが必須であろう。

また将来の専門研究者の育成、すなわち大学院教育への参加という重要な問題も、すでに80年代中葉から学内諸部局を交えて様々な可能性が検討されているが、いまだ明確な見通しを得るに至っていない。

制度上の問題とは別に、現在のスラブ地域研究に固有の課題も投げかけられている。それは個々別々の方向へ歩んでゆこうとしている旧ソ連・東欧の諸国家・諸地域の研究を、スラブ地域研究という枠組みの中でいかに体系化するべきか、すなわち研究対象地域のアイデンティティの変化にどの様な研究体制をもって応じてゆくべきかという問題である。

もちろん地域研究自体が相対的に若い学問であり、制度化の過程にも研究内容や方法論にも、時代状況とのかねあいの中での試行錯誤的な要素が反映してきた以上、上記のような問題の存在はむしろ当然であり、すべては今後の実践を通じて解決されてゆくべきものであろう。

いまセンターが行おうとしている重点領域研究が、このような問題にひとつの解決のあり方を提示することが期待される。

— 注 —

1 外川継男「スラブ研究施設二十年の歩み」『スラヴ研究』No.20 (1975年)
外川継男「スラブ研究施設」*『北大百年史　部局史』(北海道大学、1980年)
外川継男「木村彰一教授と北大のスラブ研究」*『スラヴ研究』No.33 (1986年)
岩間徹「ファーズ博士のこと」*『スラヴ研究』No.20 (1975年)
「座談会　鳥山成人先生を囲んで」*『北大史学』No.25 (1985年)
*印は本誌収録

2 スラブ言語文学研究(フィロロジー)の泰斗木村彰一は、研究と教育に優れた業績を残しただけでなく、日本のスラブ研究の制度的な整備にも非常に大きな貢献をしており、1947年7月に北海道帝国大学法文学部に赴任し、56年1月に北海道大学文学部を退職するまでの間に、文学部ロシア文学科、およびスラヴ研究室の設立に中心的役割を果たした。以降も東京大学教養学部教養学科ロシア分科、同文学部ロシア語ロシア文学科、同大学院人文科学研究科露語露文学専修課程の設立に携わっている。53年からスラヴ研究室主任、55年から56年にかけてスラブ研究所主任を勤め、東京大学に移った後もスラブ

研究センターが誕生する78年まで研究員(学外兼任)として施設の活動を支え続けた。(上記外川継男「木村彰一教授と北大のスラブ研究」参照)

3 この経緯については注1の外川論文、特に「木村彰一教授と北大のスラブ研究」および岩間徹「ファーズ博士のこと」『スラヴ研究』No.20(1975年)を参照。岩間徹(東京女子大学教授)は施設の20周年記念によせた上記の文章の中で、ロックフェラー財団の人文研究部長であったファーズ博士(Dr. Charles B. Fahs)が「スラブ研究所」設立に大きな役割を果たしたことを述べながら、同博士および財団の姿勢が、いわゆる「ひもつき」の研究所を作ろうとするものではなく、研究所の組織運営はまったく北大のスタッフの自主性に任されたことを証言している。

4 53年6月設立当時の組織は以下のようであった。主任: 木村彰一(文学部教授)、「文学部門」: 北垣信行(文学部助教授)、金子幸彦(一橋大学社会学部講師)、「歴史部門」: 鳥山成人(文学部助教授)、岩間徹(東京女子大学文学部教授)、「政治部門」: 猪木正道(京都大学法学部教授)、「経済部門」: 内海庫一郎(経済学部教授)、「国際関係部門」: 江口朴郎(東京大学教養学部教授)。なお岩間徹は上記文章の中で、以降も継続されることとなったこのintercollegiateあるいはinteruniversityというべきあり方を、施設の積極的な特色として評価している。

5 この点では外川論文に引用されている『北海道大学新聞』(1993年2月1日付)中の鳥山成人の次のようなコメントが興味深い。「(スラヴ研究室は—望月)従来西欧に比べて劣っていた東欧についての学問的水準を高めるため言語学、文献学、歴史学、文学など広い範囲にわたり基礎的な研究をすすめてゆくが専任の研究者をおかずそれぞれの分野から研究に参加する。(中略)研究は対象が学問的なものであって保安隊などの軍事的、戦略的研究とは全く関係ない。」なお外川は施設の命名の由来に関する鳥山教授の退官記念パーティーでの発言も記録している。それによれば当初名称として候補にあがった「ソ連研究施設」と「ロシア研究施設」は、それぞれに親ソ的あるいは反ソ的ニュアンスを持っていたため、政治的な色彩のない「スラブ研究施設」に落ち着いたという。(外川継男「木村彰一教授と北大のスラブ研究」111-113頁)当時ややもすれば施設に向けられがちだった「国策研究」、「アメリカのひもつき」という批判とそれへの反論については、ロックフェラー財団の態度に関する証言とも併せて、上記の岩間徹の文章および「座談会　鳥山成人先生を囲んで」を参照されたい。

6 施設の所属先には当初文学部と法学部の二案があったが、インターディシプリナリーな組織の性格から、いずれの学部もにわかには受入れ難かった。法学部に「廂を借りる」ことになった背景には、島善鄰学長の尽力があったという。(上記「座談会　鳥山成人先生を囲んで」『北大史学』No.25、4-5頁を参照)同時に施設は事実上独立した組織として、運営、組織、予算、人事その他重要事項は、法学部教授会ではなく施設の研究員会議で決定してゆくことが、北大評議会で承認された。(上記外川継男「スラブ研究施設二十年の歩み」を参照)

7 これらの研究活動の詳細は、当時の『スラヴ研究』の各号および「北海道大学スラブ研究施設便覧」(1975年)に紹介されている。

8 学部に例えると、前出の運営委員会が「教授会」にあたり、教官会議は「学科会議」に相当する。前者は90年の全国共同利用施設への改組以降「協議員会」と改称され、同時に主として共同利用上の問題を審議する全国規模の「運営委員会」が新設された。なお「教官会議」と並行して、情報資料部と事務部を交えて事務上の打合せを行う「事務連絡会議」もおこなわれている。

9 伊東孝之『"ソ連・東欧研究所"設立構想』(スラブ研究センター、1982年)

10 ここに言及したものを含め、これまでに次のような研究者名簿が発行されている。

『わが国におけるソ連・東欧研究の動向』(坪谷七魚子編、1972年)
『ソ連・東欧研究者名簿改訂版』(松田潤編、1977年)
『ソ連・東欧研究者名簿第3版』(松田潤、望月哲男編、1988年)
『スラブ・東欧研究者名簿』(松田潤編、1994年)

11 Такаюки Ито, "Славяноведение в Японии: история, учреждения и проблемы,"『スラヴ研究』No. 25 (1980).
Takayuki Ito, "Slavistik und Osteuropa-Kune in Japan," *Osteuropa*, 33-5, 6 (1983).
Цугуо Тогава, "Славистика в Японии: история, развитие и сегодняшнее состояние," «Обозрение», 8 (1984).
Tsuyoshi Hasegawa, "Soviet Studies in Japan: History, Problems, and Prospects," in: Morrison Thambipillai, *Soviet Studies in the Asia-Pacific Region* (1986).

12 木村汎『欧米におけるソ連東欧研究』スラブ研究センター研究報告シリーズNo.27 (1989年) 参照。

13 秋月孝子「アメリカのスラブ関係主要図書館を訪ねて」『ソ連研究』2 (1986年) 参照。

14 この談話会の模様は以下のものに収録されている。
『歴史における人物とその環境:日露関係を中心に』スラブ研究センター研究報告シリーズNo. 14 (1984年)
『ソ連東欧研究のフロンティア』同No.15 (1985年)

15 『スラブ研究のための提言:スラブ研究推進の方法検討会の記録 (1987年7月~1988年1月)』スラブ研究センター研究報告シリーズNo.26 (1989年) 13-25頁。

16 同書26-44頁参照。

17 同書45-54頁参照。

18 1990年に発足した部門毎の共同研究プロジェクトには以下のものがある。
地域文化部門 (文学)「ロシア文学におけるロシアのイメージ」
同 (歴史)「旧ソ連東欧諸国における歴史の見直し」
国際関係部門「旧ソ連東欧諸国の変動と国際システムへの再統合」
生産環境部門「市場経済へ変貌する旧ソ連:軟着陸の条件」
社会体制部門「旧ソ連邦における政治システムの転換」
これらの成果は『スラブ研究センター研究報告シリーズ』に掲載されている。

19 『ペレストロイカとわが国におけるソ連東欧研究: 反省と課題』スラブ研究センター研究報告シリーズ別冊 (1992年) 参照。

20 『スラブ研究センターを研究する (北海道大学スラブ研究センター点検評価報告書) No. 1』(1994年)。

21 原暉之代表編集『講座スラブの世界』(弘文堂、1994~) の内容は以下の通り (括弧内は責任編集者)。
1巻『スラブの文化』(川端香男里、中村喜和、望月哲男)
2巻『スラブの民族』(原暉之、山内昌之)
3巻『スラブの歴史』(和田春樹、家田修、松里公孝)
4巻『スラブの社会』(石川晃弘、塩川伸明、松里公孝)
5巻『スラブの政治』(皆川修吾、木戸蓊)
6巻『スラブの経済』(望月喜市、田畑伸一郎、山村理人)
7巻『スラブの国際関係』(伊東孝之、木村汎、林忠行)
8巻『スラブと日本』(原暉之、外川継男)

22 重点領域研究計画研究分の組織図
研究組織図(公募研究を除く)

研究項目	計画研究	◎研究代表者　研究分担者
総括班	スラブ・ユーラシアの変動	◎皆川　修吾(北大)　家田　修(北大)　川端香男里(中部大) 木戸　蓊(神戸大)　加藤　九祚(創価大) 佐藤　経明(日本大)　木村　汎(国際日本文化研究センター)
A. 政治システムの変革と地域間関係	(A01)政治改革の理念とその制度化過程	◎皆川　修吾(北大)　宇多　文雄(上智大)　塩川　伸明(東大) 下斗米伸夫(法政大)　袴田　茂樹(青山学院大)
	(A02)地方統治と政治文化	◎家田　修(北大)　松里　公孝(北大)　川原　彰(杏林大) 永綱　憲悟(亜細亜大)　佐原　徹哉(都立大)
	(A03)地域間及び国家間協力関係の展開	◎林　忠行(北大)　伊東　孝之(早稲田大)　横手　慎二(慶應大) 秋野　豊(筑波大)　小泉　直美(防衛大)
B. 経済システムの転換と新経済圏の形成	(B01)経済システム転換期における企業の動態分析	◎山村　理人(北大)　大津　定美(神戸大)　石川　晃弘(中央大) 吉井　昌彦(神戸大)　小田　福男(小樽商科大)
	(B02)経済構造と経済循環の変化に関する実証的分析	◎田畑伸一郎(北大)　田畑　理一(大阪市大)　久保庭真彰(一橋大) 中村　靖(横浜国大)　上垣　彰(西南学院大)
	(B03)地域間経済協力の問題点と可能性	◎西村　可明(一橋大)　百済　勇(駒沢大)　村上　隆(北大) 長岡貞男(成蹊大)　平泉　公雄(埼玉大)　吉野　悦雄(北大) 岡　奈津子(アジア経済研)
C. 社会変動と自己認識	(C01)民族の問題と共存の条件	◎井上　紘一(北大)　斎藤　晨二(名古屋市大)　中井　和夫(東大) 佐々木史郎(大阪大)　庄司　博史(国立民族学博物館)
	(C02)地域と地域統合の歴史認識	◎原　暉之(北大)　西山　克典(札幌市立高専) 豊川　浩一(静岡県大)　柴　宜弘(東大)　篠原　琢(東京学芸大)
	(C03)文芸における社会的アイデンティティ	◎望月　哲男(北大)　沼野　充義(東大)　浦　雅春(東大) 井桁　貞義(早稲田大)　西中村　浩(東大) 貝澤　哉(早稲田大)

23 90年代の国際シンポジウムのテーマは以下の通り(参加者は平均約70名)
1990年8月29、30日「ソ連東欧改革と世界システムへの衝撃」
1991年7月12、13日「ソ連の政治システムの再生と世界システムへの衝撃」
1992年7月17、18日「ユーラシア新秩序への模索」
1993年9月2、3日「ユーラシアの変動と姿を現し始めた世界新秩序」
1994年7月13、14日「帝国と社会: ロシア史への新しいアプローチ」

24 95年度のセンターの現員構成は以下の通り(外国人研究員は省略)。括弧内は主たる専門領域もしくは担当業務。

地域文化部門	教授	原暉之(ロシア史、極東史、日露関係)
	教授	望月哲男(ロシア文化、文学)
国際関係部門	教授	村上隆(ロシア経済、極東国際経済)
	教授	林忠行(東欧政治史、チェコ、スロヴァキア現代史)
	助教授	秋月孝子(スラブ書誌学)
生産環境部門	助教授	山村理人(スラブ経済、農業経済)
	助教授	田畑伸一郎(ロシア経済、マクロ経済)
	客員教授	百瀬宏(北欧史、国際関係史)
社会体制部門	教授	皆川修吾(ロシア政治)

	教授	家田修 (東欧経済史、ハンガリー経済)
	客員教授	川端香男里 (スラブ文化・思想)
民族環境部門	教授	井上紘一 (北方ユーラシア民族学)
	助教授	松里公孝 (ロシア史、地方自治)
	客員教授	斎藤晨二 (文化地理学、シベリア地域)
情報資料部	講師	兎内勇津流 (スラブ書誌学、図書収集管理)
	助手	松田潤 (研究情報収集管理)
	助手	野原美香 (共同研究補助、編集業務)
事務部	掛長	堀田文雄 (庶務)
	主任	渋谷良一 (会計)
	図書職員	松野とも子 (図書業務)

スラブ研究施設史

外川継男

わが国の国立大学中唯一のスラブ地域に関する総合的研究機関として、北海道大学にスラブ研究施設が設置されたのは、1955(昭和30)年7月1日のことであった。欧米におけるスラブ研究は、第二次大戦までは言語学・文献学・文学史の研究を中心とするフィロロジーであったが、第二次大戦直後アメリカ合衆国をはじめとして、人文・社会科学の諸分野からスラブ地域(ソ連・東欧諸国)の総合的研究を指向する動きが始まり、比較的短期間に地域研究の指導的地位を占めるほどの研究者と業績を生み出すに至った。

北海道大学のスラブ研究施設も、このようなスラブ地域の総合的研究を目的として設立されたが、すでに2年前の1953(昭和28)年に、その母胎となるスラブ研究室が、官制によらぬ学内共同研究機関として発足していた。この時中心となって努力したのは、当時法学部で政治学を担当していた尾形典男と、文学部ロシア文学科主任の木村彰一であった。尾形自身は必ずしもアメリカ流の地域研究に全面約に賛成していたわけではなく、何よりもイデオロギーに左右されぬ、よい意味でのアカデミックなソ連・東欧研究を意図していた。その際に尾形がめざしていたのは、歴史を中心として、スラブ地域の文化や思想の本質を研究し、ひいてはなぜロシアで革命が起こり、それがいちおうの成功をみたかを理解することであった。これに加えて、第二次大戦後ようやく文系学部を設置するに至った北海道大学が、単なるローカル大学にとどまることなく、人文・社会系の分野でも全国的にユニークな研究をつくり出そうとの意図があった。

このような尾形の意図がロックフェラー財団の認めるところとなり、数百点にのぼるスラブ研究の分野での基本的文献が北大に寄贈された。これをもとにして、尾形と木村の二人によって、共同研究の分担者の人選が進められ、1953(昭和28)年6月24日、スラブ研究室が設置された。その時の各部門と研究分担者は、小人数ながら、以下のように全国的な視野から選ばれた。

主任　木村彰一(北大文学部教授)
〔文学部門〕北垣信行(北大文学部助教授)、金子幸彦(一橋大学社会学部講師)
〔歴史部門〕鳥山成人(北大文学部助教授)、岩間徹(東京女子大学文学部教授)
〔政治部門〕猪木正道(京都大学法学部教授)
〔経済部門〕内海庫一郎(北大経済学部教授)
〔国際関係部門〕江口朴郎(東京大学教養学部教授)

ここに見られる部門別の研究体制と、北大及び北大外の研究者からなる体制は、二年後にスラブ研究施設として官制化された際にもそのまま受け継がれて、現在に及んでいる。

このようなスラブ研究室は、2年後に官制化されることになった。しかし当初認められた定員はわずか半講座(助教授1、助手1)にすぎず、独立した研究機関として機能することが不可能であったため、時の北大学長島善鄰が仲介に立って、将来独立した研究機関となるまで当分の間法学部付属の研究施設とすることが、法学部教授会によって了承された。しかし「研究施設の運営、組織、予算、人事、その他重要事項」は先の研究分担者全員によって構

成される研究員会議において審議されることが「規程」に明記され、事実上は独立の研究機関たることが北大の評議会において承認された。初代の施設長には文学部教授の木村彰一が併任された。

このようにして設立された北大法学部付属スラブ研究施設は、歴史・文学・政治・経済・国際関係の五部門にわたって、次の3つのカテゴリーからなる研究員及び助手と事務官によって構成されることになった。

第1のカテゴリーはスラブ研究施設プロパーのメンバーで、これは1957(昭和32)年以降13年間にわたって施設長を勤める鳥山成人と、経済部門の山本敏の2名、それに事務担当官たる豊田久馬彦、更科道子、芳賀柳二の計5名からなる。ついで第2のカテゴリーとして北大文系各学部の教官がおり、これは前記木村、北垣、内海のほかに法学部の尾形が加わり、さらに文学部助手(ロシア文学科)の福岡星児が参加した。第3のカテゴリーは北大外の研究者であって、前記の金子、岩間、猪木、江口の4人に、1956(昭和31)年からは東京大学に移った木村が加わり、これら5人のメンバーは以後十余年にわたって学外兼任研究員を勤めることとなった。

さらに1959(昭和34)年には新たに法律部門が加わり、北大法学部教授の五十嵐清が加わるとともに、政治部門に同じ法学部教授の矢田俊隆が参加し、六部門の研究体制がここに整った。

これら北大内外の十余名からなる研究員は、毎年2回開かれる研究員会議において、研究施設の運営全般の審議に参加するとともに、3日間にわたる研究報告会に参加して、それぞれレポートしたり、討論に参加することになった。

このようにして発足したスラブ研究施設の存在は、はやくも1956(昭和31)年にアメリカで出版された『ロシアの分野における日本の教育と研究』のなかでとり上げられ、次のように書かれるに至った。

「現在のところ、アメリカ合衆国におけるいくつかの地域研究所と同様に、スラブ研究施設はいまだ主としてさまざまな研究分野の専門家をとりまとめる組織にとどまっている……ロシア語やロシア文学の教育とはまた別にこれは厳密に言えば大学の責任であって研究所の仕事ではないのであるが研修センターとしてのスラブ研究施設の将来は、主に研究の分野にあるように思われる。それでも人文・社会科学の研究は東京と京都でなされるべきだという日本の伝統がなければ、学際的なロシア地域研究と研修センターとしての北海道大学スラブ研究施設の可能性は、日本のいかなる研究所にも負けぬほど大きい。」

このようにアメリカの専門家に書かれてから8年たって、ようやく1964(昭和39)年に官制上の部門として歴史部門が増設され、さらに1977(昭和52)年に政治部門と客員教授1が加えられて、教授3、助教授3に、客員教授1という現在の体制ができた。しかしこの間1965年(昭和40年)には、京都大学に「東南アジア研究センター」が設立され、わずか10年間に8部門と資料部を有する一大研究センターに成長していた。この点北大のスラブ研究施設は、創設こそ早かったが、研究機関としての規模では、依然として小規模な研究施設にとどまっていたのである。

このような実状を打開すべく、1969年(昭和44年)に施設長に就任した百瀬宏のもとで、スラブ研究センターの構想が初めて打ち出され、1975年(昭和50年)6月18日の文系四学部長会議において、百瀬の後任施設長の外川継男がセンター案を説明して、各学部長の共感と支持をえた。さらにこの年7月15日にはスラブ研究施設創立20周年記念祝賀会が挙行され、今村学長、文系各学部長はじめ関係者約60名が参加したが、ここにおいても外川はセンター昇格への協力を呼びかけた。

このような研究施設のセンターへの改組拡充は、第5代の施設長木村汎のもとで一段と具体的になり、今村学長、小暮法学部長、北大事務局の支援のもとに、1978(昭和53)年春から

かに、客員教授1、外国人客員研究員2を有し、文字どおりわが国におけるソ連・東欧研究の中心的機関となることが予想される。

この間、設立以来科学研究費補助金による各種の総合研究が行われてきたが、それらは「ロシア人民主義の研究」、「ロシア社会の近代化に関する研究」、「ロシア革命の研究」、「ロシア・東欧におけるナショナリズムの諸問題」、「東欧におけるフェデラリズムの研究」、「ソ連社会の変遷と対外関係」、「ロシア・ソ連の東方進出と文化摩擦」といった、いずれも重要な基本的テーマに関するものであった。

これらの研究成果の多くは、毎年1回発行される紀要『スラヴ研究』に発表されるが、これは1957(昭和32)年以来、1978年で22号を数える。この紀要は日本国内の主な大学・研究所・図書館のほか、世界中の主だったスラブ研究機関にも送られ、高い評価を得ており、外人研究者の寄稿も少なくない。

スラブ研究施設へは毎年のように内外の研究者が訪れる。この中には内地研究員として半年、1年にわたって滞在する者もいれば、外国人客員研究員として共同研究に参加するために数カ月スラブ研究施設で研究に従事する者もいる。短期の訪問者にいたっては毎年20名以上になり、学外研究者による文献の利用はかなりの頻度にのぼる。

このほか北海道在住の研究者によって、1970(昭和45)年から「北海道スラブ研究会」が組織され、以来毎月1回スラブ研究施設の専任研究員が中心になって、定期的に研究会が開催されている。

教育の面では法学部にスラブ研究特殊講義が恒常的に開かれているほか、大学院・法学研究科や文学部・教養部の授業にも協力している。

ファーズ博士のこと

岩間　徹

ファーズ博士 (Dr. Charles B. Fahs) にはじめてお会いしたのは昭和26 (1951) 年のことだったと思う。場所はよく覚えている。帝国ホテルのロビーである。当時博士はロックフェラー財団の要職にあった。勿論、私から会見を申し入れたのでなく、先方から会見を申し込まれたのであったが、どういういきさつで私のようなものが会見を申し込まれたのか、さっぱり見当がつかなかった。

博士はもの静かな紳士で、とくに深く青い湖のようなその眼が印象に残った。若いとき日本に留学し、東大で臘山政道氏の指導を受けたということであった。おそらくアメリカにおける知日派の一人であろう。その席でのお話の要点は、日本でロシア・ソヴィエト研究を組織する必要があるのではないか、ということであった。正直のところ、この話をきいて、私は一種のとまどいを感じたことを覚えている。そんなことを一度も考えたことがなかったからである。

大学時代からロシア史の勉強をはじめたが、それは提灯を持たずに暗い夜道をゆく旅人に似ていた。たしかにあの当時私は学問上の恩師や先輩や友人に恵まれていて、そういうありがたい人びとの顔が次から次へと浮かんでくるが、しかしロシア史、とくに私の研究そのものを指導してくれる先達にはめぐり会えなかった。いきおい私は孤独の道をゆく以外になかった。そして所詮、学問とは市場の雑踏の中にあるのでなく、書斉の静寂と孤独の中にあると観念した。孤独の道をゆくこと、それが習性 (ならいせい) と成った。現在でもまだそれが尾を曳いている。いわんや、ファーズ博士に会った当時においておやだ。

ファーズ博士は日本におけるいくたりかのロシア・ソヴィエト研究者の名をあげた。そのなかに親しく知っている人もいたし、また名前だけは知っていたが、会ったことのない人もいた。おそらく博士は日本滞在中にこれらの人びとと会って意見を交換するつもりだったのだろう。私もその一人だったわけだが、さきほども述べたように、真暗闇をとぼとぼ歩いていて、突然、懐中電燈のあかりを眼の前に突きつけられたようなものだったから、これといった立派な意見などありようはずもなかった。慣 (なれ) は馴 (なれ) にもなる、というにがい反省があった。孤独に「慣」れているうちに、いつのまにか孤独に「馴」れてしまって、孤独の中のたたかいを忘れて、孤独に甘えている自分を発見した思いであった。閑雲野鶴を気取っていたものの、実はその殻をもって天地とするさざえや、またその外包をもって世界とするみの虫のようなものだと悟った。

その年 (昭和26年) の夏、私は信州富士見高原の別荘を借りて仕事をしていた。ある日のこと、当時北大の教授だった木村彰一氏が訪ねて来た。お会いするのはそのときがはじめてである。木村さんがわざわざ信州まで訪ねて来られた用件は、ほかならぬロシア・ソヴィエト研究の組織であった。そしてその具体化として北大に「スラヴ研究所」を設けてはどうかというお話であった。北大にはロシア語・ロシア文学、ロシア史、またロシア・ソヴィエトの法律・政治・経済などの分野にスタッフがいること、これが「スラヴ研究所」を北大に設立するひとつの具体的根拠になっていた。しかも当時日本では文化の地方分権がしきりに説かれていて、なんでもかんでも東京集中という傾向に対する批判の声があがっていたこともあって、文化の地方分権が研究所を北大にという主張のいわば理論的根拠になっていた。私は木村さんのお話を伺って、ファーズ博士の構想が具体化の一歩を踏み出したと実感した。私はこころよく協力をお約束した。

この日の木村さんとの出会いは今でも楽しい思い出のひとつになっている。富士見の別荘では留守番の老夫婦が食事の世話をしてくれていたが、たまたま豆腐が好きだと一言もらしたおかげで、私は毎日のように豆腐ぜめにあっていた。今日の夕食は二人分用意してくれるように老夫婦に頼んで、木村さんと一緒に八ケ岳の連峰の見える丘を下りて、富士見駅の近くまで酒と罐詰を買いに出かけた。

その夜の食膳に豆腐が出たことは勿論だが、買い込んできた罐詰類をあけて、一緒に酒をのんだ。飲むほどに酔うほどに談論風発し、酒が切れてしまった。そこでまたまた二人で町まで出かけ、酒を買い込んできて、のみつづけた。その夜おそくまで二人で鴎外、漱石論をたたかわした。木村さんは鴎外を、私は漱石を推して、おたがいにゆずらなかった。

その翌年のことだったと思う。ファーズ博士が北大に来られる、ついては札幌まで御足労を煩わしたい、と木村さんから連絡があった。あれから木村さんは「スラヴ研究所」設立のために種々奔走していたとみえる。このとき木村さんは北大文学部の有志教授会(?)にファーズ博士を紹介し、懇談会をやった。私も陪席した。ここは文学部の教授会をやる会議室だそうで、木造の建物の二階にあった。簀子の廊下を渡って、がたぴしする階段を上って入ったこの部屋は、まことにあらけなく、寒々としていた。懇談会では「スラヴ研究所」の設立が直接の話題にならなかったと覚えている。しかし、おそらく、木村さんは「スラヴ研究所」を文学部に置くことを考えて、同学部の教授をあつめて懇談会をやったのだろう。この考えは結局実をむすばなかった。周知のように、「スラヴ研究所」は文学部でなく、法学部に付属することになったのである。

その後も木村さんを中心に北大の関係スタッフは研究所の組織づくりとその官制化の準備を進めた。その準備は着々と進められた。ファーズ博士が北大に来学した翌年、つまり昭和28(1953)年に文部省から科学研究費の交付を受け、北大の関係スタッフに東京や京都のスタッフを加えて、事実上「スラヴ研究所」の研究活動がはじまった。共同研究のテーマは「ナロードニキ研究」であった。最初の研究会は北大でやった。東京や京都から加った創立当初のメンバーは札幌の宿舎 — 宮部会館といった — に勢揃いした。現在、これらの人びとは全部引退している。今昔の感に堪えない。

ソヴィエトにおけるナロードニキ研究史には大きな断層と歪曲があった。1930年代の半ばごろから1956年の第20回党大会まで、およそ20数年間、悪名高いスターリンの個人崇拝の影響の下で、ソヴィエトの学界はナロードニキ研究を歴史の研究対象から外してしまった。たとえ研究されたとしても、一面的且つ否定的見地からなされていたといっていい。『共産党小史』のナロードニキ観が横行していたのだ。この断層と歪曲が克服されたのは第20回党大会以後のことだ。かつて(1968年)私はモスクワのレーニン図書館でナロードニキ関係のカタログを漁りながら上述の研究史の断層をまざまざと実感したものだ。それはさておき、私は今でも忘れないが、「スラヴ研究所」が事実上発足し、ナロードニキ研究にとりかかったとき、研究員の間で以上のような研究史の断層と歪曲が問題にされた。とくに『共産党小史』にみられるような歪曲が問題にされた。念を押していうようだが、「スラヴ研究所」の研究活動が事実上はじまったのが1953年であって、ソヴィエトにおける前記党大会より3年前のことである。このときすでに私たち研究員の間でソヴィエトにおけるナロードニキ研究史の断層と歪曲が問題にされていたという事実をここに特記しておきたいと思う。

最近のソヴィエト史学界で革命的ナロードニチェストヴォを研究する場合、その研究主題はロシアのマルクス主義とこれに先行するロシアの革命思想・革命運動との連続を示すことにあるようだ。そしてこの連続の環は革命と民主主義にあるようだ。私たちはすでにこの連続を考えていた。たからこそソヴィエトにおけるナロードニキ研究史の歪曲を問題にしていたのだ。ただ、同じ連続をいうにしても、ネチャーエフやトカチョフをレーニンに結びつけることは、ソヴィエトの歴史家たちにとって無性に腹が立つことらしい。このような継承関

係を主張したのはベルジャーエフやカルポーヴィッチであったが、ボリシェヴィキを革命的民主主義の伝統から引き離して、彼らをナロード大衆の革命運動と結びつかぬ「陰謀家」とする傾向に対して、ソヴィエトの歴史家たちは猛然と噛みつくのである。人は痛いところをつかれると腹を立てるものらしい。

「スラヴ研究所」が北大法学部付属スラブ研究施設として官制化したのが、昭和30年7月1日であって、その前年末、私はロックフェラー財団の研究員としてアメリカのコロンビア大学ロシア研究所に留学した。ニューヨークに着いて間もなく、ロックフェラー・センター所在の財団のオフィスにファーズ博士を訪ねた。博士は当時HumanitiesのDirectorであった。私を迎えた博士のにこやかな笑顔を私は忘れない。その後、お招きをうけてニュージャージーにあるお宅へ伺ったことがある。固くなっている私の気持をときほぐそうとしていろいろと心づかいをしていただいた親切を私は忘れない。お嬢さんが私を相手に五目並べをしたのも、実は博士の心づかいだと察せられた。博士御夫妻からオペラ見物のお招きを受けたこともある。留学中の夏休みを利用して、私はヴァモント州のミドルバリという小さな町のロシア語学校で生活したが、このときも博士御夫妻がドライブ旅行の途次立ち寄って、町のホテルのレストランでお招きを受けた。このロシア語学校では寮生活を原則とし、朝起きてから夜寝るまでロシア語以外の言葉を使ってはならぬ規則があって、このおきてを破れば退学を命ぜられることになっていた。博士のお招きを受けてホテルへ出かけるとき、校長から今日は英語を使ってよろしいと特別許可がおりた。あのとき博士は右手に包帯を巻いていた。自動車のドアにはさんだのだと苦笑していた。申しわけないが…といって、左手で握手の手を差しのべたのを覚えている。それからまた、留学中、ワシントンでアメリカの史学会大会が開かれたときのことだが、ロシア史関係者のお茶の会にファーズ博士が顔を見せ、私のためにハーヴァード大学のカルポーヴィッチ教授その他に紹介の労をとって下さった。あれもこれも懐しい思い出である。

留学中に「スラヴ研究所」は官制化した。官制化以前の組織づくりについては、私の前にアメリカに留学した木村彰一教授がハーヴァード大学やコロンビア大学などのロシア・ソヴィエト研究機関をつぶさに見て、それらを帰国後参考にして仕上げたものらしい。ただ、日本の「スラヴ研究所」の独自性はその研究員構成にある。つまり一大学のスタッフのみで構成するのでなく、他大学のスタッフをも加えたのであって、intercollegiateというか、interuniversityというか、それが特色であった。その独自性は今日も継承されている。

スラヴ研究所はその発足のそもそもの最初からいわゆるひもつきの研究機関ではなかった。なるほど、その創立に当ってロックフェラー財団からスラヴ関係の学術雑誌のバックナムバーの寄贈を受けたし、また2・3の研究員に海外留学の機会が与えられたりした。しかし財団は金を出したが、口を出さなかった。「スラヴ研究所」をオーソライズするのは、日本の政府であって、ロックフェラー財団ではない、という言葉を私は何回かファーズ博士の口からきいた。そのとおりである。

最近、アメリカの前上院議員、J・ウィリアム・フルブライト氏が国際交流基金受賞で来日した。受賞記念講演「世界平和と国際交流」の一部が新聞紙上に紹介されていた。その中で次のような言葉が心にとまった。「国際教育は一国の外交政策の道具に使われてはならない。絶対に、一国のイメージアップ、PRの手段に利用されてはならない。教育交流が外交政策の手段として扱われるならば、教育の腐敗であり、必ず失敗する」と同氏は強調している。ここで取上げた問題は教育の国際交流であるが、研究の国際交流も同様であって、それがいやしくも一国の外交改策の道具に使われてはならない。その結果はいわずと知れたこと、研究の自由は失われ、その成果は硬直する。

フルブライト氏の記念議演の一部を読んで、私はファーズ博士の節度ある態度を思い出した。前述したように、「スラヴ研究所」の構想そのものは、私の知る限りにおいて、ファー

ズ博士から出た。しかしその後の組織運営はまったく北大スタッフの自主性に任せた。あたり前のことじゃないかといえば、それまでであるが、そのあたり前のことが仲々行なわれないからこそ、さきほどのフルブライト氏のような言葉が出てくるのであろう。

「スラヴ研究所」の発足準備の開始が昭和26(1951)年だったとすれば、この年は、1月以来、ダレス・吉田会談を通して単独講和の準備が進められ、3月、対日講和条約草案の発表、8月、最終草案の発表、つづいて日本の講和全権団の出発、そして9月8日、対日講和条約が調印され、日米安保条約が調印された。ここに6ヵ年にわたる占領に終止符が打たれ、日本は独立したが、同時にアメリカの前進基地としての役割を担うことになった。このような状況の中で「スラヴ研究所」の創立準備が行なわれたのだから、というわけで状況証拠から短絡的にひとつの事実を確定しようと猪突猛進して、やれあれは日米安保体制の一環だの、やれアメリカのひもつきだのときめつけるとしたら、私はこのきめつけ方にくみしない。このきめつけ方は私のなまの実感が否定するからだ。誰かの道具になった覚えもないのに、お前は奴隷だといわれたら、そういう相手の幻想に身ぶるいするのは、私ばかりであるまい。笑いとばしてもいいが、やっぱりおそろしいのは、それが思想の鎧をつけた幻想だからだ。かつて私は徳冨蘇峰の「吉田松陰」を愛読したが、その中で蘇峰学人は「世に恐るべきは偏理的哲学者と執迷的妄信者なり」と喝破し、偏理的哲学も冷たい論理だけならば、まだしものことだが、それが宗教的熱気と触れるにいたったら、実におそろしい、と書いている。思想の鎧をつけた幻想のおそろしさを語っているのであろう。そのおそろしさは戦時中いやというほど身にしみたはずなのに、戦後も、そしていまもそれが別の形で日本の精神風土のなかに生きているとしたら、そらおそろしくなるのは臆病な私のみではあるまい。

「スラヴ研究所」の創立20周年を迎えて、創立の産婆役をしてくれたファーズ博士に感謝したい一念からこの一文を草した。ひょっとしたら長い歳月の流転の中でうたかたのように博士の名は消えてしまうかも知れないと思ったからた。産婆役であったにもかかわらず、博士の姿は「スラヴ研究所」に大きな影をおとしていない。それだからこそ、言葉を換えていえば、嵩にかかった力のおごりらしきものがなかったからこそ、かえって博士の寄与は貴重だと思うのである。1951年の日米安保条約におけるダレスの影のようなものはここにはない。ファーズ博士の場合は、暑熱の中をさっと吹きすぎる一陣の涼風のようなさわやかさを残しているだけなのだ。このことはもの静かな博士の節度ある態度のおかげであろうし、だからこそいよいよ忘れてはならぬ人だと思うのである。

木村彰一教授と北大のスラブ研究

外川継男

本年(1986年)1月18日午後4時45分、東京神田駿河台の日大病院で木村彰一教授が急逝された。原因は心不全であり、年齢は71歳になられたばかりであった。

木村教授は当日神田の学士会館でラテン語の辞書の編集をしておられたが、突然の発作に倒られ、救急車で日大病院に運ばれたが、そのままついに不帰の客となられた。

ここに謹んで哀悼の意を表するとともに、生前の木村先生を偲んで一文を捧げる次第である。

誰もが知るように、木村教授はわが国のスラヴ学の創始者の1人であり、研究者としても教育者としても巨大な足跡を残された。木村教授は北海道大学文学部にロシア文学科が、法学部にスラブ研究施設が設立されるに当たって中心的な役割を果たされたばかりか、その後東京大学に移られてからは教養学部の教養学科にロシア分科を、さらに文学部にロシア語ロシア文学科とその大学院の修士・博士過程を設立された。おそらく1人の学者がこのように5つものスラブ関係の教育・研究機関を創設する上で主導的な役割を果たすということは過去にもなかったし、多分これからもありえないことであろう。

学会の上では、「日本ロシヤ文学会」の会長をつとめられ、国内のみならず国際的にも活躍され著名であった。

今後おそらく何人もの人によって、研究者および教育者としての木村教授について、しかるべき文章が書かれることであろう。以下において筆者は、木村教授が4半世紀の長きにわたって関与された北大の「スラブ研究施設」との関係に限って記すこととする。これは初代スラブ研究施設長であられた木村教授への追悼という意味にとどまらず、先生の御逝去を機会に北大のスラブ研究の来し方行く末を考えるよすがにしたいと思うからもである。

木村彰一教授が東京外事専門学校の教授から、敗戦後新設された北大法文学部のロシア語・ロシア文学担当の助教授として赴任されたのは1947(昭和22)年7月1日付のことであり、このとき木村助教授は未だ32歳であった。このあと1956(昭和31)年1月31日付で北大を退職されるまで、木村先生は8年半にわたって北大に勤務されたわけであるが、北大退職後もひきつづき「スラブ研究施設」の研究員としてつとめられた。しかもそれは施設が「スラブ研究センター」に改組される1978(昭和53)年3月31日までの20余年の長期間にわたるものであった。

北大に赴任されて6年後の1953(昭和28)年7月16日から翌年8月27日まで、木村教授はロックフェラー財団のフェローとしてアメリカに留学された。これは同財団が北海道大学にソ連・東欧関係の研究機関を設立する助力をしようとの意向と無関係ではなく、ロックフェラー財団は翌1954年にも「スラヴ研究室」のメンバーたる東京女子大の岩間徹教授をコロンビア大学に、また1960年には筆者をカリフォルニア大学(バークレー)に留学するフェローシップを与えた。木村教授はアメリカでは主にハーヴァード大学でローマン・ヤコブソン教授を指導教官として研究され、その主たる成果は後に『イーゴリ軍記』やプーシキン研究となって結実する。

一方ロックフェラー財団は、このとき木村教授にハーヴァードやコロンビアの「ロシア研究センター」や「ロシア研究所」をも視察して、将来北大に出来るであろう同種機関のモデルにすべく研究してもらいたかったらしい。しかし、この点筆者の見るところでは、木村教授は「地域研究」としてのソ連・東欧研究についてはいささか懐疑的であり、これをもってプロジェクトを作って予算を獲得する手段として考えておられたようである。

ところで本稿を執筆するに際して、筆者が調べたところ、ロックフェラー財団の名前が初めて出て来るのは、木村教授のアメリカ留学の2年前の1951(昭和26)年3月6日付の『北海

道大学新聞』の記事である。このとき来日中のダレス特使団に文化関係の随員として加わっていたロックフェラー三世が、北大の島善鄰学長と会見し、「北大を北方文化のセンター」とするため援助することを約束し、さらに同財団の人文科学部長のチャールズ・ファーズ博士が松田図書館長とこの件に関して「細目について」協議したことが報じられている。

「スラブ研究施設」の設立にあたってロックフェラー財団が財政的に援助したのみか、とくにファーズ博士が献身的に協力されたことは、故岩間教授が「ファーズ博士のこと」(『スラヴ研究』No. 20)と題する一文のなかでも書いておられる。岩間教授の回想するところによると、この年(1951年)の夏、当時富士見高原に別荘を借りて仕事をされていた氏のもとに、わざわざ木村教授が訪ねて来られて、夜を徹して語り合ったが、それは北大に「スラブ研究所」を設立するために岩間教授にも是非協力してもらいたいとの目的からであったという。

しかしこのとき「北方文化のセンター」という新聞の書き方には、ソ連・東欧研究とは別に、北大に以前からあった「北方文化研究室」の研究所昇格という意味とも無関係ではなかったらしい。北大には戦前から北東アジアの諸民族に関する人類学や民俗学の研究の伝統があり、児玉、犬飼、高倉、名取、知里、大場といった著名な研究者が名をつらねていた。しかしロックフェラー財団はこのような「北方文化」よりも、「地域研究」としてのソ連・東欧研究機関がわが国の大学には一つもないことを知って、国立大学中ロシア文学科を有する唯一の大学である北大に目をつけたというのが真相だったと思われる。

かつて筆者は「スラブ研究施設二十年の歩み」(『スラヴ研究』No. 20)と題する一文を草するに当って、創設当時のいきさつを木村教授や鳥山成人教授にうかがったことがあった。そしてこのときお2人の口から、施設の設立に当って島学長のあとを継いだ杉野目学長と並んで、当時法学部におられた尾形典男教授が大きな役割を果たされたことを聞いた。そこで早速1975(昭和50)年1月22日に尾形邸にうかがって、教授自身から次のようなお話をうかがうことができた。

それは木村教授がアメリカへ留学する1、2年以前のことである。尾形教授は東大と京大の2人の教授とともにアメリカにおける「地域研究」の実状を視察するため渡米したが、帰りの船の上で、将来東大はアメリカ研究を、京大は中国・アジア研究を、そして北大はソ連・東欧研究をそれぞれ分担してやるという「希望というか夢」を語り合ったとのことであった。さらにこの時尾形教授は、将来の北大のスラブ研究の目的として、個人的意見だがと前置きされた上で、「歴史研究を中心として、スラブ諸国の文化や思想様式の本質を研究し、ひいては何故にロシアで革命が起こり、それが一応の成功を見たかを理解すること」にあったと筆者に話された。

このあと1953(昭和28)年6月24日付で、官制にもとづかぬ学内共同研究機関として「スラヴ研究室」が北大に設立されたが、すでにそこには文学部門(木村教授、北垣信行助教授、金子幸彦一橋大学講師)、と歴史部門(鳥山助教授と岩間東京女子大学教授)のほかに、経済部門(内海庫一郎教授)、政治部門(猪木正道京都大学教授)、国際関係部門(江口朴郎東京大学教授)といった社会科学の諸部門も加えられて、はっきり「地域研究」の色彩が打ち出されていた。そしてこの「スラヴ研究室」の主任に木村教授が任命されたのは、アメリカ留学に出発されたあとの8月1日のことであった。

しかるにこの「スラヴ研究室」の性格と組織について、この年2月1日付の『北海道大学新聞』には以下のような極めて興味ある記事が掲載されているので、煩瑣を厭わず全文をここに紹介することにする。

「文学部ではかねてから露文科の木村助教授(実は前年12月6日付で教授に昇任している—筆者)、史学科の鳥山助教授らを中心に東ヨーロッパの研究をすすめる計画が立てられていたが、このほどアメリカのロックフェラー財団の援助によって文学部内にスラヴ研究所が設置されるはこびとなった(傍点筆者)。

ロ財団からは約500万円に相当する学術図書、文献などが寄贈され、更に政府より施設費として300万円の予算を要求し来る4月1日より発足する見込である。

最近駐留軍、保安隊などにおけるソ連のさかんな軍事研究が噂されている折から、地理的にソヴェトロシアの研究であり、そのためにアメリカの財団の援助でできるスラヴ研究所にたいしてはかつての中国研究所や大東亜研究所のような反動的な役割をはたすのではないかと懸念するむきもある。

研究所の構想として鳥山助教授は次のように語った。

「従来西欧に比べて劣っていた東欧についての学問的水準を高めるため言語学、文献学、歴史学、文学など広い範囲にわたり基礎的な研究をすすめてゆくが、専任の研究者をおかず、それぞれの分野から研究に参加する。研究は対象が学問的なものであって保安隊などの軍事的、戦略的研究とは全く関係ない。」

つまり、「スラブ研究室」が発足する半年足らず前に考えられていた構想では、①研究の目的は言語学、文献学、歴史学、文学など、いわゆる「スラヴ学」(Slawistik, slavistique) であって、軍事研究や戦略的研究とは全く関係ないものであること。②研究は広範囲にわたるが基本的なものであること、言葉を代えていえば、インターディシプリナリーな学術的研究であること。③文学部に附属し4月1日から発足の予定だが研究所に専任の研究員はおかず、各部局、各機関に研究員を委嘱する計画であることが、ここには記されている。

しかるに「スラヴ研究室」が国立学校設置法にもとづかぬ学内の共同研究組織として発足するのは前述の如く、4月1日ではなく、この年6月24日付のことであり、その運営はもっぱら科学研究費補助金(130万円 ― 但しこの年度の科研費の総額は約1億5千万円であった)でまかなわれた。共同研究としては「ロシアおよびソビエト社会における中間層の役割に関する研究 ― 第1期ナロードニキ関係」がテーマに選ばれ、木村教授の留守を預った鳥山助教授や山本敏助手が実際上の中心となって行われ始めた。

このようにして発足した「スラヴ研究室」は、2年後の1955(昭和30)年7月1日に官制化されて、正式に「スラブ研究施設」として国立大学の1機関として認置された。しかし、このとき認められたのは経済部門の助教授1、助手1にすぎなかった。しかも制度上、研究施設はいずれかの学部か研究所に附置されなければならず、本来なら木村教授や鳥山助教授の在籍する文学部に置かれるべきであったが、実際には研究員のいない法学部に附属するところとなった。従来その理由として、当時文学部はいわゆる「藤井事件」を抱えており、新設の「スラブ研究施設」など引受ける余裕などなかったと説明されてきた。現在筆者はこれに対して疑問を抱いている。というのは、文学部に「第1次藤井教授問題」が発生したのは翌1956(昭和31)年6月のことだからである。むしろ事実は、このようにして生まれた「スラブ研究施設」が、先の北大新聞が報じたようなアメリカの財団の援助の下に出来た研究機関である上に、さらに既存の「北方文化研究室」とも微妙な関係にあることを憂慮して、当時の文学部が引受けることを躊躇したというのが真相だったように思われる。それに加えて、「地域研究」の先駆けをなすソ連・東欧研究機関を北大に設置することについては、すでに尾形教授が島学長および法学部教授会の内諾を取りつけていたという事情もあった。「尾形天皇」と渾名された氏が仲介となって島学長やその後の杉野目学長を動かした結果、新しく出来た「スラブ研究施設」は形式的には法学部に属するが、法学部には一切迷惑をかけず、学部長選挙にも加わらなければ、法学部の教授会にも参加しないという紳士協定が出来たのであった。

この年10月21日付の『北海道大学新聞』は「スラブ研究施設」の誕生を次のように簡単に報じている。

「『スラブ研究室』は、去る7月1日付で研究所(実は研究施設 ― 筆者)に昇格したが、このほど教養部第3講堂裏に独立の校舎を持つことになった。

山本同研究所講師談

この研究所は、これまで我が国で非常におくれている、ロシアソヴィエトを中心とするスラブ民族諸国を研究するために作られたもので、日本でも最初のものと思います。これからは『Area Study』の方法を採入れて、全国の専門の学者の連携の下に研究を進めて行くつもりです。」

ここに、「スラブ研究施設」がSlawistikの研究機関というよりSlavic area studiesの研究機関たることが、初めて登場してくる。事実第二次大戦後アメリカで急速に発達した「地域研究」においては、ソ連・東欧を中心とするスラブ地域の研究Slavic studiesが主導的役割を果たしており、このような気運のなかで1955(昭和30)年に北大に「スラブ研究施設」が誕生したのであった。

木村教授はこのようにして生まれた「スラブ研究施設」の初代施設長に任命され、同時に文学部教授と法学部教授を兼任した。新設の「スラブ研究施設」には文学部から鳥山助教授と経済学部から山本講師が移られ、創設期の種々の雑用をこなされた。

「スラブ研究施設」の命名の由来に関しては、鳥山教授の退官パーティーの折に次のような逸話が紹介された。研究施設の設立にあたって、「ソ連研究施設」と「ロシア研究施設」の二つがあげられたが、当時の社会的風潮からすると、前者はともすれば親ソ的であり、後者は反ソ的なニュアンスをもつものとして受けとられる可能性があった。そこで言葉としては政治的色彩のまったくない「スラブ研究施設」に落着いたというのである。

しかしこれにはプラスとマイナスの双方がある。プラスはソ連や東ヨーロッパの研究者との交流という点で、これがたいへんよい名称だということである。事実彼らの多くは、もしこの研究所が「ソ連・東欧研究所」という名前だったら、自分の所属する大学や研究所はここを訪れることを許可しないであろう。なぜならそれはソ連・東欧に関する外交政策や軍事を研究したり、スパイを養成するところと見なされるからであるという。一方、マイナスというのは、「スラヴ研究」というのは本来フィロロジーやフォークロアが中心であるのに、過去にも現在にも専任のメンバーでこの分野の専門家が1人もいないという事実である。またスラヴ圏といいながらソ連(ロシア)とポーランド以外はまったく手薄だからである。

本来フィロロジストであった木村教授は、アメリカ流の政策科学的なソ連・東欧研究には一貫して批判的であった。しかし新しく設立された「スラブ研究施設」の年2回定期的に行なわれる研究員会議においては、研究も予算も人事も、まったくイデオロギーに左右されることなく、あくまでも学術的な基礎に立脚して行なわれた。当時の日本の学会で、右の猪木教授と左の江口教授とが同じ宿舎に泊り、同じ釜の飯を食って議論を戦わせた後、同じ温泉につかって文字通り裸でつき合うといった光景は、北大の「スラブ研究施設」以外、いかなる大学でも考えられぬところであったろう。この「スラブ研究施設」のイデオロギーに左右されぬ、アカデミックでリベラルな研究こそ木村教授や鳥山教授が築かれた伝統であったといってよい。

しかし木村教授は「スラブ研究施設」が設立されたわずか半年後の1956(昭和31)年1月31日付で、9年間勤務された北大を退職され、東京へ移られることになった。

木村教授は北大文学部では1952年12月以来教授の地位にあったが、東大文学部の言語科が用意したポストは助教授であった。このため木村教授はいったん文部教官を自己都合で退職して、新たに東大に採用される形をとられた。北大の他の学部では、時として北大教授から東大助教授に降格となって移る例があるが、木村教授はこのようなやり方はとられなかった。

しかし北大教授を辞任したとはいえ、木村教授はその後23年間にわたって、「スラブ研究施設」が「スラブ研究センター」となって独立するまで研究員でありつづけられた。「スラブ研究施設」は毎年2回、主に夏は札幌で、冬は東京ないし首都圏で研究員会議を開催してきたが、そこにおいて木村教授が報告された研究テーマは以下の如くである。

1954年7月　　アメリカにおけるスラヴ研究の現状について

1957年1月　『イーゴリ軍記』について
1957年12月　ベリンスキーのタチアーナ観
1959年6月　パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』について
1960年10月　N.S.レスコフについて
1963年1月　アンジェイエフスキの作品について
1966年11月　アブラム・テルツの社会主義リアリズム論について
1969年11月　1966年2月の文学裁判について
1974年7月　『青鍋の騎士』解釈をめぐって
1977年6月　偶感

この最後のテーマは、「スラブ研究施設」がセンターに改組されるに当って、こちらからお願いして4半世紀に及ぶ思い出を話していただいたものであった。

このほかにも「スラブ研究施設」はいわゆる大学紛争以後、より開かれた研究をめざして学生や職員のみならず一般市民をも対象に公開講演会を開催したが、そこにおいても木村教授は以下の如き講演を引受けて下さった。

1969年7月　スラヴの使徒キリールの業績について
1971年7月　晩年のトルストイ
1975年7月　プーシキン雑感

この最後の講演の7月15日には、北大のクラーク会館において「スラブ研究施設創立20周年祝賀会」と、あわせて「木村彰一・矢田俊隆両教授還暦祝賀会」が盛大に開かれた。今村成和学長や小碁得雄法学部長より心のこもった祝詞が寄せられ、スラブ研究施設の今後の発展と両教授のますますの御活躍を祈って乾杯が重ねられた。

木村教授が研究員として出席された最後の研究員会議は、1978(昭和53)年2月の東京本郷の学士会館における会議であった。その第2日の2月8日の午後6時から、今度は場所を変えて神田の学士会館で「スラブ研究施設」のお別れパーティーが開かれた。奇しくも木村教授が倒られた同じ場所で、木村教授をはじめ、江口、金子、岩間、百瀬宏、日南田静真、斉藤孝、望月喜市、南塚信吾、宮島直機といった北大外の新旧研究員に、矢田、五十嵐清、鳥山、福岡星児教授ら北大の兼任研究員を加えて、まことに楽しい一夕をもつことができた。すでに4月1日から法学部所属の「スラブ研究施設」は独立した「スラブ研究センター」になることが決定しており、25年に及ぶ「スラブ研究施設」の歴史を回顧しつつ、新しい「センター」への期待が語られた。

「スラブ研究施設」は1957年以来現在にいたるまで機関誌『スラヴ研究』を発行してきた。木村教授はその第1号から1979年の第24号まで7回にわたって『イーゴリ遠征譚—訳及び注』を連載された。これは木村教授の主要業績の一つである。しかし本文よりもはるかに注が多く、しかもいろいろな言語の活字を必要とするこの『イーゴリ遠征譚』の印刷は、正直なところ印刷屋と編集者泣かせといった面もなかったわけではない。しかしいまやわれわれは、この木村教授の業績を『スラヴ研究』に連載し終ったことを多少とも誇りにしている。なぜなら、このような面倒な原稿を採算を無視して出版するところはほかにないからである。このあと木村教授は近年岩井憲幸氏と共訳の形で『コンスタンティノス一代記』と『メトディオス一代記』をも『スラヴ研究』の第31号以下に連載された。そして今回本誌に掲載されている『メトディオス一代記』が木村教授の最後のお仕事となられた。

「スラブ研究センター」の設立により、それまでの学外研究員はすべて交代され、木村教授も『スラヴ研究」に寄構されるほかセンクーと直接関係を持たれることはなくなった。しかしその後も平均して2年に1度は北大の文学部に集中講義に来られ、『イーゴリ軍記』や『エフゲーニ・オネーギン』やオストローフスキーの『雷雨』の演習を行なわれた。

木村教授は昨年は9月の下旬に北大に集中講義に来られた。いつものように灰谷氏の肝煎りで木村教授を囲んで9月24日の夕べにロシア語・ロシア文学の人たちと楽しい歓談のひと

ときを持つことができたが、私にとってはこれが木村教授とお話することのできた最後の機会となった。たまたま私の前に席を取られた木村教授は、全員がそろうまでの時間を使われて、最近の「スラブ研究センター」が本来のスラヴ学からますます遠去かり、ソビエト政治や国際関係に重点が移ってきたことをさびしげに語り、ひとこと「これも時勢ですかな」とつぶやかれたことが強く印象に残っている。

(Jan. 25, 1986)

スラブ研究施設回想

鳥山成人

[　同座談会は鳥山成人北大文学部教授の退官に先立って、1985年1月12日、北大史学会の主催で行われた。転載部分は同座談会の第2部、鳥山教授がスラブ研究施設に在籍していた1956年3月～69年3月に関する部分。発言者中高岡健次郎氏は現札幌学院大学教授、中村健之介氏は現東京大学教授。]

外川継男: 私も林健太郎教授にロシア近代の思想史を研究するなら北大がよいといわれ、昭和32年、北海道大学の文学研究科の大学院生としてやって来たわけです。鳥山先生はその前年の昭和31年に文学部からスラブ研究施設に配置換えになっていました。この施設は昭和28年に北大の小さな研究機関として生まれ、昭和30年7月1日に官制化し、法学部付属のスラブ研究施設となりました。最初の施設の主任は、文学部ロシア文学科の木村彰一先生でしたが、木村先生は間もなくアメリカのハーバード大学へ留学され、鳥山先生が事実上、施設の建物から研究メンバーの構想に至るまで色々と関係されたと聞いています。施設の建物も随分苦労されて捜されたと聞きましたし、創設期のいろんな御苦労もあったと思います。まず、創設に至る事情と、なぜ文学部でなく法学部の付属になったのかということを伺いたいと思います。

鳥山成人: 北大にスラブ研究の機関をつくるということが起こりました当時、実は私は中心人物ではありませんでした。ロシア文学科の木村彰一さん、法学部、経済学部の教授クラスの先生方が話しをされて、私は兼任の研究員としてお手伝いすることから始ったのです。その間の事情はそういう訳で、私も詳しくは知らないのですが、戦後日本で海外の学界状況がだんたん明らかになってきた段階で、アメリカにはいわゆる地域研究Area Studyという研究の組織、あり方のあることが判りました。それで、当時の占領軍と文部省の合意によるんでしょうが、日本にもそういうものを導入できないかということで何人かがアメリカへ視察に行かれた。その1人が北大法学部の尾形(典男)さんで、氏が帰って来てから文学部や経済学部の先生方と話しをされ、北大にはスラブ関係の研究機関をつくろうということになり、まず学内組織としてでき、次いで昭和30年に官制化され、予算と定員も最小限度つき、正式に発足したわけです。

その内、初めの中心人物であった木村彰一教授が東京へ転出し、結局、研究施設が置き去りになったようなもので、私も文学部から移り、まだ完全でない施設の裏方的なことを引き受けざるを得ないことになりました。もともと学部と学科の枠を越えた組織ですから、従来の日本の大学には非常に馴染みが悪いわけで、当時の学長にお願いしたのですが、どの学部も自分の所属としたがらなかった。文学部については、確かに研究対象に文学と歴史があるが、同時に政治学とか、国際関係とか経済学があり、又、法学部について言えば、自分達と異質な文学とか歴史という部門があるのは困るということで、宙に浮いてしまった。結局、学長が法学部長に、迷惑はかけない、廂を借して頂くだけと頼みこんだというかたちです。学長が農学部の出で、たまたま法学部長も、もと農学部の農経で農業法をやっておられた小林さんであったということも関係していると思います。当時、一つの学部で完全に丸抱えできない機関が、いろんな大学に少しずつできて来たのですが、文部省ははじめそれを一つ一つ扱い、同じようなものができてしまったので、だいぶ後に大学の学部に研究施設を置くこ

とができるという法律改正を行い、それでスラブ研究施設も制度的に一応安定するということになったと思います。その間は非常に中途半端な存在ですから私を含めて関係者が苦労したわけです。

外川: 私は昭和36年にアメリカ留学から帰り、スラブ研究施設の助手になりましたが、当時はある意味で基礎ができており、年に2回、研究員会議がコンスタントに開かれていました。スラブ研究施設には歴史学、文学、政治、経済、国際関係という5部門があり、その後、法律が加って6部門となります。文学では、ロシア文学科の北垣(信行)先生、福岡(星児)先生、助手の松井(茂雄)さんが、歴史の方では、施設長の鳥山先生の他に、東京女子大学の岩間(徹)先生が、政治では北大の矢田(俊隆)先生が関係され、学外では京都大学の猪木正道教授が兼任研究員でした。国際関係では東京大学の江口朴郎教授がおられ、法律関係では北大の五十嵐(清)先生が加わることになります。このようにスラブ研究施設は発足当時から学部とか大学の枠を越えた研究機関であり、学問の内容も六分野に亘っています。やはり北大におけるスラブ研究施設の位置づけということもありますし、日本において学部とかデイシプリンを越えた、あるいは跨った学問という伝統がなかったところから、研究組織をどのように運営していくかという点で、大変苦労されたと思います。

私はスラブ研究センターには良い意味でのアカデミズムとリベラリズムの伝統がみられると思います。とかくソ連・東欧という地域を対象とする場合、そこにイデオロギーが入らざるを得ない面があるわけですが、鳥山先生がずっと関係されたスラブ研究施設は、そういうものを越えて、自由なディスカッションができる場だったと思います。今、鳥山先生が御苦労の一端を語られましたが、新しい学問分野でともすればイデオロギーとか政策に左右されがちな研究機関を、良い意味でのアカデミズムで支えられてきたということで、私は鳥山先生の御苦労に対して感銘しているわけです。

鳥山: アカデミズムとリベラリズムという研究・討論の雰囲気は、別に私が施設長であったからという訳でなく、関係して頂いた先生方が最少限度の了解として前提し、日本のスラブ研究を発展させるために協力して下さったことがあったからだと思います。今の話に関わって一つだけ申しますと、最初そういう研究機関をつくるとき、現在と違い政治的には非常に微妙な問題が存在していました。例えばネーム一つにしても、初めはロシア研究所にするか、ソ連研究所にするかということで、スラヴ一般あるいは東欧一般まで念頭に入っていなかった。当時の社会の受けとめ方からは、ロシア研究所とすると大変反動的な響きを鮮明にするようで、逆にソ連研究所というと非常に親ソ的な研究所であると看板に掲げるように受けとめられる社会的風潮がありました。それで、いわば苦肉の策として当り障りのないスラブ研究施設という名前がついたわけです。そういう意味での苦心は私ばかりでなく皆さんも持たれたと思います。学内でも、外部でも好意的な支援もありましたが、同時に疑惑の眼で、あれはアメリカの紐がついている、あるいはソ連大使館と何かあるらしいとか、今考えると噴飯ものですが、考えられてもおかしくない雰囲気のなかで発足しました。そういう点では各人、相当注意を払ったと思います。

外川: 私が北大に来るよりも前に、一橋大学を出た萩原直さんが、また私の後にも何人もの方がロシア史を勉強するために北大の文学研究科に、あるいは最初から文学部の西洋史にこられた。この間に、ロシア・東欧史について北大の文学研究科に修士論文を出したものは12~3人おり、その内、半分位が大学の教職についています。私は昭和32年にまいりましたが、その時、鳥山先生は既にスラブ研究施設に移られていたわけですが、文学部の西洋史にずっと開係されており、私はゼミにだけ出ていました。その頃は月曜日にスラブ研究施設で

ロシア語でリヤシチェンコのロシア経済史のゼミがあり、それから、福岡先生がチューターになられてポーランド語のゼミがあった。鳥山先生はその頃からポーランド語をやりポーランド史の資料をお読みになっていた。水曜日には文学研究科でフランス近世史のゼミがあり、ムーニエの国際歴史学会での報告だったと思いますが、フランス語で読んでいた。その水曜日に雑誌講読会があり、これは大学院生がそれぞれの分野の雑誌を紹介したわけです。金曜日にはロシア史関係のゼミがあり、私の時はロシア語でなくフランス語で、アレクサンドル・コイレの著作をつかってゼミをやりました。この頃はゼロックスはありませんから、今考えると大変な労力でした。私は今でもはっきり憶えていますが、その前年に東大では堀米(庸三)さんがマルク・ブロックの『封建社会』をテキストにフランス語で読んでいました。ブロックもとても難しい文章ですが、このコイレのテキストをロシア史の専門家である鳥山先生が実に正確に読まれる。これには本当に驚きました。それから、私は北大の大学院へ来て、鳥山先生に初めて私の分野の基本的文献をいくつか教えて頂いたわけですが、大学院修士課程に入ったぐらいの学生に基本的な、ある場合にはオリジナルな研究文献を教えるということは大変なことだと思います。こういう点では、鳥山先生は古代から現代に至るまでのロシア・東欧について非常に幅広く、目配りの利いた、正しい深い指導ができたのではないかと思います。それに西洋史の学生の中にはロシア史に限らず、イギリス、フランスとかドイツを学ぶ学生もいますが、彼らにもそれぞれ卒論なり修士論文なりで指導なさり、幅の広い教育ができるということは本当に難しいことで苦労されたと思います。いわば、北大の西洋史の一つの看板といえると思いますが、ロシア・東欧史が非常に強いという伝統があり、この点でも、鳥山先生には御苦労なり思い出がおありと思います。

鳥山: 教師としていい教師であったかどうかは私の場合だけでなく、本人が判定するのではなく、講義やゼミに出席された方々が、それぞれの体験に基づいて判断されるべきでしょう。只今、私が指導教官でマスター論文を書いた人が十数人とありましたが、三十数年いてその程度というのは、あまり効率の良い教師ではなかったという気も一面ではするわけです。自分自身ではあまりいい教師であったとは思いません。講義がもともと非常に下手ですし、嫌いですし、止むを得ずやっているものですから、学生諸君には非常に理解しにくい講義を長い間やってきて御迷惑をかけたということは、やはりちょっとお詫びしたいと思います。もう遅いんですが反省しています(会場笑い)。只一つだけ弁解させて頂きますと、大きな声をあげると論理が雑になってしまうような感じがします(会場笑い)。ノートやメモは準備していても、話しているうちに何か違うことに気付いたり、それを訂正したりしているうちに論理が混乱し、それを元に戻そうとすると、又混乱を重ねる。後で試験をすると、そのあたりは大抵、学生のノートも非常に混乱している。やはり、大きな声をあげながら同時にきちんと文章を作りながら話す、論理もきちんと落度のないようにするのは至芸に属することです。結局、講義の前に自分自身の頭の中で、きちっと主題が咀嚼され、論理展開ができていれば、そういうことはないのですが、教師のそういう苦悩みたいなものを察知することが学生の努力として望ましいということもあるわけです(会場笑い)。又、学問というのは、そう簡単に筋道通り、きちっと説明できるものではないと、特に歴史学の場合、そういうことも間接に察知して頂ければ幸いです。どうも御迷惑をかけたようで相済みません、ここでお詫びしておきます(会場大きな笑い)。

外川: 当時、鳥山先生のゼミに出ていた高岡さん、中村健之介さん、何か思い出なりございましたら、一言お願いします。

高岡健次郎: 私が西洋史学科に移ったのは、1958年ですが、学部時代に受けた先生の講義は、先生が書かれた修道社の『ロシア史』をテキストに使われてのロシア史の概説でした。私の記憶では、テキストがあるということもあったでしょうが、余り聴きとりずらかったということはなかったと思います(会場笑い)。

思い出となるとむしろ研究指導という点にあると思います。私が大学院へ進むと大学院の他の人達と、スラブ研究施設の小さな部屋で、膝を交えての自由な形式のゼミをもって下さった。そこで私はレーニンの論文を研究発表するとか、非常に自由なゼミでした。鳥山先生の研究上の指導は、いわば手とり足とりという仕方とは違います。後姿でということではないのですが、最も基本的なところで、その時々の適切な指導をなさる、それを我々がどれたけ吸収できるかということになると思います。私は卒業論文を何人かの先生を前にして報告したことがありますが、先生は一応内容の評価をされたあとで、結局、この論文は何を狙いとしているかという、今も記憶に残る非常に辛辣な言葉がありました。その後、考えさせられ、後から修士論文、その他を執筆する際に心すべきこととして、噛み締めたことがあります。しかし、いよいよという段階では吃驚するぐらいの親切をして頂ける。例えば、ロシア史研究会で発表するとなると、わざわざ出て行ってついて来てくれるというような。

先程、話しがありましたが、スラブ研究施設という名前を選ぶに当ってロシア史とするか、ソ連史とするかということで苦労されたような、つまり、ロシア史研究は政治的背景がかなり影響し易い分野だと思います。私は特に革命史をやっておりますので、先生に色々と話しをもちかけたりすると、適確な姿勢を絶えず示され、大変学びとるところが多かった。その点で、先生が様々な外的諸要因に影響され易いロシア史研究のなかで、研究上、特に留意されていた点をお聞かせ願えればと思います。

鳥山: 政治的に色々と意味のある領域であるかとうかということで、私自身、特に心掛けてきたことはありません。ありふれたことで言えば、やはり、いろんな立場で、いろんな人が書いているものをできる限り系統的に読むことで、一つは、研究史を、それは同時に思想史でもあるわけですが、辿っていくことが、現在その問題がどういう立場からはどういうふうに、別の立場からはどう発言されているかを少し距離をおいてみることを可能にする方法じゃないかと思っている。日本では、ロシア史研究は現在でも新しい分野ですから、多少とも違った何かをやろうとすると、必ず研究史まで遡らねばならないということで、研究史をフォローするわけですが、その結果として現代の学界での論争とか、問題状況とか研究視角といったものを、ある程度つき離して、広い眼でみることが、理想ですが、できることになるのではないかと思います。

外川: 今の話を聞きながら、一つだけ申し上げたいことがある。ロシア史は学問が新しいとか、イデオロギーに左右され易いということもあるせいか、時とすると思いつきで発言したり、ソ連や西側、アメリカ等の業績を自分のものであるかのように提出し、得々としている向きがかっては無きにしもあらずだったと思います。そういう学問の姿勢に対して、鳥山先生は驚くほど厳しかった。自分の書かれたものでは、非常に禁欲的で、これ以上は史料的裏付けがないとはっきり言われ、断定を避けるということがあったと思います。それから、鳥山先生のお仕事のなかで書評も興味深い。書評はその人の学問的蓄積だけでなく、いわば人柄とか人格的なものが滲み出るものと思いますか、その点から、先生の書評は実に目配りがきいた絶品だろうと思います。それでは次に中村さん、一言お願いします。

中村健之介: 当時、毎週1回のゼミでしたが大変スピードがありおもしろかった。私と外川さんと高岡さん、もう1人か2人いたと思いますが、非常に小さなゼミで、シモンズの編

集した『伝統と変化 ―ロシアとソ連』を読みました。毎回レジュメを配り、非常に能率のいい、視野の広い一種の授業でした。印象を申しますと、正確に読み、報告し、それを提出するということで、スピードと正確さがありました。もうひとつは、学生に対して、フェアであった。教師として大変必要で、大事なことではないかと思います。鳥山先生に学ばれた方々は大変、運の良い学生で、私はほんの1年間だけでしたが、あまり運が良いので、それに気付かない点もあるのではないかと思います。

2. 研究員リスト

センター長・施設長・主任

専任スタッフ

客員教授

外国人研究員

共同研究員・兼任研究員

事務官

センター長・施設長・主任

1955.7.1～1957.3.31	木村彰一
1957.4.1～1969.3.31	鳥山成人
1969.4.1～1971.3.31	百瀬宏
1971.4.1～1975.9.30	外川継男
1975.10.1～1977.9.30	木村汎
1977.10.1～1981.3.31	外川継男
1981.4.1～1983.3.31	伊東孝之
1983.4.1～1985.3.31	望月喜市
1985.4.1～1987.3.31	木村汎
1987.4.1～1989.3.31	伊東孝之
1989.4.1～1992.3.31	原暉之
1992.4.1～1994.3.31	皆川修吾
1994.4.1～	望月哲男

専任スタッフ

1955 鳥山成人 (助教授)、山本敏 (講師)

1956 鳥山成人 (助教授)、山本敏 (講師)

1957 鳥山成人 (助教授)、山本敏 (講師)

1958 鳥山成人 (助教授)、山本敏 (講師)

1959 鳥山成人 (助教授)、松原道子 (助手)、山本敏 (助教授)

1960 鳥山成人 (助教授)、松原道子 (助手)、山本敏 (助教授)

1961 外川継男 (助手)、鳥山成人 (助教授)、山本敏 (助教授)

1962 外川継男 (助手)、鳥山成人 (助教授)、山本敏 (助教授)

1963 外川継男 (助手)、鳥山成人 (教授)、山本敏 (助教授)

1964 出かず子 (助手)、外川継男 (助手)、鳥山成人 (教授)、百瀬宏 (助教授)、山本敏 (助教授)

1965 出かず子 (助手)、外川継男 (助手)、鳥山成人 (教授)、百瀬宏 (助教授)、山本敏 (助教授)

1966 出かず子 (助手)、外川継男 (助手)、鳥山成人 (教授)、百瀬宏 (助教授)、山本敏 (助教授)

1967 出かず子 (助手)、外川継男 (助手)、鳥山成人 (教授)、百瀬宏 (助教授)、山本敏 (助教授)

1968 出かず子 (助手)、外川継男 (助手)、鳥山成人 (教授)、百瀬宏 (助教授)、山本敏 (助教授)

1969 出かず子 (助手)、佐野優子 (助手)、外川継男 (助教授)、百瀬宏 (助教授)、山本敏 (助教授)

1970 出かず子 (助手)、木村汎 (助教授)、佐野優子 (助手)、外川継男 (助教授)、百瀬宏 (助教授)、山本敏 (助教授)

1971 出かず子 (助手)、木村汎 (助教授)、佐野優子 (助手)、外川継男 (助教授)、百瀬宏 (教授)、山本敏 (助教授)

1972 出かず子 (助手)、木村汎 (助教授)、佐野優子 (助手)、外川継男 (助教授)、百瀬宏 (教授)

1973 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (助教授)、木村汎 (助教授)、坪内七魚子 (助手)、外川継男 (教授)

1974 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (助教授)、木村汎 (助教授)、坪内七魚子 (助手)、外川継男 (教授)

1975 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (助教授)、木村汎 (助教授)、坪内七魚子 (助手)、外川継男 (教授)

1976 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (助教授)、木村汎 (助教授)、外川継男 (教授)、松田潤 (助手)

1977 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (助教授)、木村汎 (教授)、外川継男 (教授)、松田潤 (助手)

1978 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (教授)、木村汎 (教授)、外川継男 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)

1979 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (教授)、岩田昌征 (教授)、木村汎 (教授)、外川継男 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)

1980 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (教授)、岩田昌征 (教授)、木村汎 (教授)、外川継男 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)

1981 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (教授)、岩田昌征 (教授)、木村汎 (教授)、外川継男 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)

1982 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (教授)、岩田昌征 (教授)、木村汎 (教授)、外川継男 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)

1983 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (教授)、岩田昌征 (教授)、木村汎 (教授)、澤田美喜子 (助手)、外川継男 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)

1984 出かず子 (助教授)、伊東孝之 (教授)、木村汎 (教授)、外川継男 (教授)、長谷川毅 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)

1985 出かず子 (教授)、伊東孝之 (教授)、木村汎 (教授)、外川継男 (教授)、長谷川毅 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)

1986 伊東孝之 (教授)、大塚恵理 (助手)、木村汎 (教授)、田畑伸一郎 (助教授)、外川継男 (教授)、長谷川毅 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)、望月哲男 (助教授)

1987 伊東孝之 (教授)、大塚恵理 (助手)、木村汎 (教授)、田畑伸一郎 (助教授)、長谷川毅 (教授)、原暉之 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)、望月哲男 (助教授)

1988 伊東孝之 (教授)、木村汎 (教授)、小竹史緒 (助手)、田畑伸一郎 (助教授)、長谷川毅 (教授)、原暉之 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)、望月哲男 (助教授)

1989 伊東孝之 (教授)、木村汎 (教授)、杉浦和子 (助手)、田畑伸一郎 (助教授)、長谷川毅 (教授)、原暉之 (教授)、松田潤 (助手)、望月喜市 (教授)、望月哲男 (助教授)

1990 秋月孝子 (講師)、伊東孝之 (教授)、木村汎 (教授)、田畑伸一郎 (助教授)、野原美香 (助手)、長谷川毅 (教授)、原暉之 (教授)、松田潤 (助手)、皆川修吾 (教授)、望月喜市 (教授)、望月哲男 (助教授)

1991 秋月孝子 (講師)、家田修 (助教授)、伊東孝之 (教授)、田畑伸一郎 (助教授)、野原美香 (助手)、長谷川毅 (教授)、原暉之 (教授)、松田潤 (助手)、皆川修吾 (教授)、望月喜市 (教授)、望月哲男 (助教授)

1992 秋月孝子(講師)、家田修(助教授)、伊東孝之(教授)、田畑伸一郎(助教授)、野原美香(助手)、原暉之(教授)、松里公孝(助教授)、松田潤(助手)、皆川修吾(教授)、望月喜市(教授)、望月哲男(助教授)

1993 秋月孝子(講師)、家田修(助教授)、田畑伸一郎(助教授)、野原美香(助手)、原暉之(教授)、松里公孝(助教授)、松田潤(助手)、皆川修吾(教授)、望月喜市(教授)、望月哲男(助教授)、山村理人(助教授)

1994 秋月孝子(助教授)、家田修(助教授)、井上紘一(教授)、田畑伸一郎(助教授)、野原美香(助手)、林忠行(教授)、原暉之(教授)、松里公孝(助教授)、松田潤(助手)、皆川修吾(教授)、村上隆(教授)、望月哲男(教授)、山村理人(助教授)

1995 秋月孝子(助教授)、家田修(教授)、井上紘一(教授)、田畑伸一郎(助教授)、兎内勇津流(講師)、野原美香(助手)、林忠行(教授)、原暉之(教授)、松里公孝(助教授)、松田潤(助手)、皆川修吾(教授)、村上隆(教授)、望月哲男(教授)、山村理人(助教授)

(備考)北海道大学職員録をもとに作成。必ずしも、4月1日現在ではない。
各年度の氏名は50音順。

客員教授

1978.9.～1980.3.	中村喜和(一橋大)
1980.4.～1982.3.	渓内謙(東大)
1982.4.～1984.3.	宮鍋幟(一橋大)
1984.4.～1986.3.	江川卓(東京工大)
1986.4.～1988.3.	木戸蓊(神戸大)
1988.4.～1990.3.	和田春樹(東大)
1990.4.～1992.3.	大津定美(龍谷大)
1990.4.～1992.3.	安井亮平(早稲田大)
1992.4.～1994.3.	中村泰三(大阪市立大)
1992.4.～1994.3.	石川晃弘(中央大)
1993.4.～	斉藤晨二(名古屋市立大)
1994.4.～1995.3.	小森田秋夫(東大)
1994.4.～	川端香男里(中部大)
1995.4.～	百瀬宏(津田塾大)

外国人研究員

Year	Name	Speciality	Place of Work (Address)
1978-79	Basil Dmytryshyn	Russia & Soviet history	Dept. of History, Portland State Univ., POB 751 Portland Oregon 97207 USA
1978-79	Stuart E. Kirby/deceased	Economic history of Russia, China & Japan	

Year	Name	Speciality	Place of Work (Address)
1979-80	Vladimir V. Kusin	History of Eastern Europe	Glasgow Univ., Gebelestrassse 80 800, Munchen 80 Germany
1979-80	Albert Boiter	Soviet politics, law	Research Center for Religion & Human Rights in Closed Society, 475 Riverside Dr. New York, NY 10115 USA
1979-80	Paul L. Horecky	Philosophy, library science	Institute for Sino-Soviet Studies, George Washington Univ. 2207 Paul Spring Rd. Alexandria, VA 22307 USA (Home)
1980-81	Vladislaw G. Krasnow	Russian literature, history, anthropology, politics	Monterey Institute of International Studies 425 Van Buren, Monterey, CA 96940 USA
1980-81	Andrzej Garlicki	History	ul. Gdanska, 2 m 17 Warszawa 01633 Poland (Home)
1981-82	Janusz Beksiak	Economics	Institut Ekonomii Politycznej Sgpis 02-554, Warszawa A1. Niepodleglosci 162 Poland
1981-82	James R. Gibson	Contemporary & historical geography of Russia	Faculty of Arts, York Univ. 4700 Keele Street Downsview, Ontario M3J 1P3 Canada
1982-83	Jasse Zeldin/deceased	19th century Russian literature	
1982-83	Norman I. Davies	Polish history	School of Slavonic & East European Studies, Univ. of London Senate House, Malet Street, London WC1E 7HU U.K.
1982-83	Aleksandr M. Nekrich	History of the USSR, Great Britain: International relations	Russian Research Center, Harvard Univ. 1727 Cambridge St., Cambridge, MA 02138 USA
1983-84	Caslav Ocic	Yugoslav economic system: Development economics	Institute of Economic Sciences Beograd Beograd Zmaj Jovina 12, Beograd 11000 Yugoslavia
1983-84	Aladar Sipos	Economic cooperation in Comecon countries	Institute of Economics, Hungarian Academy of Sciences POB 262, H-1502 Budapest, Hungary
1984-85	Samuel H. Baron	Russian history	Univ. of North Carolina, Chapel Hill 5, Marilyn Lane, Chapel Hill, NC 27514 USA
1984-85	Leslie D. Dienes	Soviet geography	Dept. of Geography, Univ. of Kansas, Lawrence, KS 66045 USA
1985-86	Gordon B. Smith	Soviet politics	Dept. of Government & International Studies, Univ. of South Carolina, Columbia, SC 29208 USA
1985-86	Jean-Claude Lanne	20th century Russian literature	Lyon Univ., 1 rue de l'Universite, BP 155 France
1986-87	R. Alan Kimball	19th century Russian history	Dept. of History, Univ. of Oregon, Eugene OR 97403 USA
1986-87	Lu Nanquan (陸南泉)	Soviet & East European economy	Institute of East European, Russian & Central Asian Studies, Chinese Academy of Social Sciences, 3 Zhang Zizhog Lu, 100007 Beijing PRC (中国)

Year	Name	Speciality	Place of Work (Address)
1987-88	James P. Scanlan	Russian & Soviet philosophy & ideology	Dept. of Philosophy, Ohio State Univ., 230 North Oval Mall, Columbus, OH 43210-1365 USA
1987-88	Leonid I. Evenko	Comparative economics	International Business School, Academy of National Economy, pr. Vernadskogo, 82, Moscow 117571 Russia
1987-88	Aleksei U. Sheviakov	Mathematical economics	Central Economics & Mathematical Institute of the RAN, Krasikova str. 32, Moscow 117417 Russia
1988-89	Andrew R. Durkin	19th-20th centuries Russian literature	Dept. of Slavic Languages & Literatures, Indiana Univ., Ballantine Hall 502, Bloomington, Indiana 47405 USA
1988-89	Victor L. Mote	Economic geography of the USSR	Dept. of Political Science, Univ. of Houston, University Park Campus, Houston, TX 77004 USA
1989-90	Jerzy Tomaszewski	Economic history of Poland	M. Anielewicz Center for Research and Teaching of the History and Culture of Jews in Poland, Warsaw Univ., ul. Czarnieckiego 52, 01-548 Warszawa Poland (Home)
1989-90	Detlef Brandes	19th-20th centuries East European & Russian history	Osteuropa Institut der Freien Universität, Garystr. 55, D-1000, Berlin 33, Germany
1990-91	George Yaney	19th-20th centuries Russian history	Dept. of History, Univ. of Maryland, College Park, Maryland 20742 USA
1990-91	Aleksandar Petrov	19th-20th centuries Yugoslav & Russian literature	Institute for Literature & Arts Belgrade, Djushina 7, 11000 Belgrade Yugoslavia
1990-91	Evgenii B. Kovrigin	Economic relations of Japan with the USSR & other pacific countries	Faculty of Law, Seinan Gakuin Univ., 6-2-92, Nishijin, Sawara-ku, Fukuoka 814 Japan
1991-92	Elena A. Krasnostchekova	18th-20th Centuries Russian literature	Univ. of Georgia, Meigs Hall, Rm. 211, Athens, GA 30602 USA
1991-92	Edward Mozejko	Modern Slavic literature	Department of Comparative Literature, Univ. of Alberta, 347 Arts Building, Edmonton, Alberta, T6G 2E6 Canada
1991-92	Xing Shugang	Foreign policy of Russia & USSR	Institute of East European, Russian & Central Asian Studies, Chinese Academy of Social Sciences, 3 Zhang Zizhog Lu, 100007 Beijing PRC (中国)
1992-93	Geoffrey J. Jukes	Soviet & Russian military history & strategy	Dept. of International Relations, RSPacS, Australian National Univ., Canberra, Act 2601 Australia
1992-93	John P. LeDonne	18th-20th centuries Russian history	Russian Center, Harvard Univ., 1727 Cambridge St., Cambridge, MA 02138 USA
1992-93	Alexander S. Tsipko	Political science	International Foundation for Socio-Economic & Political Studies = Gorbachev Foundation, 49 Leningradskij prospect, Moscow Russia

Year	Name	Speciality	Place of Work (Address)
1993-94	John H. Löwenhardt	Soviet & Russian Politics	Institute of East European Law, Leiden Univ., POB 9521, 2300 RA, Leiden, The Netherlands
1993-94	Sabrina P. Ramet	Political science & history of 20th century Eastern Europe	HMJ School of International Studies, Univ. of Washington, Thomson Hall DR-05, Seattle, Washington 98195 USA
1993-94	Valery I. Rybin	Russian economy	Economic Faculty, Moscow State Univ., Leninskie Gory, Moscow 119899 Russia
1994-95	Tsuyoshi Hasegawa	Russian history & international relations	Dept. of History, Univ. of California, Santa Barbara CA 93106 USA
1994-95	Vladimir A. Tunimanov	18th-20th Centuries Russian literature	Institute of Russian Literature (Pushkinskii Dom), Nab. Makarova 4, S.-Petersburg 199164 Russia
1994-95	Pavel N. Zyrianov	Russian history	Institute of Russian History ul. D. Ul'anova, 19, Moscow 117036 Russia
1995-96	Nikolay P. Shmeliev	International economy	Institute of Europe, 8/3 "B", Mokhovaia st. Moscow 103873 Russia
1995-96	Vladimir V. Popov	Russian Economy, Comparative Economic Systems	Academy of National Economy, Prospect Vernadskogo 82, 117571 Moscow Russia
1995-96	Vojtech Mastny	International History of East Central Europe	School of Advanced International Studies, Bologna Center, Johns Hopkins University, Via Belmeloro 11 40126 Bologna, Italy
1995-96	Jadwiga M. Staniszkis	Political Science	Institute of Political Studies, PAN, Polna 18/20 Warsaw 00-625 Poland

共同研究員・兼任研究員

(50音順氏名　在任期間)

青木国彦 90.10~92.9
秋野豊 82.4~96.9
荒又重雄 79.4~96.9
飯田規和 87.4~88.3
五十嵐清 61.4~78.3, 89.4~90.3
井桁貞義 94.10~96.9
石井規衛 89.4~96.9
伊東一郎 94.10~96.9
伊東孝之 94.10~96.9
井上紘一 79.4~83.3
猪木正道 55.4~70.3
岩田賢司 92.10~96.9
岩間徹 55.4~73.3
上野俊彦 92.10~96.9
宇多文雄 86.4~96.9
内海庫一郎 55.4~56.3
浦雅春 88.4~96.9
大江敏美 86.4~90.3
大津定美 86.4~89.3, 92.10~96.9
岡部匠一 85.4~86.3
小川和男 88.4~89.3, 90.10~94.9
奥田央 90.10~96.9
小田福男 84.4~88.3, 89.4~96.9
香川敏幸 81.4~83.3
方波見雅夫 80.4~81.3
金子幸彦 55.4~72.3
川原彰 94.10~96.9
菊池俊彦 79.4~81.3
北垣信彦 55.4~63.3
吉川元 90.10~96.9
木村彰一 55.4~78.3
木村汎 92.10~96.9
工藤孝史 85.4~96.9
久保庭真彰 87.4~89.3, 92.10~96.9
栗原成郎 85.4~86.3, 90.10~96.9
越村勲 94.10~96.9
小平武 79.4~92.3
小森田秋夫 79.4~94.3
斉藤孝 72.4~78.3, 80.4~81.3
佐々木史朗 94.10~96.9
佐々木照央 87.4~88.3
佐藤経明 82.4~96.9
秋月俊幸 94.10~96.9
荒井信雄 89.4~96.9
安藤厚 90.10~96.9
家田裕子 91.10~96.9
池田博行 80.4~81.3
諫早勇一 90.10~96.9
石川晃弘 94.10~96.9
伊藤憲一 85.4~86.3
伊藤知義 83.4~90.3
井内敏夫 89.4~90.3, 94.10~96.9
岩崎俊夫 80.4~83.3, 86.4~90.3
岩田昌征 85.4~89.3, 94.10~96.9
上垣彰 94.10~96.9
宇佐見森吉 94.10~96.9
内田健二 86.4~87.3, 94.10~96.9
鵜野公郎 85.4~86.3, 90.10~94.9
江口朴郎 55.4~71.3
大島梓 92.10~96.9
大西郁夫 89.4~96.9
尾形典男 55.7~57.3
萩原眞子 94.10~96.9
小田博 86.4~87.3
小野菊雄 94.10~96.9
柿澤宏昭 94.10~96.9
加藤九祚 94.10~96.9
川野辺敏 85.4~86.3
川端香男里 81.4~83.3, 86.4~94.3
菊地昌典 80.4~81.3
北川誠一 83.4~84.3
木戸蓊 71.4~77.3, 81.4~86.3, 88.4~96.9
木村崇 94.10~96.9
金原主幸 85.4~86.3
工藤正廣 79.4~96.9
栗生沢猛夫 80.4~81.3, 83.4~96.9
小泉直美 91.10~96.9
小島修一 85.4~89.3
小林公司 89.4~92.9
是永純弘 79.4~90.3, 91.10~94.9
酒井哲哉 87.4~96.9
佐々木隆生 91.10~94.9
佐藤純一 88.4~90.3
佐原徹哉 94.10~96.9

澤田和彦 94.10~96.9
篠田優 88.4~90.3
柴宣弘 94.10~96.9
下斗米伸夫 86.4~89.3, 90.10~96.9
城田俊 79.4~90.3
菅原淳子 94.10~96.9
杉浦秀一 89.4~96.9
鈴木淳一 85.4~90.3, 91.10~96.9
高岡健次郎 81.4~82.3, 84.4~89.3
高橋一彦 94.10~96.9
高弊秀知 94.10~96.9
竹田正直 79.4~90.3, 94.10~96.9
竹浪祥一郎 89.4~90.3
田中一夫 (一生) 83.4~85.3
田中雄三 87.4~89.3, 90.10~92.9
津久井定雄 90.10~96.9
外川継男 87.4~96.9
所伸一 81.4~90.3, 94.10~96.9
富森孜子 86.4~96.9
鳥山成人 70.4~78.3
中井和夫 89.4~90.3, 94.10~96.9
中嶋毅 92.10~96.9
中見立夫 94.10~96.9
中村研一 92.10~94.9
中村泰三 89.4~90.3
中本信幸 83.4~85.3, 88.4~89.3
長岡貞男 94.10~96.9
長興進 91.10~96.9
西中村浩 92.10~96.9
西村可明 83.4~85.3, 91.10~96.9
丹羽春喜 81.4~83.3
野上義二 90.10~92.9
袴田茂樹 87.4~89.3, 91.10~96.9
長谷見一雄 94.10~96.9
原暉之 86.4~87.3
坂内徳明 85.4~90.3, 94.10~96.9
平井友義 81.4~83.3, 86.4~90.3, 91.10~96.9
広瀬佳一 92.10~96.9
福岡星児 55.4~56.3, 64.4~78.3, 79.4~89.3
福永 (千葉) 恵美子 82.4~90.3
藤本和貴夫 87.4~94.9
松井茂雄 57.4~67.3
松井憲明 81.4~83.3, 84.4~86.3, 90.10~96.9
松原広志 85.4~90.3
松本忠司 88.4~92.9
塩川伸明 87.4~89.3, 90.10~96.9
篠原琢 94.10~96.9
志摩園子 94.10~96.9
庄司博史 94.10~96.9
ジンベルグ、ヤコフ 86.4~92.9
菅原崇光 80.4~81.3
鈴木秀一 82.4~90.3
鈴木健夫 94.10~96.9
高田和夫 89.4~90.3
高橋清治 88.4~89.3
田口晃 94.10~96.9
竹中浩 94.10~96.9
田中明彦 90.10~94.9
田中克彦 94.10~96.9
千野栄一 81.4~82.3, 85.4~86.3
土屋好古 94.10~96.9
徳永彰作 89.4~96.9
富田武 90.10~96.9
富森虔児 90.10~96.9
内藤操 (内村剛介) 80.4~83.3
中沢孝之 87.4~88.3
中西治 80.4~81.3
中村逸郎 92.10~96.9
中村健之介 79.4~96.9
中村喜和 80.4~96.9
中山弘正 81.4~83.3
永綱憲悟 92.10~96.9
名島修三 89.4~90.3
西村文夫 89.4~96.9
西山克典 80.4~96.9
沼野充義 86.4~88.3, 90.10~96.9
灰谷慶三 79.4~96.9
橋本聡 94.10~96.9
林忠行 89.4~92.9
馬場宏 (江川卓) 86.4~90.3
日南田静真 71.4~76.3
平井友義 72.4~76.3
深水明美 80.4~81.3
福田正己 94.10~96.9
藤家壮一 79.4~96.9
ベローフ、アンドレイ 94.10~96.9
松井俊和 79.4~92.9
松井康浩 94.10~96.9
松原道子 61.4~62.3
御園生真 82.4~84.3

皆川修吾	81.4~85.3, 86.4~87.3, 88.4~90.3	南塚信吾	77.4~78.3, 81.4~83.3, 88.4~89.3
宮坂純一	84.4~85.3	宮島直樹	77.4~78.3
宮本勝浩	90.10~94.9	六鹿茂夫	90.10~96.9
望月喜市	76.4~78.3, 94.10~96.9	望月恒子	87.4~96.9
百瀬宏	80.4~81.3, 86.4~95.3	森下敏男	85.4~86.3, 90.10~92.9
森田憲	85.4~92.9	盛田常夫	83.4~85.3
森安達也	89.4~94.8	安井亮平	87.4~90.3, 92.10~96.9
保田孝一	94.10~96.9	矢田俊隆	59.4~78.3
山内昌之	94.10~96.9	山口巌	88.4~90.3
山田吉二郎	79.4~96.9	山村理人	91.10~92.8
山本茂	86.4~90.3	山本武彦	91.10~94.9
横手慎二	90.10~96.9	吉田進	89.4~96.9
吉田俊則	86.4~90.3, 94.10~96.9	吉田浩	94.10~96.9
吉田文和	79.4~90.3, 91.10~96.9	吉野悦雄	82.4~96.9
渡辺雅司	80.4~81.3, 83.4~85.3	渡辺良智	85.4~86.3
和田完	94.10~96.9	和田春樹	83.4~88.3, 90.10~96.9

(備考) 1977年までは兼任研究員、1979年以降は共同研究員。1978年は兼任研究員も共同研究員も発令されていない。1990年 4~9 月も共同研究員が発令されていないが、1990年 3 月まで共同研究を務め、1990年10月以降も務めた人については、この表では継続して務めたと見なされている。
『センター・ニュース』、『北海道大学職員録』をもとに作成。

協議員・運営委員

運営委員 (1978~1989年)

1978	是永純弘 (経済学部)	鈴木秀一 (教育学部)	鳥山成人 (文学部)	矢田俊隆 (法学部)
1979	五十嵐清 (法学部)	是永純弘 (経済学部)	鈴木秀一 (教育学部)	鳥山成人 (文学部)
1980	五十嵐清 (法学部)	是永純弘 (経済学部)	鈴木秀一 (教育学部)	鳥山成人 (文学部)
1981	荒又重雄 (経済学部)	五十嵐清 (法学部)	竹田正直 (教育学部)	福岡星児 (文学部)
1982	荒又重雄 (経済学部)	五十嵐清 (法学部)	竹田正直 (教育学部)	福岡星児 (文学部)
1983	荒又重雄 (経済学部)	五十嵐清 (法学部)	竹田正直 (教育学部)	福岡星児 (文学部)
1984	荒又重雄 (経済学部)	五十嵐清 (法学部)	竹田正直 (教育学部)	福岡星児 (文学部)
1985	荒又重雄 (経済学部)	五十嵐清 (法学部)	竹田正直 (教育学部)	福岡星児 (文学部)
1986	荒又重雄 (経済学部)	五十嵐清 (法学部)	竹田正直 (教育学部)	灰谷慶三 (文学部)
1987	荒又重雄 (経済学部)	五十嵐清 (法学部)	竹田正直 (教育学部)	灰谷慶三 (文学部)
1988	荒又重雄 (経済学部)	五十嵐清 (法学部)	竹田正直 (教育学部)	灰谷慶三 (文学部)
1989	荒又重雄 (経済学部)	田口晃 (法学部)	竹田正直 (教育学部)	灰谷慶三 (文学部)

(備考) センター専任は自動的に運営委員となっていたが、この表からは除いた。
各年度の氏名は50音順。

協 議 員 (1990年～)

1990	是永純弘(経済学部)	田口晃(法学部)	竹田正直(教育学部)	灰谷慶三(文学部)
1991	是永純弘(経済学部)	田口晃(法学部)	竹田正直(教育学部)	灰谷慶三(文学部)
1992	荒又重雄(経済学部)	田口晃(法学部)	竹田正直(教育学部)	灰谷慶三(文学部)
1993	荒又重雄(経済学部)	田口晃 (法学部)	竹田正直 (教育学部)	灰谷慶三 (文学部)
1994	荒又重雄 (経済学部)	田口晃 (法学部)	所伸一 (教育学部)	灰谷慶三 (文学部)
1995	荒又重雄 (経済学部)	田口晃 (法学部)	所伸一 (教育学部)	灰谷慶三 (文学部)

(備考) センター専任は自動的に協議員となっているが、この表からは除いた。
各年度の氏名は50音順。

運営委員 (1990年～)

1990	伊東孝之 (センター)	川端香男里 (東大)	木戸蓊 (神戸大)	木村汎 (センター)
	是永純弘 (経済学部)	佐藤経明 (日大)	中村喜和 (一橋大)	灰谷慶三 (文学部)
	原暉之 (センター)	望月喜市 (センター)	和田春樹 (東大)	
1991	伊東孝之 (センター)	川端香男里 (東大)	木戸蓊 (神戸大)	是永純弘 (経済学部)
	佐藤経明 (日大)	中村喜和 (一橋大)	灰谷慶三 (文学部)	原暉之 (センター)
	望月喜市 (センター)	和田春樹 (東大)		
1992	伊東孝之 (センター)	川端香男里 (東大)	木戸蓊 (神戸大)	田口晃 (法学部)
	竹田正直 (教育学部)	中村喜和 (一橋大)	西村可明 (一橋大)	原暉之 (センター)
	皆川修吾 (センター)	望月喜市 (センター)	和田春樹 (東大)	
1993	川端香男里 (東大)	木戸蓊 (神戸大)	田口晃 (法学部)	竹田正直 (教育学部)
	中村喜和 (一橋大)	西村可明 (一橋大)	原暉之 (センター)	皆川修吾 (センター)
	望月喜市 (センター)	和田春樹 (東大)		
1994	荒又重雄 (経済学部)	井上紘一 (センター)	宇多文雄 (上智大)	木戸蓊 (神戸大)
	木村崇 (京大)	西村可明 (一橋大)	灰谷慶三 (文学部)	林忠之 (センター)
	原暉之 (センター)	皆川修吾 (センター)	村上隆 (センター)	望月哲男 (センター)
	和田春樹 (東大)			
1995	荒又重雄 (経済学部)	家田修 (センター)	井上紘一 (センター)	宇多文雄 (上智大)
	木戸蓊 (神戸大)	木村崇 (京大)	西村可明 (一橋大)	灰谷慶三 (文学部)
	林忠之 (センター)	原暉之 (センター)	皆川修吾 (センター)	村上隆 (センター)
	望月哲男 (センター)	和田春樹 (東大)		

(備考) 各年度の氏名は50音順。

1990年の全国共同利用施設への改組と同時に、協議員会 (人事･予算など運営に関する事柄を審議する学内組織) と運営委員会 (研究･共同利用に関する事柄を審議する全国組織) が従来の運営委員会の機能を果たすようになった。

事務官

1955	芳賀柳二		
1956	更科道子	豊田久馬彦	芳賀柳二
1957	豊田久馬彦	松原道子	芳賀柳二
1958	豊田久馬彦	松原道子	芳賀柳二
1959	豊田久馬彦	芳賀柳二	
1960	豊田久馬彦	芳賀柳二	
1961	赤樫安子	豊田久馬彦	芳賀柳二
1962	豊田久馬彦	芳賀柳二	
1963	大垣徇	成田京	芳賀柳二
1964	大垣徇	成田京	芳賀柳二
1965	大垣徇	高岡京	芳賀柳二
1966	大垣徇	劒持正子	高岡京
1967	秋月孝子	大垣徇	
1968	秋月孝子	大垣徇	
1969	秋月孝子	大垣徇	
1970	秋月孝子	大垣徇	
1971	秋月孝子	佐藤安一	
1972	秋月孝子	佐藤安一	
1973	秋月孝子	井上恵美子	
1974	秋月孝子	長手恵美子	
1975	秋月孝子	長手恵美子	
1976	秋月孝子	長手恵美子	
1977	秋月孝子	川村眞理子	
1978	秋月孝子	川村眞理子	
1979	秋月孝子	富樫信夫	沼田清美
1980	秋月孝子	澤田美喜子	富樫信夫
1981	秋月孝子	富樫信夫	
1982	秋月孝子	富樫信夫	
1983	秋月孝子	畑正義	
1984	秋月孝子	瀬田尚利	畑正義
1985	秋月孝子	瀬田尚利	畑正義
1986	秋月孝子	梅原正義	瀬田尚利
1987	秋月孝子	梅原正義	若狭谷慶子
1988	秋月孝子	梅原正義	浪塚良平
1989	秋月孝子	中村博司	浪塚良平
1990	佐々木光子	中村博司	山下康弘
1991	今田純一	佐々木光子	山下康弘
1992	今田純一	櫻洋子	山下康弘
1993	今田純一	櫻洋子	堀田文雄
1994	櫻洋子	渋谷良一	堀田文雄
1995	渋谷良一	堀田文雄	松野とも子

(備考)　北海道大学職員録をもとに作成。必ずしも4月1日現在ではない。
各年度の氏名は50音順。

3. 研究報告会リスト

夏期・冬期研究報告会/国際シンポジウム

特別研究会・北海道スラブ研究会・昼食懇談会等

専任研究員セミナー

夏期・冬期研究報告会/国際シンポジウム

1954年 7 月
木村彰一「アメリカにおけるスラヴ研究の現状について」
岩間徹「ナロードニキの系譜」
金子幸彦「ナロードニキの人間像」
鳥山成人「ピーサレフについて」
山本敏「オガリョフの農業理論」

1954年12月
猪木正道「ヨーロッパにおけるスラヴ研究の現状について」

1955年 7 月
金子幸彦「ソヴエト学会におけるナロードニキ史の取扱いについて」
鳥山成人「“人民の意志”党の革命理論について」

1956年 1 月
山本敏「創設期の帝国自由経済協会」
木村彰一「“イーゴリ軍記”について」
北垣信行「ゴーゴリの思想的転換について」

1956年 7 月
猪木正道「バクーニンの政治思想」
江口朴郎「クリミヤ戦争とバルカン・スラヴ」
矢田俊隆「独墺の 3 月革命とスラヴ民族」

1956年12月
金子幸彦「チェルヌィシェフスキーの文学理論」
岩間徹「米国及び西欧のスラヴ研究について」
菊地昌典「19世紀前半のロシア農業構造」

1957年 7 月
松井茂雄「“二重人格”における人格の分裂について」
江口朴郎「ロシヤ革命論」
岩間徹「二つのナロードニチェストヴォ」
北垣信行「ベリンスキーに与えた同時代の批評家の影響」

1957年12月
山本敏「帝国自由経済協会150年通史」
木村彰一「ベリンスキーのタチアーナ観」
鳥山成人「ナロードニキ研究の問題点」
相田重夫「ソヴエトにおける十月革命史研究の現段階」

1958年 7 月
金子幸彦「トゥルゲーネフの“処女地”」

山本敏「ニコライ・オン“革命後我国経済概要”について」
猪木正道「ソヴエト独裁について」
福岡星児「コレージ・ド・フランスにおけるミツキェヴィチの“スラヴ文学講義”について」

1958年11月
北垣信行「ロシア近代詩形成の発生」
岩間徹「ロシアとアジア」
矢田俊隆「1848年のスラヴ民族会議について」
辻村明「ソヴエトにおける新聞配布の問題」

1959年6月
鳥山成人「イヴァン四世の評価をめぐって」
木村彰一「パステルナークの“ドクトル・ジバコ”について」
相田重夫「ブレスト・リトウスク条約の諸問題」
荒又重雄「プレハーノフの思想史的地位」
柴田誠一「コミンテルンの中国政策」

1959年10月
山本敏「19世紀末のロシア農業恐慌」
猪木正道「最近10年間の中ソの政治関係」
江口朴郎「ギリシャの独立運動とロシヤ」
木村浩「ソヴエト文学とユダヤ作家」

1960年7月
岩間徹「革命前のロシヤにおけるインテリゲンツィアについて」
北垣信行「1830年代のロシア評壇」
中野徹三「ソヴエト・マルクス主義の思想史的位置」

1960年10月
鳥山成人「ユーラムのソヴエト政治論について」
木村彰一「M.S.レスコフについて」
猪木正道「中ソ両共産党のイデオロギーについて」
和田春樹「1881年3月1日事件とツァーリズム」

1961年5月
北垣信行「ミハイロフスキーについて」
山本敏「フレローフスキーについて」
金子幸彦「ロシヤの国民性と文学」
安平哲二「米ソ両国の経済競争」

1962年2月
矢田俊隆「独墺におけるスラヴ地域研究の現状について」
岩間徹「農奴解放前夜のインテリゲンツィア」
江口朴郎「ソヴエト初期における隣接アジア諸国との関係」
若林大鬼智「ゴーリキーの初期の文学活動」

1962年 7 月
金子幸彦「ソ連管見」
五十嵐清「社会主義国家における夫婦財産制の諸問題」
外川継男「アメリカにおけるロシヤ史研究」
勝田吉太郎「ソヴエト体制と軍部」
高岡健次郎「エス・エルの農業綱領の性格とその結果について」

1962年11月
鳥山成人「ロシヤ史学史の«国家学派»について」
山本敏「ソヴエト管見」
米山哲夫「ソ連の図書館・博物館について」

1963年 1 月
竹田正男「Rabfakについて」
木村彰一「アンジェイエフスキの作品について」
松井茂雄「“アヴァクム自伝”について」
山本敏「いわゆる“雇役制”について」

1963年11月
高野明「日露関係史の若干の問題」
江口朴郎「第一次世界大戦とスラヴ世界」
猪木正道「中ソ論争とその国家観」
福岡星児「F.P.フィリンの“東スラヴ人の言語教育”について」

1964年 7 月
岩間徹「イワーノフ＝ラズーニムクの“ロシア・インテリゲンチャ論”に寄せて」
沢村武生「ソ連におけるカント研究」
外川継男「チャアダーエフの歴史哲学について」
矢田俊隆「ハプスブルグ帝国におけるフェデラリズムの問題」

1964年11月
萩原直「東南ヨーロッパの歴史学界について」
五十嵐清「ソヴエト法におけるロシヤ的要素: H.J.バーマンの所説をめぐって」
山本敏「“自由経済協会”の役割について」
金子幸彦「ゲルツェンの小説」

1965年 7 月
吉川宏「トロツキーの英国論」
外川継男「ロシヤと日本における近代化の比較研究について」
江口朴郎「後進国における近代化について」
G.E. ブラック “Soviet Society: A Comparative View”
百瀬宏「“東ヨーロッパ”の概念について」

1965年12月
山本敏「東欧農業史研究の方向」

江口朴郎「海外における東欧研究の動向」
鳥山成人、福岡星児「東スラヴの考古学的文化の系譜について」
安井亮平「二葉亭のロシア人との交渉」

1966年7月
矢田俊隆「オーストリア・ハンガリー史研究の現況: インディアナ会議に参加して」
岩崎允胤「ソヴエトにおける哲学、社会科学の現況」
川端香男里「18世紀後半のロシヤ文化に対する外国の影響: 主にフランス文学との関連について」
百瀬宏「ソ連邦における国際政治・外交の研究によせて」

1966年11月
五十嵐清「ソヴエトの新民法典について」
木村彰一「アブラム・テルツの社会主義リアリズム論について」
萩原直「ニコラエ・ヨルガの再評価に関連して」
今岡十一郎「ヨーロッパにおけるアジア民族の運命: 主としてマジャール人を中心として見る」

1967年7月
外川継男「フランスにおけるスラヴ研究の歴史と現状」
猪木正道「ロシヤ革命とアジア: ソヴエト外交政策1917~1967 (1)」
岩間徹「19世紀初期の改革運動」
秋月俊幸「ロシヤの日本発見」

1967年11月
日南田静真「20世紀初頭ロシヤの農業構造について」
江口朴郎「国際政治史におけるボスニア・ヘルツェゴヴィナの問題」
出かず子「モスクワ大におけるロシヤ語教授法について」
福岡星児「ザポロージェ・コサックについて」

1968年7月
百瀬宏「フィンランド史における東方関係: 研究動向の紹介」
山本敏「東欧経済史研究に関する一試論」
金子幸彦「ピーサレフについて」
D. Treadgold "Marx and Russia"

1968年11月
五十嵐清「資本主義法と社会主義法」
矢田俊隆「第二次世界大戦とハプスブルク帝国」
阪東宏「ポーランドにおけるスターリン"民族理論"の批判」

1969年7月
鳥山成人「江口編『ロシア革命の研究』について」
高岡健次郎「エス・エルに関する最近のソヴェト史学の研究について: グーセフとエリツアンの著書に寄せて」

外川継男「ハーバード大学におけるロシア革命50周年記念シンポジウムについて」

1969年11月
木村彰一「1966年2月の文学裁判について」
衛藤瀋吉「ミュンヘンにおける東欧学会に出席して」
全研究員「スラヴ研究のあり方をめぐる研究討議(I)」
全研究員「スラヴ研究のあり方をめぐる研究討議(II)」

1970年7月
出かず子「チェルヌィシェフスキーの"ランデ・ヴーにおけるロシア人"について」
G. Niemeyer "Lenin and the Total Critique of Society"
福岡星児「スラヴ中世文学の構造についてのD.リハチョフの視点」
五十嵐清「ドイツにおけるOstrecht研究の発展と現状について」
江口朴郎「"コミンテルンと東方"についての最近の研究動向について」

1970年11月
金子幸彦「カラムジーンの小説」
沢田于一郎「転換期にあるソ連経済」
全研究員「スラブ研究のあり方をめぐる研究討議」
岩間徹「デカブリストの自由思想」
木村汎「ソ連の対東欧政策」

1971年7月
山本敏「シベリア学試論」
矢田俊隆「西ヨーロッパにおけるハプスブルク帝国史研究の近況」
藤家壮一「いわゆるカラムジンの"危機"について」
百瀬宏「第二次大戦とフィンランド: 独ソ戦争への"参加"の事情をめぐって」

1971年11月
鳥山成人「ベルリン自由大学におけるロシア古代史学会に出席して」
中村喜和「瀬沼夏葉について」
直野敦「ハシデウについて」
木戸蓊「東欧諸国視察旅行報告」

1972年7月
外川継男「バクーニン・アルヒーフの刊行について」
日南田静真「スクヴォルツォフ=ステパーノフとレーニン」
五十嵐清「東西契約法の比較: D.A.レーバーの所説について」
灰谷慶三「ゴーゴリについて」

1972年11月
有馬達郎「改革前ロシアの工業発展」
宮島直機「ポーランド近代史とピウスーツキ」
中西治「米中ソ関係と転換期のソ連外交」
伊東孝之「ソ連・ポーランドの共産党文献にあらわれたソ=ポ戦争(1919~1920)」

1973年 7 月
福岡星児「17世紀以前のロシアの詩について」
斉藤孝「ソ連邦における第二次世界大戦研究」
山内昌之「“トルコ:アルメニア戦争”とトルコの対ソ関係」
平井友義「イスラエルにおけるソ連・東欧研究」

1974年 1 月
斉藤稔「ハンガリーにおける経済改革の発想と問題点」
鳥山成人「V.D. グレコフのロシア農奴制成立論について」
岩田昌征「ユーゴスラビア社会主義とソビエト社会主義」
鹿毛達雄「“ドイツの10月”とファシズム」

1974年 7 月
南塚信吾「東欧における農奴解放と民族問題: E.ニーダーハウザーの比較研究を中心に」
出かず子「レールモントフにおける“運命”の問題」
木村彰「『青銅の騎士』の解釈をめぐって」
矢田俊隆「オーストリア・ハンガリー帝国の構造と特質: ハンガリーの立場を中心に」

1975年 1 月
山懸弘志「ズバートフシチナの歴史的意義をめぐって」
百瀬宏「第二次大戦中のソ連のフィンランド政策: 戦後への展望によせて」
木戸蓊「第三回東南欧国際会議 (1974.9.ブカレスト)に出席して」
矢田俊隆・伊東孝之「ソ連・東欧学術調査旅行を終えて」

1975年 7 月
伊東孝之「ソ連東欧研究の制度的問題: アメリカとカナダの関連施設・コレクションを視察して」
是永純弘「ソ連経済計画化におけるシステム分析の連用とその問題点」
西村文夫「戦後ソ連の第三世界イメージ」
木村汎「フルシチョフ主義の挫折: 物質的インセンティヴの限界」

1976年 1 月
尾上正男「ソ連外交とイデオロギーとの関連」
松下輝雄「社会主義法の比較可能性について」
飛鳥井雅道「明治末期社会主義者のロシア観」
斉藤孝・日南田静真「日ソ歴史学シンポジウムおよび訪欧・訪米についての報告」

1976年 7 月
望月喜市「ソビエトの経済改革後の現実と理論状況“計画と市場”論争との関連において」
福岡星児「年代記における物語のスタイルについて」
外川継男「最近のアメリカにおける日本とロシアの近代化の比較研究について」
五十嵐清「ソ連・東欧諸国の夫婦財産制の展開」

1977年 1 月
川崎浹「“コンチネント”の動向」

石川晃弘「東欧の労働問題: チェコスロバキアを中心として」
金田辰夫「ソ連農業の今後の動向」
松井憲明「近・現代ロシア・初期ソビエト政府の農家不分割政策と分家論争について」

1977年7月
鈴木秀一「ポーランドの教育とその研究」
中山研一「社会主義法研究の課題」
木村彰「偶感」
F. Tych「ポーランドにおける労働運動史研究の現況」

1978年2月
柴宜弘「南スラブ人統一国家形成に至る統一思想の諸潮流」
G. Clark「ソ連の中国および日本との関係」
塩川伸明「第1次5ヵ年計画期の農工関係: 最近の研究動向から(1968-1978)」

1978年11月
B. ドミトリシン "Russian Expansion to the Pacific, 1581-1700: A Historiographical Review"
高野明「日露両国の北方領土探険をめぐる比較研究」
百瀬宏「ソ連・フィンランド国境: その歴史的背景」
E. カービー "Siberia in the Geopolitics of Asia"
南塚信吾「ハンガリーにおける1848年革命とマルクス主義」

1979年2月
B. ドミトリシン "Russian Expansion to North America, 1700-1867"
原暉之「"尼港事件"をめぐって」
袴田茂樹「ソヴェートの民衆と知識人」
E. カービー "Russian Studies of Japan: Academic Perspectives in Tsarist and Soviet Times"
池田博行「ソ連の鉄道運賃の特徴」
田中克彦「ロシアの分離主義における民族的性格論の役割」
内藤操「書かれざる国民性」

1979年度第1回総合シンポジウム「日ソ関係の総合研究」
1979年7月12日(木)

10:00~12:00	特別講演 重光晶(元駐ソ大使)「日ソ関係の課題と展望」
13:30~15:30	第1分科会「ロシアの国民性」「北方領土」 中西治(創価大)「領土問題とソ連外交: 日ソ領土問題を中心として」
	第2分科会「シベリア開発と漁業問題」 鈴木啓介(日ソ経済委員会)「シベリア開発と日ソ経済関係」
16:00~18:00	第1分科会「ロシアの国民性」「北方領土」 菊地昌典(東大)「アジア主義者のロシア・シベリア観」
	第2分科会「シベリア開発と漁業問題」 仲弘(東京貿易)「バム鉄道の経済効果」

7月13日 (金)

10:00~12:00	第1分科会「ロシアの国民性」「北方領土」 V. クーシン (外国人研究員) "Negotiating with an Unequal Partner: The Special Case of Soviet-Czechoslovak Political Talks in 1968" 第2分科会「シベリア開発と漁業問題」 工藤勲 (道総合研)「北洋漁業と日ソ漁業交渉」
13:30~15:30	第1分科会「ロシアの国民性」「北方領土」 内藤操 (上智大)「色のコトバ: 色に見るロシアと日本」 第2分科会「シベリア開発と漁業問題」 山中文夫 (北方圏センター)「シベリアの燃料と道の経済」
16:00~18:00	第1分科会「ロシアの国民性」「北方領土」 百瀬宏 (津田塾大)「1948年のフィンランド・ソ連条約の成立をめぐって」 第2分科会「シベリア開発と漁業問題」 望月喜市 (北大)「シベリア開発の経済的特徴」

7月14日 (土)

10:00~12:00	全体集会　総括討論 第1分科会総括報告 外川継男 (北大)、第2分科会総括報告 望月喜市 (北大)
13:30~15:30	特別講演 木村明生 (朝日新聞)「日ソ間の相互理解の現状と問題点」

1979年度第2回総合シンポジウム「日ソ関係の総合研究」
1980年1月18日 (金)

池田均 (道総合研)「日・ソ漁業協同事業の経緯と問題点」 富永守雄 (北海道新聞)「200カイリ日ソ交渉 (1977) におけるソ連側の対応の特徴」 木村汎 (北大)「漁業交渉 (1977年春) にみられる日ソの行動様式: 非対称性と対称性」

1月19日 (土)

原卓也 (東京外大)「ロシアの民族性とツァーリズム」
方波見雅夫 (札幌商大)「ソビエト医学・医療制度とシベリア開発との接点」

1980年度第1回総合シンポジウム「日ソ関係の総合研究」
1980年7月10日 (木)

	第1分科会「ロシアの国民性」「北方領土」 中野美代子 (北大)「日本人の領土意識」 第2分科会「シベリア開発と漁業問題」 望月喜市 (北大)「ソ連経済とシベリア開発: そのバランスシート」
	第1分科会「ロシアの国民性」「北方領土」 三輪公忠 (上智大)「歴史世界のはざまの北方領土」 第2分科会「シベリア開発と漁業問題」 仲弘 (東京貿易)「バム鉄道とその沿線開発」
	第1分科会「ロシアの国民性」「北方領土」 杉山茂雄 (法政大)「国際法からみた北方領土」 第2分科会「シベリア開発と漁業問題」 鈴木旭 (北大)「日ソ漁業関係の諸問題」

7月11日(金)

	第1分科会「ロシアの国民性」「北方領土」 V. クラスノフ(外国人研究員)"Solzhenitsyn and the Russian National Renascence" 第2分科会「シベリア開発と漁業問題」 小川和男(ソ連東欧貿易会)「世界経済の中のシベリア開発」
	第1分科会「ロシアの国民性」「北方領土」 藤本和貴夫(阪大)「シベリア戦争の諸問題」 第2分科会「シベリア開発と漁業問題」 方波見雅夫(札幌商大)「寒冷地労働と労働保護問題」 山中文夫(北方圏センター)「シベリア開発と北海道経済: サハリン天然ガス導入問題の近況」

7月12日(土)

	全体集会　総括討論 第1分科会総括報告 木村汎(北大)、第2分科会総括報告 望月喜市(北大)

1980年度第2回総合シンポジウム「日ソ関係の総合研究」
1981年1月30日(金)

9:30~12:00	第I部　ロシア国民性: 継続と変化 内藤操(上智大)「タブー(禁忌)は解けるか」 袴田茂樹(芦屋大)「ソ連国民の宗教意識」 安井侑子「ロシア現代文学における風刺と笑い: 70年代以降の作品(ジノヴィエフ他)をめぐって」
13:30~16:00	第II部　シベリア開発 深水明美(札幌大)「シベリア鉄道建設に関する一考察」 白井久也(朝日新聞)「シベリア開発と日ソ経済協力」 木村汎(北大)「シベリア開発の政治学」
16:15~18:15	特別講演 A. ガルリツキ(外国人研究員)「ポーランドの苦悩と希望」

1981年1月31日(土)

9:30~12:00	第III部　ソ連をめぐる領土問題 百瀬宏(津田塾大)「ソ連=フィンランド間の領土問題」 伊東孝之(北大)「ソ連=ポーランド間の領土問題」 木戸蓊(神戸大)「ソ連=ルーマニア間の領土問題」
13:30~16:00	第VI部　日本とロシア 中本伸幸(神奈川大)「チェーホフのなかの日本」 中村健之介(北大)「ポズニェーエフのニコライ大主教伝」 秋月俊幸(北大)「明治初年の樺太問題と征韓論」
16:15~17:15	総括討論　　司会: 外川継男(北大)

1981年度第1回研究報告会
1981年7月9日(木)

13:30~16:00	第I部会 小平武(北大)「漱石とアンドレーエフ」
	第II部会 皆川修吾(南山大) "Political Clientelism in the USSR and Japan: A Tentative Comparison"
16:15~17:45	公開講演 R.スウェリンゲン(南カリフォルニア大) "Current Soviet-Japanese Relations and Prospects: An American View"

7月10日(金)

9:30~12:00	第I部会 中村喜和(一橋大)「『イーゴリ軍記』と『平家物語』」
	第II部会 丹羽春喜(京都産業大)「ソ連の経済成長と軍事支出についての分析と予測:計量モデルによる第10次・第11次五ケ年計画のシミュレーション分析」
13:30~16:00	第I部会 J.ギブソン(外国人研究員) "Diversification and Contraction: The Twilight of Russian America"
	第II部会 香川敏幸(亜細亜大)「ユーゴスラヴィア社会主義自主管理経済:分権化と国際化

7月11日(土)

9:30~12:00	第I部会 川端香男里(東大)「トルストイ:芸術家と思想家の間」
	第II部会 J.ベクシャク(外国人研究員) "Response Patterns of Socialist Enterprises in Poland"
13:30~16:00	第I部会 松原広志(龍谷大)「イヴァーノフ=ラズームニクのインテリゲンツィア論」
	第II部会 中山弘正(明治学院大)「ソ連の軍事」
16:15~17:45	公開講演 渓内謙(東大)「現代民主主義を考える」

1981年度第2回研究報告会「ソ連の隣国関係の比較研究」
1982年1月29日(金)

10:00~12:00	林忠行(一橋大)「チェコスロヴァキアの大ソヴィエト政策(1918~22):E.ベネシュのソヴィエト・ロシア認識をめぐって」
13:30~15:30	秋野豊(北大)「第二次世界大戦中のソ連=チェコスロヴァキア関係」
15:40~17:40	和田春樹(東大)「第二次大戦直後のソ連=朝鮮関係」

1月30日(土)

10:00~12:00	小松久男(東海大)「1898年アンディジャン蜂起: 中央アジアにおけるスーフィズムと民衆運動」
13:30~15:30	山内昌之(東洋文庫)「ソ連邦の現代スーフィズム:社会主義体制とイスラム神秘主義教団」
15:40~17:40	中嶋嶺雄(東京外語大)「中国の転換と中ソ関係」

1982年度第1回研究報告会
1982年7月8日(木)

	公開講演 J. ゼールジン(外国人研究員)「形なきものを求めて: 文学におけるロシア的態度」 N. デーヴィス(外国人研究員)「ソ連=ポーランド関係の現在」

7月9日(金)

	第I部会(政治・歴史) 南塚信吾(千葉大)「ハンガリーにおける人民民主主義論の変遷(1945-1948年)」
	第II部会(文化) 平川祐弘(東大)「西欧化の心理: プーシュキンと芥川の場合」
	第I部会(政治・歴史) 木戸蓊(神戸大)「ソ連とバルカン諸国」
	第II部会(文化) 川端香男里(東大)「ロシア・スラヴ・西欧」
	第I部会(政治・歴史) 梁好民(大韓民国統一問題研)「北朝鮮と長期化する中ソ対立」
	第II部会(文化) 中村喜和(一橋大)「幕末期のロシア文学: 受容」

7月10日(土)

	第I部会(政治・歴史) 石井明(東大)「旧満州接収をめぐる中ソ交渉: 1945~1946年」
	第II部会(文化) 直野敦(東大)「ルーマニアの知識人とロシア・ソ連」
	第I部会(政治・歴史) 八尾師誠(東洋文庫)「1920年代のイラン=ソヴエト関係」
	第II部会(文化) 栗原成郎(東大)「ロシア=セルビア文学交流」
	第I部会(政治・歴史) 平井友義(大阪市大)「ソ連の西南アジア政策」
	第II部会(文化) 内藤操(上智大)「иносказание(あてこすり)は越境し昇華する」

1982年度第2回研究報告会「ソ連の隣国関係の比較研究」
1983年1月28日(金)

宮鍋幟(一橋大)「ソ連とコメコン共同事業」 佐藤経明(横浜市大)「ソ連・東欧関係におけるセフ(コメコン)」 小山茂樹(中東経済研)「ソ連の対中東政策: その経済的側面」

1月29日(土)

中山弘正(明治学院大)「最近の西ドイツのソ連・東欧研究: 6研究所訪問の報告を中心に」
丹羽春喜(京都産業大)「ソ連の貿易・経済成長・軍備・実質賃金の動向予測: 計量モデルによる」
香川敏幸(広島大)「ユーゴとソ連の経済協力関係について」

国際シンポジウム「ソ連・東欧社会における秩序志向と自由化傾向」
1983年8月23日(火)

9:30~10:20	第1セッション A. カツェネリンボイゲン(ペンシルヴァニア大)「計画、市場と測定」 司会: C. オツィチ(外国人研究員) 討論者: 久保庭真彰(一橋大); 岩田昌征(北大) 第2セッション 皆川修吾(南山大)「最高ソビエト常任委員会における地域の第1書記」 司会: 木戸蓊(神戸大)　討論者: J. ハフ(デューク大); 平井友義(大阪市大)
14:00~14:20	第3セッション 司会: 外川継男(北大) 第1セッション報告　C. オツィチ(外国人研究員) 第2セッション報告　木戸蓊(神戸大)
14:20~15:10	A. プザンソン(パリ社会科学高等研)「ソ連についてわれわれは如何なる意味で強さ、弱さという概念を使うことができるか?」 討論者: 和田春樹(東大); 佐藤経明(横浜市大)

8月24日(水)

9:30~10:20	第4セッション 盛田常夫(法政大)「社会主義経済における所有=市場、効率=制御、平等=博愛」 司会: A. カツェネリンボイゲン(ペンシルヴァニア大) 討論者: C. オツィチ(外国人研究員); A. シーポス(外国人研究員) 第5セッション S. フィッツパトリク(テキサス大)「スターリン主義の起源: 内戦はどれほど重要だったか?」 司会: ハク=ジュン・キム(金学俊)(ソウル国立大) 討論者: 和田春樹(東大); 辻義昌(早大)
14:00~14:20	第6セッション 司会: A. プザンソン(パリ社会科学高等研) 第4セッション報告　A. カツェネリンボイゲン(ペンシルヴァニア大) 第5セッション報告　ハク=ジュン・キム(金学俊)(ソウル国立大)
14:20~15:10	J. ハフ(デューク大)「ソビエト政治体制の進化」 討論者: 平井友義(大阪市大); 木村汎(北大)

8月25日（木）

9:30~10:20	第7セッション A. シーボス（外国人研究員）「コメコン諸国における分業と専門化に関する若干の問題」 司会：盛田常夫（法政大）　討論者：宮鍋幟（一橋大）；望月喜市（北大）
	第8セッション M. フリードバーグ（イリノイ大）「ソ連の書籍市場：供給と需要」 司会：内藤操（上智大） 討論者：渡辺雅司（同志社大）；中本信幸（神奈川大）
14:00~14:20	第9セッション 司会：木村汎（北大） 第7セッション報告　盛田常夫（法政大） 第8セッション報告　内藤操（上智大）
14:20~15:10	佐藤経明（横浜市大）「社会主義計画経済における"混合経済"の可能性と諸制限」 討論者：J. ハフ（デューク大）；A. カツェネリンボイゲン（ペンシルヴァニア大）

1983年度第2回研究報告会「ブレジネフ時代の総合的研究」
1984年1月27日（金）

西村文夫（日本国際問題研）「ブレジネフ時代の歴史的意味」 司会：富永守雄　討論者：長谷川毅
長谷川毅（北大）「ブレジネフ時代におけるソ連の軍事問題」 司会：西村文夫　討論者：木村汎
金田辰夫（上智大）「ブレジネフ時代の経済」 司会：吉野悦雄　討論者：望月喜市

1月28日（土）

西村可明（一橋大）「ブレジネフ時代におけるコルホーズの国家化」 司会：岩田昌征　討論者：金田辰夫
田中一生（津田塾大）「戦後ユーゴスラビア文学の特徴」 司会：太田一男　討論者：灰谷慶三
中村喜和（一橋大）「石川啄木とロシア」 司会：出かず子　討論者：亀井秀雄

1984年度第1回研究報告会
1984年7月18日（水）

18:00~20:00	S. バロン（外国人研究員）"Plekhanov, International Socialism, and the Revolution of 1905" L. ディーネス（外国人研究員）"Siberia in the Soviet Economy: Regional Strategy, Diversity and Prospects" 司会：長谷川毅

7月19日 (木)

9:30~11:30	第I部会　ブレジネフ時代の総合的研究 皆川修吾 (南山大)「ブレジネフ時代の指導体制」 司会: 小森田秋夫　　討論者: 木村明生 第II部会　自由論題 (日本とロシア、その他) 栗生沢猛夫 (小樽商大)「モスクワの外国人村について」 司会: 福岡星児　　討論者: 鳥山成人
13:00~15:00	第I部会　ブレジネフ時代の総合的研究 佐藤経明 (横浜市大)「ブレジネフ期のコメコン経済体制: 東西関係の視点から」 司会: 望月喜市　　討論者: 箱木真澄 第II部会　自由論題 (日本とロシア、その他) 渡辺雅司 (同志社大)「メーチニコフと岩倉使節団」 司会: 中村健之介　　討論者: 田中彰
15:30~17:30	第I部会　ブレジネフ時代の総合的研究 木戸蓊 (神戸大)「ブレジネフ時代の外交」 司会: 中村研一　　討論者: 木村汎 第II部会　自由論題 (日本とロシア、その他) 中本信幸 (神奈川大)「大津事件をめぐる日本とロシア: 国際的視座からの再評価」 司会: 松沢弘陽　　討論者: 秋月俊幸
18:00~20:00	懇談・談話会 長谷川毅「わが国におけるソ連・東欧研究のあり方」

7月20日 (金)

10:00~12:00	第I部会　ブレジネフ時代の総合的研究 江川卓 (東京工大)「ブレジネフ時代のロシア文学の動向」 司会: 工藤正広　　討論者: 中本信幸
13:30~15:30	第I部会　ブレジネフ時代の総合的研究 和田春樹 (東大)「ブレジネフ時代の歴史家たち」 司会: 鳥山成人　　討論者: 長谷川毅

1984年度第2回研究報告会「わが国におけるソ連・東欧研究のあり方」
1985年2月1日 (金)

10:00~12:00	中村喜和 (一橋大)「旧教徒カザークのユートピア: ネクラノフ派の場合」 司会: 外川継男　　討論者: 福岡星児
13:30~15:30	西村可明 (一橋大)「現代社会主義におけるデエタティゼーションの意義と限界」 司会: 望月喜市　　討論者: 盛田常夫
15:45~17:45	談話会 木村汎 (北大)「わが国におけるソ連・東欧研究のあり方」 司会: 伊東孝之

2月2日(土)

10:00~12:00	田中一生(津田塾大)「ドゥブロヴニク: ある共和国の歴史」 司会: 伊東孝之　　討論者: 鳥山成人
13:30~15:30	盛田常夫(法政大)「セカンドエコノミーの分析モデル」 司会: 是永純弘　　討論者: 吉野悦雄
15:45~17:45	江川卓(東工大)「ドストエフスキーの"великодушие"とロシア国民性について」 司会: 出かず子　　討論者: 中村健之介

1985年度第1回研究報告会「過渡期にたつ現代ソ連: その総合的研究」
1985年7月10日(水)

10:00~12:00	川野辺敏(国立教育研)「ソ迫の教育改革をめぐって」 司会: 三沢正博(札教大)　　討論者: 竹田正直(北大)
13:30~15:30	小島修一(甲南大)「ロシアにおける農村社会の研究: ネオナロードニキ学派の形成と展開」 司会: 荒又重雄(北大)　　討論者: 松井憲明(旭川大)
15:45~17:45	波辺良智(青山学院女子短大)「ソ連の階層と社会移動」 司会: 伊東孝之(北大)　　討論者: 金子勇(北大)

7月11日(木)

10:00~12:00	森下敏男(神戸大)「ソ連における法的紛争と"合法性"の実現」 司会: 五十嵐清(北大)　　討論者: 小森田秋夫(北大)

Sapporo Summer Slavic Studies Seminar 1985
The Soviet Union at Crossroad: Foreign Policy, the Economy, and the Military
July 11, 1985

13:00~14:00	Opening Session
14:00~16:00	J. Valenta (Univ. of Miami), "Soviet Decision-Making for National Security: The Case of Afghanistan" Chairman: G.B. Smith　　Discussants: T. Hirai & T. Hasegawa
16:30~18:30	K. Ito (Aoyama Gakuin Univ.), "Behaivioral Pattern of Soviet External Approach" Chairman: S. Minagawa　　Discussants: Discussants: J. Valenta & T. Ito

July 12

10:00~12:00	M. Bornstein (Univ. of Michigan), "Economic Reform in the Soviet Union" Chairman: R. Campbell　　Discussants: T. Sato & T. Kaneda
13:00~15:00	K. Uno (Tsukuba Univ.), "Recent Trends in Soviet R & D and Patents: A Quantitative Appraisal" Chairman: T. Sato　　Discussants: R. Campbell & M. Bornstein
16:00~18:00	K. Kimbara (Keidanren), "Development of Siberia and Japan" Chairman: F. Uda　　Discussants: G.B. Smith & H.J. Ellison

July 13

10:00~12:00	R. Campbell (Indiana Univ.), "Soviet Defence Expenditures and Their Impact on Economic Performance" Chairman: M. Bornstein　　Discussants: T. Hasegawa & K. Mochizuki
13:30~15:30	I. Takizawa (National Defence Academy), "Some Thoughts on Recent Kremlinology" Chairman: J. Valenta　　Discussants: S. Minagawa & H.J. Ellison
16:00~18:00	H.J. Ellison (Kennan Inst.), "Foreign Policy Role of International Department of the Central Committee" Chairman: T. Ito　　Discussants: H. Kimura & N. Koizumi

1985年度第2回研究報告会
1986年1月31日(金)

10:00~12:00	江川卓(東工大)「ドストエフスキーと20世紀ロシア」 司会: 中村健之介(北大)
13:30~15:30	栗原成郎(東大)「ヴーク・カラジッチとロシア」 司会: 外川継男(北大)
15:45~17:45	千野栄一(東京外大)「ヤロスラフ・サイフェルトの詩と真実」 司会: 灰谷慶三(北大)

2月1日(土)

10:00~12:00	第I部会 J. ランヌ(外国人研究員) "В. Хлебников и греческое наследство" 司会: Y. ジンベルグ(北大) 第II部会 下斗米伸夫(成蹊大)「スターリン体制下のモスクワ: 1931~1934年」 司会: 伊東孝之(北大)　討論者: 西山克典(北大); 長谷川毅(北大)
13:30~15:30	第I部会 水野忠夫(早大)「今、何故ロシア・アヴァンギャルドか?」 司会: 小平武(北大) 第II部会 秋野豊(北大)「最近のソ連=東欧関係」 司会: 木村汎(北大)　討論者: 中村研一(北大); 伊東孝之(北大)
15:45~17:45	第I部会 五十殿利治(筑波大)「未来派: 挑発するスポーツマン」 司会: 山田吉二郎(北大) 第II部会 G. スミス(外国人研究員) "The Gorbachev Purge:Leadership Consolidation in the USSR and Its Policy Implications" 司会: 長谷川毅(北大)　討論者: 秋野豊(北大); 下斗米伸夫(成蹊大)

1986年度第1回研究報告会「過渡期にたつ現代ソ連: その総合的研究」
1986年7月14日(月)

10:00~12:00	原暉之(愛知県大)「日露関係と露領沿海州の朝鮮人」 司会: 外川継男(北大)　　討論者: 秋月俊幸(北大)
13:30~15:30	沼野充義(東大)「亡命文学の栄光と悲惨: 第三の波を中心に」 司会: 灰谷慶三(北大)　　討論者: 望月哲男(北大)
15:45~17:45	大津定美(龍谷大)「ソ連労働力不足問題と縁辺労働力」 司会: 望月喜市(北大)　　討論者: 荒又重雄(北大)

The Second Sapporo Summer Slavic Studies Seminar 1986
The Soviet Union Faces Asia: Perceptions and Policies
July 15, 1986

10:00~12:00	D.W. Treadgold, "Soviet Historians' Views of the 'Asiatic Mode of Production'" Chairman: T. Hasegawa Discussants: T. Kuryuzawa & H. Kotani
13:30~15:30	G. Rozman, "Chinese Comparisons of Socialism: A New Agenda for Research and New Perceptions of Convergence in Socialist Reforms" Chairman: D.W. Treadgold Discussants: S. Takagi & R. Kojima
16:00~18:00	T. Hasegawa, "Japanese Perceptions of the Soviet Union: 1960-1985" Chairman: S. Kido Discussants: G. Rozman & T. Hirai

July 16

10:00~12:00	H. Kimura, "Determinants of Soviet-Japanese Relations" Chairman: T. Togawa Discussants: J.M. Ha & S. Minagawa
13:30~15:30	T. Shabad, "The Gorbachev Economic Policy: Is the USSR Turning Away from Siberian Development?" Chairman: T. Sato Discussants: M. Nagata & K. Mochizuki
16:00~18:00	J.M. Ha, "Soviet Policy Toward East Asia: Its Perception on Korean Unification" Chairman: T. Ito Discussants: F. Uda & N. Shimotomai

1986年度第2回研究報告会
1987年1月30日(金)

10:00~12:00	陸南泉(外国人研究員)「中ソ関係発展の展望」 司会: 望月喜市(北大) 討論者: 木戸蓊(神戸大)
13:30~15:30	A. キンボール(外国人研究員) "The First Russian Revolutionary Situation, 1859-1863" 司会: 外川継男(北大) 討論者: 和田春樹(東大)
15:45~17:45	下斗米伸夫(成蹊大)「ゴルバチョフ改革の知識社会学」 司会: 木村汎(北大) 討論者: 西村文夫(静岡薬大)

1月31日 (土)

10:00~12:00	歴史・文学分科会 和田春樹 (東大)「皇帝暗殺と"人民の意志"党」 司会: 栗生沢猛夫 (小樽商大)　討論者: 外川継男 (北大)
	政治分科会 木戸蓊 (神戸大)「コソヴォ問題再考: 社会変動とマイノリティ」 司会: 伊東孝之 (北大)　討論者: 伊藤知義 (北大)
	経済分科会 田畑伸一郎 (北大)「ソ連の国民所得成長の規定要因」 司会: 吉野悦雄 (北大)　討論者: 是永純弘 (北大)
13:30~15:30	歴史・文学分科会 坂内徳明 (一橋大)「ロシア民衆版画の文化史的考察: "ねずみによる猫の葬送"を素材として」 司会: 外川継男 (北大)　討論者: 小平武 (北大)
	政治分科会 西村文夫 (静岡薬大)「個人労働の合法化をめぐるイデオロギー」 司会: 五十嵐清 (北大)　討論者: 小森田秋夫 (北大)
	経済分科会 二瓶剛男 (東大)「ポーランドの経済分析によせて: 産業連関表の一整理」 司会: 小田福男 (小樽商大)　討論者: 岩崎俊夫 (北海学園大)
15:45~17:45	歴史・文学分科会 川端香男里 (東大)「バフチーンとバフチーン派の現在」 司会: 望月哲男 (北大)　討論者: 灰谷慶三 (北大)
	政治分科会 塩川伸明 (東大)「スターリン体制と労働者統合」 司会: 長谷川毅 (北大)　討論者: 荒又重雄 (北大)
	経済分科会 久保庭真彰 (一橋大)「ゴルバチョフ政権の投資政策」 司会: 吉田文和 (北大)　討論者: 望月喜市 (北大)

1987年度第1回研究報告会
1987年7月17日 (金)

10:00~12:00	J. スキャンラン (外国人研究員) "Marxist Ideology and the 'New Thinking' in the USSR" 司会: 木村汎 (北大)　討論者: 木戸蓊 (神戸大)
13:30~15:30	L. エヴェンコ (外国人研究員) "Economic and Managerial Reform in the USSR" 司会: 望月喜市 (北大)　討論者: 佐藤経明 (横浜市大)
15:45~17:45	革命70周年記念フォーラム「ロシア革命の歴史的意義」(円卓討論) 司会: 長谷川毅 (北大) 討論者: 木戸蓊 (神戸大); 佐藤経明 (横浜市大); 沼野充義 (東大); 原暉之 (北大)

7月18日（土）

10:00~12:00	第1分科会 袴田茂樹（青学大）「ゴルバチョフ改革路線に対する社会的抵抗をめぐって」 司会：伊東孝之（北大）　討論者：木戸蓊（神戸大） 第2分科会 沼野充義（東大）「第二の“雪どけ”?：ペレストロイカの中のソ連文学」 司会：小平武（北大）　討論者：灰谷慶三（北大）
13:30~15:30	第1分科会 中沢孝之（時事通信社）「ペレストロイカについての考察」 司会：小森田秋夫（北大）　討論者：木村汎（北大） 第2分科会 安井亮平（早大）「農村派の文学：ペローフを中心として」 司会：福岡星児（北大）　討論者：中村健之介（北大）
15:45~17:455	第1分科会 大津定美（龍谷大）「ソ連賃金改革と雇用合理化」 司会：荒又重雄（北大）　討論者：田畑伸一郎（北大） 第2分科会 望月哲男（北大）「アイトマートフと家族の神話」 司会：鈴木淳一（札幌大）　討論者：沼野充義（東大）

1987年度第2回研究報告会
1988年1月29日（金）

10:00~12:00	J. スキャンラン（外国人研究員）“Social and Political Aspects of Restructuring in the USSR” 司会：木村汎（北大）　討論者：下斗米伸夫（成蹊大）；長谷川毅（北大）
13:30~15:30	A. シェヴァコフ（外国人研究員）"The Restructuring of Social-Economic Planning and Management: Problems and Direction of Reforms” 司会：望月喜市（北大）　討論者：久保庭真彰（一橋大）；田中雄三（龍谷大）
16:00~17:30	「スラヴ研究の推進の方法について」検討会

1月30日 (土)

10:00~12:00	第1分科会 佐々木照央 (埼玉大)「ナロードニキのインタナショナリズム: ラヴローフの場合」 司会: 原暉之 (北大)　討論者: 和田春樹 (東大) 第2分科会 藤本和貴夫 (大阪大)「ペレストロイカとソ連の党＝軍関係」 司会: 伊東孝之 (北大)　討論者: 長谷川毅 (北大) 第3分科会 田中雄三 (龍谷大)「ソ連経済改革の現状と問題点」 司会: 荒又重雄 (北大)　討論者: 望月喜市 (北大)
13:30~15:30	第1分科会 西山克典 (北大)「中央アジアにおける植民と革命」 司会: 高岡健次郎 (札幌学院大)　討論者: 原暉之 (北大) 第2分科会 秋野豊 (筑波大)「87年のソ連外交」 司会: 木戸蓊 (神戸大)　討論者: 木村汎 (北大) 第3分科会 久保庭真彰 (一橋大)「計量経済モデルによるソ連経済の中長期分析」 司会: 田畑伸一郎 (北大)　討論者: 是永純弘 (北大)
15:50~17:50	塩川伸明 (東大)「現代ソ連の社会問題と社会政策: 家族問題・家族政策を焦点として」 司会: 五十嵐清 (北大)　討論者: 小森田秋夫 (北大)

1988年度第1回研究報告会
1988年7月15日 (金)

10:00~12:00	和田春樹 (東大)「ソ連の歴史見直し: 過程と諸相」 司会: 栗生沢猛夫 (北大)　討論者: 高橋清治 (愛知県大); 原暉之 (北大)
13:30~15:30	第1分科会 中本信幸 (神奈川大)「ソ連における環境問題と文学」 司会: 小平武 (北大)　討論者: 灰谷慶三 (北大) 第2分科会 V. モート (外国人研究員) "The BAM and Pacific Development" 司会: 長谷川毅 (北大)　討論者: 望月喜市 (北大)
15:45~17:45	安井亮平 (早大)「ソ連現代文学の現在」 司会: 中村健之介 (北大)　討論者: 工藤正広 (北大)

7月16日 (土)

10:00~12:00	南塚信吾 (千葉大)、伊東孝之 (北大)「東欧改革の現状と展望」 司会: 平井友義 (大阪市大)　討論者: 下斗米伸夫 (法政大); 吉野悦雄 (北大)
13:30~15:30	第1分科会 A. ダーキン (外国人研究員) "Герой и традиция в повести Чехова «Дуэль»" 司会: Y. ジンベルグ (北大)　討論者: 中本信幸 (神奈川大) 第2分科会 小川和男 (ソ連東欧貿易会)「ソ連極東の開発と日ソ貿易」 司会: 田畑伸一郎 (北大)　討論者: 荒井信雄 (北大)
15:50~17:50	皆川修吾 (南山大)「第19回全ソ党協議会と党の活性化」 司会: 藤本和貴夫 (大阪大)　討論者: 塩川伸明 (東大); 木村汎 (北大)

1988年度第2回研究報告会
1989年2月3日(金)

10:00~12:00	下斗米伸夫(法政大)「ペレストロイカ: 第二の息吹: 1988年政治改革論の展開」 司会: 五十嵐清(北大)　　討論者: 伊東孝之(北大)
13:30~15:30	佐藤経明(日大)「6月党協議会後の経済ペレストロイカ」 司会: 吉田文和(北大)　　討論者: 久保庭真彰(一橋大)
15:45~17:45	川端香男里(東大)「ロシアの世紀末(アンドレーエフスキイについて)」 司会: 工藤正広(北大)　　討論者: 浦雅春(東工大)

2月4日(土)

10:00~12:00	第1分科会 長谷川毅(北大)「ロシア・ソ連史からみたペレストロイカ」 司会: 栗生沢猛夫(北大)　　討論者: 塩川伸明(東大) 第2分科会 田中雄三(龍谷大)「新刊ソ連経済学教科書の若干の問題点」 司会: 小田福男(小樽商大)　　討論者: 荒又重雄(北大) 第3分科会 浦雅春(東工大)「チェーホフにおける"家"の機能」 司会: 福岡星児(北大)　　討論者: 小平武(北大)
13:30~15:30	第1分科会 袴田茂樹(青学大)「ソ連における民族問題とゴルバチョフの民族政策」 司会: 西山克典(北大)　　討論者: 原暉之(北大) 第2分科会 久保庭真彰(一橋大)「ソ連における統計システム再編の批判的考察」 司会: 森田憲(小樽商大)　　討論者: 是永純弘(北大) 第3分科会 鈴木淳一(札幌大)「佯狂者(ユーロヂヴィ)とドストエフスキー」 司会: 灰谷慶三(北大)　　討論者: 中村健之介(北大)
15:50~17:50	円卓会議「最近の日ソ関係」 和田春樹(東大); 木村汎(北大); 望月喜市(北大) 司会: 秋月俊幸(北大)

1989年度第1回研究報告会
1989年7月13日(木)「社会主義諸国改革の世界システムへのインパクト」

10:00~12:00	下斗米伸夫(法政大) "The New Thinking and the International System" 司会: 木村汎(北大) 討論者: 平井友義(大阪市大)、R.デーヴィス(バーミンガム大)
13:30~15:30	E.アンバルツーモフ(ソ連・世界社会主義体制経済研) "Реформа социализма: путь к возвращению мировой цивилизации" 司会: 原暉之(北大)　討論者: 和田春樹(東大); 袴田茂樹(青学大)
15:45~17:45	R.デーヴィス(バーミンガム大) "Gorbachev's Socialism in Historical Perspective" 司会: 佐藤経明(日大)　討論者: 塩川伸明(東大); E.アンバルツーモフ

7月14日 (金)「東欧・ロシアの歴史と民族」

10:00~12:00	J. トマシェフスキ (外国人研究員) "The Legal Status of National Minorities in Interwar Poland" 司会: 吉野悦雄 (北大) 討論者: D. ブランデス (外国人研究員); 伊東孝之 (北大)
13:30~15:30	D. ブランデス (外国人研究員) "Peaceful Conquest of Southern Russia by the German Colonists" 司会: 長谷川毅 (北大)　討論者: 中井和夫 (秋大); 西山克典 (北大)
15:45~17:45	中井和夫 (秋大)「第三のウクライナ化: ペレストロイカの中のウクライナ語とウクライナ教会」 司会: 望月哲男 (北大)　討論者: 森安達也 (東大)

7月15日 (土)

10:00~12:00	歴史分科会 森安達也 (東大)「スラブ圏におけるキリスト教の求心性と遠心性」 司会: 中村健之介 (北大)　討論者: 栗生沢猛夫 (北大)
	政治・経済分科会 皆川修吾 (南山大)「ソ連における人民代義員選挙後の政治改革」 司会: 中村研一 (北大)　討論者: 下斗米伸夫 (法政大)
13:30~15:30	歴史分科会 井内敏夫 (早大)「中世後期のポーランドにおける王と国家と社会」 司会: 伊東孝之 (北大)　討論者: 栗生沢猛夫 (北大)
	政治・経済分科会 松井憲明 (旭川大)「ソ連農業史の再評価: チャヤーノフと集団化」 司会: 望月喜市 (北大)　討論者: 和田春樹 (東大)
15:45~17:45	歴史分科会 高田和夫 (九大)「近代ロシアの労動力移動について」 司会: 原暉之 (北大)　討論者: 荒又重雄 (北大)
	政治・経済分科会 林忠行 (広島大)「ロンドン亡命政府時代のベネシュ: その国際政治認識と行動」 司会: 木村汎 (北大)　討論者: 秋野豊 (筑波大)

1989年度第2回研究報告会
1990年2月2日 (金)

10:00~12:00	J. トマシェフスキ (外国人研究員) "Politics of Investment in Poland: 1944-80" 司会: 伊東孝之 (北大)　討論者: 石坂昭雄 (北大)
13:30~15:30	中村泰三 (大阪市大)「ソ連邦における都市化の進展と都市問題」 司会: 望月喜市 (北大)　討論者: 小林三樹 (北大)
15:45~17:45	文学・歴史分科会 工藤正広 (北大)「チェーホフとジヴァゴ」 司会: 中村健之介 (北大)　討論者: 灰谷慶三 (北大)
	政治・経済分科会 吉田進 (日商岩井)「日ソ貿易の現状と問題」 司会: 徳永彰作 (札幌大)　討論者: 荒井信雄 (道地域総研)

2月3日(土)

10:00~12:00	文学・歴史分科会 浦雅春(東京工業大)「現代ロシア文学の新展開」 司会: 小平武(北大)　　討論者: 望月哲男(北大) 政治・経済分科会 名島修三(横浜商大)「社会主義経済の成長循環」 司会: 是永純弘(北大)　　討論者: 森田憲(小樽商大)
13:30~15:30	文学・歴史分科会 西中村浩(東大)「1920年代と現代ロシア文学」 司会: 望月哲男(北大)　　討論者: 山田吉二郎(北大) 政治・経済分科会 A.クズィノフスキ(ワルシャワ中央計画統計大)他5名 「ポーランドの経済情勢(工場現場の視点から)」 司会: 吉野悦雄(北大) 討論者: 富森虔児(北大); J.トマシェフスキ(外国人研究員)
15:50~17:50	石井規衛(神戸大)「ロシア革命研究の方法に関する諸問題」 司会: 松井憲明(旭川大)　　討論者: 原暉之(北大)

国際シンポジウム「ソ連東欧改革と世界システムへの衝撃」
1990年8月29日(水)

15:30~17:30	A.ペトロフ(外国人研究員)「国際的文化現象としてのグラスノスチ」 川端香男里(東大)「亡命者の帰還」 司会: 灰谷慶三(北大)　討論者: 安井亮平(早大); 中村喜和(一橋大)

8月30日(木)

9:30~11:30	A.ボガトウーロフ(ソ連米加研)「ソ連のアジア太平洋ドクトリン:その概要」 西原正(防衛大)「ソビエトの変貌とアジア太平洋地域」 司会: 石井明(東大)　討論者: 長谷川毅(北大); 平井友義(大阪市大)
13:00~15:00	田中明彦(東大)「世界システムの構造的変化」 徐葵(中国ソ連東欧研)「東欧の劇的変動と世界情勢への衝撃」 司会: J.ハズラム(ケンブリッジ大) 討論者: 河龍出(ソウル大); 木戸蓊(神戸大)
15:30~17:30	J.ハズラム(ケンブリッジ大)「ソ連の対日政策: 継続するゴルバチョフ外交の混迷」 木村汎(北大)「ペレストロイカに対する日本の影響?」 司会: 西原正(防衛大) 討論者: 和田春樹(東大); A.ボガトウーロフ(ソ連米加研)

8月31日(金)

9:30~11:30	河龍出(ソウル大)「出現しつつある東北アジアの新秩序」 和田春樹(東大)「ペレストロイカと東北アジア: その功罪」 司会: 望月哲男(北大)　討論者: 石井明(東大); 徐葵(中国ソ連東欧研)
13:00~15:00	佐藤経明(日大)「世界経済統合へのソ連のアプローチとその日ソ関係にとっての意味合い」 I.ティシェツキー(ソ連外交アカデミー)「過渡期の日ソ関係」 司会: 木戸蓊(神戸大)　討論者: 望月喜市(北大); 荒井信雄(道地域総研)
15:30~17:30	イェーニー(外国人研究員)「ペレストロイカと権威」 長谷川毅(北大)「歴史的展望におけるペレストロイカ: 再評価」 司会: 平井友義(大阪市大)　討論者: 竹中浩(大阪大); 原暉之(北大)

1990年度冬期研究報告会
1991年 1 月25日 (金)

10:00~12:00	中村喜和 (一橋大)「満州ロマノフカ村」 司会: 川端香男里 (東大)　　討論者: 安村仁志 (中京大)
13:15~15:15	文学分科会 A. ペトロフ (外国人研究員)「ロシア詩における東と西のテーマ」 司会: 望月哲男 (北大)　　討論者: 亀山郁夫 (東京外大)
	歴史分科会 長與進 (東海大)「チェコスロヴァキアの民族問題: チェコ・スロヴァキア関係を中心として」 司会: 伊東孝之 (北大)　　討論者: 林忠行 (広島大)
	経済分科会 宮鍋幟 (東京国際大)「ソ連の市場経済移行: 構想と現状」 司会: 田畑伸一郎 (北大)　　討論者: 小林好宏 (北大)
15:30~17:30	文学分科会 栗原成郎 (東大)「ロシアの諺に見るロシアのイメージ」 司会: 中村健之介 (北大)　　討論者: 灰谷慶三 (北大)
	歴史分科会 J. イェーニー (外国人研究員)「ロシア史再検討の試案」 司会: 皆川修吾 (北大)　　討論者: 栗生沢猛夫 (北大) 長谷川毅 (北大)
	経済分科会 小山洋司 (新潟大)「ユーゴスラヴィアにおける経済改革の現局面」 司会: 伊藤知義 (札幌学院大)　　討論者: 徳永彰作 (札幌大)

1 月26日 (土)

10:00~12:00	文学分科会 森安達也 (東大)「"キリスト教的ロシア"イメージの虚と実」 司会: 藤家壮一 (北大)　　討論者: 安藤厚 (北大)
	歴史分科会 討論会「ソ連史の見直し (その 1): 革命と内戦」 司会: 長谷川毅 (北大) 討論者: 和田春樹 (東大)、塩川伸明 (東大)、西山克典 (北大)
	経済分科会 望月喜市 (北大)「ソ連極東の経済と地域独立採算制」 司会: 是永純弘 (北大)　　討論者: 松井憲明 (旭川大)
13:15~15:15	文学分科会 討論会「20世紀文学におけるロシアのイメージ」 司会: 山田吉二郎 (北大) 討論者: 諫早勇一 (信州大)「第一次亡命文学の中のロシア: ナボコフを中心に」 亀山郁夫 (東京外大)「未来派とロシア: 二つの革命のはざまで」 沼野充義 (東大)「"非ロシア的作家"とロシア性: 1920年代文学を中心に」
	歴史分科会 討論会「ソ連史の見直し (その 2): スターリン時代」 司会: 原暉之 (北大) 討論者: 奥田央 (東大); 富田武 (成蹊大); 横手慎二 (佐賀大)
	経済分科会 E. コヴリギン (ソ連科学アカデミー極東支部経済研) 「ソ連極東の経済: 内的なペレストロイカと国際環境の変化」 司会: 望月喜市 (北大)　　討論者: 是永純弘 (北大)
15:30~17:30	大津定美 (龍谷大)「ソ連市場経済移行と雇用・労使関係」 司会: 荒又重雄 (北大)　　討論者: 田畑伸一郎 (北大)

国際シンポジウム「ソ連の政治システムの再生と世界システムへの衝撃」
1991年7月12日(金)

9:30~11:30	木村汎(日文研)「ペレストロイカのアジアおよび日本に対するインパクト」 J.ジュークス(オーストラリア国立大)「ソ連軍と極東」 司会:木戸蓊(神戸大) 討論者:小泉直美(日本国際問題研); M.ノソフ(ソ連・米加研)
13:00~15:00	M.ノソフ(ソ連・米加研)「岐路に立つ日・米・ソ関係」 シン・シュガン(中国・ソ連東欧研)「ペレストロイカと中ソ関係」 司会:吉川元(広島修道大)　討論者:平井友義(大阪市大); 秋野豊(筑波大)
15:30~17:30	A.ブテンコ(ソ連・国際経済政治研)「前途に何があるか」 T.リグビー(オーストラリア国立大)「システム・体制・指導者の変化」 司会:宇多文雄(上智大)　　討論者:伊東孝之(北大)

7月13日(土)

9:30~11:30	A.ツィプコ(ソ連・国際経済政治研)「ペレストロイカとロシア国家の危機」 A.ミグラニヤン(ソ連・国際経済政治研)「ペレストロイカ空想期の終焉」 司会:小森田秋夫(東大)　　討論者:下斗米伸夫(法政大)
13:00~15:00	L.シェフツォーヴァ(ソ連・国際経済政治研)「ペレストロイカ:その演出と展望」 塩川伸明(東大)「ペレストロイカは終わったか」 司会:長谷川毅(北大)　　討論者:和田春樹(東大)
15:30~17:30	円卓会議:ソ連は再生できるか パネリスト　A.ブテンコ(ソ連・国際経済政治研) A.ミグラニヤン(同) A.ツィプコ(同)　L.シェフツォーヴァ(同) 司会:P.バートン(南カリフォルニア大)

1991年度冬期研究報告会
1992年1月31日(金)

9:30~11:30	西村可明(一橋大)「ソ連における市場化の問題点」 司会:望月喜市(北大)　　討論者:富森虔児(北大)
13:00~15:00	文学・歴史分科会 E.モジェイコ(外国人研究員) 「現代ポーランド及びロシア文学におけるポストモダニズム:タデウシュ・コンヴィツキとワシーリー・アクショーノフの場合」 司会:川端香男里(東大)　　討論者:望月哲男(北大) 政治・国際関係分科会 小森田秋夫(東大)「労働組合の最近の動向」 司会:五十嵐清(札幌大)　　討論者:皆川修吾(北大) 経済分科会 大津定美(龍谷大)「ロシアの市場化とコーペラチヴ」 司会:荒又重雄(北大)　　討論者:望月喜市(北大)
15:15~17:45	ラウンドテーブルI「ソ連邦解体:共和国・地域・民族」 報告者:ウクライナ　中井和夫(東大); ロシア　保田孝一(岡山大) ザカフカス　高橋清治(愛知県大) 中央アジア　小松久男(東海大) タタール　西山克典(札幌市立高専) 司会:　原暉之(北大)

2月1日(土)

9:30~11:30	文学・歴史分科会 E.クラスノシチョーコワ(外国人研究員)「ゴンチャローフ『フリゲート艦パルラダ号』における日本のイメージ」 沢田和彦(埼玉大)「日本におけるゴンチャローフ」 司会:中村喜和(一橋大)　討論者:大西郁夫(北大) 政治・国際関係分科会 下斗米伸夫(法政大)「ロシアのジレンマ」 司会:木村汎(日文研)　討論者:木戸蓊(神戸大) 経済分科会 田中雄三(龍谷大)「NCR派の社会主義経済論」 司会:田畑伸一郎(北大)　討論者:是永純弘(北大)
13:00~15:00	文学・歴史分科会 高橋一彦(東大)「ミリューチン軍制改革について」 司会:栗生沢猛夫(北大)　討論者:松里公孝(北大) 政治・国際関係分科会 シン・シューガン(外国人研究員)「ソ連の変動と中国の対応」 司会:伊東孝之(北大)　討論者:毛里和子(静岡県立大) 経済分科会 山村理人(茨城大)「ソ連の食糧危機と農業改革」 司会:大沼盛男(北海学園大)　討論者:家田修(北大)
15:15~17:45	ラウンドテーブルII 「ペレストロイカと日本のソ連東欧研究:反省と課題」 討論者:　政治・国際関係　木戸蓊(神戸大); 文学　川端香男里(東大) 歴史　和田春樹(東大); 経済　佐藤経明(日本大) 司会:　伊東孝之(北大)

国際シンポジウム「ユーラシア新秩序への模索」
1992年7月17日(金)

9:30~11:30	ラウンド・テーブル:「東ヨーロッパ新秩序」 パネリスト　柴宜弘(東大)　月村太郎(神戸大) 林忠行(広島大)　南塚信吾(千葉大) 司会:家田修(北大)
13:15~15:15	D.リーヴェン(英・ロンドン大)「ロシア帝国論」 宇多文雄(上智大)「政治改革とメディア」 司会:上野俊彦(日本国際問題研) 討論者:伊東孝之(北大); A.ツィプコ(外国人研究員)
15:30~17:30	J.ルドン(外国人研究員)「帝政ロシア(1700-1917年)における官僚制度:概念と実態」 松里公孝(北大)「帝政期地方行政の類型分析:県知事とゼムストヴォ」 司会:望月哲男(北大)　討論者:栗生沢猛夫(北大); 竹中浩(大阪大)

7月18日（土）

9:30~11:30	G. ジュークス（外国人研究員）「90年代の北太平洋におけるロシアの軍事政策」 A. パルカンスキー（ロシア・米加研）「ロシア東部における分極化傾向と北太平洋での経済活動」 司会：皆川修吾（北大）　討論者：西村文夫（静岡県立大）；進藤栄一（筑波大）
13:15~15:15	S. ローズフィルド（ノースカロライナ大）「対CIS包括的借款論を超えて」 田畑伸一郎（北大）「ロシアにおける“ショック療法”の評価」 司会：望月喜市（北大）　討論者：西村可明（一橋大）；富森虔児（北大）
15:30~17:30	A. ツィプコ（外国人研究員）「新生ロシア国家の弁証法」 塩川伸明（東大）「ロシア第四の“騒乱”：過去・現在・未来」 司会：木戸蓊（神戸大） 討論者：D. リーヴェン（ロンドン大）；袴田茂樹（青山学院大）

1992年度冬期研究報告会
1993年1月29日（金）

10:00~12:00	全体会　「対ロシア支援問題：経済・政治的考察」 報告者：鵜野公郎（慶大）　報告者：袴田茂樹（青山学院大） 司会：木村汎（日文研）　討論者：西村可明（一橋大）
13:30~15:30	第1分科会「経済改革と東欧の企業社会（労使関係）」 報告者：石川晃弘（中央大）　報告者：笠原清志（立教大） 司会：山村理人（北大）　討論者：塩川伸明（東大） 第2分科会「ロシア近代社会における基層秩序」 報告者：吉田浩（東大・院）　報告者：土屋好古（都立大・非） 司会：松里公孝（北大）
15:40~17:40	ラウンドテーブルI “Domestic and Foreign Policies of the Russian Federation” パネリスト：　木村汎（日文研）； G. ジュークス（外国人研究員）；平井友義（大阪市立大） 司会：皆川修吾（北大）

1 月30日 (土)

10:00~12:00	第 1 分科会「ロシアの産業構造」 報告者: 久保庭真彰 (一橋大) 司会: 鵜野公郎 (慶応大)　討論者: 望月喜市 (北大) 第 2 分科会「民衆宗教詩における“聖なるロシア”」 報告者: 栗原成郎 (北大) 司会: 藤家壮一 (北大)　討論者: 灰谷慶三 (北大) 第 3 分科会 **“East European Transformation and Emerging New World Order”** 報告者: 木戸蓊 (神戸大)　報告者: I. パスク (ルーマニア政治行政大) 司会: 太田一男 (酪農学園大)　討論者: 伊東孝之 (北大)
13:30~15:30	第 1 分科会「ロシア (CIS)経済と金融問題」 報告者: 大島梓 (東京銀行) 司会: 徳永彰作 (札幌大)　討論者:田畑伸一郎 (北大) 第 2 分科会「ロシア文学研究の今日的課題」 報告者: 安藤厚 (北大)　報告者: 沼野充義 (東大) 報告者: 川端香男里 (東大)　司会: 中村喜和 (一橋大) 第 3 分科会「政治学者の見た党政治局議事録 (1932-38)」 報告者: 富田武 (成蹊大) 司会: 塩川伸明 (東大)　討論者: 内田健二 (大東文化大)
15:40~17:40	ラウンドテーブル II **“Russian History: Continuity and Discontinuity”** パネリスト:　A. ツィプコ (外国人研究員) J. ルドン (外国人研究員); 和田春樹 (東大) 司会:　伊東孝之 (北大)

国際シンポジウム「ユーラシアの変動と姿を現し始めた新世界秩序」
1993年 9 月 2 日 (木)

9:50~11:50	J. レーヴェンハルト (外国人研究員)「比較の見地からみたソビエト・ロシアの連邦主義」 I. イサコワ (ロシア・米加研)「ロシア・ウクライナ関係」 司会: 皆川修吾 (北大) 討論者: 塩川伸明 (東大); 上野俊彦 (日本国際問題研)
13:20~15:20	A. ロートフェルト (ストックホルム国際平和研)「新しい欧州安全保障体制の模索: 脅威と挑戦」 田中明彦 (東大)「ポスト冷戦世界における東アジアの安全保障」 司会: 長谷川毅 (カリフォルニア大) 討論者: 植田隆子 (国際基督大)　J. スタニシュキス (ポーランド・政治学研)
15:40~17:40	S. ラメー (外国人研究員)「ユーゴスラヴィアの危機と西側」 小山洋司 (新潟大)「1974年憲法体制の崩壊: 旧ユーゴスラヴィアにおける民族紛争の遠因」 司会: 木村汎 (日文研) 討論者: J. レーヴェンハルト (外国人研究員); 佐原徹哉 (都立大)

9月3日(金)

9:30~11:30	V. ルイビン(外国人研究員)「市場移行条件下のロシアの財政・金融メカニズムと外国資本利用の条件」 陸南泉(中国・東欧中亜研)「ロシアの経済改革の中国との比較」 司会:望月喜市(北大)　討論者:佐藤経明(日本大);西村可明(一橋大)
13:00~15:00	J. スタニシュキス(ポーランド・政治学研)「共産主義からの移行の3類型」 林忠行(広島大)「チェコスロヴァキア連邦分裂後の中・東欧協力」 司会:伊東孝之(早大)　討論者:田中明彦(東大);S. ラメー(外国人研究員)
15:20~17:20	李石湖(韓国スラブ学会)「ロシアの朝鮮半島政策の再編過程」 長谷川毅(外国人研究員)「日ロ(ソ)関係:継続するパターン、枠組、展望」 司会:原暉之(北大)　討論者:和田春樹(東大);木村汎(日文研)

1993年度冬期研究報告会
1994年1月27日(木)

9:50~11:50	井上紘一(中部大)「レフ・グミリョフのエトノス論について」 司会:栗生澤猛夫(北大)　討論者:西山克典(札幌市立高専)
13:20~15:20	第1分科会 根村亮(一橋大)「道標派の全体像をめぐって」 司会:中村喜和(一橋大)　討論者:杉浦秀一(北大) 第2分科会 斎藤晨二(名古屋市大)「寒極とエクメネ」 庄司博史(国立民族学博物館)「北西ロシア・フィン系諸族の言語復権運動」 司会:原暉之(北大)　討論者:大島稔(小樽商大) 第3分科会 S. フォミーン(日本国際問題研)「ウクライナ経済の現状」 司会:西村可明(一橋大)　討論者:大津定美(龍谷大)
15:40~17:40	J. レーヴェンハルト(外国人研究員) "Institutional Dilemmas in the Transitionto Democracy: Russia between Presidentialism and Parliamentarianism" 報告者:伊東孝之(早大) "Regionalism in Russian Politics" 司会:永綱憲悟(亜細亜大)　討論者:皆川修吾(北大)

1月28日 (金)

9:50~11:50	第1分科会 A. ドーリン (東京外大) "Российская культура на переломном этапе" V. ジダーノフ (札幌大) "Последний русский философ серебряного века: К столетию со дня рождения А. Ф. Лосева" 司会・討論: 望月哲男 (北大)
	第2分科会 中嶋毅 (岩手大)「ロシアにおける技術者集団の形成」 梶雅範 (都立商科短大)「19世紀ロシアにおける科学者集団の形成についての考察: ロシアの科学者を中心として」 司会: ・討論: 松里公孝 (北大)
	第3分科会 村上隆 (ロシア東欧貿易会)「ロシア極東地域における産業インフラの現状と課題」 司会: 田畑伸一郎 (北大)　　討論者: 望月喜市 (北大)
13:30~15:30	第1分科会 津久井定雄 (大阪大)「救いの黙示録と破滅の黙示録: ドストエフスキー・パステルナーク・タルコフスキー」 望月哲男 (北大)「文学的ペテルブルグ論」 司会: 川端香男里 (東大)　　討論者: 山田吉二郎 (北大)
	第2分科会 中村逸郎 (学習院大)「ロシア大統領制下の政党政治」 永綱憲悟 (亜細亜大)「新ロシアの愛国共産主義について」 司会・討論: 伊東孝之 (早稲田大)
	第3分科会 V. ルイビン (外国人研究員) "Первые итоги перехода России к рынку и ближайшие перспективы" 司会: 山村理人 (北大)　　討論者: 吉田進 (日商岩井)
15:40~17:40	S. ラメー (外国人研究員) "Democratic Values and the Construction of Democracy: The Case of Eastern Europe" 石川晃弘 (中央大) "De-Socialism and Industrial Democracy" 司会: 林忠行 (広島大)　　討論者: 家田修 (北大)

夏期国際シンポジウム「帝国と社会: ロシア史への新しいアプローチ」
1994年7月13日 (水)

16:00~17:30	記念講演 V. トゥニマーノフ (外国人研究員)「ドストエフスキーと現代ロシア」 司会: 沼野充義 (東大)

7月14日 (木)

9:45~11:45	L. エンジェルステイン (プリンストン大)「異端から害悪へ: 後期帝政ロシアの市民的言説における去勢派」 土屋好古 (日大)「帝政末期ロシアにおける労働者階級文化について」 司会: 望月哲男 (北大)　討論者: 和田春樹 (東大); 栗生沢猛夫 (北大)
13:15~15:15	O. サテルニー (ヨーク大)「ハプスブルク帝国とロシア帝国: 若干の比較と対比」 J. クヴェル (ブダペスト経済大)「市場統合、国家の経済介入と両帝国の崩壊」 司会: 木戸蓊 (神戸大)　討論者: 中井和夫 (東大); 林忠行 (北大)
15:30~17:00	P. ズィリャーノフ (外国人研究員)「19世紀~20世紀初頭におけるロシアの国家性の発展」 竹中浩 (阪大)「地主貴族とゼムストヴォ機構: 政治的パースペクティヴにおける改革後の身分制」 司会: 長谷川毅 (外国人研究員)　討論者: 鈴木健夫 (早大); 小島修一 (甲南大)

7月15日 (金)

9:45~11:45	B. コロニツキー (ロシア史研)「"ロシアのイデー"と二月革命のイデオロギー」 松里公孝 (北大)「ロシア史における空間概念: 行政区画の変遷を題材として」 司会: 原暉之 (北大)　討論者: 石井規衛 (東大); 島田孝夫 (静岡県大)
13:15~15:15	J. ハスラム (ケンブリッジ大)「スターリンの下での外交政策の形成」 富田武 (成蹊大)「1930年代ソ連における政策決定過程の一局面」 司会: 皆川修吾 (北大)　討論者: 長谷川毅 (外国人研究員); 横手慎二 (慶大)
15:30~17:00	ラウンドテーブル「ロシア史研究の新しい地平」 和田春樹; 家田修; L. エンジェルステイン; B. コロニツキー; J. ハスラムほか 司会: 伊東孝之 (早大)

1994年度冬期研究報告会
1995年1月26日 (木)

9:50~11:50	長谷川毅 (外国人研究員)「ロシア革命下ペトログラードの社会史再考」 司会: 原暉之 (北大)　討論者: 塩川伸明 (東大); 西山克典 (札幌市立高専)
13:20~15:20	第1分科会 (文学・歴史) V. トゥニマーノフ (外国人研究員)「レスコフとロシア文学」 司会: 川端香男里 (中部大)　討論者: 木村崇 (京大); 大西郁夫 (北大)
	第2分科会 (地域・国際関係) 松里公孝 (北大)「現代ロシア地方政治の類型分析」 佐原徹哉 (都立大)「ブルガリア地方行政制度の歴史的変遷に関する予備的考察」 司会: 家田修 (北大)　討論者: 永綱憲悟 (亜細亜大); 川原彰 (杏林大)
	第3分科会 (地域・経済) 荒又重雄 (北大)「ロシア極東の外国人労働者問題」 A. ベロフ (北海道銀行)「サハリン州の社会経済状態」 司会: 村上隆 (北大)　討論者: 大津定美 (神戸大); 荒井信雄 (道地域総研)
15:40~17:40	第1分科会 (文学・歴史) 井桁貞義 (早大)「教養小説の形式による現代ロシア散文論」 沼野充義 (東大)「セルゲイ・ドヴラートフの"詩学"にむけて」 司会: 浦雅春 (東大)　討論者: 西中村浩 (東大); 貝澤哉 (早大)
	第2分科会 (地域・政治) 袴田茂樹 (青学大)「ロシアにおけるナショナリズムの考察」 下斗米伸夫 (法政大)「エスニック革命の終焉とエスノ政治」 司会: 木村汎 (日文研),　討論者: 宇多文雄 (上智大); 伊東孝之 (早大)

1月27日 (金)

9:30~11:30	第1分科会 (文学・歴史) P. ズィリャーノフ (外国人研究員)「19世紀~20世紀初頭ロシアの修道院」 司会: 松里公孝 (北大)　討論者: 栗生澤猛夫 (北大); 中村喜和 (一橋大)
	第2分科会 (国際関係) 秋野豊 (筑波大)「モスクワのアジア近隣諸国政策」 林忠行 (北大)「東中欧国際関係の特質と変容」 司会: 木戸蓊 (神戸大)　討論者: 横手慎二 (慶大); 中井和夫 (東大)
	第3分科会 (地域・民族) 齊藤晨二 (名古屋市大)「シベリアにおける近年の環境異変について」 佐々木史郎 (阪大)「アムール諸民族の近代史」 司会: 井上紘一 (北大)　討論者: 加藤九祚 (創価大); 福田正己 (北大)

特別研究会・北海道スラブ研究会・昼食懇談会等

69.07　江口朴郎「ロシア革命の現代的意義」(公開講演); 木村彰一(早大)「スラヴの使徒キリールの業績について」(公開講演)

70.04～71.10　藤井一行「ベリンスキーとナジェージン」; 成田博之「レーニンと第二インターナショナル」; 鳥山成人「松田道雄著『革命と市民的自由』について」; 若林大鬼智「ブロークの恋愛詩について」; 外川継男「ゲルツェンとツルゲーネフの論争をめぐって」; 山内昌之「ソビエト＝トルコ関係1920-1930: 国家的関係とイデオロギー的関係」; 出口健司「クロンシュタットの反乱(1921)」; 望月喜市「社会主義経済理論の最近の動向」; 日南田静真「渓内謙著『ソビエト政治史: 権力と農民』(1962)について」; 木村汎「渓内謙著『スターリン政治体制の成立(第1部)』(1970)について」; 栗生沢猛夫「ヨシフ・ヴォロツキー(1439-1515)の政治理論」; 望月喜市「ソ連経済の発展と再生産構造: 第八次五カ年計画の総括と第九次五カ年計画の見通し」; 出かず子「F.Randall著『チェルヌィシェフスキー』(1967)について」; 外川継男「A.Walickiのロシア人民主義論について」; 三宅正樹「現代史におけるヨーロッパと日本: 帝政ロシア外交文集の反訳をめぐって」; 小平武「初期のマヤコフスキー」

70.05　Roger Portal(パリ大・スラブ研)「18世紀末より20世紀初めのロシア社会」; 「19～20世紀のロシアにおける工業中産階級」

70.07　岩間徹「ロシアのインテリゲンツィア公開講演」; 金子幸彦「トルストイについて」(公開講演)

71.07　木村彰一「晩年のトルストイ」(公開講演); 百瀬宏(津田塾大)「フィンランドとロシア: 現代の歴史像」(公開講演)

71.09　西川正雄(東大)「第二インターナショナルにおける植民地問題」

71.10　池田博行(専修大)「シベリア開発」; Jean Duroselle(パリ大)「第二次世界大戦をめぐって」

71.11～72.10　中村健之介「ドストエフスキーの『未成年』について」; 荒又重雄「"改革"前後のロシアの労働政策: Zelnikに学んで」; 渡辺善一郎「ソ連とソ連人」; 金子信雄「ドブロリューボフの世界観の形成」; 早坂真理「トカチョフの革命思想」; 佐保雅子「ソビエト法における労働者の解雇について」; 百瀬宏「東北ヨーロッパと日本外交(1918-1944): 日本側史料の紹介に寄せて」; 工藤正広「パステルナーク詩集『我が妹人生1917夏』の神話」; 秋月俊之「日露雑居時代の樺太: 現地ロシア側書簡資料から」; 嶺野修「"ブハーリンとコミンテルン"序説: A. Glowy, *die Welgeshichteist das Weitgericht*, Wien 1969を中心に」; ルーカス夫人「ブルガリアについて」

72.07　斉藤孝「ソ連外交の歴史的特質公開講演」; 木村汎(スラブ研)「ソ連と東欧: 共産国における大国・小国関係」(公開講演)

72.11-74.2　伊東孝之「ポーランドにおける現代史研究の近況」; 佐藤正人「ミールに関するマルクスおよびエンゲルスの見解について」; 竹田正直「ロシア教員組合運動史(1905-1907)」; 山内靖子「『革命ロシア』に見られるエス・エル党の思想的特質: 土地の社会化を中心として(1900-1906)」; 松田潤「ラヴロフの『哲学書簡』における実証主義」; 内藤操「"ナロート"について: 言葉の実感から」; 神田明典(レニングラード大)「ロシア史を学んで」; 藤家壮一「外国人にとってのロシア語のむづかしさ: ロシア語否定他動詞の補語: 対格か生格か?」; 中村健之介「夢想家

小見: ドストエフスキーの初期作品」; 伊東孝之「ローザ・ルクセンブルグのロシア観」; 灰谷慶三「ビェチェスラフ・イワーノフの"ディアード論"について」; 外川継男「カナダにおけるスラブ研究」; 日南田静真「19世紀末のミールに関する文献上の一問題」

73.03 左近毅(群馬高専)「最近のソ連におけるバクーニン研究: ピルーモヴァの紹介」

73.04 Jerzy Silizinski(ポーランド科学アカデミー・スラブ研)「比較文学の方法論の諸問題」

73.07 木戸蓊(神戸大)「ユーゴスラビアの社会主義」(公開講演); 平井友義(大阪市大)「コミンテルンとソ連外交: 分化と統合」(公開講演)

74.03~75.05 小平武「ブロークの『薔薇と十字架』について」; 花田圭介「管見ブルガリア」; 富岡庄一「19世紀ロシア工業化における外国企業の役割: G.P. Mackey, *Pioneers for Profit*の紹介を中心に」; 栗生沢猛夫「イワン4世: クールプスキィ公往復書簡について: 最近の論争を中心として」; 松本忠司「ゴーリキーの書簡について」; 出かず子「1974年夏: ロシア文学の旅」; 伊東孝之「1974年初秋: ソ連・東欧の旅」; 城田俊「チェコの印象」; 望月喜市「ソ連経済の最近の状況」; 工藤正広「パステルナークの第二の恋」; 所伸一「二月革命と教員組合運動」

74.07 斉藤孝(学習院大)「最近の中ソ関係公開講演」; 南塚信吾「ハンガリー留学から帰って」(公開講演)

74.09 Franco Venturi(トリノ大)「ロシア革命思想史の諸問題」

74.10 Vig Rudolf(ハンガリー国立科学アカデミー・音楽研)「ソ連・東欧におけるジプシーの生活と音楽」

75.06~76.03 原暉之「ユダヤ人とロシア人社会」; 渡辺雅司「チェルニシェフスキーのアジア観と共同体論の関係について」; 南塚信吾第一次世界大戦前の東欧をめぐる資本輸出入関係: バルカンを中心に」; 山田吉二郎ブロークを語る: 形とテーマ」; 中村健之介ドストエフスキーの感覚と自覚」; 内藤操フォリクロールの定義」; 左近毅ロシア革命とアナキズム」; 西山克典1917年2月~10月期の工場労働委員会運動について」; 木村浩ロシアの美的世界: 画家ワシリエフのこと

75.07 江口朴郎「フランス革命とロシア革命」; 木村彰一「プーシキン雑感」

76.03 木村浩「『収容所群島』について」(公開講演); 菊地昌典「中ソ対立をめぐって: その理論的考察」; 菊地昌典「ソ連反対制知識人の思想的考察」(公開講演)

76.05~77.07 松井俊和「プーシキンの『ボリス・ゴドゥノフ』に描かれた現状について」; 岩崎俊夫「国民経済バランスの方法と課題: 部門連関バランスを中心に」; 森田稔「プロコーフィエフとソビエト音楽」; 有馬達郎「農奴制ロシアの製鉄業と世界市場の動向」; 三矢哲夫、外川継男「最近のポーランド: 都市と農村」; 辻村明「ソ連社会の社会学的研究の意義」; 栗生沢猛夫「ロシアの古都をめぐって」; 太田一男「最近のユーゴスラヴィア情勢: 留学からかえって」; 辻村明「政策転換の正当化の論理について: 独ソ不可侵条約をめぐって」; 丸毛忍「現代ソ連の農業問題」; 三宅正樹「ソ連・西独モスクワ条約(1970年8月12日)の成立過程」; 直野敦「ルーマニア文学と農民問題」; 丸山直起「ソ連の中東政策: ソ連=イスラエル関係」; 勝田吉太郎「マルクス主義と宗教: ソ連の宗教政策を中心に」; 金井晃一「東欧の農業協同組合」; J. Stephan「ハワイ大ロシア・ファシスト運動について」

76.10 R. Kanet「最近のアメリカにおけるソ連・東欧研究」(特別研究会)

76.11 J. Billington「ソ連社会の三つの局面」(特別研究会)

77.02 T. Brend「ブダペスト経済大東欧における産業革命と近代化の諸問題」

77.06　A. Wakicki (ポーランド科学アカデミー・哲学・社会学研)「ロシア・スラブ主義者の哲学的、社会的思想」; A. Wakicki (ポーランド科学アカデミー・哲学・社会学研)「比較的にみたポーランドのローマン的メシアニズム」

77.07　細谷千博 (一橋大)「ソ連・フィンランド関係」

77.10～78.07　方波見雅夫「ソ連の医療制度」; 中村健之介「ストラーホフとドストエフスキー」; 松田潤「わが国におけるソ連・東欧研究者の歴史と現状: アンケートの分析」; 中村健之介「ニコライ大主教之日本観紹介」; 内藤操「ロシアのブイト (Byt) と私の語学」; 栗生沢猛夫「外川継男著『ロシアとソ連邦』について」; 矢田俊隆「鳥山成人著『ビザンツと東方世界』について」; 斉藤稔「東欧経済改革の現段階」

78.03　Keith Scott (サスカチュアン大)「ジュンガール人と初期の清・露関係」

78.04　H. Beck (ミュンヘン大)「ビザンツ帝国の国制」

78.04　R. Smith (バーミンガム大)「19世紀ロシアにおける食べ物と飲みもの」

78.06　A. Garlicki (ワルシャワ大)「ピウソツキの東方政策」

79.09　伊東孝之 (スラブ研)「ソ連留学から帰って」(談話会)

79.10　伊東孝之 (スラブ研)「コーカサスと沿バルト地方の旅」(北海道スラブ研究会)

79.10　木村汎 (スラブ研)「サハリン・ヤクーツク・ハバロフスク旅行報告」(談話会)

79.11　出かず子 (スラブ研)「トゥルゲーネフの領地スパースコエ」(談話会)

79.11　小川和男 (ソ連東欧貿易会)「シベリア開発と最近の日ソ経済関係」(社会主義経済研究会)

79.11　Albert Boiter (外国人研究員) "Samizdat"; "The Dissident Groups in USSR" (セミナー)

79.11　小川和男 (ソ連東欧貿易会)「ソ連・東欧の燃料・エネルギー動向」(北海道スラブ研究会)

79.12　Paul Horecky (外国人研究員)「スラブ中欧部米国におけるスラブ研究」(北海道スラブ研究会)

79.12　岩田昌征 (スラブ研)「ユーゴスラビア社会主義の一断面」(談話会)

79.12　宮坂純一「社会主義競争の理論と現実」(社会主義経済研究会)

80.02　望月喜市 (スラブ研)「ソ連経済の光と影: その統計的分析」(談話会)

80.02　佐藤経明「中ソの経済体制の比較分析」(北海道スラブ研究会)

80.04.14　外川継男 (スラブ研)「アメリカ再訪: 最近のアメリカのスラブ研究」(談話会)

80.05.12　伊東孝之 (スラブ研) "Dialogue in Moscow: On a Talk in the Soviet Academy of Sciences" (談話会)

80.05.26　井上紘一 (北大文学部)「ブロニスワフ・ピウスツキ: サハリン時代を中心として」(北海道スラブ研究会)

80.06.13　Andrzej Garlicki ()「社会意識調査の資料としての歴史的記念日」(ポーランド語使用) (特別研究会)

80.06.16　木村汎 (スラブ研) "Sovietology in Japan and in the States: An Intuitive Comparison" (談話会)

80.06.30　渡辺雅司 (札幌大)「ナロードニキと自由民権運動」(北海道スラブ研究会)

80.09.24　Andrzej Garlicki (外国人研究員)、伊東孝之 (スラブ研)「ポーランドの現況」

80.09.29　山田吉二郎 (北大文学部)「ロシア語新旧文体論争」(北海道スラブ研究会)

80.10.06　灰谷慶三 (北大文学部)「ポーランドから帰って」(談話会)

80.10.19　伊東孝之 (スラブ研)、Andrzej Garlicki (外国人研究員)「現代社会主義の諸問題: ポーランドを中心とする東欧とソ連」(講演会・北海学園大)

80.10.27 中村健之介 (北大文学部)「ロシアの聖書について」(北海道スラブ研究会)

80.11 Jean Bonamour (パリ第四大) "Русская парижская журнаристика" (談話会)

80.11 菊地俊彦 (北大文学部)「ツァー・ロシアの膨張と中国: 最近の中国文献から」(北海道スラブ研究会)

80.12 稲掛久雄「"人民の意志"グループ (1891-1896)をめぐって」(北海道スラブ研究会)

80.12 エドバルド・ヤーン (西独・フランクフルト大)「ドイツにおけるソビエト研究」(北海道スラブ研究会)

80.12 出かず子 (スラブ研)「トゥルゲーネフ最後の愛」(談話会)

81.02 岩田昌征 (スラブ研)「集権制社会主義の難問」(談話会)

81.02 御園生真 (北大経済学部)「19世紀前半のベーメン (チェコ) 綿紡績業における機械大工業の成立」(北海道スラブ研究会)

81.03 Andrzej Garlicki (外国人研究員)「ポーランドにおける現代史研究の諸問題」(談話会)

81.03 WladislawKrasnow (外国人研究員) "Принципы советской внешней поритики сограстно проф. Паипсу" (談話会)

81.03 戴有振 (中国社会科学院・世界経済研究会)「中国の経済政策」(北海道スラブ研究会)

81.05.11 望月喜市 (スラブ研)「ソ連社会をどう考えるか: ソ連から帰って」(談話会)

81.05.19 Janusz Beksiak (外国人研究員)「ワルシャワ中央計画統計大社会主義の経済システムの変遷と経済成果の相互関係について」(英語使用)ゼミナール (毎火曜日)

81.05.25 ドナルド・ザゴリア (米・ハンター大)「ソ連の北東アジア政策」(英語使用) (北海道スラブ研究会)

81.06.15 James Gibson (外国人研究員) "The Sale of America to the United States: A Re-examination" (談話会)

81.06.23 E.M. アガバビャン (モスクワ大・科学アカデミー・経済研)「ソ連の第11次5ヶ年計画とシベリア開発」(特別研究会)

81.06.29 吉野悦雄 (北大経済学部)「ポーランド滞在4年記」(北海道スラブ研究会)

81.07.28 Gregory Grossman (カリフォルニア大・バークレー分校)「ソ連の第二経済」(特別研究会); Joan Grossman (カリフォルニア大・バークレー分校)「1905年革命のロシア・シンボリズムに与えた影響: ヴァレリィ・ブリューソフの場合」(特別研究会)

81.09.21 外川継男 (スラブ研)「ジョージ・レンセン: 人・業績・コレクション」(談話会)

81.09.22 TiborErdos (ハンガリー科学アカデミー)「最近のハンガリーの経済発展の主要問題と将来の経済成長の見通し」(特別セミナー)

81.09.28 秋野豊 (北大法学部)「第二戦線問題の起源」(北海道スラブ研究会)

81.10.05 ジョルジュ・ニヴァ (ジュネーブ大)「ロシア・シムボリズムについて」(特別研究会)

81.10.12 木村汎 (スラブ研)「80年代におけるソ連の選択」(談話会)

81.10.26 千葉恵美子 (北大法学部)「レニングラード大管見」(北海道スラブ研究会)

81.11.09 伊東孝之 (スラブ研)「ポーランドにおけるノーメンクラトゥーラ論争」(談話会)

81.12.14 岩田昌征 (スラブ研)、望月喜市 (同)「アメリカみたまま: ソ連・東欧研究者を訪ねて」(談話会)

81.12.21 伊藤知義 (北大法学部)「事故被害者の所得保障: ソ連の場合」(北海道スラブ研究会)

82.02.15 千野栄一 (東京外大)「古代スラブ語研究の過去と現在」(特別研究会)

82.02.22 工藤正広(北大文学部)「折口信夫とロシア: 小説『口ぶえ』を中心として」(北海道スラブ研究会)

82.04.12 オスカー・アンワイラー(ルール大・世界ソ連・東欧学会)「"新しい人間"の概念: ソビエトの教育の理論と実際」(英語使用)(特別研究会)

82.04.19 W.ブルス(オックスフォード大)「1980年代に向かう東欧経済」(英語使用)(特別研究会・経済学部と共催)

82.04.26 栗生沢猛夫(小樽商大)「モスクワ・ワルシャワ見聞記: モスクワ1980.10-1981.7、ワルシャワ1981.8-1982.3」(北海道スラブ研究会)

82.05.14 パトリシア・グリムステッド(ハーバード大・カリフォルニア大)「ソ連の文書館・資料館: その現状と西側研究者の受入れ」(英語使用)(特別研究会)

82.05.17 出かず子(スラブ研)「『リゴフスカーヤ公爵夫人』: レールモントフにおけるロマン成立の一断面」(談話会)

82.05.20 ロバート・ベデスキ(カナダ・カールトン大)「中ソ関係と中ソ対立」(英語使用)(特別研究会)

82.05.31 山田吉二郎(北大文学部)「エカテリーナII世時代のペテルブルグ: 『ペテルブルグ百般』」(北海道スラブ研究会)

82.06.07 V・ヴァルディス(オクラホマ大)「ソ連と東欧の民族問題: 比較的検討」(英語使用)(特別研究会)

82.06.17 エレーヌ・ダンコース(パリ大)「ソ連の民族問題」(英語使用)(特別研究会)

82.06.21 木村汎(スラブ研)「ソ連=東南アジア関係」(談話会)

82.06.28 小平武(北大言語文化部)「志賀直哉とロシア文学」(北海道スラブ研究会)

82.09.04 H.Skilling(トロント大)「二つの中断された革命: チェコスロバキア1968年とポーランド1980-81年」(特別研究会)

82.09.06 Boris Meissner(ケルン大)「今日のソ連: 政治、経済、社会」(特別研究会)

82.09.09 Norman Davies(外国人研究員)「ポーランド史の視点からみた"連帯"の運動」(公開講演会)

82.09.09 H.Skilling(トロント大)「サミズダート: 共産主義諸国における表現の自由」(公開講演会)

82.09.22 ズデニェク・ムリナーシュ(オーストリア・国際関係大)「"プラハの春"とポーランド"連帯"の15ヵ月」(特別研究会)

82.09.25 マリア・コジェニェーヴィ(ポーランド・ヤギェロニア大)「ロマン主義: ポーランドの視点」(特別研究会)

82.09.27 藤家壮一(北大言語文化部)「ロシアの外国人: ペンケンドルフの場合」(北海道スラブ研究会)

82.10.13 James Scanlan(オハイオ州大)「ソ連におけるマルクス主義哲学の運命」(特別研究会)

82.10.18 城田俊(北大言語文化部)「ロシア語の名詞変化: полымяの綴り字の改正」(北海道スラブ研究会)

82.10.25 松井俊和(北大文学部)「『ゴリューヒノ村史話』について」(北海道スラブ研究会)

82.11.05 Christer Jonsson(スウェーデン・ルンド大)「ソ連外交の交渉様式」(特別研究会)

82.11.19 アレクサンダー・アレクシ(米国・ランド・コーポレーション)「ポーランド問題の軍事的側面」(特別研究会)

82.11.29 早坂真理(北大文学部)「現代ポーランド史学における社会の周縁性研究」(特別研究会)

82.12.13　北川誠一(北大文学部)「ザカフカーズにおける民族史編纂の諸問題」(北海道スラブ研究会)
82.12.20　匹田軍次(札幌大外国語学部)「モスクワの日本人)(北海道スラブ研究会)
83.02.02　アンダース・フォーゲルク(スウェーデン・ウプサラ大)「アンドロポフの政権獲得とソビエト政治制度」(特別研究会)
83.02.20　出かず子(スラブ研)「管見ロシア文学」(談話会)
83.03.10　アレクサンドル・ネクリッヒ(外国人研究員)「ハーバード大学ロシア研究所のロシア研究組織について」(特別研究会)
83.03.25　久保庭真彰(一橋大)「計画理論の一側面」(特別研究会)
83.03.31　S.ウリヤニチェフ(ソ連科学アカデミー・世界経済・国際関係研)「技術進歩と経済効率」(特別研究会)
83.04.12　ウォルター・クレメンス(ボストン大)「援助と自助との間のバランス」(特別研究会)
83.04.20　ペーター・シャイバート(マールブルグ大)「ロシア革命の社会史」(英語使用)(特別研究会)
83.05.09　外川継男(スラブ研)「日本におけるロシア・スラブ研究」(英語使用)(談話会)
83.05.30　中村健之介(北大言語文化部)「ドストエフスキーと"墓の中のキリスト"」(北海道スラブ研究会)
83.06.06　ハーバート・レヴィン(ペンシルヴァニア大)「ソビエトにおける企業家活動の存在とその性質」(特別研究会)
83.06.13　伊東孝之(スラブ研)「ポーランドにおける水平構造運動: 党内民主化運動の一側面」(談話会)
83.07.02　W.ヴェアビッツ(北大言語文化部)「E.H.カーのボリシェヴィキ革命論批判」(露語使用)(北海道スラブ研究会)
83.09.20　Nissan Oren(ヘブライ大)「東欧におけるソビエト影響圏の確立」(英語使用)(特別研究会)
83.09.26　エドワード・カシネッツ(カリフォルニア大)「西側のスラブ関係蔵書: 一書誌学者の見解」(英語使用)(特別研究会)
83.10.17　望月喜市(スラブ研)「アンドロポフ政権の経済政策」(談話会)
83.10.31　高岡健次郎(札幌商大)「近年におけるソ連のエスエル研究」(北海道スラブ研究会)
83.11.14　長谷川毅(スラブ研)「アメリカにおけるソ連研究」(談話会)
83.11.30　鳥山成人(北大文学部)「ピョートルI世について」(北海道スラブ研究会)
83.12.19　岩田昌征(スラブ研)「ユーゴスラビア社会主義の諸困難」(談話会)
84.02.06　Aleksei Shevyakov(ソ連科学アカデミー・中央数理経済研)「福祉の分析・予測モデルシステムの作成問題」(英語使用)(特別研究会)
84.02.07　Aleksei Shevyakov(ソ連科学アカデミー・中央数理経済研)「計量経済学者の見たソ連の経済改革の展望」(ロシア語使用)(特別研究会)
84.02.13　福岡星児(北大文学部)「シェフチェンコの詩について」(北海道スラブ研究会)
84.03.26　マーク・フィールド(ボストン大)「ソ連における幼児死亡率の増大とその意味」(特別研究会)
84.06.04　所伸一(北大教育学部)「現代のソ連の教育改革」(北海道スラブ研究会)
84.06.25　マリヤ・クリヴォンキナ(札幌大)「ソ連の教育: 中等教育の改革について」(北海道スラブ研究会)

84.07.18 Leslie Dienes (外国人研究員) "Siberia in the Soviet Economy: Regional Strategy, Diversity, and Prospects" (公開講演会)

84.07.18 Samuel Baron (外国人研究員) "Plekhanov, International Socialism, and the Revolution of 1905" (公開講演会)

84.08.28 Karl-Eugen Wädekin (ジャスタス=リービッヒ大・ヨーロッパ農業研)「ソ連農業の現状と展望」(特別研究会)

84.09.14 L. ベッシー (ハワイ"日本フォーラム"事務局長)、ドナルド・ヘルマン (ワシントン大)「アジア・太平洋時代とソ連」(特別研究会)

84.09.20 ルドルフ・トーケシュ (コネティカット大)「ソ連と東欧諸国の相互関係の現状」(特別研究会)

84.10.18 アレクサンダー・ジョージ (スタンフォード大)「最近の米ソ関係と危機管理」(特別研究会)

84.11.19 外川継男 (スラブ研)「最近のポーランド」(談話会)

84.12.03 西山克典 (北大文学部)「ロシア革命と地方ソビエト権力: "一党制"政治システムの形成によせて」(北海道スラブ研究会)

84.12.10 木村汎 (スラブ研)「"大祖国戦争"におけるスターリンの誤算: 情報と予測」(談話会)

85.01.11 デーヴィッド・フーサン (カリフォルニア大バークレー分校)「ロシア・ソ連の地理学思想における自然観と社会観」(特別研究会)

85.01.16 宮内邦子 (防衛研)「ソ連軍事理論の変遷」(北海道スラブ研究会)

85.01.22 Samuel Baron (外国人研究員)「16-17世紀ロシアにおける企業家と企業家精神」(セミナー)

85.01.25 宮鍋幟 (一橋大)「ソ連の経済改革実験」(北海道スラブ研究会)

85.02.25 藤田勇 (東大)「ソ連における自由権思想の史的展開」(北海道スラブ研究会)

85.03.04 ウラジーミル・トレムル (米・デューク大)「ソ連社会と経済: 漫画誌『クロコジール』を通して見る」(特別研究会)

85.03.08 中井和夫 (立教大)「ウクライナ史におけるシェフチェンコ」(北海道スラブ研究会)

85.03.11 家田修 (東大)「19世紀末ハンガリーの農業政策」(北海道スラブ研究会)

85.03.18 カール・リンデン (ジョージワシントン大)「転換期のソ連政治」(特別研究会)

85.03.18 中山研一 (大阪市大)「ポーランド刑事法の改革提案: 改革の試みと挫折」(北海道スラブ研究会)

85.03.22 横手慎二 (中央大)「戦間期ソ連の対外政策決定過程: 外務人民委員部を中心として」(北海道スラブ研究会)

85.04.22 岡部匠一 (金沢大)「ロシアにおけるシェークスピア」(北海道スラブ研究会)

85.05.13 外川継男 (スラブ研)「高田屋嘉兵衛とゴロヴニン」(準公開講座)

85.05.20 長谷川毅 (スラブ研)「スターリンとブハーリン」(準公開講座)

85.05.27 中村健之介 (北大言語文化部)「ニコライとドストエフスキー」(準公開講座)

85.06.03 秋月俊幸 (北大附属図書館北方資料室)「プチャーチンと川路聖謨」(準公開講座)

85.06.06 V. Chichkanov (ソ連極東経済研究会)「ソ連極東部及びバム沿線の経済発展の展望」(特別研究会)

85.06.10 灰谷慶三 (北大文学部)「ゴーゴリ」(準公開講座)

85.06.14 長谷川毅 (スラブ研)「ソ連における兵器調達の政治学」(北大政治学研究会)

85.06.17 竹田正直 (北大教育学部)「マカーレンコ」(準公開講座)

85.06.21 ジョン・クルチツキ(イリノイ大)「ポーランド史における教会、国家、民族」(特別研究会)
85.06.24 伊東孝之(スラブ研)「レーニンとローザ・ルクセンブルク」(準公開講座)
85.07.01 木村汎(スラブ研)「ゴルバチョフ」(準公開講座)
85.07.05 伊東孝之(スラブ研)「ユーロミサイルの陰で: 転換期の東欧安全保障システム」(北大政治学研究会)
85.07.15 Herbert Ellison(米国・ケナン研)「アメリカにおけるソ連研究」(特別研究会)
85.09.20 Zbigniew Pelczynski(オックスフォード大)「連帯とポーランドにおける市民社会の再生」(特別研究会)
85.09.30 Peter Knirsch(ベルリン自由大)「ゴルバチョフ政権下の経済政策の見通し」(特別研究会)
85.10.07 Boris Meissner(ケルン大)「ソ連の外交政策: アンドロポフからゴルバチョフへ」(特別研究会)
85.10.14 望月哲男(東大)「欧米におけるドストエフスキー研究の最近の動向」
85.10.21 亀山郁夫(天理大)「水の迷宮、混血の都市: フレーブニコフにおける詩のトポス」
85.10.21 Jean Lanne(外国人研究員)「お伽話から未来主義へ: フレーブニコフの哲学と作品(フレーブニコフの論文『お伽話研究の効用について』と関連して)」
85.11.18 Gordon Smith(外国人研究員)「日ソ貿易の最近の傾向」
85.11.25 Peter Berton(南カリフォルニア大)「アメリカのソ連研究の幾つかの特徴」
85.12.02 田畑伸一郎(一橋大)「ソ連経済改革の現状: 工業の経済実験を中心に」
85.12.05 Jean Lanne(外国人研究員)"Хлебников и язык"(ロシア文学談話会)
85.12.08 木戸蓊(神戸大)「一東欧研究者のソ連論: ゴルバチョフ時代の展望を含む」
86.01.13 伊藤知義(北大法学部)、牛山敬二(北大経済学部)、吉野悦雄(北大経済学部)「ユーゴスラビアの農村調査」
86.01.23 Yakov Zinverg(北大言語文化部)"Перевод «хаику» и выражительная возможность русской стихотворной речи"(ロシア文学談話会)
86.01.27 Gilbert Rozman(プリンストン大)「ソ連人の中国観」
86.02.06 山田吉二郎(北大言語文化部)"Две утопии в русской литературе конца 19 века"(ロシア文学談話会)
86.02.17 伊藤知義(北大法学部)「ユーゴスラビアの私的経営について」
86.02.24 Georgii Kynadze(駐日ソ連大使館)「ゴルバチョフ政権の外交政策: 80年代後半の展望を含む」
86.02.27 Jean Lanne(外国人研究員)"Б. Лившиц «Поэта Гилеи»"(ロシア文学談話会)
86.03.06 Anne Sloan(ニューヨーク州大)「米ソの戦略的諸関係」
86.03.10 佐々木照央(埼玉大)「ある自由主義ナロードニキの日本観: 日清・日露戦争をめぐって」
86.03.12 佐々木照夫(埼玉大)"Звуки и метафоры в «Медном всаднике» Пушкина"(ロシア文学談話会)
86.03.17 佐藤経明(横浜市大)「ソ連・東欧・中国の経済改革の理論的交通整理: 党大会後のソ連の改革の方向と関連して」
86.03.17 吉野悦雄(北大経済学部)「社会主義経済の集権・分権二分論の限界」
86.03.20 Wolf Mendl(ロンドン大)「米ソ狭間の日欧安全保障問題」
86.03.25 Peter Reddaway(ロンドン大・米国ケナン研)「ゴルバチョフとソ連共産党第27回大会」

86.06.02 柳光青 (上海国際問題研)「中国におけるソ連研究」
86.06.23 伊東孝之 (スラブ研)「"連帯"後のポーランド」
86.07.26 石川晃弘 (中央大)「東欧の労使関係」
86.10.06 山本茂 (埼玉大)「ポーランドの地域開発政策」
86.10.13 Max Schmidt (東独・国際政治経済研)「東欧から見たゴルバチョフ政権の評価と期待」
86.10.24 Helmut Wagner (ベルリン自由大)「"東方政策"の盛衰: 西独の経験とデタント」
86.10.29 Pushpa Thambipillai (ハワイ東西センター)「東南アジアにおけるソ連研究」
86.11.04 Vladimir Shlapentokh (ミシガン州大)「ソ連における最近の世論動向」
86.11.17 Andrei Kokoshin (ソ連科学アカデミー・アメリカ=カナダ研)「国際安全保障における現代ソ連の概念」
86.11.18 Alan Kimball (外国人研究員)「ゲルツェンについて」(ロシア語談話会)
86.11.25 陸南泉 (外国人研究員)「中国におけるソ連・東欧問題の研究状況」
86.12 Zhdanov (札幌大)「現代ソビエト文学について」(ロシア語談話会)
86.12.08 陸南泉 (外国人研究員)「中国の経済改革」
87.01 Yakov Zinverg (北大言語文化部)「俳句のロシア語訳について」(ロシア語談話会)
87.01.19 Lidiya Gromkovskaya (ソ連・東洋学研)「ソ連文学の最近の状況について」
87.01.29 藤本和貴夫 (阪大)「日ソ基本条約締結 (1925) に至る日ソ交渉史の諸問題」
87.01.29 今井義夫 (工学院大)「19世紀ロシアの協同組合運動とその思想」
87.02 山田吉二郎 (北大言語文化部)「トルストイの主人公における迷いと悟り」(ロシア語談話会)
87.02.02 Bilveer Singh (シンガポール国立大)「ソ連の対東南アジア政策」
87.02.16 Alan Kimball (外国人研究員) "The Collapse of the Revolution and the Formation of 'Land and Liberty', 1892"
87.03.03 外川継男 (スラブ研)「岩倉使節団とロシアをめぐって」
87.03.09 Holland Hunter (ハーバード大) "Analyzing the Structure of Soviet Growth: 1928-1940"
87.05.18 城田俊 (北大言語文化部)「モスクワ留学記」(昼食談話会)
87.06.08 Nissan Oren (ヘブライ大)「帝国の代価」
87.06.08 小森田秋夫 (北大法学部)「ペレストロイカとソ連の司法」(昼食談話会)
87.06.10 Seth Singleton (米国・パシフィック大)「ソ連の対アフリカ政策」
87.06.18 Leonid Evenko (外国人研究員)「今日のソ連社会」(ロシア語談話会)
87.06.22 秋月俊幸 (北大附属図書館資料室)「江戸時代における日本人のロシア観」(昼食談話会)
87.07.06 原暉之 (スラブ研)「現代ソ連の歴史学とスターリン批判の行方」(昼食談話会)
87.09.07 工藤孝史 (駒沢大)「ウラジーミル・ソロヴィヨフの初期哲学思想」
87.09.25 Roger Pethybridge (英国・スワンシー大)「初期ソ連史研究の諸問題」
87.10.01 Armin Bohnet (西独・ギーセン大)「ソ連経済改革の背景と可能性」
87.10.05 Karl Wädekin (西独・ギーセン大)「ゴルバチョフ改革とソ連農業」
87.10.26 Aleksei Shevyakov (外国人研究員)「ソ連の厚生経済の今日的諸問題」
87.11.11 汪暁京 (北京師範大)「中国におけるソ連文学研究について」
87.11.24 James Scanlan (外国人研究員)「ソ連哲学の新潮流」(ロシア語談話会)
87.11.30 Walter Joyce (グラスゴー大)「ソ連のシベリア・極東開発戦略」
87.11.30 Joseph Berliner (ハーバード大)「ソ連の経済改革と技術進歩」

87.12.04 Ernst Kux (西独・ノイエチューリッヒ・ツァイトゥング)「ゴルバチョフの挑戦とその制約」

87.12.07 山田吉二郎 (北大言語文化部)「文学史か文壇史か: ロシア文学研究方法卑見」

87.12.14 Vladimir Khlynov (ソ連科学アカデミー・世界経済・国際関係研)「日ソ関係の現状と将来」

87.12.15 Aleksei Shevyakov (外国人研究員)「ソ連インテリゲンツィアのペレストロイカ観」(ロシア語談話会)

88.01.11 荒井信雄 (北海道地域総合研)「ブレジネフ末期のモスクワ留学印象記」(昼食談話会)

88.01.18 Michael MccGwire (米国・ブルッキングス研)「ソ連の安全保障における新思考」

88.01.21 Yakov Zinverg (北大言語文化部)「俳句のロシア語訳について」(ロシア語談話会)

88.01.28 Gaye Christoffersen (ハワイ東西センター)「東北中国の経済改革: 開放政策の国内要因」

88.01.28 Oleg Vikhanskiy (モスクワ大)「経済管理のペレストロイカの諸問題」

88.02.08 Sergey Kotsuba (ソ連科学アカデミー・世界経済・国際関係研)「私の考えるソ連の経済改革について」

88.02.15 所伸一 (北大教育学部)「ソ連教育のペレストロイカの現段階」

88.02.29 Peter Berton (南カリフォルニア大)「北東アジアにおける勢力バランスとソ連: モデルと分析」

88.03.03 Sergey Kotsuba (ソ連科学アカデミー・世界経済・国際関係研)「アジア太平洋地方における国際分業とソ連の役割: 現状と見通し」

88.04.04 Michel Tatu (仏・ルモンド社)「ゴルバチョフのペレストロイカ」

88.04.18 松田潤 (スラブ研)「わが国のスラブ研究者の現状とその特徴: ソ連東欧研究者名簿第3版から見て」(北海道スラブ研究会)

88.05.17 Henry Huttenbach (ニューヨーク・シティ・カレッジ)「グラスノスチとソ連の民族問題」

88.06.20 Tat'yana Vostrtsova (モスクワ大・札幌大)「ソ連の普通教育のペレストロイカ: 最近の状況」

88.07.12 Brunon Holyst (ポーランド科学アカデミー・犯罪問題研)「ポーランドにおける麻薬中毒の予防と駆除策の効果性」

88.09.26 Franz Tinnefeld (ミュンヘン大)「14世紀ビザンツ・ロシア間の政治と教会関係」

88.10.17 Laszo Samuely (ハンガリー科学アカデミー・経済研)「ソ連東欧諸国の経済改革:ネップ研究の視角から」

88.10.24 中村健之介 (北大言語文化部)「ペレストロイカ聞き書き: ニコライ日記のことども」

88.11.07 Samuel Baron (ノースカロライナ大)「昔のロシアのイメージ」

88.11.08 Vukasin Pavlovic (ベオグラード大)「社会主義の構造改革と平和の新しい概念」

88.11.28 栗生沢猛夫 (北大文学部)「ロシアのキリスト教化1000年」

88.12.12 森田憲 (小樽商大)「経済摩擦と東西関係」

89.01.23 Victor Mote (外国人研究員)「勝利への道: ゴルバチョフのもとでのソ連共産党の政治における地縁的関係」

89.02.13 Aleksei Shevyakov (ソ連科学アカデミー・数理経済研)「マクロ経済におけるペレストロイカ」

89.02.22 George Gibian (コーネル大)「ロシア文学における国民的アイデンティティー」(北大文学部と共催)

89.03.13 Andrew Durkin (外国人研究員)「小説『わが生活』とチェーホフの人生: 文学と伝記」

89.03.31 中山弘正 (明治学院大)「ペレストロイカのもとでのソ連経済」

89.04.17 望月哲男 (スラブ研)「ソ連滞在の印象から」

89.05.15 Vladimir Khoros (ソ連科学アカデミー・世界経済・国際関係研)「ロシア史のオールタナティヴ」

89.05.17 James Scanlan (オハイオ州大)「ソ連における市民社会と法改革」

89.06.14 徳永彰作 (札幌大)「ユーゴスラビア自主管理の対応」

89.09.13 銭育才 (北京師範大)「文学書翻訳中の若干の問題」

89.10.02 M.Turski (ポーランド『ポリティカ』誌論説委員)「ポーランドの選択」

89.10.03 Jerzy Tomaszewski (外国人研究員)「ソ連の民族問題: リトアニア、ベロルシア、ウクライナを中心として」(ソ連東欧現代史セミナー)

89.10.19 V.Kuleshov (モスクワ大)「ソ連の文学研究とペレストロイカ」

89.10.23 Y.Afanas'ev (ソ連・歴史文書大)「ペレストロイカとその障害」

89.10.23 E.Bagramov (ソ連・マルクス・レーニン主義研)「ソ連邦における諸民族間の政治社会問題」

89.10.26-27 袴田茂樹 (青学大)「ペレストロイカの現段階: 深刻化する経済状況と民族問題」; 木村汎 (スラブ研)「領土問題をつうじてみる最近ソ連の動向」(スラブ研究懇談会、HITと共催)

89.11.14 Jerzy Tomaszewski (外国人研究員)「ポーランドにおける経済発展: 連続性と革命」(ソ連東欧現代史セミナー)

89.11.20 Aleksander Gieysztor (ワルシャワ大)「古代スラブ人における異教信仰: インド・ヨーロッパ的コンテクストにおいて」

89.11.20 Jerzy Tomaszewski (外国人研究員)「ポーランドの経済発展戦略」

89.12.01 Tibor Erdos (ハンガリー科学アカデミー・経済研)「ヨーロッパ共同の家の視点からみたコメコン経済の現状」

89.12.04 徳永彰作 (札幌大)、Tibor Erdos (ハンガリー科学アカデミー・経済研)、Jerzy Tomaszewski (外国人研究員)、Detlef Brandes (外国人研究員)、伊東孝之 (スラブ研)「東欧はどこへ行くか?」(共同討議)

90.01.22 Jerzy Tomaszewski (外国人研究員)「ワルシャワ大チェコスロバキアにおける共産党の権力奪取: 1948年2月事件」

90.02.01 J. Pajestka (ポーランド科学アカデミー・経済研)「社会主義変革の失敗:理論的前提と歴史的経験」

90.03.19 Jerzy Tomaszewski (外国人研究員)「政治制度としてのクーデター:ブルガリア現代史から」

90.04.23 皆川修吾 (スラブ研)「ゴルバチョフ指導体制の蓋然性」

90.04.26 Andrei Belov (レニングラード大)「ソ連の自由経済移行の諸問題」

90.05.14 Antti Kuyala (ヘルシンキ大)「日露戦争におけるロシア革命諸政党内の結束強化の試み」

90.06.05 Robert Valliant (ハワイ大『SUPAR[アジア太平洋地域におけるソ連]』誌・編集長)「ソ連極東への旅から帰って」

90.06.12 戸田泰 (フロリダ大)「ソ連経済の現状」

90.06.25 Vladimir Raskovic (ベオグラード大)「ミックスト・エコノミーは機能するか」

90.06.29 Nicholas Daniloff (ニューヨーク大『U.S.News & World Report』誌元モスクワ特派員)「ソ連における人権問題」

90.07.02　Z. Kruszewski (テキサス大)「ソ連東欧におけるナショナリズムの伸長、民族のアイデンティティー、少数者の自覚」

90.07.05　荒井信雄 (北海道地域総合研)「ロシア共和国の主権宣言と今後の日ソ関係: 横路知事訪ソ同行記」

90.07.09　Aleksandar Petrov (外国人研究員)「ロシア地下文学: 詩を中心に」

90.07.13　伊東孝之 (スラブ研)「東欧の変動と東西関係」; 杉本侃「サハリン石油ソ連極東地域の資源開発と日ソ経済協力の展望」; 西村文夫 (静岡県大)「ペレストロイカと日ソ経済関係」(スラブ研究懇談会)

90.07.16　GeorgeYaney (外国人研究員)「スターリン主義について考える」

90.09.04　山田吉二郎 (北大文学部)「ラジーシチェフ『ペテルブルグからモスクワへの旅』を読む」; 安井亮平 (早大)「親露と排露: シャファレーヴィチを中心に」(研究会"ロシア的なるものを求めて")

90.11.09　A. Shatalin (ソ連科学アカデミー・中央数理経済研)、D. Kuzin (同)「ソ連経済の市場への移行をめぐる諸問題」

90.12.03　牛山敬二 (北大経済学部)、吉野悦雄 (同)、坂下明彦 (北大農学部)「ポーランドの農場から」

90.12.10　家田修 (スラブ研)「戦後におけるハンガリー人民民主主義の成立過程」

90.12.21　鵜野公郎 (慶応大)「マクロ経済の視点から」; 宮本勝浩 (大阪府大)「市場経済システム導入のソ連企業に与える影響」; 大津定美 (龍谷大)「労働・賃金・刺激の側面から」; E. コヴリーギン (外国人研究員)「ソ連極東における改革とアジア太平洋地域への接近の諸問題」(部門研究会)

91.01.10　木村汎 (スラブ研)「ゴルバチョフ訪日と北方領土問題」; 田畑伸一郎 (同)「日ソ経済関係の展望」; 長谷川毅 (スラブ研)「ペレストロイカとソ連軍」(ソ連・東欧フォーラム)

91.01.14　長谷川毅 (スラブ研)「社会主義体制からの移行: 政治的移行と経済的移行の相互関係」(昼食懇談会)

91.02.13　伊東孝之 (スラブ研)「東欧における正統性の獲得」(昼食懇談会)

91.02.27　田畑伸一郎 (スラブ研)「ソ連経済の現状: 1990年実績を中心に」(昼食懇談会)

91.03.25　西谷公明ほか (長銀・総合研)「ソ連の経済危機と西側諸国の対応」

91.04.22　伊東孝之 (スラブ研)、家田修 (同)、長谷川毅 (同)、望月喜市 (同)「最近のソ連東欧訪問記」(北海道スラブ研究会)

91.05.08　田畑伸一郎 (スラブ研)「価格引き上げと最近のソ連の経済政策」(昼食懇談会)

91.05.15　小川和男 (ロシア東欧経済研)「ソ連の対外経済政策と日ソ経済関係」; 吉田進 (日商岩井)「シベリア・極東の資源: ソ連の資源政策と経済浮遊」(部門研究会)

91.05.20　Andrei Belov (レニングラード大)「ソ連における市場経済移行の可能性と問題点」

91.05.30　坪井善明 (北大法学部)「ベトナム・ソ連関係私見」(昼食懇談会)

91.06.06　富森虔児 (北大ポーランド経済改革の現状と展望 (昼食懇談会)

91.08.06　Andrew Durkin (インディアナ大)「チェーホフの絵画観」

91.09.09　赤羽恒雄 (モントレー大)「1990年代の日中ソ関係: 経済を中心として」(昼食懇談会)

91.09.17　安井亮平 (早大)「ソ連サミズダートあれこれ」

91.09.26　浦井康男 (福井大)「パソコンによるロシア語文献処理の諸問題」

91.10.02　富森虔児 (北大経済学部)「激動のソ連経済: 市場経済化の現場を訪ねて」(昼食懇談会)

91.10.07　望月喜市(スラブ研)「最近のソ連極東経済」(昼食懇談会)
91.10.12　中沢敦夫(一橋大)「ロシア近代のユロージヴィのイメージ:『カラマーゾフの兄弟』をめぐって」(地域文化部門共同研究プロジェクト研究会)
91.10.28　F. Tomczak(ワルシャワ経済統計大)「最近のポーランド経済について」
91.11.11　伊東孝之(スラブ研)「ソ連科学アカデミーの運命」
91.12.09　皆川修吾(スラブ研)「最近のソ連における政治動向について」(昼食懇談会)
91.12.16　松里公孝(スラブ研)「革命前ロシアの地方行政と食糧問題」
92.01.30　望月喜市(スラブ研)「経済循環と軍民転換」; 田畑伸一郎(スラブ研)「旧ソ連の経済と過剰流動性問題」; A. ベロフ(サンクトペテルブルク大)「1991年のサハリン経済改革と経済実態」(部門研究会)
92.02.02　石井規衛(神戸大)「帝政パラダイムについて」; 松里公孝(スラブ研)「日本の近代ロシア史研究における歴史補助学」(部門研究会)
92.02.12　G. Bakos(ハンガリー経済研) "Free Trade Area in the East-Central Europe after COMECON"
92.02.26　Vyacheslau Rakicki(ベラルーシ芸術アカデミー)「ベラルーシ社会の諸問題」
92.03.10　大津定美(龍谷大)「ロシアの急進経済改革と失業問題」(部門研究会)
92.03.14　中北徹(東洋大)「対ソ経済協力をどう進めるか」; 鈴木康二(日本輸出銀行)「旧ソ連への投資と経済支援」; 杉本侃(日ソ経済委員会)「日露経済関係の新たな視点」; 広瀬佳一(山梨学院大)「中・東欧における地域間協力の動向」; 秋野豊(筑波大)「東欧・旧ソ連関係の新段階」; 小泉直美(日本国際問題研)「欧州安全保証システムと旧ソ連」(部門研究会)
92.03.16　安井亮平(早大)「現代ロシア・ナショナリズムの系譜」
92.03.16　浦雅春(東工大)「ポスト・ペレストロイカの文学」
92.04.13　伊東孝之(スラブ研)「科学アカデミーの危機その後: ロシアとポーランド」(昼食懇談会)
92.04.27　Csaba Mako(ハンガリー社会学研) "Economic Transition and Its Social Dimensions in Hungary"
92.05.11　家田修(スラブ研)「共産党文書の行方: ハンガリーを中心として」(北海道スラブ研究会)
92.05.29　松里公孝(スラブ研)「ロシアにおける学術活動の現状」(昼食懇談会)
92.06.08　D. Macey(ミドルベリー大) "Political Perception of Stolypin in Contemporary Russia"
92.06.09　P. Berton(南カリフォリニア大)「第一次世界大戦と日露同盟(1916年)」
92.06.24　長谷川毅(カリフォルニア大)「ソ連崩壊後の日ロ関係」
92.06.25　Alexander Tsipko(外国人研究員)「A.ツィプコ氏を囲んで」(政治座談会)
92.07.03　V.Kozhevnikov(ロシア科学アカデミー極東支部・歴史民族学研)「北方領土問題解決への道」(昼食懇談会)
92.07.06　V. Kozhevnikov(ロシア科学アカデミー極東支部・歴史民族学研)「日ロ関係最初の半年: 現状と発展の展望」
92.07.08　M. Goldman(ハーバード大ロシア研究センター) "What Went Wrong with Perestroika"
92.09.14　T. Foldi (Economic Information Acta OECONOMICA 編集長) "Problems of the Transformation of East-European Economies with a Special Regard to Hungary"
92.09.21　田畑伸一郎(スラブ研)、松里公孝(同)「最近のロシア事情」(昼食懇談会)
92.10.14　Geoffrey Jukes(外国人研究員)「G.ジュークス氏を囲んで」(座談会)

92.10.28 Viktor Belkin (モスクワ生産力と自然資源委員会"経済メカニズム"研究室)「軍事経済の市場経済化と二重通貨制度」

92.11.24 I. Pascu (ルーマニア政治・行政大) "Relations with Russia: The Romanian Experience" (昼食懇談会)

92.11.24 Alexander Tsipko (外国人研究員)「最近のロシア事情について」(昼食懇談会)

92.12.14 栗原成郎 (北大文学部)「熊と聖像: ロシアにおける"二重信仰"の一例」

93.01.08 山村理人 (スラブ研)「アルマアタ・キエフ・リガ・ロシア各地をまわって」(昼食懇談会)

93.01.25 Aleksei Shevyakov (ロシアアカデミー・中央数理経済研) "Russian Economic Reform: Its Problem and Perspective"

93.01.28 Stephen Kotkin (プリンストン大) "Birthpangs of Socialist Culture"; Yasuhiro Matsui (香川大) "Быт рабочей молодежи в годы НЕПа"(部門研究会)

93.03.12 I. Kozhevnikova「画家ブブノワと日本におけるロシア文化」

93.03.15 A. Rachwald (USナヴァルアカデミー)「旧ソ連・東欧諸国の安全保障問題」

93.03.18 John LeDonne (外国人研究員)「1700年から1917年にかけてのロシア外交の基本原則」

93.05.06 原暉之 (スラブ研)「ソーラク・サラコフ: 教会復興のモスクワ」(北海道スラブ研究会)

93.06.03 Steven Rosefielde (ノースカロライナ大) "Aiding Russia: Flight from Pragmatism"

93.06.14 Geoffrey Jukes (オーストラリア国立大) "Military Significance of the Northern Territories?"

92.06.18 Stephen Kotkin (プリンストン大) "The Causes and Consequences of the Miners Strikes in the Kuzbass, Siberia, from 1989 to 1991"

93.08.16 G. Shmelev (ロシア国際経済・政治研)「ロシアの農業改革の現状と展望」; N. Popov (ロシア農民経営協会)「ロシアの農民運動の発展と協同化」

93.10.19 E. Motrich (ロシア科学アカデミー極東支部・経済研)、A. Shkurkin (同)、B. Afonin (ロシア科学アカデミー極東支部・歴史民族学研)「極東の政治・経済・社会: 問題と展望」(特別研究会)

93.11.29 T. Rigby (オーストラリア国立大) "Yeltsin's Presidency and the Evolution of Representative and Responsible Government in Russia"; John Löwenhardt (外国人研究員) "General Elections in Russia"

93.12.03 V. Supian (ロシア科学アカデミー・アメリカ=カナダ研) "Problems of the Privatization in Russia" (特別研究会)

94.02.23 Sabrina Ramet (外国人研究員) "Back to the Future in Eastern Europe" (特別研究会)

94.03.17 西村文夫 (静岡県立大)「ユーラシアの融合集散: ロシアの近代外交; 小沢治子 (日本国際問題研)「ロシアの対外政策基本動向と東アジア政策」(部門研究会)

94.03.25 A. ダダシェフ (ロシア科学アカデミー)「ロシア連邦における地域政策」; 大津定美 (龍谷大)「労働市場の動態といくつかの部門・地域におけるその特殊性」(部門研究会)

94.03.28 吉田俊則 (富山大)「アレクセイ帝時代のロシア: その新しさと古さ」(部門研究会); 豊川浩一 (静岡県大)「近世ロシアの地方社会: オレンブルグを中心に」(部門研究会)

94.04.15 V. Makarov (ロシア科学アカデミー中央数理経済研)、D. L'vov (同)

"Экономическая реформа в России: нынешнее положение и перспектива ее развития" (特別研究会)

94.04.26 林忠行 (スラブ研)「チェコスロヴァキア国家の解体をめぐって」(北海道スラブ研究会)

94.05.30 松里公孝 (スラブ研)「トヴェーリ州: 1994年春インタビュー調査の経験」(昼食懇談会)

94.06.01 G. Grossman (カリフォルニア大) "The Mafia and Russian Economy" (特別研究会); J. Grossman (同) "Comic Love in Turgenev and the European Comedic Tradition" (特別研究会)

94.06.20 家田修 (スラブ研)「ハンガリー国政選挙と社会党の勝利」(昼食懇談会)

94.07.30 保田孝一(岡山大)、中村健之介(北大言語文化部)、秋月俊幸(北大法学部)「幕末・明治期の日露関係:新資料の発掘と研究の現段階」(部門研究会)

94.09.07 村上隆 (スラブ研)「極東 (マガダン、カムチャトカ) 訪問報告」(昼食懇談会)

94.09.07 皆川修吾 (スラブ研)「ウラジオストク訪問報告」(昼食懇談会)

94.09.19 皆川修吾 (スラブ研)、村上隆 (同)、田畑伸一郎 (同)「中国社会科学院・東欧中亜研究所訪問」(昼食懇談会)

94.09.26 井上紘一 (スラブ研)「この夏、シベリア牧畜民の現地調査で体験したこと」(昼食懇談会)

94.10.05 Geoffrey Jukes (オーストラリア国立大) "The Relationship between Russia and the Former Central Asian Republics"

94.10.13 マリヤ・セヴェラ (仏・社会科学高等研究院)「日本が"ソ連"になったとき: 聞き取りからの印象」(昼食懇談会)

94.10.18 林忠行 (スラブ研)「スロヴァキアの総選挙について」(昼食懇談会)

94.10.24 太田幸雄 (北大工学部)「シベリア北極圏の大気汚染について」(北海道スラブ研究会)

94.10.24 山村理人 (スラブ研)「ロシアの企業で何が起きているか?」(昼食懇談会)

94.10.25 A. Porokhovsky (ロシア科学アカデミー・アメリカ=カナダ研) "State Interests and National Economic Security" (特別研究会)

94.10.26 松里公孝 (スラブ研)「くすぶり続ける"ウラル共和国": スヴェルドロフスク州・チェリャビンスク州調査の経験」(昼食懇談会)

94.11.01 F. Tokei (ハンガリー科学アカデミー)「ハンガリー社会主義、ルカーチそして現在」(特別研究会)

94.12.01 G. Rozman (プリンストン大) "Russian Populist Reactions in 1993-94 to the Coming of the Chinese" (特別研究会)

94.12.02 A. Ivliev (ロシア科学アカデミー極東支部・歴史民族学研)「沿海地方の中世国家 (渤海・金) 期に関する考古学的研究」

94.12.13 P. Zyrianov (外国人研究員)「私の人生とソ連=ロシアの史学史」(特別談話会)

94.12.16 中村文隆 (北海道電力)「ウクライナの最近の原子力事情」(昼食懇談会)

95.03.06 稲葉千晴 (東洋英和女学院短大)、笠原十九司 (宇都宮大)、梶浦篤 (電気通信大)、白石仁章 (外務省外交史料館)、田中孝彦 (一橋大)、中見立夫 (東京外国語大)、西山克典 (札幌市立高専)、長谷川毅 (カリフォルニア大)、林忠行 (スラブ研)、原暉之 (スラブ研)、松井憲明 (旭川大)、横手慎二 (慶応義塾大)「大正・昭和期の日露関係: 新資料の発掘と研究の現段階」(部門研究会)

95.03.07　A. ボガトゥーロフ (ロシア科学アカデミー米加研) "Russian Foreign Policy and the Russian Far East"; A. ツィプコ (ゴルバチョフ基金) "Current Russian Politics" (特別研究会)

95.04.17　N. ミヘーエヴァ (ロシア科学アカデミー極東支部経済研) "Economic Reform on the Russian Far East and Development of Interregional and International Ties" (特別研究会)

95.04.24　村上隆 (スラブ研)「ロシア極東の最新経済事情」(北海道スラブ研究会)

95.05.22　R. Hutchings (Journal of Russian & East European Economic Affairs) "Russian Industry: The Post-Soviet Years" (特別研究会)

95.06.30　J. Shappell (Visiting Fulbright Scholar) "Northern Territorial Issues on the Spot Observation" (特別研究会)

専任研究員セミナー

1991年に、自己の研究活動の点検評価の場として、専任研究員セミナーが制度化された。このセミナーは以下のような原則で行われている。

1) すべての専任研究員は、年に一度セミナーで報告する。

2) 報告は、口頭の発表ではなく、事前にペーパーを執筆し、セミナーの少なくとも1週間前に参加者に配布される。

3) ペーパーは、学術論文に限られる。

4) 報告者は、同時に、長期的研究計画を提出し、提出するペーパーが、この長期計画のなかでいかなる位置を占めているのか、また、それまでの研究と比較していかなる進展があったかを説明する。

5) 報告者の研究領域に近い研究者 (原則としてセンター外) に専門的コメントを依頼する。

6) 参加者全員が、ペーパーの内容だけでなく、その形式、長期研究計画との関係について、コメントする。

現在までに開かれた専任研究員セミナーは次のとおりである (括弧内はコメンテーター)。

1991年

5月23日:　伊東孝之「ドイツ統一とCSCE」(田口晃: 法学部)

6月12日:　長谷川毅「Perestroika and Soviet-Japanese Relations, Chapter One: Historical Background」(酒井哲哉: 法学部)

6月26日:　望月哲男「ドストエフスキイ:評論家と小説家」(安藤厚: 文学部)

9月25日:　原暉之「1930年代のソビエト極東」(西山克典: 札幌市立高等専門学校)

11月5日:　田畑伸一郎「1980年代後半のソ連経済: 産業関連表に基づく分析」(是永純弘: 経済学部)

11月27日:　家田修「Individual Farming and Socialist Agricultural Cooperative: Based on a Case Study of Individual Farming in the 1970s' Hungary」(吉野悦雄: 経済学部)

1992年

3月10日:　皆川修吾「制度化とリーダーシップ」(田口晃: 法学部)

4月16日:　望月喜市「ロシアのインフレ現象の分析」(富森虔児: 経済学部)

9月29日: 松里公孝「ロシアにおけるブルジョア民主主義の可能性: ゼムストヴォを中心として」、「A.A.リッチフの食糧割当徴発制について」(西山克典: 札幌市立高等専門学校)

11月9日: 伊東孝之「多元的民主主義の制度化: 東欧諸国の経験、1989-92」(田口晃: 法学部)

11月18日: 家田修「19世紀末のハンガリーにおける農民信用問題」(牛山敬二: 経済学部)

1993年

2月24日: 皆川修吾「政治改革と政治文化: 人脈政治の位置づけ」(中村研一: 法学部)

3月29日: 望月哲男「パラドクスの態様:『白痴』論へのアプローチ」(鈴木淳一: 札幌大学)

4月8日: 田畑伸一郎「ロシア国民所得成長の分析(1980-1991年)」(富森虔児: 経済学部)

5月21日: 望月喜市「ロシア極東の家計類型の摘出」(荒又重雄: 経済学部)

12月17日: 山村理人「『非集団化』の考察: 中央ロシアおよび北コーカサスにおけるケーススタディー」(松井憲明: 旭川大学)

同 : 原暉之「ポーツマス条約から日ソ基本条約へ: 北サハリンをめぐって」(松井憲明: 旭川大学)

1994年

2月14日: 松里公孝「総力戦争と地方統治: 第一次世界大戦期ロシアにおける食糧事業と農事指導」(中村研一: 法学部)

5月31日: 家田修「ハンガリー現代農業史」(荒又重雄: 経済学部)

11月8日: 長谷川毅「ペレストロイカおよびペレストロイカ後の日露関係」

11月28日: 田畑伸一郎「Trends in Foreign Trade of Russia: Volumes, Composition, and Geographic Distribution」(佐々木隆生: 経済学部)

12月19日: 皆川修吾「議会の制度化: 議会をめぐる環境との相互作用」(長谷川毅: 外国人研究員)

1995年

3月6日: 望月哲男「ペテルブルグ文学」(長谷川毅: 外国人研究員)

4. 出版物リスト

和文紀要『スラヴ研究』(1957-1995年) 総索引

欧文紀要 *Acta Slavica Iaponica* (1983-1994年) 総索引

その他出版物タイトル

和文紀要『スラヴ研究』総索引（1957-1995年）

No.1（1957）

「イーゴリ遠征譚」（訳及び註）　木村彰一
「資本」と「労働」に関するチェルヌイシェフスキーの所論　山本敏
「人民の意志」党の革命理論—資料と解説　鳥山成人
ペ・エリ・ラヴロフ『歴史書簡』（翻訳）（1）　松井茂雄

No.2（1958）

Two Narodnichestvos　Toru Iwama
バザーロフ論　金子幸彦
ロシヤ文芸評論の形成前夜（1）　北垣信行
『分身』について　松井茂雄
「イーゴリ遠征譚」（訳及び註）（2）　木村彰一
ペ・エリ・ラヴロフ『歴史書簡』（翻訳）（2）　松井茂雄

No.3（1959）

ソ連邦における外交資料公表の意義　江口朴郎
バクーニンの革命論　勝田吉太郎
19世紀後半のロシアにおける「資本主義」論争　山本敏
「イーゴリ遠征譚」（訳及び註）（3）　木村彰一
プラハに開かれた最初のスラヴ民族会議がヨーロッパ諸民族にあてた声明（訳及び解説）　矢田俊隆
『ボリースとグレープの物語』（訳及び解説）　福岡星児
ペ・エリ・ラヴロフ『歴史書簡』（翻訳）（3）　松井茂雄
〔学会動向〕第二回ソヴェト問題国際会議の報告　岩間徹

No.4（1960）

レーニン・スターリンにおけるプロレタリアート独裁理論の発展　猪木正道
ラヴリズムの形成—綱領「前進！」成立小史　鳥山成人
プレハーノフとプロレタリアートのヘゲモニーの思想　荒又重雄
Sur la formation de la theorie du «Socialisme russe» chez Herzen　Tsuguo Togawa
ソ連トルコ学研究管見　村山七郎
ペ・エリ・ラヴロフ『歴史書簡』（翻訳）(4)　松井茂雄

No.5（1961）

トカチョフ論考（1）—「思想のアナーキー」を中心として　岩間徹
イヴァン四世の改革の性格（I）—1550年のСудебник 85条の解釈をめぐって　鳥山成人
ソヴェト・マルクス主義における新動向の展開とその史的意義　中野徹三
モスクワと中国革命の指導　柴田誠一
「ルーシの地の滅亡の物語」について　中村喜和
ペ・エリ・ラヴロフ『歴史書簡』（翻訳）(5)　松井茂雄

No.6（1962）

イヴァン四世の改革の性格（II）—1550年のСудебник 85条の解釈をめぐって　鳥山成人
ア・エヌ・エンゲリガルトについて　山本敏
ニコライ・バルチェスクにおける「ネ･･ション」と「農奴解放」の問題　萩原直
ペー・ヤー・チャアダーエフ『哲学書簡』（翻訳及び解説）(I)　外川継男
ロリス＝メリコフの改革案とツァーリズム　和田春樹

No.7 (1963)
社会主義諸国家における夫婦財産制の諸問題 五十嵐清
オーストリア社会民主党と民族問題 矢田俊隆
ペ・イ・リャーシチェンコ教授の業績について 山本敏
プロレタリアートの独裁と過渡期の教育—労農予備校（Рабфак）の発生・発展・消滅過程の実証的研究 竹田正直
ペー・ヤー・チャアダーエフ『哲学書簡』（翻訳及び解説）(Ⅱ) 外川継男

No.8 (1964)
ペチョーリン論 金子幸彦
トカチョフ論考（2） 岩間徹
О Законе Распределения по Труду при Социализме Ичиро Оно
ペー・ヤー・チャアダーエフ『哲学書簡』（翻訳及び解説）(Ⅲ) 外川継男

No.9 (1965)
ポーランドの「連盟」と身分代表制 鳥山成人
「帝国自由経済協会」論 山本敏
ペー・ヤー・チャアダーエフ『哲学書簡』（翻訳及び解説）(Ⅳ) 外川継男
Советская историография реформы 1861 года в России Тэцуо Ионекава

No.10 (1966)
ポーランド＝リトワ連合小史（ミェルニクの連合まで） 鳥山成人
A Survey of Eastern Europe from the Viewpoint of Japanese Social Scientists: An Interim Report Hiroshi Momose
Залоги в сочетании глаголов с инфинитивом в современном русском литературном языке Сюн Сирота
「近代化」をめぐる報告と討論 鳥山成人・外川継男
『司祭長アヴァクム自伝』（訳及び註） 松井茂雄

No.11 (1967)
中ソ論争の焦点，1963－64（上） 猪木正道
19世紀初期のロシアにおける改革運動の底流（I） 岩間徹
「帝国自由経済協会」論（続） 山本敏
Залоги в сочетании глаголов с инфинитивом в современном русском литературном языке (2) Сюн Сирота
アメリカ合衆国におけるハプスブルク帝国史研究の近況 矢田俊隆
ソ連＝フィンランド戦争をめぐる史料・文献について—その研究史的覚書 百瀬宏

No.12 (1968)
ペー・エヌ・ミリュコーフと「国家学派」 鳥山成人
ロシア臨時政府に関する一考察（上）—特に連立政府に対するエス・エルの動向を中心として 高岡健次郎
Залоги в сочетании глаголов с инфинитивом в современном русском литературном языке (3) Сюн Сирота
フランスにおけるスラヴ研究の歴史と現状 外川継男

No.13 (1969)
ゲルツェンの『向こう岸から』について 外川継男
Personal Property in the Soviet Union, with Particular Emphasis on the Khrushchev Era: An Ideological, Political and Economic Dilemma (I) Hiroshi Kimura
チェルヌイシェフスキーの美学理論—『現実に対する芸術の美学的関係』を中心として（I） 出かず子
フィンランド史における「東方関係」—〈研究動向の紹介〉 百瀬宏
О материалах Госплана по развитию Востока (I) Сатоси Ямамото

1939年のソ連＝フィンランド関係に関するノート　百瀬宏

No.14（1970）

ロシア・ソヴェトの東漸—シベリアの問題（1）　山本敏
チェルヌィシェフスキーの美学理論—『現実に対する芸術の美学的関係』を中心として(II)　出かず子
ロシア臨時政府に関する一考察（中）—特に連立政府に対するエス・エルの動向を中心として　高岡健次郎
О материалах Госплана по развитию Востока（II）　Сатоси Ямамото
Personal Property in the Soviet Union, with Particular Emphasis on the Khrushchev Era: An Ideological, Political and Economic Dilemma（II）　Hiroshi Kimura

No.15（1971）

二つの論争—ゲルツェンのツルゲーネフとバクーニンとの論争に寄せて（I）　外川継男
『イーゴリ遠征譚』（訳及び註）(4)　木村彰一
19世紀初期のロシアにおける改革運動の底流（II）　岩間徹
ロシア・ソヴェトの東漸—シベリアの問題（2）　山本敏
「冬戦争」にいたるソ連・フィンランド関係に関する補足的ノート
　I「冬戦争」勃発前後のフィンランド共産党の動向について —史料紹介
　II社会民主主義ヴィルタネン（Atos Wirtanen）の国際情勢観—30年代から「冬戦争」へ　百瀬宏

No.16（1972）

党史と政権—歴史的・比較的研究　木村汎
「ランデ・ヴーにおけるロシア人」考　出かず子
ヨシフ・ヴォロツキー（1439/40-1515）の政治理論—モスクワ・ロシアの政治思想史研究序説　栗生沢猛夫
Philologism and Conservatism in Nineteenth-Century Russian Literature　Joachim T. Baer
ロシア・ソヴェトの東漸—シベリアの問題（3）　山本敏
檄文の時代—人民主義の発生をめぐる若干の資料と解説　外川継男
フィンランドの対ソ関係 1940-1941年—「継続戦争」前史に関する覚書　百瀬宏
西ヨーロッパにおけるハプスブルク帝国史研究の近況　矢田俊隆
古ロシア史の国際会議に参加して　鳥山成人

No.17（1973）

Japan's Relations with Finland, 1919-1944, as Reflected by Japanese Source Materials　Hiroshi Momose
Russian Moves in Central Asia, 1843-1856　John W. Strong
二つのブレジネフ党史　木村汎
二つの論争—ゲルツェンのツルゲーネフとバクーニンとの論争に寄せて（II）　外川継男
ロシア臨時政府に関する一考察（下）　高岡健次郎
ヨシフ・ヴォロツキーの政治理論（II）　栗生沢猛夫

No.18（1973）

Руский капитализм и отработочная система в сельском хозяйстове России　Сидзума Хинада
東欧の民族問題とマルクス主義の民族自決権概念—ローザ・ルクセンブルク　伊東孝之
ソ連邦における個人的副業経営—とくに社会的経営との関係において　木村汎
戦後ポーランドの成立—ソ連外交とポーランド労働者党の戦術（1943-1945年）　伊東孝之
“余計者”小考—1856年版「トゥルゲーネフ中・短篇集」をめぐって　出かず子

No.19（1974）

16世紀末ロシアにおける農民農奴化について—ソヴェト史学史におけるグレコフ説　鳥山成人
「死せる魂」について　灰谷慶三

嘉永年間ロシヤの久春古丹占拠　秋月俊幸
トルコ＝アルメニア戦争とトルコの対ソ関係（1919－1920）　山内昌之
ハンガリーにおける「東欧」経済史研究の諸問題—封建制から資本制生産へ　南塚信吾
コメニウスのポーランドにおける活動とそのポーランド観　イェージィ・シリジニスキ 伊東孝之訳
Organic Work as a Problem in Polish Historiography　Stanislaus A. Blejwas
Russian and Soviet Studies in Finland　Ilmari Susiluoto

No.20 (1975)　20周年記念号

渡し守キイの伝説について　福岡星児
ベチョーリンにおける「矛盾した」真実　出かず子
エカテリーナ2世の地方改革—その動機と背景に関する問題と諸見解　鳥山成人
ハプスブルク帝国の軍隊と民族問題　矢田俊隆
On the Meaning in Our Time of the Drafts of Marx's Letterto Vera Zasulich（1881): With Textual Criticism　Shizuma Hinada
トゥハチェーフスキー事件に関する一試論　平井友義
第二次大戦中のソ連のフィンランド政策—戦後への展望に寄せて　百瀬宏
Личная собственность в СССР, её связь с общественными фондами потребления и перспективы их развития　Хироси Кимура
最近のローザルクセンブルク研究—ポーランドにおける活動を中心として　伊東孝之
東西契約法の比較—D. A. レーバーの所説について　五十嵐清
スラブ研究施設二十年の歩み　外川継男
今様和製「検察官」—フセヴォーロト・ヴャーチェスラヴォヴィチ・イワノフと
ナイリ・エギザロヴィチ・ザリヤンの北大「視察」　北垣信行
ファーズ博士のこと　岩間徹

No.21 (1976)

短篇「タマーニ」—レールモントフにおけるアイロニーの表現　出かず子
『かよわい心』—ドストエフスキーの自覚　中村健之介
イーゴリ遠征譚（訳及び注）（5）　木村彰一
1848年の革命とチャアダーエフの逆説—バーリンのチャアダーエフ像への反論として　外川継男
物質的インセンティブの限界—フルシチョフ主義の挫折（その1）　木村汎
コミンテルンとバルカン民族問題　木戸蓊
東欧に関する連合国の戦争目的　1941-1945（I）　伊東孝之
第二次大戦中のソ連のフィンランド政策—戦後への展望に寄せて（II）　百瀬宏

No.22 (1978)

Polish Romantic Messianism in Comparative Perspective　Andrzej Walicki
ソ連経済の所得循環『ソ連邦経済統計年報』の研究　望月喜市
東方ロカルノ案をめぐるソ連外交ソ連外交における「集団安全保障」政策の形成　植田隆子
「公衆主義の陥穽」—フルシチョフ主義の挫折（Ⅱ）　木村汎
東欧に関する連合国の戦争目的　1941-1945（Ⅱ）　伊東孝之
ヴァレリアン・カリンカの保守主義思想—農民解放とホテル・ランベール（1852-1861）　早坂真理
わが国におけるソ連・東欧研究の歴史と現状　松田潤
〈資料紹介〉
Khlebnikov, Colonial Russian America, 1817-1832　秋月俊幸
〈図書室便り〉ロシア語アルファベットのローマ字翻字について　秋月孝子
ソ連・東欧研究文献目録1976　松田潤

No.23 (1979)

Pierre Tchaadaev : FRAGMENTS ET PENSÉES DIVERSES（INÉDITS）　présentés par Tsuguo Togawa
レールモントフのバラード＜タマーラ＞　出かず子

ィーゴリ遠征譚（訳及び注）（6）　木村彰一
コミンテルンとバルカン民族問題（Ⅱ）　木戸蓊
第二次大戦中のソ連のフィンランド政策—戦後への展望によせて（Ⅲ）　百瀬宏
東欧に関する連合国の戦争目的　1941-1945（3）　伊東孝之
〈研究ノート〉
シベリア開発モデルの理論と実際　望月喜市
ソ連・東欧研究文献目録1977　松田潤

No.24（1979）

Z polsko-czesko-słowackich stosunków kulturalnych na przestrzeni wieków　Jerzy Sliziński
ィーゴリ遠征譚（訳及び注）（7）　木村彰一
『ウラジーミル諸公物語』覚書　栗生沢猛夫
ロシア農村共同体の土地割替慣行—その普及過程に関する考察　鳥山成人
シベリア・極東ロシアにおける十月革命　原暉之
戦間期ハンガリーにおける人民運動の一考察—1930年代における知識人・民族・民主主義　佐藤紀子
1948年のフィンランド・ソ連条約の成立事情に関する覚書（1）　百瀬宏
Трудовая теория стоимости и система разрешающих множителей Л. В. Канторовича　Киити Мотидзуки
The Slánkiý Trial of 1952: Some New Psychological Insights　Vladimir V. Kusin

No.25（1980）

Russian Expansion to the Pacific, 1580-1700: A Historiographical Review　Basil Dmytryshyn
Communism in Yakutia: The First Decade (1918-1928)　E. Stuart Kirby
日ソ関係における非対称性　木村汎
Eastern Europe in the 1970s　Vladimir V. Kusin
Славяноведение в Японии : История, учреждения и проблемы　Такаюки Ито
〈資料紹介〉
ピョートル・チャアダーエフ「狂人の弁明」（訳・解説）　外川継男
「計画化の改善と経済メカニズムの強化」について（訳・解説）　望月喜市

No.26（1980）

モスコーヴィアの日本人　中村喜和
Soviet Foreign Policy Toward Japan since the Conclusion of the Japan - China Peace Treaty　Hiroshi Kimura
漁業交渉（1977年春）にみられる日・ソの交渉行動様式—非対称性と対称性　木村汎
「所得－商品」モデルの特徴と統計数値の適用　望月喜市
SIZシステムの成立とその意味　岩田昌征
東欧に関する連合国の戦争目的1941-1945（4）　伊東孝之
〈資料紹介〉
Реалии эпохи —ключ к пониманию её культурного творчества　Госуке Утимура
Slavic Studies in the United States: An Overview　Paul L. Horecky

No.27（1981）

トゥルゲーネフの最後の愛　出かず子
中世末ロシアの農村共同体—土地関係訴訟史料を通じてみたその構造　吉田俊則
Japan - Soviet Relations: From Afghanistan to Suzuki　Hiroshi Kimura
1948年のフィンランド・ソ連条約の成立事情に関する覚書（2）　百瀬宏
〈研究ノート〉
The Trail of the Sable: New Evidence on the Fur - Hunters of Siberia in the Seventeenth Century　E. Stuart Kirby
〈資料紹介〉
Реалии эпохи —ключ к пониманию её культурного творчества (2)　Госуке Утимура

No.28 (1981)

Обломов и литература　Жан Бонамур
ソ連のマクロ経済指標の統計分析　望月喜市
ソ連邦における経済計画とボーナス関数　岩田昌征
ソ連のエネルギー問題　吉田文和
1948年のフィンランド・ソ連条約の成立事情に関する覚書（3）　百瀬宏
〈図書室だより〉　レンセン・コレクションについて　秋月孝子
実践的関心と学問的研究—スラブ研究センター研究棟落成式における式辞　伊東孝之

No.29 (1982)

The "Sanacacja" and Problems of Security of the Second Republic　Andrzej Garlicki
ロシア革命と農民—共同体における"スチヒーヤ"の問題によせて　西山克典
20年代ソ連外交の一断面—1927年のウォー・スケアーを中心にして　横手慎二
スターリン政治体制下の農村における統治体制の再編—1931－1934年　内田健二
Conflicting Views of Russian Nationalism　Albert Boiter
Main Problems of the Recent Hungarian Economic Development and Prospects of the Future Economic Growth　Tibor Erdös
ソ連における軍事拡充と経済成長の今後の趨勢予測—計量モデルによる第10次，第11次5カ年計画についてのシミュレーション分析　丹羽春喜

No.30 (1982)

レールモントフ『リゴフスカーヤ公爵夫人』攷—その手法の分析　出かず子
ハンガリー革命における国家機構—タナーチ（評議会）権力の構造，1919年　羽場久泥子
パリ平和会議の期間におけるチェコスロヴァキアと「ロシア問題」　林忠行
第1次5ケ年計画期ソ連における合理化と労働組織化—石炭業および建設業を中心として　塩川伸明
1948年のフィンランド・ソ連条約の成立事情に関する覚書（4）　百瀬宏
〈研究ノート〉
「通貨循環連関表」(Межотраслевой баланс денежного оборота)の研究　望月喜市

No.31 (1984)

〈翻訳〉
コンスタンティノス一代記—訳ならびに註（1）　木村彰一・岩井憲幸
〈論文〉
メーチニコフの革命思想におけるナショナルな契機　渡辺雅司
ソ連における団体協約制度およびその変容　塩川伸明
現存社会主義における社会変動と政治体制—ポーランドにおける党内選挙（1980-81）に即して　伊東孝之
ソ連農業における集団請負制について　金田辰夫
〈学界消息〉
最近の西ドイツのソ連・東欧研究の一側面　中山弘正

No.32 (1985)　鳥山成人教授退官記念号

〈論文〉
ゴスチ考　栗生沢猛夫
ロシアにおける中央集権化と地方社会—いわゆるグバー制の導入過程をめぐって　吉田俊則
ロシア最初の印刷新聞「ヴェードモスチ」　秋月孝子・秋月俊幸
若き森有礼のロシア観をめぐって　外川継男
「人民の権利」党をめぐって—その形成から「崩壊」まで　稲掛久雄
十月革命における左翼エスエル　高岡健次郎

ロシア革命と地方ソヴェト権力―一党制政治システムの形成によせて　西山克典
鳥山成人教授略歴・著作目録
〈翻訳〉
コンスタンティノス一代記―訳ならびに註（2）　木村彰一・岩井憲幸

No.33 (1986)

〈翻訳〉
メトディオス一代記 ―訳ならびに註　木村彰一・岩井憲幸
〈論文〉
ルドルフ・ビチャニッチにおける「農民の国家」の思想―ユーゴスラヴィア人民主義の一考察　越村勲
ソ連のコルホーズ農戸について―77年憲法と56-64年の論争　松井憲明
ソビエト社会における階級と社会移動　渡辺良智
〈研究ノート〉
イギリスにおけるソ連研究　木村汎
木村彰一教授と北大のスラブ研究　外川継男
木村彰一教授略歴・著作目録

No.34 (1987)

〈論文〉
「社会主義文献フォンド」小史（1887-1888）―「人民の意志」主義と社会民主主義の狭間の亡命者群像　佐々木照央
犯罪，警察，サモスード―ロシア革命下ペトログラードの社会史への一試論　長谷川毅
エヴゲニイ・ザミャーチンにおけるロシアと西欧　西中村浩
ソ連の国民所得統計に関する一考察　田畑伸一郎
シコルスキの対ソ政策（1939-1943）―ポーランド問題序説　広瀬佳一
日本におけるおけるソ連・東欧研究の現状―計量誌学的分析（1976-1980）　松田潤
〈研究ノート〉
AVNOJ第2回会議諸決定とユーコスラヴィアの連邦化　苑原俊明
〈図書室だより〉　昭和58-60年度の主要受入図書について　秋月孝子

No.35 (1988)

〈論文〉
B. N. チチェーリンとロシアの立憲主義　杉浦秀一
MTC政治部とコルホーズ―労働規律問題を中心に　富田武
ソ連の『国家学』と政治改革―国家認識の変化と国家の自立性をめぐる試論　中村逸郎
「新ロシヤ展」と大正期の新興美術　五十殿利治
〈研究ノート〉
『ヴラツァ福音書』における時の従属節　服部文昭
ソ連の第12次5カ年計画の進行状況と経済政策　望月喜市

No.36 (1989)

〈論文〉
ウォルター・スコットとロシア・ロマン主義文学　金沢美知子
ロシア・アヴァンギャルドにおけるイデオロギー活動―〈機能〉・〈環境〉・〈世界感覚〉　大石雅彦
形成期のグロムイコ1909 1945　横手慎二
小協商と対ソ承認問題1932-1934　坂本清
〈研究ノート〉
チェルヌィシェフスキーとミハイロフ―両者の女性観　大竹由利子
ソ連経済の現状と89年計画　望月喜市
〈書評〉
現代ソ連の労働事情と労働市場概念―大津定美著『現代ソ連の労働市場』について　荒又重雄

No.37 (1990)

〈論文〉

有機的批評の諸相—アポロン・グリゴーリエフの文学観　望月哲男
ツルゲーネフとピーサレフ　相沢直樹
チェーホフの短編小説の創作方法の発展—伝統的リアリズムから「象徴的リアリズム」　清水道子
チチェーリンにおける「家政学」と「経済学」—ロシア「自由主義」の性格規程をめぐって　杉浦秀一
ベルジャーエフとストルーヴェ（1901-1909）　根村亮
14-15世紀前半のポーランドにおける王と国家と社会—共和主義の起源に関する一考察　井内敏夫
ロシア国家による地方の併合過程—バシキーリア併合の問題をめぐって　豊川浩一
1905年革命の中の地主貴族たち—貴族団全権代表者大会と政府　加納格
ソ連における生活水準の地域間格差　栖原学
〈図書室便り〉　昭和61-63年度受け入れ図書について　秋月孝子

No.38 (1991)

〈論文〉

「クロイツェル・ソナタ」と「平凡」—キリスト教的性愛観への反撃　村上孝之
談話の構造におけるスラブ語の指示詞の照応機能について　三谷恵子
〈文明〉とロシア知識人の自己意識—П. Н. トカチョーフと1860年代の精神　下里俊行
ソロヴィヨーフとニーチェ—「超人の思想」（1899）　工藤孝史
大テロル下ソ連農村の政治過程—1936年の農業不振とアゾフ=黒海地方　内田健二
〈研究ノート〉
ポーランドの国内構造の転換（1970-1990）—構造転換の政治経済学に向けて　仙石学
〈文献紹介〉
国家文書と条約集　秋月孝子

No.39 (1992)

〈論文〉

1980年代後半のソ連経済—産業連関表に基づく分析　田畑伸一郎
近代ロシアにおける資本家の社会的位置—1905年のモスクワ資本改革派をめぐって　高田和夫
帝政ロシアの民族政策—18世紀のヴォルガ流域とウラル　豊川浩一
大改革期ロシアにおける地方行政制度の再編—1858-1864年　竹中浩
ドストエフスキイ：評論家と小説家—ロシア・西欧論の心理構造をめぐって　望月哲男
トルストイ作「幼年時代」について　山田吉二郎
『道標』について　根村亮
ポーランド語における地名ないし民族名起源の派生語　渡辺克義
〈研究ノート〉
ロシヤ昔話の話型目録編集をめぐって　宮廻和男

No.40 (1993)

〈論文〉

明治初年の樺太—日露雑居をめぐる諸問題　秋月俊幸
ソ連共産党の支配下の地方ソビエト—モスクワ市オクチヤーブリ地区ソビエトの実証研究 1988-90年　中村逸郎
ドストエフスキイの神話的イデアの源泉についての考察—「カラマーゾフの兄弟」に於けるアポタリフアと民衆文学　清水俊行
現在のクロアチア語について　三谷恵子
キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝における物語の比較研究Ⅲ　三浦清美
〈調査研究〉
ロシア極東の地下資源の需給と分布　望月喜市
〈研究ノート〉

帝政ロシアの地方制度1889-1917　松里公孝
〈資料紹介〉
北大におけるロシア関係資料—個人コレクションとロシア語マイクロ資料　秋月孝子

No.41 (1994)　望月喜市教授退官記念号

ロシア国民所得成長の分析（1980-1991年）　田畑伸一郎
「非集団化」の考察—中央ロシアおよび北コーカサスにおけるケース・スタディ　山村理人
中国と旧ソ連・ロシアとの新しい経済関係　小川和男
「ネップ」期ソ連経済における総合的要素生産性向上率の計測　丹羽春喜
ロシアのエコロジー危機とその克服の道　ヴェ・ベルキン、ヴェ・ストロジェンコ
極東の経済改革：成果、問題点、展望　ペ・ミナーキル
イワン・ブーニンの「村」について—その文体的特徴　望月恒子
Ф. И. チュッチェフと検閲改革—専制の擁護と言論の自由の問題によせて　大矢温
シベリア内戦とブリヤート・モンゴル問題　生駒雅則
道標転換派とソヴィエト権力　中嶋毅
望月喜市教授略歴・著作目録

No.42 (1995)　40周年記念号

〈創設40周年記念論文〉
スラブ研究センター40周年によせて　望月哲男
スラブ研究センター図書室の歩み　秋月孝子
〈論文〉
『戦争と平和』にあらわれたロシア・フリーメイスン　笠間啓治
ロシアの村落穀物備蓄制度：1864－1917年　松里公孝
ファウスト・ヴランチッチの『五カ国辞書』とクロアチア語「チャ方言」の音韻特徴について　三谷恵子
カラムジン『哀れなリーザ』における普通名詞表現の分析—データベースと多変量解析　浦井康男
〈研究ノート〉
ソ連の環境保護理念と行政システム　片山博文
サハ（ヤクーチヤ）の草原と牛馬飼育　斎藤晨二
ロシア北方の社会・経済発展に関する国家綱領とカタンガ・エウェンキ　ミハイル・トウーロフ
〈書評〉
E. アクトン著『ロシア革命再考』を読む　池田嘉郎
欧米の研究に見る第二次世界大戦期のソ連　松戸清裕

著者名索引（数字は『スラヴ研究』号数）

-あ-
相沢直樹 37
秋月孝子 22,28,32,34,37,38,40,42
秋月俊幸 19,22,32,40
荒又重雄 4,36
-い-
五十嵐清 7,20
池田嘉郎 42
生駒雅則 41
出かず子 13,14,16,18,20,21,23,27,30
伊東孝之 18,19,20,21,22,23,25,26,28,31
稲掛久雄 32
井内敏夫 37
猪木正道 4,11,
岩井憲幸 31,32,33
岩田昌征 26,28
岩間徹 2,3,5,8,11,15,20
-う-
植田隆子 22
内田健二 29,38
内村剛介 27
浦井康男 42
-え-
江口朴郎 3
-お-
大石雅彦 36
大竹由利子 36
大矢温 41
小川和男 41
小野一郎
五十殿利治 35
-か-
笠間啓治 42
片山博文 42
勝田吉太郎 3
金沢美知子 36
金子幸彦 2,8
金田辰夫 31
加納格 37
-き-
北垣信行 2,20
木戸蓊 21,23
木村彰一 1,2,3,15,21,23,24,31,32,33
木村汎 13,14,16,17,18,20,21,22,25,26,27,33
-く-
工藤孝史 38
栗生沢猛夫 16,17,24,32
-こ-
越村勲 33
-さ-
斎藤晨二 42
坂本清 36
佐々木照央 34
佐藤紀子 24
-し-
塩川伸明 30,31
柴田誠一 5
清水俊行 40
清水道子 37
下里俊行 38
シリジニスキ 19
城田俊 10,11,12
-す-
杉浦秀一 35,37
ストロジェンコ 41
栖原学 37
-せ-
仙石学 38
-そ-
苑原俊明 34
-た-
高岡健次郎 12,14,17,32
高田和夫 39
竹田正直 7
竹中浩 39
田畑伸一郎 34,39,41
-ち-
チャアダーエフ 6,23
-と-
トウーロフ 42
外川継男 4,6,7,8,9,10,12,13,15,16,17,20,21,23,25,32,33
富田武 35
豊川浩一 37,39
鳥山成人 1,4,5,6,9,10,12,16,19,20,24
-な-
中嶋毅 41
中野徹三 5
中村逸郎 35,40
中村健之介 21
中村喜和 5,26
中山弘正 31
-に-

西中村浩 34
西山克典 29,32
丹羽春喜 29,41
-ね-
根村亮 37,39
-は-
灰谷慶三 19
萩原直 6
長谷川毅 34
服部文昭 35
羽場久泥子 30
早坂真理 22
林忠行 30
原暉之 24
-ひ-
日南田静真 18,20
平井友義 20
広瀬佳一 34
-ふ-
福岡星児 3,20
-べ-
ベルキン 41
-ま-
松井茂雄 1,2,3,4,5,10
松井憲明 33
松里公孝 40,42
松田潤 22,23,34
松戸清裕 42
-み-
三浦清美 40
三谷恵子 38,40,42
南塚信吾 19
ミナーキル 41
宮廻和男 39
-む-
村上孝之 38
村山七郎 4
-も-
望月喜市 22,23,24,25,26,28,30,35,36,40
望月恒子 41
望月哲男 37,39,42
百瀬宏 10,11,13,15,16,17,20,21,23,24,27,28,30
-や-
矢田俊隆 3,7,11,16,20,23
山内昌之 19
山田吉二郎 39
山村理人 41
山本敏 1,3,6,7,9,11,13,14,15,16
-よ-
横手慎二 29,36
吉田俊則 27,32
吉田文和 28
-ら-
ラヴロフ 1,2,3,4,5
-わ-
和田春樹 6
渡辺雅司 31
渡辺良智 33
渡辺克義 39

（欧米語論文）
-B-
Baer, J. T. 16
Blejwa, S. A. 19
Boiter, A. 29
-D-
Dmytryshyn, B. 25
-E-
Erdos, T. 29
-G-
Garlicki, A. 29
-H-
Hinada, S. 20
Horecky, P. L. 26
-I-
Iwama, T. 2
-K-
Kimura, H. 13,14,26,27
Kirby, E. S. 25,27
Kusin, V. V. 24,25
-M-
Momose, H. 10,17
-S-
Slizinski, J. 24
Strong, J. W. 17
Susiluoto, I. 19
-T-
Togawa, T. 4,23
-W-
Walicki, A. 22

（露語論文）
-Б-
Бонамур, Жан 28
-И-
Ионскава, Тэцуо 9
Ито, Такаюки 25

-К-
Кимура, Хироси 20
-М-
Мотидзуки, Киити 24
-О-
Оно, Ичиро 8
-С-
Сирота, Сюн 10,11,12
-У-
Утимура, Госуке 26,27
-Х-
Хинада, Сидзма 18
-Я-
Ямамото, Сатоси 13,14

Contents of Acta Slavica Iaponica (1983-1994)

Volume 1 (1983)

Joining the International Community of Slavists
Russia : The Spiritual Solution — Jesse Zeldin
The Sale of Russian America to the United States — James R. Gibson
A Note on the Kuban Affair (1932-1933) : The Crisis of Kolkhoz Agriculture in the North Caucasus — Nobuo Shimotomai
Controversy over Nomenklatura in Poland : Twilight of a Monopolistic Instrument for Social Control — Takayuki Ito
Некоторы аспекты вопроса защиты потребителей с точки зрения гражданского права : для проведения дискуссии между юристами капиталистических и социалистических стран — **Эмико Тиба**
The Economic Crisis in Poland — Janusz Beksiak
A Study of National Accounts Tables of the Soviet Union and Its Industrial Structure — Kiichi Mochizuki
Major Russian Slavic Collection in Japan — Takako Akizuki
Cumulative Contents of the *Surabu Kenkyu (Slavic Studies)*

Volume 2 (1984) Special Issue

Proceedings of the International Symposium on Order Orientation and Liberalizing Tendencies in Soviet & East European Societies (August 23-25, 1983)
Preface
Editor's Note
1. Plan, Market, and Measurement — Aron J. Katsenelinboigen
Comment: Masaaki Kuboniwa, Masayuki Iwata
2. Regional First Secretaries in the Supreme Soviet Standing Commissions — Shugo Minagawa
Comment: Jerry Hough, Tomoyoshi Hirai
3. An Asymmetric State — Aladár Sipos
Comment: Haruki Wada, Hiroshi Kimura
4. Ownership, Controllability, and Equality in a Socialist Economy: Analytical Frameworks and Some Observations on Hungarian Reforms — Tsuneo Morita
Comment: Časlav Ocić, Aladár Sipos
5. Origins of Stalinism: How Important Was the Civil War — Sheila Fitzpatrick
Comment: Haruki Wada, Yoshimasa Tsuji
6. Evolution in the Soviet Political System — Jerry Hough
Comment: Tomoyoshi Hirai, Hiroshi Kimura
7. Some Questions Concerning Division of Labor and Specialization within the CMEA — Aladár Sipos
Comment: Noboru Miyanabe, Kiichi Mochizuki
8. The Soviet Book Market : Supply and Demand — Maurice Friedberg
Comment: Masaji Watanabe, Nobuyuki Nakamoto
9. Possibilities for and Limitations to a Mixed Economy in Socialist Planned Economies — Tsuneaki Sato
Comment: Jerry Hough, Aron J. Katsenelinboigen
Concluding Remarks: Maurice Friedberg
List of Participants
Selected Bibliography on Japanese Slavic Studies in Western Languages

Volume 3 (1985)

ARTICLES

Muscovy and the English Quest for a Northeastern Passage to Cathay (1553-1584). Samuel H. Baron
Il'ia Glazunov's Russian Nationalism : Notes from Two Exhibits Vladislav Krasnov
Some Aspects of Japanese Studies on Russian and Soviet History Nobuaki Shiokawa
Две концепции жизни в романе (Преступление и Наказание) : ощущение жизни и смерти в творчестве Достоевского **Кэнъноскэ Накамура**
The Connection between External and Home Market Prices in CMEA Countries Gabor Bakos
News and Development
Cumulated Bibliography on Japanese Slavic Studies in European Languages

Volume 4 (1986)

ARTICLES

Springtime for the *Politotdel* : Local Party Organization in Crisis Nobuo Shimotomai
Regional Development and National Policy Choices : the Asian USSR Leslie Dienes
Development of Siberia and Japan Kazuyuki Kimbara
Poland's Multicultural Heritage Norman Davies
Mathematical Economics in the Soviet Union A Reflection on the 25th Anniversary of L. V. Kantorovich Book, *The Best Use of Economic Resources* Aron J. Katsenelinboigen
Integration as the Pooling of Labor and Resources : the Yogoslav Experience Časlav Ocić
В честь столетия со дня рождения В. В. Хлебникова
От сказки Футуризма : по поводу статьи Хлебникова « пользе изучения сказок»: Философия и творчество В. Хлебникова **Жан-Клод Ланн**
Водный лабиринт, город смешанной крови : Хлебников и Астрахань **Икуо Камеяма**

REVIEWS

Shigeto Toriyama, *State and Society in Russia and East Europe* (Takeo Kuryuzawa)
Hiroshi Kimura, *The Soviet Union in Paradox*; Hiroshi Kimura et al, *Contemporary Sovietology as a Matter of Common Knowledge* ; Fumio Nishimura, *Gorbachev* (Shugo Minagawa)
Toshio Morishita, *Study of Soviet Constitutional Theory* (Akio Komorida)
News and Development

Volume 5 (1987)

Editor's Note

ARTICLES

The Second Sapporo Japan-US Seminar on the Soviet Union : The Soviet Union Faces Asia: Perceptions and Policies
Soviet Historians' Views of the Asiatic Mode of Production Donald W. Treadgold
Chinese Comparison of Socialism: A New Agenda for Research and New Perceptions of Convergence in Socialist Reforms Gilbert Rozman
Japanese Perceptions of the Soviet Union: 1960-1985 Tsuyoshi Hasegawa
Basic Determinants of Soviet-Japanese Relations : Background, Framework, Perceptions, and Issues Hiroshi Kimura
Soviet Policy in the Asian-Pacific Region: Primary and Secondary Relationships Joseph M. Ha
Recent Trends in Japanese-Soviet Trade Gordon B. Smith
List of Participants

REVIEWS

Nobuaki Shiokawa, *Socialists State and the Working Class: Control over Workers in the Soviet Enterprise 1929-1933;*

The Working Class under the Stalin Regime: the Social Composition and Conditions of the Soviet Workers. 1929-1933 (Kenji Uchida)
Kiichi Mochizuki, *The Reproductive Structure of the Soviet Economy: A Statistical Study* (Masaaki Kuboniwa)
Hiroshi Oda, *The Political Power and the Law under the Stalin Regime: the Formative Process of the Socialist Legality* ; Kan Ueda, *A Study of the History of Soviet Criminology* (Tatsuhiko Ueno)
News and Development

Volume 6 (1988)

ARTICLES

Student Interests and Student Politics: Kazan University before the Crisis of 1862 — Alan Kimball
Neo-Narodnikis' View of the Russian Agricultural Development — Shuichi Kojima
The Soviet Factor in Japanese Foreign Policy, 1923-1937 — Tetsuya Sakai
Nomenklatura and Free Elections: A Polish Experiment, 1980-1981 — Takayuki Ito
La Divino-humanité et nous: Pour les études des premières œuvres philosophiques de Vladimir Soloviev — Takafumi Kudo
Buddhist Themes in Medieval, Serbian & Russian Literature: the Manuscript of Barlaam and Ioasaph — Dragam Milivojevic
Economic Management System in Hungary at the End of the Second Reform Decade — Aladár Sipos, Márton Tardos
Некоторые вопросы в процессах реформы экономической системы социалистических стран Лу-Наньцюань

REVIEW ARTICLE

Yuzuru Taniuchi, *The Formation of the Stalin Political Regime*, 4 vols. — Naoko Hirooka, Hiroshi Okuda, Kenji Uchida

BOOK REVIEWS

Shuichi Kojima, *A Study on Russian Agricultural Thoughts* (Shizuma Hinada)
Fumikazu Yoshida, *Formation of Marx's Theory of Machinery* (Izumi Ohmura)
News and Development

Volume 7 (1989)

ARTICLES

Интернационализм и общечеловеческое мышление в народничестве П. Л. Лаврова — **Тэрухиро Сасаки**
Internationalized Bolshevism: The Bolsheviks and the International, 1914-1917 — Akito Yamanouchi
Политическая ситуация в СССР. Осень 1930 года — **Нобуаки Сиокава**
Gorbachev's New Political Thinking and the Priority of Common Interests — James P. Scanlan
Conceptualization of Informal Group Behavior under Gorbachev — Shugo Minagawa
Evaluation of Economic Performance under Gorbachev — Shinichiro Tabata
Soviet Wage Reform under Perestroika — Sadayoshi Ohtsu
The Japanese Communist Party's View of Gorbachev's Perestroika — Peter Berton

BOOK REVIEWS

Tetsuo Kunimoto, Iwao Yamaguchi, Naoki Chujo et al., *The Russian Primary Chronicle*. (Yoshikazu Nakamura)
Masayuki Yamauchi, *Sultan Galiev's Vision: Islam and the Russian Revolution* (Katsunori Nishiyama)

LIBRARY COLLECTIONS

Japanese Manuscript Sources on 19th Century Russia in HUL — Takako Akizuki

Volume 8 (1990)

ARTICLES

The Overthrow of Authority in Chekhov's My Life — Andrew R. Durkin
У истоков театрально-критической концепции Ап. Григорьева —Размышления по поводу одной малоизвестной

статьи Тэцуо Мотидзуки
New Stage of Economic Reform in the USSR Leonid I. Evenko
Социализм в идеях и действительности Алексей Ю. Шевяков
Electoral Reform and the First Congress of People's Deputies of the USSR Toshihiko Ueno
Внешняя политика Советского Союза в Восточной Азии: критический анализ Р. Ш. -А. Алиев
New Soviet Economic Strategy in Asia and the Pacific Victor L. Mote
Soviet Policy towards Japan and Western Europe : What the Differences Reveal Jonathan Haslam
Stalemate or Slow Progress? Japanese-Soviet Relations, 1986-1989 Tsuyoshi Hasegawa
Recent Trends in the Soviet-Japanese Economic Relations: High Expectations, Slow Progress Yasushi Toda
Japanese Perceptions of the Soviet Union Mayumi Ito
BOOK REVIEWS
Так похоже на Россию, только все же не Россия : О книге профессора Хакамада и не только о ней Георгии Кунадзе
Kaori Kawabata et al. *Cyclopedia of Russia and the Soviet Union* (Gilbert Rozman)
Masayuki Kouno, *History of Russian Ideas : a Lineage of Messianism* (Takafumi Kudo)
Kenji Iwata, *The Dynamics of Domestic Politics and Foreign Policy-Making in the Soviet Union* (Shugo Minagawa)
Eiichi Sato, *Arms Control and Disarmament at the Present : Nuclear Weapons and Diplomacy, 1965-85* (Naomi Koizumi)
Masaaki Kuboniwa, *Quantitative Economics of Socialism : Input-Output Approaches* (Kiichi Mochizuki)
Haruki Niwa, *An Analytical Estimate on Soviet Militaary Expenditure* (Yasuto Fukushima)
Sadayoshi Ohtsu, *Labor Market of the Current Soviet Union* (Shigeki Hakamada)
Teruyuki Hara, *Japan's Siberia Expedition : Revolution and Intervention, 1917-1922* (John J. Stephan)

Volume 9 (1991)

ARTICLES
International Migrations Connected with the National Conflicts in East-Central Europe in the First Half of the XXth Century Jerzy Tomaszewski
A Success Story : The German Colonists in New Russia and Bessarabia, 1787-1914 Detlef Brandes
Молодой Достоевский и французский романтизм Мичико Каназава
А. С. Пушкин и П. И. Рычков. Исторические источники пушкинской "Историии Чугачевского бунта" Коити Тоёкава
Первая мировая война и изменение продовольственной системы Российской империи Кимитака Мацузато
The Learning Heart : Western and Native Education in Ivan Turgenev's *Nest of Gentry* and Tanizaki Junichiro's *Light Snow (Makioka Sisters)* Patrick L. Alston
N. I. Konrad and the Soviet Study of Japan Robert M. Croskey
Attempts at Fostering Collaboration among the Russian Revolutionary Parties during the Russo-Japanese War Antti Kujala
The "Highly Crucial" Decision Making Model and the 1956 Soviet-Japanese Normalization of Relations Motohide Saito
Changing Factors in Recent Soviet-Japanese Relations Hiroshi Kimura
Local Factor in Soviet Northern Territories Politicts : A Partial Survey of the *Sovetsky Sakhalin* Daily Newspaper (October 1989-June 1990) Yakov Zinberg
The Japanese-Soviet Economic Future Shinichiro Tabata
Japan and USSR: Prospects for Economic Cooperation in the 1990's Aleksandr Kollontai
BOOK REVIEWS
Yasuhiko Yoshida. *Economic Development and Productivity Trends in the Soviet Union and East European Countries* (Minoru Nagata)

Akira Shigemitsu. *The Soviet National Economy* (Haruki Niwa)
Shingo Minamizuka. *The Reform of Hungary : National Tradition and the Third Road* (Kumiko Haba)
Tsuneo Morita, *A History of Hungarian Reforms* (Hiroyuki Okada)
Hokkaido University Library ed., *An Annotated Catalog of Japanese Manuscript Sources on Hokkaido, Sakhalin, the Kuriles and Russla in Hokkaido University Library* (Tsuyoshi Hasegawa)

Volume 10(1992)

ARTICLES

A Proposed Re-Examination of Russian History — George Yaney
Столыпинская реформа и русский агротехчологический переворот — **Кимитака Мацузато**
"Cleansing" the Soviet Far East, 1937-1938 — John J. Stephan
Gorbachev's Visit to Japan and Soviet-Japanese Relations — Tsuyoshi Hasegawa
Систематическое наблюдение социально-экономических реформ в СССР — **Андрей В. Белов**
Introduction of the Market Mechanism into the Soviet Command Economy — Katsuhiro Miyamoto
On an Inefficiency of Adjustment Mechanisms in Centralized Economies — Ken Morita
Останется ли место социализму в грядущем веке ? — **Юдзо Танака**
The Problems of Economic Rapprochement of the Russian Far East with Japan and Other Asia-Pacific Countries — Evgenii B. Kovrigin

PUBLICATION

Речи Андрея Тургенева — **Китидзиро Ямада**

BOOK REVIEWS

Ёсикадзу Накамура, *В поисках Святой Руси. Утопические легенды староверов* **(Риохэй Яасуй)**
Tokuaki Bannai, *Substrata of Russian Culture* (Yoshikazu Nakamura)
Haruki Wada, *Opening the Country : Russo-Japanese Boundary Negotiations* (Toshiyuki Akizuki)

Volume 11 (1993)

ATICLES

"Shock Therapy" in Russia : A Theoretical and Statistical Analysis — Shinichiro Tabata
Current Issues of Foreign Direct Investment in Russia — Alexander B. Parkansky
Некоторые вопросы внешней политики Горбачева в Азии — **Шуган Син**
A New Russo-Japanese Alliance ? : Diplomacy in the Far East During World War I — Peter Berton
Japanese Money and the Russian Revolution, 1904-1905 — Dmitrii B. Pavlov
The Twisted Bond : Technological Progress and the Evolution of Russian Literary Avant-Garde — Edward Możejko
«Мир Японии» в книге И. А. Гончарова «Фрегат Паллада» — **Елена А. Краснощекова**
Сказ Н. В. Гоголя в «Вечере накануне Ивана Купала» — **Томоко Фуздита**
Московский журнал et Аграя I — Haruko Sugiyama
Русская идея в ресской поэзии : Восток и Запад, «свое» и «чужое» в былинах — **Александр Петров**
On the Concept of Chernebog and Bielbog in Slavic Mythology — Myroslava T. Znayenko
Оренбург и оренбургское казачество в XVIII в. : Причины участия оренбургского казачества восстании Пугачева — **Коити Тоёкава**

Volume 12 (1994)

ATICLES

The Geopolitical Context of Russian Foreign Policy : 1700-1917 — John P. LeDonne
The Russian Military and the Northern Territories — Geoffrey Jukes
Peace and Prosperity in the Pacific Rim : Optimizing the Benefits of Japanese Assistance to Russia — Steven S. Rosefielde

Была ли "Демократическая Россия" демократической партией Александр С. Ципко
Political Fragmentation in Russia : Is the Multi- Party System Bound to Fail in a Post- Communist Country ?
Takayuki Ito
Triple Chauvinism in the New Eastern Europe Sabrina Petra Ramet
Роль личности в теории "родового быта" у К. Д. Кавелина Сюити Сугиура
Николай Петрович Баллин и его архив : Библиографическое исследование о пионере русско-украинского кооперативного движения
Сергей Н. Киржаев, Ёсио Имаи
On the Thematic Illustrations in 18th-Century Russian Cartography Simon R. Potter
Знал ли Дайкокуя Кодаю русский язык ? Иван П. Бондаренко
Сюжет оставшегося времени в жизни в рассказах Чехова и развитие его творческого метода
Митико Симизу
Проект письменности уйльтинского языка Дзиро Икэгами

Authors Index (Numbers after names as volumes of *ASI*)

- A -

Akizuki, Ta. 1,7
Akizuki, To. 10
Alston, P. L. 9

- B -

Bakos, G. 3
Baron, S. H. 3
Beksiak, J. 1
Berton, P. 7,11
Brandes, D. 9

- C -

Croskey, R. M. 9

- D -

Davies, N. 4
Dienes, L. 4
Durkin, A. R. 8

- E -

Evenko, L. I. 8

- F -

Fitzpatrick, S. 2
Friedberg, M. 2
Fukushima, Y. 8

- G -

Gibson, J. R. 1

- H -

Ha, J. M. 5
Haba, K. 9
Hakamada, S. 8
Hasegawa, T. 5,8,9,10
Haslam, J. 8
Hinada, S. 6
Hirooka, N. 6
Hough, J. 2

- I -

Ito, M. 8
Ito, T. 1,6,12

- J -

Jukes, G. 12

- K -

Katsenelinboigen, A. J. 2,4
Kimball, A. 6
Kimbara, K. 4
Kimura, H. 5,9
Koizumi, N. 8
Kojima, S. 6
Kollontai, A. 9
Komorida, A. 4
Kovrigin, E. B. 10
Krasnov, V. 3
Kuboniwa, M. 5
Kudo, T. 6,8
Kujala, A. 9
Kuryuzawa, T. 4

- L -

LeDonne, J. P. 12

- M -

Milivojevic, D. 6
Minagawa, S. 2,4,7,8
Miyamoto, K. 10
Mochizuki, K. 1
Morita, K. 10
Morita, T. 2
Mote, V. L. 8
Możejko, E. 11

- N -

Nagata, M. 9
Nakamura, Y. 7,10
Nishiyama, K. 7
Niwa, H. 9

- O -

Ocić, Č 4
Ohmura, I. 6
Ohtsu, S. 7
Okada, H. 9
Okuda, H. 6

- P -

Parkansky, A. B. 11
Pavlov, D. B. 11
Potter, S. R. 12

- R -

Ramet, S. P. 12
Rosefielde, S. S. 12
Rozman, G. 5,8

- S -

Saito, M. 9
Sakai, T. 6
Sato, T. 2
Scanlan, J. P. 7

Shimotomai, N. 1,4
Shiokawa, N. 3
Sipos, A. 2,6
Smith, G. 5
Stephan, J. J. 8, 10
Sugiyama, H. 11
- T -
Tabata, S. 7,9,11
Tardos, M. 6
Toda, Y. 8
Tomaszewski, J. 9
Treadgold, D. W. 5
- U -
Uchida, K. 5,6
Ueno, Ta. 5
Ueno, To. 8
-W-
Wada, H. 2
- Y -
Yamanouchi, A. 7
Yaney, G. 10
- Z -
Zeldin, J. 1
Zinberg, Y. 9
Znayenko, M. T. 11

(Written in Russian)

-А-
Алиев, Р.Ш.-А. 8
-Б-
Белов, А. В. 10
Бондаренко, И.П. 12
-И-
Икэгами, Д. 12
Имаи, Ё. 12
-К-
Камеяма, И. 4
Каназава, М. 9
Киржаев, С. Н. 12
Краснощекова, Е. 11
Кунадзе, Г. 8
-Л-
Ланн, Ж-К. 4
Лу-Наньцюань 6
-М-
Мацузато, К. 9, 10
Мотидзуки, Т. 8
-Н-
Накамура, К. 3
-П-
Петров, А. 11
-С-
Сасаки, Т. 7
Симизу, М. 12
Син, Шуган 11
Сиокава, Н. 7
Сугиура, С. 12
-Т-
Танака, Ю. 10
Тиба, Э. 1
Тоёкава, К. 9, 11
-Ф-
Фуздита,Т. 11
-Ц-
Ципко, А. С. 12
-Ш-
Шевяков, А. Ю. 8
-Я-
Яасуй, Р. 10
Ямада, К. 10

その他　出版物タイトル

スラブ研究センター研究報告シリーズ

No.1　日ソ関係の総合的研究（昭和54年度第1回ンンポジウム報告）:1979.9
No.2　日ソ関係の総合的研究（昭和54年度第2回シンポジウム報告）:1980.2
No.3　日ソ関係の総合的研究（昭和55年度第1回ンンポジウム報告）:1980.9
No.4　日ソ関係の総合的研究（昭和55年度第2回シンポジウム報告）:1981.3
No.5　スラヴ世界の過去と現在（昭和56年度第1回研究報告会）:1981.9
No.6　ソ連の隣国関係の比較研究（昭和56年度第2回研究報告会）:1982.3
No.7　コメコン経済の多角的研究―その制度と現状 :1982.3
No.8　ソ連の隣国関係の比較研究（昭和57年度第1回研究報告会）:1982.9
No.9　ソ連の隣国関係の比較研究（昭和57年度第2回研究報告会）:1983.3
No.10　スラヴ文化の内と外:1983.3
No.11　ブレジネフ時代の総合的研究（昭和58年度第2回研究報告会）:1984.3
No.12　歴史過程におけるソ連・東欧 :1984.3
No.13　ブレジネフ時代の総合的研究（昭和59年度第1回研究報告会）:1984.11
No.14　歴史における人物とその環境―日露関係を中心に（昭和59年度第1回研究報告会）:1984.11
No.15　ソ連東欧研究のフロンティア（昭和59年度第2回研究報告会）1985.3
No.16　過渡期にたつ現代ソ連―その総合的研究（昭和60年度第1回研究報告会）:1985.12
No.17　過渡期にたつ現代ソ連―その総合的研究（昭和60年度第2回研究報告会）:1986.3
No.18　スラヴ文化の精華（昭和60年度第2回研究報告会）:1986.3
No.19　過渡期にたつ現代ソ連―その総合的研究II（昭和61年度第1回研究報告会）:1986.9
No.20　過渡期にたつ現代ソ連―その総合的研究II（昭和61年度第2回研究報告会）:1987.3
No.21　ロシア・ソ連の伝統と変革（昭和61年度第2回研究報告会）:1987.3
No.22　ゴルバチョフ改革の波紋―ソ連内外晴勢の多角的分析（昭和62年度第1回研究報告会）:1988.1
No.23　ゴルバチョフ改革の波紋―ソ連内外情勢の多角的分析（昭和62年度第2回研究報告会）:1988.3
No.24　シュミット氏、現代世界を語る―前西独首相を囲む討論会（1987.5.25）全記録 :1988.6
No.25　ゴルバチョフ改革の波紋Ⅱ―ソ連内外情勢の多角的分析（昭和63年度第1回研究報告会）:1988.12
No.26　スラブ研究のための提言―スラブ研究推進の方法検討会の記録（1987.7-1988.1）:1989.3
No.27　欧米におけるソ連東欧研究 :1989.3
No.28　ゴルバチョフ改革の波紋Ⅱ―ソ連内外情勢の多角的分析（昭和63年度第2回研究報告会）:1989.3
No.29　社会主義圏における改革と変動I―ソ連を中心とする比較研究（平成元年度第1回研究報告会）:1989.12
No.30　ペレストロイカの思想を語る―ズナーニエ代表団との研究会（1989.10.23）の記録 :1990.3
No.31　社会主義圏における改革と変動Ⅱ―ソ連を中心とする比較研究（平成元年度第2回研究報告会）:1990.5
No.32　ロシア的なるものを求めて―センター地域文化部門研究会（1990.9.4）の記録 :1991.1
No.33　市場経済へ変貌するソ連―軟着陸の条件　センター生産環境部門研究会（1990.12.21）の記録 :1992.2
No.34　社会主義圏における改革と変動Ⅲ―ソ連を中心とする比較研究（平成2年度第2回研究報告会）:1991.4
No.35　市場経済へ変貌するソ連―軟着陸の条件　センター生産環境部門研究会（1991.5.15,7.11）の記録 :1991.9
No.36　ロシア文学の現在―センター地域文化部門研究会（1991.7.11）の記録 :1992.1
No.37　ソ連東欧諸国の変動と国際システムへの再統合（I）―センター国際関係部門研究会（1991.7.11-7.13）:1992.1
No.38　旧ソ連邦の模索する政治システムの諸問題―センター社会体制部門中間研究報告書 :1992.3
No.39　現代ロシアの文芸思潮をめぐって―センター地域文化部門（文学）研究会（1992.3.16）の記録 :1992.4
No.40　市場経済へ変貌するソ連―軟着陸の条件―センター生産環境部門研究会（1992.1.30,3.10）の記

録 :1992.5
No.41　ソ連・東欧の解体—模索する大小国家の群生（平成3年度第2回研究報告会）:1992.7
No.42　ソ連東欧諸国の変動と国際システムへの再統合（Ⅱ）—センター国際関係部門研究資料 :1992.8
No.43　歴史家は挑戦する—岐路に立つロシア史研究—センター地域文化部門（歴史）研究会（1992.2.2）の記録 :1992.11
No.44　東ヨーロッパ新秩序—センター地域文化・国際関係部門研究会（1992.7.17）の記録 :1992.12
No.45　スラブ・ユーラシアにおける変動と新秩序の模索（平成4年度第2回研究報告会）:1993.4
No.46　Soviet Society and Culture in the 1920 - 30s—センター地域文化部門研究会（1993.1.28）の記録 :1993.5
No.47　エリツィン政権下の政治システム—センター社会体制部門研究会（1993.3.30）の記録 :1993.6
No.48　ロシア近代社会における基層秩序—センター地域文化部門研究会（1993.1.29）の記録 :1993.7
No.49　Cutting the Gordian Knot : Responsible Government and Elections in Russia—センター社会体制部門研究会（1993.11.29）の記録 :1994.1
No.50　ロシア政治の再編　Realignment of Russian Politics—センター社会体制部門研究会（1994.1.27）の記録 :1994.3
No.51　ロシア・旧ソ連の市場経済移行をめぐる諸問題—センター生産環境部門研究会（1993.3.24,25）の記録 :1994.3
No.52　転換期のスラブ・ユーラシア—多元的分析（平成5年度第2回研究会）:1994.6
No.53　CIS - ロシア外交路線の現実—センター国際関係部門研究会（1994.3.17）の記録 :1994.6
No.54　ロシア・旧ソ連の市場経済移行をめぐる諸問題（2）—センター生産環境部門研究会（1994.3.28）の記録 :1994.10
No.55　前近代ロシア史研究の諸問題—センター地域文化部門（歴史）研究会（1994.3.28）の記録 :1994.12
No.56　体制移行期における地域社会 :[近刊]
No.57　スラブの世界：学際的研究へのアプローチ　（平成6年度第2回研究報告会）:1995.5

欧文報告書

Facing Up to the Past: Soviet Historiography under Perestroika. Ed. by Takayuki Ito, 1989
The World Confronts Perestroika: The Challenge to East Asia. Ed. by Takayuki Ito, 1991
Thorny Path to the Post-Perestroika World: Problems of Institutionalization. Ed. by Shugo Minagawa, 1992
New Order in Post-Communist Eurasia. Ed. by Osamu Ieda, 1993
Between Disintegration and Reintegration: Former Socialist Countries and the World since 1989. Ed. by Takayuki Ito & Shinichiro Tabata, 1994
The Soviet Union Faces Asia: Perceptions and Policies. Ed. by Tsuyoshi Hasegawa, 1987

科学研究費補助金報告書類

ブレジネフ時代の総合的研究：1983-1985.3（文部省特定研究経費研究成果報告書）　1985
ソ連東欧諸国の改革と世界システムへの衝撃（1）（平成元年度文部省科学研究費補助金[国際学術研究]）1990
ソ連経済統計データベースの研究　（昭和63年度科学研究費補助金「研究成果報告公開促進費（データベース）」研究成果報告書）
ソ連経済のマクロ政策モデルの作製とその応用研究　（昭和61-62年度科学研究費補助金（一般研究(B)）研究成果報告書）　1988
日ソ間における相互イメージの変遷（昭和60-62年度科学研究費補助金（一般研究(B)）研究成果報告書）1988

公開講座報告集

ロシア極東への視座（1994年度公開講座）1994.11

研究者名簿

わが国におけるソ連・東欧研究の動向：List of Researchers in Soviet & East European Studies in Japan：1972.10.1

ソ連・東欧研究者名簿　Directory of Japanese Scholars in Soviet & East European Studies　改訂版：1977.3.25

Directory of Japanese Scholars in Soviet & East European Studies in Japan：1978.3.20

ソ連・東欧研究者名簿　第3版：1988

スラブ・東欧研究者名簿　第4版：1994

文献目録・蔵書目録類

A Descriptive Guide to Russian-Related Research Materials at Hokkaido University: Individual Collections and Russian Language Microform Materials, 1993 (Slavic Bibliography Series No.1)

Ucrainica at Hokkaido University: a Preliminary Bibliography, 1995 (Slavic Bibliography Series No.2)

ソ連東欧研究文献目録—1978-　:1978-89（1976-77年版は『スラヴ研究』No.22,23に所収）

欧文図書目録—1953-1965　Library Catalogue of The Slavic Institute Hokkaido University :1966.7.1

欧文図書目録—1966-1970 :1970

北海道大学法学附属スラブ研究施設所蔵欧文雑誌目録—1953-67 :1967

マイクロフィルム所蔵目録—1953-1971 :1971

北海道大学スラブ研究センター所蔵外国雑誌目録—1953-1988 :1988

点検評価報告書

スラブ研究を研究する　（北海道大学スラブ研究センター点検評価報告書　1）:1994

5. 図　　書

秋月孝子　スラブ研究センター図書室の歩み

出典『スラヴ研究』No. 42 (1995年 3 月) 15-40頁

秋月孝子　図書室の現状

スラブ研究センター図書室の歩み

秋月孝子

1. 法学部附属施設の時代 (1953～1978)

スラブ研究センターの前身である「スラヴ研究室」* が、旧ソ連・東欧地域の総合的な研究機関として、北海道大学の学内措置により設置されたのは1953 (昭和28) 年 6 月24日のことであった。その後1955 (昭和30) 年 7 月には「北海道大学法学部附属スラヴ研究所」(1955年 7 月 1 日～1956年 1 月31日)[1] として官制化され、さらに「法学部附属スラブ研究室」(1956年 2 月 1 日～1962年 3 月31日)、「法学部附属スラブ研究施設」(1962年 4 月 1 日～1978年 3 月31日) と名称を替えながら、25年の歳月をへて1978 (昭和53) 年 4 月 1 日には独立した研究機関として「学内共同教育研究施設スラブ研究センター」に改組された。1990 (平成 2) 年にはさらに「全国共同利用施設スラブ研究センター」となり、1995 (平成 7) 年は丁度創立40周年にあたる。

スラブ研究センターは、創設以来スラブ地域 (旧ソ連・東欧地域) の学際的総合研究を目的とし、旧ソ連・東欧諸国 (旧チェコスロヴァキア、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、ブルガリア、旧ユーゴスラヴィア、アルバニア) の歴史・文学・政治・経済・国際関係・法律に関する研究を行なっている。それはまた研究活動のほかに、幅広い研究交流、文献・資料の収集、資料情報活動によって大学の枠を越えたスラブ研究の中心となることを目指している。センターの図書室も、このセンターの学際的総合研究を支えつつ、センターの歴史と共に歩み、今日に至っている。

準備期 (1953～1955)

スラブ研究関係資料の収集は、わが国における旧ソ連・東欧地域を含むスラブ研究の発展と密接に結びついている。戦前にわが国で組織的なソ連研究を行なっていたのは、満鉄や外務省関連の諸機関にすぎず、大学ではロシア文学や語学の研究以外はほとんど行なわれていなかった。このような過去の歴史におけるソ連・東欧研究の片寄りは、当然のことながらこの分野の資料収集にもあらわれていた。とくに戦前は自然系の総合大学であった北大の場合は、スラブ関係の文献は皆無にひとしかった。このような北大に設置された「スラヴ研究室」は、その当初から資料収集を重要な活動の一部としなければならなかった。

「スラヴ研究室」が設立された1953 (昭和28) 年は戦後間もなく、予算的にも窮迫した時代であったが、アメリカのロックフェラー財団から図書購入費として500万円[2] が寄贈され、国内外の古書市場からもかなりまとまった収書が可能となった。最初の研究員となった木村彰一教授、鳥山成人助教授の両氏はスラブ研究に必要な基本図書リストを作成し、それに基づいて、米国議会図書館スラブ部門部長ヤコブソン氏 (Sergius Yakobson) (有名なスラブ言語学者ヤコブソン博士の令弟) が発注を行ない、絶版などで入手不能なものは類似のものにふり替え、それらがスラブ研に寄贈の形式で収められたようである[3]。それらの大部分は第2次世界大戦の戦中・戦後にかけて刊行された英・独・仏語の文献であるため、わが国では入手できなかったもので、「スラヴ研究室」にとってはコレクションの最初のまとまった核となった[4]。当時の収書の基礎カードを見ると、単行本・雑誌ともに基本的な資料が精選して集められており、マイクロフィルムによる補充も始められていた (『マイクロフィルム所蔵目録 1953-1973』参照)。

「スラヴ研究室」は、創立から2年間(1953~1954)は、制度上の機関ではなかったので、研究室の運営は文部省からの特別の科学研究費によりまかなわれていた。科学研究費補助金による機関研究のテーマは「ロシア及びソヴェト社会における中間層の役割に関する研究(第一期ナロードニキ関係資料の収集及びその研究)」で、研究代表者は木村彰一教授であった。この機関研究報告が1部残されている。それによると1953~1954(昭和28~29)年の2年間は、毎年130万円配分され、研究設備及び支出経費の内訳リストが添付されており、それを見ると当時受入れられた本の1冊1冊に出会うような思いがして興味つきないものがある。さらに今筆者の手許に残されているメモ的資料は、資料収集のための基本的な文献カード、リストの作成準備に費やされたエネルギーが大変なものであったことを窺わせる[5]。その頃の予算の支出管理は文学部の会計掛でおこなわれていたとのことである[6]。爾来スラブ研の図書費は、今日に至るまで科学研究費が重要な役割を果すことになる。

草創期(1955~1970)

1955(昭和30)年7月スラヴ研究室は官制上の研究機関となり、法学部に附属することになった(1955年7月1日~1956年1月31日の期間は「スラヴ研究所」、1956年2月1日~1962年3月31日の間は「スラヴ研究室」と称していた)。建物としてはそれまで「北方文化研究室」が使用していた、もと札幌農学校の昆虫学講堂の一部があてられ、石造りの昆虫標本室が書庫となった。官制化とともに専任の研究員・助手・事務職員の定員も認められ、研究体制も整い、1957(昭和32)年には『スラヴ研究』の第1号が発刊された。当時の事務担当者として、助手の更科道子氏、事務職員の豊田久馬彦氏と芳賀柳二氏の3人が配置され、図書の発注・受入・整理・貸出業務に携わっていた。当時北大では、各学部で支払われた図書は、支払い内訳と各学部の物品管理官の下で付与された物品番号票を付して附属図書館に送られ、そこで目録・分類が行なわれていた。しかしスラブ研では、図書の大部分がロシア語のこともあって、スラブ研で法学部の物品として登録し、目録・分類も更科・芳賀両氏によってなされていた。筆者は高校時代からの友人であった更科道子助手を訪ねてしばしばスラブ研究室に出入りしていたので、木綿の風呂敷いっぱいにロシア語の本を包んで連んできていた、ナウカ社札幌営業所の荒木五郎氏(のちナウカ社社長)のことや、冬には木造部分の建物が深い雪のなかにすっぽりと埋もれ、中でダルマストーヴを燃やしていた狭い事務室の光景を今でも憶えている。

1960(昭和35)年にチェコスロヴァキア大使が北大を訪れ、杉野目学長自ら定山渓に招待し、鳥山先生も同行したと仄聞しているが、この時チェコ語の歴史・言語学に関する図書が多数スラブ研に寄贈されたとのことである。このことについての記録は、スラブ研には残されていないが、『北海道大学一覧』に「本施設の存在と研究成果は、米国以外からも注目され昭和二十五年には、チェコスロヴァキアから約二百点の学術誌と図書の寄贈を受けた」[7]と記されている。筆者が1966年8月スラブ研に移ってきたとき、当時の担当者からその現物の一部を見せてもらった記憶がある。それらは基本的な歴史資料集なども含まれており学術的に貴重なものであるとの印象を強く受けた。これらの本は現在でもよく利用されている。鳥山先生のお話では、この時のチェコスロヴァキア大使は優れたスラヴィストであったとのことで、寄贈図書の選択も大使自身の手によったものかもしれない。

「スラブ研究室」は1962(昭和37)年に「スラブ研究施設」と改称され、1966(昭和41)年には法学部研究棟の新築にともない、事務室と研究室はその2階部分に移転した。その際にスラブ研究施設の蔵書の大部分は隣接する中央図書館の書庫3層に移され、それ以後図書の貸出業務は図書館の管理に委ねられることになった。センターの歩みを省みるとき、木造の小さな建物を利用していた10年間は、古きよき時代であったと思われる。

スラブ研の蔵書は、創立から20数年間はあまり増えることがなかった。年間の増加冊数は平均1,000冊前後で、1975年4月現在の蔵書数は、19,081冊(洋書17,606、和書1,475冊)であった。その大部分はスラブ研設立の1953年以後の出版物である。1966年には創立10周年を記念して『欧文図書目録1953~1965』が刊行された。B5判2段組み235ページのタイプ印刷である。欧文と露文に大別され、デューイの10進分類によって分類されているが、索引がないのは残念である。当時図書室は、設立当初の更科道子助手と豊田久馬彦事務官が去り、芳賀柳二、大垣絢、成田京子の3人の事務官で運営されていた[8]。そのほか出かず子助手が研究のほか紀要の編集、シチェドリン図書館との図書交換業務、マイクロフィルムの整理(創立から1968年までのマイクロフィルムを検収しカードを作成)に従事していた。

筆者が芳賀柳二氏の後任として研究施設に来たのは、1966年8月のことである。爾来30年スラブ研究施設とともに歩むことになるとは予想もしなかった。スラブ研究センターの図書業務は創立以来助手ポストの要員により分担されてきた。このことは外国のように、スラブ諸国の図書を扱う仕事は「選択から整理」に至るまで、かなりの専門的知識と能力が必要なので、教官ポストをさく必要があるという考えに基づいていたようである。したがってスラブ研では、更科道子(1956年6月~1962年3月)、佐野優子(1969年4月~1972年8月)、坪谷七魚子(1972年9月~1976年5月)、松田潤(1976年4月~)、大塚恵理(1986年5月~1988年3月)、小竹史緒(1988年4月~1989年3月)、杉浦和子(1989年4月~1990年3月)と相次いで助手ポストが図書業務をカヴァーしてきた。

この時期の研究施設の年間受入冊数は1,000冊たらずとはいえ、乏しい図書購入費を補っていたのは、文部省の科学研究費補助金であった。この研究費は毎年自動的に交付されるとは限らない不安定なものであったので、図書購入計画に大きな影響を及ぼした。幸いなことに兼任研究員の協力によって共同研究が組織され、1953年以来40年間にわたり、ほぼ恒常的にいろいろな種類の科学研究費が交付されて現在に至っている。1966年から1975年の10年間にわたる費目別受入図書冊数表は、この間の事情を物語るものである[9]。

1968年から1969年にかけて全国に吹き荒れた大学紛争の嵐は北大にも押し寄せ、1969年の北大紛争は法学部に間借りしていた小さなスラブ研究施設にも及んだ。同年5月の本部封鎖に始まり、7月に図書館、8月17日には文系4学部の校舎が封鎖された。この年の秋は、研究施設の事務室も法学部の事務室とともに医学部附属病院旧看護婦宿舎に間借りして過ごすことになった。恒例の週1回の事務会議の開催もままならず、旧市電の通りに面していた旧ナウカ書店の2階や、正門前にあった中屋菓子店の2階などを転々としながら、1週間ごとに研究員と事務職員との打ち合わせの会合が開かれた。10月末文系4学部の封鎖は解除されたが、研究施設のあった法学部研究棟の東側2階は、図書館への通路にもあたっていたため、建物の被害は大きかった。しかしスラブ研の紛失した図書はドイツ語の辞書1冊のみであった。それには封鎖に先だって受入未支払い本などはダンボールにつめて封印し、旧市電通りの小さな雑貨店の倉庫に一時避難するなどの事前の措置をしていたことが役立った。封鎖解除後、被害による紛失図書リストの提出を求められたが、それは他学部と比較すれば被害のうちに入らぬものであった。

過渡期(1970~1978)

1970(昭和45)年北大紛争が一応解決し、スラブ研究施設は法学部研究棟の2階から3階に移ることになった。同年「北海道スラブ研究会」が設立され、第1回年次総会が開かれた。この研究会は学内外の研究者に開放され、設立25年後の今日まで存続している。

この時期のスラブ研図書室にとっての大きな出来事は、附属図書館との統合問題であった。大学紛争後の時期は大学全体が改革の機運に満ち、そのことは附属図書館の改革の努力にもあらわれた。1970年には今村館長の『大学図書館の未来像:その理念を中心にして』と

いう報告書が作成され、「北海道大学改革検討委員会」のI-2専門委員会が「図書館に関すること」を分担することになった。この作業を補助するために委員長(館長)の諮問機関として図書館員よりなる事務改善委員会も発足した。上記の専門委員会は、今村委員長の図書館改善案を討議して、評議会へ送ったが、そこでは自然科学系部局における図書分散の是正、人文社会科学部局図書室の図書館との統合が勧告された。学内組織の中で孤立していたかのように見えた附属図書館は、「北海道大学改革検討委員会」の一つの専門委員会によってはじめて、学内の他の組織と同列の有機的な位置づけが与えられることになったのである。この勧告に基づいて1975年4月には法学部図書室の附属図書館との統合が実現した。

人文社会系図書室と附属図書館の統合問題の目指すところは、その出発点において今村館長の『大学図書館の未来像』をうけ、「大学図書館の教育と研究の基本的な目的の実現と、今後の図書の増加、それにともなう書庫スペースの問題、定員削減・定員不補充等の現実的な諸問題に対処するためにも統合は合理的な措置である」との判断に基づくものであった。当時欠員不補充と定員削減の問題は大学全体に深刻な波紋を引き起こしていた。これこそ附属図書館との統合に際して、いかなる理由よりも局囲に強い説得力をもつものではなかったろうか。法学部図書室の統合の場合も単に法学部側の理由からのみでなく、受入れ側の図書館にとっても9名の定員[10]の移行はこのうえなく魅力的なものであったにちがいない。この問題は、大学紛争直後の1970年から5年の歳月をかけて、今田事務長はじめ当時の歴代の学部長、山畠図書委員、全図書職員の討議の結果、全員の合意のうえ決定されたものであった。筆者も何度か法学部の統合問題懇談会に出席した。一般には法学部の図書室が統合されるならば、その附属研究施設であるスラブ研の図書室がその決定に従うのは当然と思われていた。しかしスラブ研は、独自に討論を重ね、法学部とは独立の行動をとることになった。

スラブ研図書室の附属図書館との統合問題は、解決を見出せないまま今日に至っており、現在のスラブ研究センターにとっても大きな課題となっているので、その経緯を簡単に説明しておきたいと思う。スラブ研図書室が法学部図書室と同時に統合しなかった理由は、附属図書館との統合に単に反対するのではなく、人文・社会系図書室全体の統合を前提に、スラブ系の文献を一括して取り扱うスラブ部門を附属図書館に設置するという理念に基づくものであった。ある意味ではこれこそ、今村館長の「大学図書館の未来像」の理念に合致するものではなかったろうか。

1970(昭和45)年春、法学部図書室の附属図書館との統合問題の動きが具体的に始まりつつあることを仄聞した外川図書委員は、上記の考えに基づいて「図書館・法学部図書の合体について」と題する文書を附属図書館に提出した。しかしこれにはなんらの回答もされなかった。スラブ研では慎重な討議の結果、施設長以下全員の出席のもとに図書館の部・課長、担当掛長と統合問題懇談会を開いた。スラブ研側からは、スラブ研図書室と図書館の統合を「図書館改善案」の理想的なモデルとすべく、スラブ部門(Slavic Division)設置の提案がなされた。それはスラブ研の資料を核に法・文・経・教育の各学部のスラブ関係資料を一貫して収集・整理し、参考業務を行なうことを目的としており、この提案が受け入れられるならば喜んで統合される用意がある旨の説明がなされた。スラブ研側はさらに統合に際しての附属図書館側の具体的な青写真の提示を求めた。しかし附属図書館側からは明確な反応はなく、これらについては持ち帰って後ほど回答することになった。しかしその回答はついに得られず、スラブ研図書室の統合問題についての図書館側との話し合いは、そのまま中断された。

その後4年を経て、スラブ研は附属図書館から1974(昭和49)年4月1日付け文書で突然「人文・社会系学部附属図書館書庫内図書等の管理について」[11]という通知を受取った。これに対して、外川施設長は同年4月23日付け文書で「法学部図書業務を統合(集中化)する件については、スラブ研究施設は、法学部とは別に独白の立場から附属図書館と協議する」旨を伝えた。

法学部図書室の統合問題は、発端となった1970年以来薮・石川の2学部長時代をへて、小暮学部長のとき、すなわち1975(昭和50)年3月、「法学部図書掛の附属図書館への統合に関する必要な事項についての申し合わせ」(法学部図書掛の附属図書館への統合に伴う図書業務等の取扱いに関する確認事項)により終止符が打たれた。法学部図書室の附属図書館との統合問題に精力的に取り組み、自己の論理を貫いたのは今田事務長であった[12]。

1975年4月1日、法学部図書掛は業務の統合化とともに解体し、図書掛職員全員(1名の定員は学事掛に据置くことになった)は附属図書館へ配置換えになり、スラブ研の図書業務と1名の図書定員はそのまま取り残されることになった。1970年に端を発した法学部図書室の統合問題が決着を見るまでに、筆者は法学部図書職員の「統合」をめぐる討論の内容にいささか絶望的になっていた。そこで自らの見解を示すために、『スラヴ研究』の「図書室だより」に執筆したのが拙稿「大学図書館の集中管理制をめぐって」である[13]。

1971(昭和46)年には『マイクロフィルム所蔵目録1953~1971』(札幌、北海道大学法学部附属スラブ研究施設、1971)が作成された。スラブ研では設立の当初からマイクロフィルムによる文献資料の補充に努めてきたが、単行本や雑誌と違ってその内容を検索するのが困難だったからである。また単行本や雑誌についても、1972年春には、創立10周年を記念して刊行された『欧文図書目録1953~1965』を引き継ぐかたちで、5年の累積版『欧文図書目録1966~1970』(札幌、北海道大学法学部附属研究施設、1972)を、翌1973年には『欧文雑誌目録1953~1973』(札幌、北海道大学法学部附属スラブ研究施設、1973)を相次いで刊行した。後者の目録の特色は二つあり、その一つは雑誌の所蔵巻年次の表示が現物とマイクロフィルムを併せた形でなされていること(マイクロフィルムの所蔵部分はアンダーラインで示されている)、いま一つは誌名の変遷等の書誌情報が豊かであることである。

1972(昭和47)年春、百瀬研究員により、はじめてフィンランド語セミナーが開かれた。5・6人の出席者であったが、当時文学部・言語学科の学生で、現在小樽商大の津曲助教授も参加者の1人であった。スラブ研ではフィンランド語の本や雑誌も受入れられており、最低の文法的知識も必要だったので、筆者も参加したが3ヵ月で挫折した。同年内外の研究者から久しく望まれていたスラブ関係研究者名簿が『わが国におけるソ連・東欧研究の動向』[14]と題して初めて刊行された。昭和47年度文部省科学研究費補助金によるものである。これは『ソ連・東欧研究者名簿』の初版にあたり、集められたデータの最終編集の任にあたったのは坪谷助手であった。

1973(昭和48)年4月には日本学術振興会の招きでポーランド科学アカデミーからシリジニスキ博士(Jerzy Śliziński)が訪れ、約1ヵ月滞在した。研究テーマは「比較文学の方法論の諸問題」で、彼は8ヵ国語が読めることを自慢していた。シリジニスキ博士はスラブ研に長期滞在した最初の外国人であった。同年秋には伊東研究員によりポーランド語入門講座が開かれた。これは大変な人気で、参加者は北大のみでなく、他大学からも集まり、参加者の層も多様で、学部学生から年輩の教授にまでおよび、毎回座席が足りないくらいであった。翌1974年には毎週土曜日の午後、会話のレッスンとテキストの講読会が行なわれた。テキストは19世紀ポーランド思想史で、こちらのほうは参加者が少なかった。その一人は現在群馬県立女子大の岡野恵美子女史であった。さらに継続して1975年には福田ヤニーナさんを招いて会話のレッスンが開かれた。この講習会を通してポーランド語をマスターし、ポーランドに留学する人が続々あらわれた。外川継男、早坂真理、栗生沢猛夫、灰谷慶三、鈴木秀一などの諸氏がそうである[15]。

1975(昭和50)年は創立20周年にあたり、7月クラーク会館でささやかな祝賀会が開かれた。同年12月、北大で国際法の専門家であった和田禎純教授の旧蔵書の一部が、御子息の札幌医大教授和田寿郎氏から寄贈された。洋書98冊、和書102冊、和雑誌5点で、1900年の2・30年代から第2次世界大戦前に出版されたものが多い。内容は専門分野の国際法に限らず、

満州問題・植民地問題に関するものも含まれる。1976年には「ソ連東欧研究文献目録」が松田助手により編集され、『スラヴ研究』22号に収録された。1978年以降は『スラヴ研究』から独立し、単独の冊子として発行されることになった[16]。

2. 学内共同利用センターの時代(1978~1990)

1978(昭和53)年法学部附属スラブ研究施設は、学内共同教育研究施設スラブ研究センターに改組され、教授定員7、客員教授3(うち外国人2人)のほか、多数の学内外の併任研究員を擁する独立した研究機関となった。これまでの25年間にそれほど大きな変化の見られなかったスラブ研究施設の組織に著しい発展がみられたのは、この年の改組以降のことであった。このことは図書予算の面でも大きな変化をもたらした。教官積算校費としての一般経常費の他に、特定研究経費、設備充実費が加わり、かつてないほど豊かな図書費を計上することができた。20年間、年間1,000冊たらずの増加冊数しかなかった図書室に、多数の資料の購入を可能にしたのは、同年12月に何の前触れもなく配分された1,600万円の設備充実費であった。この予算は筆者を忙しさの渦中に迫い込んだが、長年購入を望んでいた多くの資料との出会いは、限りない充実感をもたらした。この時購入したものの中には、『ブロックハウス・エフロン百科』(全86冊、1890-1907)[17]、『ソビエト大百科』初版(全66冊、1926-1947)、フーヴァー研究所の『蔵書目録』(全63冊及び第2補巻6冊)、そのほか多数のマイクロフィルムがあった。

さらにこの1978(昭和53)年度に特筆すべきは、文部省の「特別外国図書購入費」により附属図書館に三つの大型スラブ関係コレクションが受け入れられたことであった。それらは「ヴェルナツキー・コレクション」、「ポリス・スヴァーリン・コレクション」、「18世紀ロシア文学コレクション」であり[18]、いずれも北大におけるスラブ関係コレクションの欠落部分を補う貴重なものであった。最初の二つはスラブ研が文部省に申請したものである[19]。このことは文部省も北大の文系図書については、特にスラブ部門を重視していることを示しているように思われた。

同年10月には第1回外国人客員研究員として、カービー氏(E. Stuart Kirby)とドミトリッシン氏(Basil Dmytryshyn)が6ヵ月滞在の予定で着任した。

1979(昭和54)年には、翌年度の概算要求に対する内示において情報資料部の設置が認められ、助教授ポストが増えることになった。同年3月には『スラブ研究センターニュース』の第1号が刊行され、1994年12月現在59号に至っている。初号はわずか4ページのタイプ印刷であった。現在のものと比較すると、スタイルは全く変わっていないが、ニュースの量の増大が隔世の感を与える。第2号は同年7月に刊行され、この号に初めて「図書室だより」欄が登場し、それ以来図書に関するいろいろな情報が掲載されることになった。『スラブ研究センターニュース』第2号の「図書室だより」には、故前谷清氏と池田博行氏から「ロシアの交通論関係図書」が寄贈されたこと、また前年度の設備充実費で購入した主な図書が紹介された。この年には特別設備費で「ロシア関係学位論文」1,131点を購入した。さらにこれまで年刊だった『スラヴ研究』が半年刊となり、23号が1979年1月に、24号が同年7月にそれぞれ刊行された。半年刊の形態は4年間(1979~1982)続いたが、翌1983年に欧文紀要*Acta Slavica Iaponica*が刊行されるにおよんで、1982年10月の秋期号30号をもって、再び年刊出版物にもどることになった。

同年7月には、第1回「日ソ関係の総合的研究」と題するシンポジウムがセンタにおいて開かれ、このシンポジウム報告は『研究報告シリーズ』第1号(*Slavic Research Center Occasional Paper*)として9月に刊行された。これ以来、年2回開催されるシンポジウム報告の出版が続けられ、1994年12月現在55号に達している。同年9月ハワイ大学のポランスキー

女史 (Patricia Polansky) が訪れ、「アメリカにおけるロシア語文献の収集について」と題して講演が行なわれた。

この年度の外国人客員はボイター氏 (Albert Boiter)、クーシン氏 (Vladimir V. Kusin)、ホレツキー氏 (Paul L. Horecky) の3氏であった。同年9月に帰国したクーシン氏の後をうけて10月から半年滞在したホレツキー氏は、長年米国議会図書館スラブ部門の部長を勤め、すぐれた書誌を次々と編集刊行して、アメリカにおけるこの分野の第1人者であった (このときは議会図書館を引退し、ジョージ・ワシントン大学の所属であった)。この度の招聘は、スラブ研のコレクション構築のための助言と協力を目的とするものであった。彼は第2次大戦後アメリカに亡命したチェコ人で、スラブ系諸言語に堪能であると同時に、書誌編纂の経験も豊かで、積極的にスラブ研の蔵書の弱点をカヴァーすべく協力を惜しまれなかった。筆者も親しく交わる機会を得て、コレクションについていろいろのアドヴァイスを受け、書誌作成等についても多くのことを学んだ。この半年は筆者にとってかけがえのない有意義な楽しい日々であった[20]。

この頃になると予算の増大に伴い、図書業務も爆発的に増えて現状では処理しきれなくなってきたので、事務補助員1年間の採用を大学当局に依頼した。1978年度に図書業務のために採用されたのは澤田美喜子さんで、翌年その後を引き継いだ沼田清美さんは北大文学部露文科の出身であった。彼女の手になる大量のマイクロフィルム、フィッシュの検収リストは、正確さと分かりやすさの点で類をみないほどみごとなものであり、今も保存されて役立っている。雇用期間はいずれも1年に限られていたが、翌1980年には例外的に再び澤田美喜子さんが事務補助員となった。彼女の後任者は北大露文出身者松崎初江さんで、1981年度はスラブ研で事務補助員の1年間の雇用が認められた最後の年となった。その後は事務補助員ではなく、協議採用による半年間の雇用報告で雇われる臨時用人の形態が主流となった。しかし北大内における事務官の定員削減・定員不補充がきびしさを増すにつれ、臨時用人の雇用も次第に難しくなり、雇用の人数なども厳しく制限された。半年間の雇用期間は、多岐にわたるスラブ系言語の資料をとり扱う図書業務の場合、あまりにも短か過ぎて効率が悪いので、1年の前半は雇用報告で、後半は科学研究費でつないで、全体として通算1年間の雇用を可能にする方法が長い間採用された。特に1981 (昭和56) 年に概算要求の「第1次基本図書整備計画」が認められ、第2次、第3次と継続されるに及んで、未整理図書は累積する一方であった。この膨大な未整理図書の現状を打開するため本部との交渉の結果、1992 (平成4) 年4月特別措置として臨時用人の2年間採用が認められることになり、現在に至っている。ここで強調したいのは、スラブ研の図書業務はこれらの人たちの協力によって辛うじて支えられているという実情である。

1980 (昭和55) 年の図書室のニュースは、フロリダ大学の故レンセン教授 (George Lensen) の旧蔵書の購入であった。レンセン教授は1979年度の当センターの外国人客員研究員として来日が予定されていたが、1979年1月5日不慮の交通事故で急逝された。その蔵書がレンセン末亡人の好意によりスラブ研に受入れられたのは、くすしき因縁というべきかもしれない。同教授の専門は、17世紀末より現代までの日露・日ソ関係であり、この分野の世界的権威であった。コレクションの特色は、日露・日ソ関係、ソ連の極東政策、ソ連の周辺地域の歴史・文化・外交関係に関するものが精選されたかたちでまとまっていることである。単行本 (露文・欧文・和文からなり、総数2,500点、3,200冊) のほかに、雑誌類、文献のマイクロコピー、多数の手稿資料が含まれている。その中には遺稿の*Balance of Intrigue*の膨大なタイプ原稿などがそのままのかたちで残されている[21]。

この年の5月にはハーヴァード大学ウクライナ研究所のグリムステッド女史 (P.K. Grimsted) がセンターを訪れ、「ソ連の文書館: その現状と西側研究者の受入れ」と題して講演会が開かれた。

同年7月、駐日ルーマニア大使ボグダン氏(Radu Bogdan)が北大を表敬訪問され、スラブ研究センターにも立ち寄った。この時350冊余のルーマニアに関する図書が寄贈され、それらの展示会が7月24日~26日までの3日間附属図書館資料展示室で開かれた。1964(昭和39)年にも170冊余が寄贈されており、ルーマニア政府からの寄贈図書は、今回の寄贈図書を加えると500冊以上にのぼる。

この年の秋(1980年9月29日~10月4日)西ドイツのガルミッシュ=パルテンキルヘンで第2回ソ連・東欧研究世界会議が開かれ、スラブ研からは木村汎教授と筆者が出席した。この会議の特色の一つに図書関係部会の併置があげられる。アメリカやヨーロッパでは研究と資料の蓄積、相互サービスは一体となって動いていることを体験させられた会議であった[22]。

同年10月にはスラブ研究センターの増築工事が始まり、翌1981年3月竣工した。当時の法学部の3階建ての上に2階を増築し、スラブ研究センターは1階と4・5階を使用し、1階は事務・図書フロアー、4階は会議室など、5階は研究室として使用されることになった。使用面積はいままでの517平米から3倍強の1,655平米になった。図書室についていえば、新築ではないのでいろいろの制約があり、全体の面積は増えたが、利用上は多くの問題が残された。参考室・雑誌室は独立し、これらの部屋は通常は施錠されているため、使用に際してそのつど利用者が鍵を開けることになり、利用上の管理は全くの野放しとなった。外国人研究員のなかには、鍵をポケットに入れたまま借用手続きもせずに雑誌や新聞をもってエレヴェータで研究室に直行する人もおり、面白い記事があると資料を他の人にたらい回しにして行方不明になることもあった。あちこち探しまわって最後に研究員の本棚や長椅子の上で発見されることもあり、新聞・雑誌室の鍵の探索も珍しいことではなかった。この問題が解決されたのは、14年後の1994年のことである。

この年の秋には、特別設備費が配分され、科学研究経費、経常費合わせて1980(昭和55)年度の図書購入費は4,490万円にのぼった。

スラブ研究センターは、外見上は建物も増築され、国内外の研究者の交流や研究活動も活発になったが、内情はそんなに豊かなものではなかった。この頃のスラブ研究センターの受入れ図書冊数は、臨時の予算措置により、少しづつは改善され増加しつつあったとはいえ、諸外国のスラブ研究機関のすぐれたコレクションとは比較にならなかった。

スラブ研ではこの現状を打開するために、1981年の概算要求に「基本図書整備5ヵ年計画」(昭和56年~60年)を申請することになった。この計画は、わが国のスラブ地域研究の発展に必要不可欠な基本資料を短期間で重点的に整備することを目指したものである。アメリカにおけるスラブ地域研究の主導的な機関の一つであるイリノイ大学ロシア・東欧研究センター(1948年設立)をモデルとして、その5分の1の規模を目標に計画がたてられた。1980年当時イリノイ大学の蔵書数は約55万冊、スラブ研の蔵書数は46,000冊であった。特に図書の要求資料の作成は、はじめての試みでもあり、法学部会計掛経由の本部の指令は紆余曲折があって困難を極めた。要求金額1年間3,000万円、5年間総額1億5,000万円にのぼる内訳に個々のタイトルと冊数と金額を記入することが求められた。この気違いじみた作業は、スラブ研スタッフ全員の昼夜わかたずの努力とナウカ書店の協力もあって、一応形式を整えて完成した。手稲山の向こうに広がる初夏の真っ赤な夕日にそまった黄昏を見ながら、このむなしいような仕事に取り組んだ日々も今は懐しい思い出である。

1981(昭和56)年には、前年の努力のかいあって「基本図書整備5ヵ年計画」(1981~1985)が承認され、実現の運びとなった。しかし要求額は全額ではなく、全体の約3分の2にあたる年間1,920万円、総額9,600万円であった。とはいえ図書費のやりくりに日夜明け暮れていた筆者にとって、この予算決定のニュースは筆舌につくしがたい喜びであった。同時に今まで長い間保留されていた高額の資料を計画的に発注することも可能になり、古書市場のカタログの丹念なチェックも始まった。図書委員外川継男教授の名前でスラブ研の運営委員、併

任研究員に宛て、「一点10万円から100万円の範囲で購入希望資料の推薦」を依頼した。主として学内の研究員から多くの推薦があり、入手可能なものから順次購入することになった。

その後は「基本図書整備計画」によるこの予算が、スラブ研の図書購入費の大部分を占めることになる。1985年度の「第1次基本図書整備計画」の終了とともに、幸いなことに1986(昭和61)年には「基本図書整備5ヵ年計画」の追加として3年間の継続(1986~1988)が認められ、前回より少し減額されて年間1,560万円、総額4,680万円の図書購入費が1988(昭和63)年まで配分された。この図書整備計画の終了とともに、「第2次基本図書整備5ヵ年計画」(1989~1993)の申請がなされた。この計画では、年間1,442万円、総額7,210万円の資料購入費が承認された。このようにして13年間にわたる図書整備計画は、雑誌・新聞のバックナンバーをはじめ、歴史・文学・政治・経済・情報等の各分野の文献・資料の欠落部分を補い、スラブ研究センターの基本図書の充実に大きな役割を果した。

しかし、1989年末から始まった東欧地域の変革と、1991年12月のソ連邦の崩壊は、スラブ地域研究の基礎資料の絶対数に飛躍的増大をもたらし、モデルとなったイリノイ大学ロシア・東欧研究センターとの蔵書数の格差は、縮まるどころか拡大した。スラブ地域での大きな変動は、これまであまり重視されていなかった地域研究の必要性を増大させ、各地域、各民族の言語資料の重要性が高まったのである。さらに1990年6月には、センターが「学内共同利用施設」から「全国共同利用施設」へ機構改組されて、新しい研究体制と、それに基づく資料収集計画の見直しが必要になった。かくて「第3次基本図書整備計画」(1994~1998)案でも、年間3,000万円、5年間で総額1億5,000万円を要求したが、この度の予算措置は、要求額の4分の1強にとどまり、年間800万円、総額4,000万円の小規模なものであった。

1982(昭和57)年には、2回にわたってチェコスロヴァキア大使館から図書が寄贈された。第1回は同年1月(53冊)、第2回は同年5月(パンフレットを含む欧文44冊、和文6冊)で、主として英語で書かれたチェコスロヴァキアの歴史、経済、国家体制、文化、言語、教育に関するものであった。チェコスロヴァキア社会主義共和国の新しいプロフィールの紹介を目的としたものである。

同年6月伊東センター長により「ソ連・東欧研究所構想」が打ち出された。これはスラブ研の長期にわたる将来構想である。

同年附属図書館に、ソ連の対外関係に関する故エプシュタイン教授(Fritz T. Epstein)の旧蔵書(Fritz T. Epstein Collection on the Foreign Relations of the Soviet Union)が受入れられた。これは当センターの購入希望で昭和57年度全国共同利用外国図書購入費により購入されたものである。

1983(昭和58)年には、故清水威久氏(1904-1981)の旧蔵書の一部が、日ソ図書の斎藤右司氏の紹介により、御遺族清水禎一氏と古閑雪氏の好意でセンターに寄贈された[23]。同氏はソ連の対日関係の専門家であるが、外務省在職中ポーランドで収集したポーランド関係図書81点125冊を含むものである。この中にはポーランド『官報』(*Dziennik Ustaw*, 1944-1962)が製本されて収められている。同氏のソ連関係の多くの図書は「清水文庫」として外務省に寄贈されている。

この年の春に長い間嘱望されていた英文紀要*Acta Slavica Iaponica*の第1号が刊行された。この号には、筆者のわが国におけるスラブ関係資料の現状を紹介した"Major Russian/Slavic Collections in Japan"が掲載された[24]。同年9月米国カリフォルニア大学(バークレー)図書館のカシネッツ氏(Edward Kasinec)(現在ニューヨーク市立図書館スラブ部門部長)を招き、「西側のスラブ関係蔵書:書誌学者の見解」と題して講演会が開かれた。

1984(昭和59)年の図書関係の大きな出来事の一つにベルンシュタイン・コレクションの購入[23]があった。これはロシア亡命ジャーナリスト、ベルンシュタイン(Leon B. Bernstein)が

60年の歳月をかけて収集したロシア革命運動に関する膨大なコレクション(数量は5,000点をこえている)である。そこには主要な革命組織の基本文献から原史料にちかいもの、さらにいままであまり研究されていなかった小さな革命組織の資料なども揃っており、モスクワのマルクス・レーニン主義研究所、アメリカのフーヴァー研究所、アムステルダムの社会運動史研究所にもない資料も含まれている。ベルンシュタインが、ナチ占領下のパリにいたということもあって、パリへ亡命した社会主義者や組織の蔵書・資料類、パーヴェル・アクセリロードの蔵書、ボリス・クリチェフスキーの蔵書、グリゴリー・アレクシンスキーの蔵書、及びブンド、ロシア社会民主党外国本部、エスエル党のアルヒーフなどの一部も含まれている。特筆すべきことは、ロシア革命に関する資料のみでなく、ソ連の歴史と文化に関する基本的なもの、歴史の古典、フランス語で書かれたソ連論、その他いろいろの革命組織の機関紙やパンフレット類なども集められていることである。

このコレクションについては、コロンビア大学のベシェンコフスキー教授(Eugen Beshenkovsky)によってカタログが作成されており、それには同氏の詳細な紹介文が付け加えられている。コレクションは最初にベルンシュタインがシカゴのニューベリー図書館に売却し、さらにニューヨークのハンタカレッジに移され、限られた関係者以外には知られていなかったものである。このようにすぐれたコレクションが文部省の「全国共同利用図書購入費」で北大の附属図書館に受入れられたことは、画期的なことであった。

コレクションの購入に際しては、センターでも研究員が一致してそれなりの努力をしたことを記しておきたいと思う。この年の4月半ば、例年の文部省の「大型コレクション購入」の申請の時期にあたって、ナウカ書店がもたらした情報の中に「ベルンシュタイン・コレクション」があった。カタログの序文を読んで、筆者は是非とも購入申請をしたいと思い、図書委員の木村教授に相談した。文部省の「大型コレクション」の購入手続きは難しい。第一の問題点は、年度内に申請した現物が納入されるかどうかということである。申請の段階では予算がつくかどうか未定であるが、最初から国内の業者がなんらかの形で前もってコレクションを確保する手段を講じる必要がある。これは大きな賭である。しかし予算がついた時に現物がないということは許されない。古書市場は流動的で、早いものがちの世界である。したがってこの高額なコレクションの購入に手を貸してくれる書店を探して事前交渉をする必要があった。木村教授を中心に関係研究員を囲んで相談し、外国の古書購入の取り扱いに慣れている在京の書店を招いて対応の方法を話し合った。この度スラブ研の勝手な希望を受入れてくれる書店に出会ったことは幸いであった。他方ニューヨークに滞在していた長谷川研究員にコレクションの内容の真偽を確かめる調査を依頼したところ、非常にすぐれたコレクションで、状態もよいとの情報がとどき、一同ホッとしたことを憶えている。高額なコレクション購入にあたっては、購入を希望する側の熱意は勿論のこと、それを取り扱う書店や関係当局などの理解と協力が不可欠であることをしみじみ感じさせられた次第である。

この年の図書室のもう一つのニュースは、前年秋(1983)の附属図書館の増築工事完成に伴い、スラブ研の蔵書が附属図書館書庫3層から、増築部分の西書庫2層に移転したことである。この部分は通路を含めて348平米あり、約62,000冊の図書の収納が可能となった。しかしこのスペースが増加する受入れ図書によって一杯になるのもそう遠い日のことではなかった。

1985(昭和60)年からその年度に新しく購入が決定した雑誌・新聞を、『センターニュース』の「図書室だより」欄で、‹新顔の購入雑誌› と題して紹介することになり、『センターニュース』22号(1985年、7月)が初登場となった。

同年関西の実業家鈴川正久氏の好意により、2,000万円が寄付され、「鈴川研究奨励基金」が設置された。この基金によって、その後毎年国内のすぐれた若い研究者がスラブ研に招かれ、短期間研究に従事することになった。第1回の研究生の応募は1987年である。

第3回ソ連・東欧研究世界会議が、10月30日から11月4日までワシントンで開かれた。スラブ研からは木村、伊東、長谷川、望月、松田、兼任の木戸、和田の各氏及び、筆者の8名が参加した。図書関係部会では、松田氏と筆者の2人がそれぞれ「わが国におけるスラブ・東欧研究の書誌計量分析」及び「1980年以降のスラブ研究センターの図書室」と題して報告を行なった[25]。その後ヴァージニア大学で「国際図書交換会議」が開かれ、ここではヨーロッパ・アメリカ・カナダなどの代表的な図書館から集まった34人のライブラリアンによって、それぞれ自館の国際図書交換の現状と問題点について短い報告がなされた。筆者もスラブ研究センターの貧しい現状を報告することになった[26]。二つの国際会議が終わって、筆者はアメリカ国務省の招待で約3週間、すぐれたスラブ関係コレクションを所蔵する図書館めぐりの旅をした。この旅行は生涯においてもっとも印象的なものとなった[27]。

1986(昭和61)年5月には大塚恵理助手が情報資料部に新しく採用され、図書業務を分担することになった。彼女はアメリカのイリノイ大学大学院修士課程修了で、これからの活躍が期待された。

この年は附属図書館で図書業務の電算化が始まり、今後全ての図書情報はコンピュータに入力され、文部省の学術情報センターの管理下におかれることになった。従来のローカルな自館の図書カード様式は廃止され、図書情報の入力も検索もすべてコンピュータによることになった。この1年はコンピュータの講習にあけくれた。翌年には現代ロシア語字母の直接入力システムが、附属図書館学術情報課の山田課長の努力によって、わが国で初めて開発された[28]。

図書業務の電算化により、図書館の利用の仕方も少し変わった。北大の図書館を利用するすべての教職員に図書利用票が発行され、図書利用票のID番号により、書庫内にある図書のうち、書誌データがコンピュータに入力され、本にOCRラベルの貼ってあるものは、ハンド・スキャナーでなぞるだけで借用手続きが完了することになった。

1987(昭和62)年4月には、田畑研究員によって1940年以降の年次データを収録したソ連経済統計データベース(SESS)が公開され、全国国立大学ネットワークに提供された。

わが国におけるスラブ研究の立ち遅れをとりもどすために、「スラブ研究の推進方法検討会」(文部省科学研究費総合B)が、1987年7月18日(札幌)、ついで同年10月21日(東京)、翌年1月29日(札幌)の3回にわたって開かれた。1回目の検討会で、資料情報体制については、田畑研究員、松田氏、筆者がそれぞれ報告した。第2回の東京検討会は、長谷川研究員のディスカッション・ペーパーに基づいて、わが国におけるスラブ研究の抱える問題とその解決策について討議された。ここでは二つのアピールが採択された[29]。その一つは「スラブ地域雑誌センター設立に関する要望書」であった。これはスラブ地域の人文・社会系の定期刊行物の系統的な収集と利用サービスを目的とするものであった。当時すでに社会科学系雑誌センターが一橋大学に、人文科学系雑誌センターが神戸大学に設置されていたが、スラブ諸国の定期刊行物については多くの問題が残されていた。これらの問題点を是正するためにイスラム地域、スラブ地域といった文化的にまとまりのある地域ごとにサブセンターを設けるべきであることが提唱されたわけだが、残念ながらこの提言は文部省の認めるところとはならなかった。

しかしもう一つの「日ソ文化交流協定に基づく国費交換留学生制度に関する要望書」のほうは認められて、交換制度は有効に機能し、ソ連邦崩壊の1991年まで続いた。

この年の夏には初めての鈴川基金奨励研究員8人を迎えた。受入れ側の図書室にも不十分なことが多々あったが、全国から若い研究員を迎えて多忙ながら熱気あふれる夏であった。鈴川研究員はスラブ研を去るに際して、この制度による研究成果・意見・要望・感想などを落書帳に記すことになっているが、「センターへの要望」の中には率直な意見が相次ぎ、「帝政未期の研究に必要な資料の欠如」などの厳しい意見もだされた。これらの指摘は筆者にあ

らためてコレクション全体の不備を見直す機会を与えてくれた。落書帳の記入は、第1回(1987)鈴川奨励研究員から1994年の夏まで継続されており、さまざまな意見から研究員気質の変遷も瞥見できて興味ぶかい。鈴川基金で来札した研究員のことで嬉しいことが二つある。一つは再びスラブ研を訪れてくれること、もう一つは業績としての著書や論文発表のニュースを聞くことである。第1・2回生達はもうすでに社会的に活躍し、多くの業績をあげているが、それらが図書室に寄贈された時の喜びは大きい。寄贈された著書を見る度に、共に過ごした暑かった夏、肌寒かった夏、山のようなコピーの話などがいろいろ懐かしく思い出される。

1988(昭和63)年3月、『外国雑誌目録(1953~1988)』(スラブ研究センター所蔵)が刊行された。欧文雑誌319点、露文雑誌337点、計656点を含むA4判71ページの小冊子である。附属図書館が初めてコンピュータによって編集した『北海道大学雑誌総合目録(外国雑誌編)』(昭和63年版)の書誌データの中から、スラブ研究センター所蔵の書誌データのみを打ち出し、それらを補足、訂正して作成したものである。3月末には、1987(昭和62)年度の全国共同利用外国図書購入費で、ゲルシンスキ文庫(the Henryk Gierszynski Collection)およそ2,500点が附属図書館に受入れられた。これは1830~1918年のポーランドの独立運動、社会主義運動についての原資料で、ポーランド近・現代史研究にとって必須の資料である。

ロシア科学アカデミー図書館(BAN)が1988年2月15日に火災にあったというニュースが、3月27日付けの『モスクワ・ニュース』に掲載された。この図書館は、1714年ピョートル1世がモスクワやバルト沿岸地方から図書資料をあつめて作った文庫が、1724年ペテルブルグの科学アカデミー設立とともにその附属の図書館となったもので、約280年の歴史を有している。今回の火災で貴重な資料が甚大な被害を蒙ったことは、大変残念で惜しまれることであった[30]。

この年の3月に、仕事にもスラブ研にも慣れた大塚恵理助手が、残念ながら2年間で退職することになり、同年4月その後任に津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業の小竹史緒助手が採用された。彼女は結婚のために翌3月末退職した。後任は同大学出身者の杉浦和子助手であったが、彼女も僅か1年で一身上の都合のため1990年3月退職することになった。

3. 全国共同利用センターの時代(1991年以後)

1990(平成2)年6月、12年間続いた「学内共同教育研究施設スラブ研究センター」は「全国共同利用施設スラブ研究センター」に改組された。この改組により、教授定員2名、助手定員1名、客員研究員2名の増員が認められた。この度の定員増は情報資料部の充実にもつながり、情報資料部は講師1、助手2の3名構成となり、新しく野原美香助手を迎えて出版・広報活動は完全に独立することになった。一方図書室は純粋に図書業務に従事する事務官定員1名(佐々木光子)と教官定員1名(筆者)との2名で運営されることになった。この大きな変化はスラブ研創立の1953年から数えて38年目のことである。筆者はこの時事務官から情報資料部の教官ポストに移行し、引き続き図書業務全体の管理を担当することになった。

1990年の改組は予算上も大きな変化をもたらした。図書の受入れ冊数も飛躍的に増大した。この年度の受入れ数は3,941冊(洋書3,711冊、和書230冊)、マイクロフィルム309タイトル、1,480リール、マイクロフィッシュ112タイトル、2,690シートである。

同年7月英国のハローゲイトで第4回ソ連・東欧研究世界会議が開かれた。この度はわが国の研究者も多数参加した。この会議に先だってケンブリッジ大学で第3回国際スラヴィック・ライブラリアン会議(ISLC)(1990年7月18日~7月21日)が開かれた。筆者も後者の会議に出席するとともに、終了後ハローゲイトの会議に合流した[31]。

1991(平成3)年の図書室のニュースは、216タイトルの新聞・雑誌を新規に発注したことである[32]。内訳は次の通りである。アルバニア5点、ブルガリア7点、チェコスロヴァキア14点、ハンガリー18点、ポーランド12点、ルーマニア22点、ソ連邦97点、ユーゴスラヴィア20点、ビザンチン関係3点、その他18点。すでに述べたように、1987年に提言された「スラブ地域雑誌センター設立」の夢はすでに潰えたが、今回の膨大な発注の背後にあるものは、わが国におけるこの分野の現状を少しでも改善すべく、スラブ地域の雑誌センターの核になることを目指した計画である。タイトル選択に際しては、一応各専門家の意見を聞くなどこの段階で必要なことはしていたが、相次ぐ東欧の変革、ソ連邦の崩壊などにより、大きな見直しが求められている。特に1991年12月のソ連邦の崩壊は、ロシア革命以来継続してきた多くの新聞雑誌の名称変更を余儀なくした。さらにこの機会に廃刊となったものも数多い[33]。

ベオグラード文学・芸術研究所のペトロフ研究員(Aleksandar Petrov、1990年外国人研究員)の推薦で発注したユーゴスラヴィア関係の図書が、1年をへた1991(平成3)年の春に多数入荷した。それらは19世紀中葉以降のユーゴスラヴィア地域の逐次刊行物31点と単行本のセットもの4点で、総冊数594冊にのぼる。これらの中には*Brastvo* (Beograd,1887-1941)や、*Ljubljanski zbon* (Ljubljana, 1881-1941)のように19世紀後半から20世紀前半にかけて出版された主要な雑誌が、完全なかたちで含まれている。国内ではみることの出来ない貴重なコレクションである[34]。

さらに米国国立文書館の国務省文書のマイクロフィルムを購入したのもこの年のことであった。これはロシア・ソ連邦関係公文書(692リール)と東ヨーロッパ関係文書(740リール)に大別され、さらに関連資料(オーストリア・ハンガリーとオーストリアの国内事情・対外関係1910-1929年、76リール)を含む総数1,508リールの膨大な資料集である。

11月に畑山擁夫氏(1947年北大医学部卒業、医師)からチェコ語の図書36冊が寄贈された。畑山氏は国際会議に出席のためプラハに行き、チェコが大変気に入り、チェコ語の勉強を始められたとのことである[35]。

ロシア革命からソ連邦の崩壊までの長い間、深いヴェールに包まれていたソ連邦共産党の文書が、マイクロフィルム化されて販売されるというニュースが世界中に流れたのは、1992(平成4)年1月のことであった。共同通信社の提供でわが国の新聞各紙にも掲載され、5月には『モスクワ・ニュース』にも取り上げられた。『モスクワ・ニュース』のレポートは、共産党文書の売却をめぐってロシア内にも異論のあることを伝えた興味深い記事である[36]。文書の公開をめぐるいろいろの議論とは関係なく、この膨大な文書はマイクロ版としてすでに刊行が開始された。目録(The Opisi series)と文書本体(The Dela series)に大別され、全部でおよそ5,000リールに及び、全部まとめて購入すれば総額7,000万円前後になる見込み(数量を多く買うことにより安くなる仕組み)である。しかしこれらリール数と金額についての情報はまだ流動的である。いずれにせよ膨大な金額に対する予算措置は頭の痛い問題である。

1992(平成4)年4月には図書室の佐々木光子事務官が教養部図書館に転出し、桜洋子事務官が転入して今日に至っている。

同年7月、文献社をとおしてドイツのクーボン・ザグナーから«Комсомольская правда» (1948-1993)、«Политика» (1926-1993)、«Рабочая газета» (1963-1990)、*Népszabadság* (1953-1990)、*Scînteia (Adevarul)* (1954-1989)、*Życie Warszawy* (1952-1990)の6タイトル1,012冊にのぼる新聞のバックナンバーをオリジナルで購入した。これらのうち«Рабочая газета»と*Scînteia*をのぞく4タイトルは、現在購入中のバックナンバーの欠号部分を埋めるものである。新聞のバックナンバーとしては比較的欠号が少なく、状態のよいのも、このコレクションの特色である。

1992年度末から1993年度にかけて、英国外務省が所蔵していたロシア関係図書の一部を購入した。このコレクションは英語を主とした欧文図書とロシア語図書からなっている。前者

は230冊で、英国外務省がロシアの歴史・文化を知るために集めたと思われる精選されたものである。後者のロシア語図書は4,500タイトルのタイトル・ページのコピーの中から、ジュークス研究員(Geoffrey Jukes、1992年度外国人研究員)に選択を依頼し、重要性の度合いによりA. B. C. D. に分類して、その中から761冊を受入れた。これらは主としてロシアの外交・極東政策に関するものである。

アルバータ大学のモジェイコ教授(Edward Mozejko、1991年度外国人研究員)による東欧の主要文学者340選リストが作成されたのは、1991年秋から翌年の冬にかけてのことであったが[37]、はからずも1993年1月末にはチェコ文学コレクション883点を購入する機会を得た。望外の喜びであった。今世紀前半の詩作品を中心としたもので、チェコ文学史上重要な作家の作品をある程度系統的に集めたものである。このコレクションについては北大言語文化部の橋本聡助教授が、「詩による20世紀チェコ文化の解読(新着図書紹介)」と題して、丁寧な紹介文を書かれている[38]。

1993(平成5)年3月、ニュージャージー州立大学のズナイエンコ教授(Myroslava Tomorug Znayenko、1992年度外国人研究員ルドン教授夫人)からウクライナ関係図書9冊が寄贈された。それらはウクライナの文学者V. ヴィニチェンコ(Volodymyr Vynnychenko)の作品と彼をめぐる評論など5冊、ウクライナ文学に関するもの2冊とウクライナ史研究資料2冊である。

同年10月には、ウクライナのキエフでウクライナ科学アカデミー図書館創立75周年記念国際会議が開かれた。筆者もそこへ招かれ、ウクライナ科学アカデミー図書館を見る機会を与えられた[39]。11月にはハワイで環太平洋地域(ロシア極東を含む)のスラヴィック・ライブラリアンの会議が開かれ、引き続き第25回AAASS年次総会が行なわれた。ここで出会ったロシア極東地域のライブラリアン達との交流によって新しい国際図書交換のきっかけが生まれた[40]。

同年12月には『北大におけるロシア関係資料個人コレクションとロシア語マイクロ資料』が英文で出版された。これは北大における貴重なスラブ関係個人コレクションについての紹介と、マイクロフィルム・フィッシュのかたちで所蔵されているロシア語の新聞・雑誌の目録を含むものである[41]。

1994(平成6)年の年度末も迫った3月、待ち望まれていたスタンフォード大学フーヴァー研究所所蔵のB.I.ニコラエフスキー・コレクションのマイクロ版を購入した。このコレクションはボリス・ニコラエフスキーによって収集された世界的に有名なロシア革命史研究文書集である。全体は11ユニットに分れているが、1993年度にはユニット1~7の250リールのみが受入れられた[42]。春には安藤厚、浦井康男、望月哲男の諸氏がコンピュータで編集した『ドストエフスキー『罪と罰』コンコーダンス』が刊行された[43]。『罪と罰』のロシア語テキストの語彙索引で、世界でも例をみないものとして高く評価されている。

原教授の提案で『スラブ研究センターニュース』に寄贈受入れ図書リストを掲載することになり、57号(April 1994)から掲載を始めることになった。

この年の受入れ資料のうち特筆すべきものに旧ソ連邦20万分の1の地勢図の購入がある。これはソ連閣僚会議測地・地図製作本部発行のもので、従来は軍事目的及び政府のための利用に限定されて門外不出であったが、最近になって漸く公開されたものである。この地図は、日本の国土地理院の地形図と同様、経度6度幅ごとに中央経線を設定するユニバーサル横メルカトル(UTM)図法で描かれている。1956年から1991年までに測量・調査された旧ソ連全土の陸地部分が網羅されている。総枚数4,472枚といわれているが、さらに国境線・海岸線に含まれている部分19枚が追加されている。1枚の地図紙面のサイズは、縦46cm、横50cm、地図そのもののサイズは縦38cm、横47cmの6色刷りの地勢図である。センターにおける地図の整備は非常に遅れており、1993年度の概算要求による民族環境部門の増設で、整備の必

要が高まっていたので、20万分の1の旧ソ連邦全図のはじめての発売の機会にめぐりあえて幸いであった。

1995(平成7)年度から重点領域研究「スラブ・ユーラシアの変動」が始まることになり、すでに予備調査のための科学研究費総合研究Bの交付が決定し、準備は着々と進んでいる。このプロジェクトはスラブ研内外の研究員が多数参加する大規模なもので、3年継続の予定であるが、図書室にもよい影響をもたらすに違いないと信じている。

最後にこの40年間を振り返ってみると、スラブ研究センターにおける機構の変革、研究機能の充実、予算の増加、図書資料の整備、建物の拡張などのめざましい発展の陰にかくれて、あまり変化しなかったものは事務機構である。創立以来の事務定員2名が正式に3名になったのは1990年6月のことである。センターの予算の大半は研究のための図書費に支出され、定期刊行物の受入れ、受入れ図書のコンピュータ入力、国内外の研究者や研究機関から寄せられる文献その他の情報についての照会、国際交換業務も日常的であるが、予算や受入れ図書の飛躍的増加のほかに輻輳する事務量の増大にも拘らず、図書の事務定員は僅か1名である。

4. 蔵書の特徴

スラブ研の資料収集活動は、1953(昭和28)年の設立とともに始まった。旧ソ連の出版物がナウカ書店を通じて輸入されはじめたのも1952年以降のことである。40年後の1994年5月1日現在の蔵書数は、単行本74,819冊(洋書69,913冊、和書4,906冊)、マイクロフィルム16,514タイトル、6,216リール、マイクロフィッシュ5,452タイトル、110,826シートである。

これらの数字は、長い歴史を持つ欧米のスラブ研究機関の図書館の蔵書数とは比較にならないが、スラブ研のコレクションの特色は基本的な文献が精選されていることである。収集の対象は、人文・社会科学に限られているが、旧ソ連を中心として広く東欧諸国の歴史・文学・政治・経済・国際関係等の分野に及んでいる。特にその特色は定期刊行物と参考図書に反映されている。1979(昭和54)年秋、外国人研究員としてスラブ研に招いた元アメリカ議会図書館・スラブ部門部長ホレツキー博士(Paul L. Horecky)から、「規模は小さいが、精選されたバランスのとれたよいコレクションである」とのおほめの言葉を頂いた。しかしながらスラブ研の創立年が示すように、そのコレクションの大部分は1953年以降の出版物で占められている。その過半数はロシア語文献であるが、第2次大戦以前のものは少なく、ロシア革命以前のオリジナルの出版物は非常に限られている。しかし最近では個人コレクションの購入やマイクロ資料の充実により、この欠陥も急速に補われ始めている。

スラブ研の蔵書は、上記の蔵書数が示すように、図書とマイクロフィルム、フィッシュの2種類から構成されており、マイクロ資料の割合が非常に高いことも特徴の一つである。第2次大戦以前の出版物をオリジナルで購入することは難しいが、最近はアメリカ及び西側の書店から送られてくるマイクロ資料の情報が豊富で、それらを受入れることにより古い文献の補充がなされている。

1953年にスラブ研が受入れた最初のマイクロフィルムは«Историк-марксист» (vols. 1-52, 56-94)、«Исторический журнал» (vols. 1-6)、«Красный архив» (vols. 1-106)などであった。それ以後受入れたマイクロ資料のうち、主なコレクションには次のようなものがある。

『18世紀ロシア出版物集成』(18th Century Russian Publications/Сводный каталог русской книги гражданской печати XVIII века 1725-1800. 1978-1990, 1994-. Microfilm. 4,730 titles, 819reels)(しばらくの間刊行が中断されていたが、1994年12月から再開されることになった)。

『日本関係書誌』(Библиография Японии, 1734-1917, 1917-1958. 1978. Microfilm. 14,149 titles, 726 reels)

『ソヴェト伝記資料集成』(The Soviet Biographic Archive, 1954-1985. 1986. Microfiche. 2,812 sheets)

『ロシアの歴史と文化』(Russian History and Culture. 1978-1988, 1989-. Microfiche. 2,146 titles, approx. 8,000 sheets) (現在受入れ継続中)

『ロシア革命文献集』(ハーバード大学・ホートン図書館所蔵) (Russian Revolutionary Literature. 1978. Microfilm. 1,168 titles, 47 reels)

『ロシア革命パンフレット集成』(LSE 附属英国政治・経済学図書館所蔵) (Russian Revolutionary Pamphlets, 1860-1923. Microfiche. 243 titles, 329 sheets)

『シベリア出版物資料集 1917~1924』(Siberian Press Materials. Microfiche. 121 titles, 335 sheets)

『ロシアの政党に関する出版物』(Russian Political Parties in the Late 19th and Early 20th Century. Microfiche. 240 titles, 596 sheets)

『ゼムストヴォ (地方自治会) 統計資料集成』(Zemstvo Publications. Collection of the Statistical Publications of the Zemstvo, 1870-1917. 1970-1991. Microfiche. 151 titles, 8,312 sheets)

『国勢調査資料』(Census Survey Material)

第 1 回 (1897) ロシア帝国国勢調査 (Первая всеобщая перепись населения Российской империи, 1897 г. Том 1-89, 1899-1905. Microfiche. 855 sheets)

1926年全ソ連邦国勢調査及びその目録 (Всесоюзная перепись населения 1926 года. Том 1-56. 1928-1935. Microfilm. 29 reels. Краткие сводки. Вып. 1-10, 1927-1929. 2 reels)

『ロシア革命期新聞集成』(Newspapers from the Russian Revolutionary Era. Microfilm.51 titles,458 reels)

『ボリス・ニコラエフスキー・コレクション』(The Boris Nicolaevsky Collection in the Archives of the Hoover Institution on War, Revolution, and Peace ‹受入れ分› 224 series, 290 boxes, 250 reels)

帝政ロシア・臨時政府・ソ連・ソヴェト共和国の議会・行政府議事録等

ロシア国家評議会議事録 (第 1 会期~第13会期、1906-1917. Microfilm, 9 reels) や、ロシア閣僚会議臨時議事要録 (1906-1917. Microfilm, 30 reels) など貴重な資料が含まれている。

定期刊行物

定期刊行物収集の特色の一つは、種類数は多くはないが、タイトルが精選されていることである。

1994年 5 月 1 日現在の定期刊行物の受入れタイトル数は和雑誌33点 (購入 9 点、寄贈24点)、洋雑誌380点 (購入308点、寄贈72点)。外国の新聞93点 (購入85点、寄贈 8 点) である。

19世紀中葉から革命までに出版されたロシアの主要な定期刊行物«Вестник Европы»、«Русская мысль»、«Русская старина»、«Русский архив»、«Русское богатство»、«Чтения в Императорском обществе истории и древностей российских» などはほとんどオリジナルで揃っている。そのほか、ユーゴスラヴィアの19世紀中葉から20世紀前半の雑誌もかなり揃っている。

1990年全国共同利用センターへの改組を機会に、スラブ研図書室では収書方針の一つの柱として新聞を含む定期刊行物の組織的な収集を掲げた。1991年には、前記のように216タイトルの定期刊行物が新規に発注されたが、それらについてはいろいろの問題も含まれてい

る。しかし従来の欠落部分を補う意味でのバックナンバーの購入計画はマイクロ形態で着実に進行している。西側では完全な形で入手困難だった新聞類も、マイクロフィルムやフィッシュで入手することも可能となった。しかし当然のことながらそれらのタイトルは限られている。出版される定期刊行物の新タイトル数は着実に増加するが、予算はそれに応じて増えるわけではないので、明確な基本方針と未来像が求められることになる。さらに定期刊行物は購入受入れ後にも、製本またはマイクロ化などの将来にわたる利用の問題、それに伴う予算とスペースの問題などが提起されている。このことは単にスラブ研のみならず、すべての図書館に共通する課題でもある。

参考図書

1994年6月、図書室の全面改造とともに参考室は広いスペースとなり、今まで一つの部屋に集中していた資料はロシア関係資料、東欧関係資料および語学辞書の三つにわけて、それぞれ独立した。総冊数は約4,500冊で、ロシア関係のものが全体の半分を占めている。東欧については、チェコスロヴァキア、ポーランド、ルーマニア、ユーゴスラヴィアなどそれぞれ国毎に分れている。

参考室には旧ソ連邦・東欧諸国・バルカン諸国の百科事典及び各国語辞典、主題辞典、各国書誌、主題書誌等が比較的よく揃っていることも蔵書の持色の一つである。ロシアの百科事典では、『ブロックハウス・エフロン百科』、『ブロックハウス新百科』、『グラナート大百科』、『ソビエト大百科』(初版から第3版まで)、その他数セットの小百科、各共和国の百科事典がある。言語辞典は豊富で、創立期から集められており、ロシア語は勿論、教会スラブ語、諸共和国、自治共和国の言語辞典も揃っている。

歴史の浅いスラブ研の書架で異彩をはなっているものとしてチェコスロヴァキアのオットー大百科 (*Ottův slovník naučný & Dodatky*, tom 1-6. Praha, 1888-1909, 1930-1943) がある。ポーランド図説大百科辞典 (*Wielka ilustrowana encyclopedia powszechna*, tom 1-22. Kraków, 1923-38)、古ポーランド語辞典、文化・歴史に関する書誌類、ポーランド人名辞典 (*Polski slownik biografiszny*, tom 1-31. Wroclaw & c., 1935-1989.現在刊行中) などポーランドに関するものは比較的揃っているが、これは伊東孝之研究員の協力に負うところが多い。

ここ数年のソ連邦の解体、それにともなう諸共和国の独立、ユーゴスラヴィアの分裂、チェコとスロヴァキアの独立などに伴う各国毎の参考図書の整備は、今後の大きな課題である。

スラブ研の図書室は、これまで地味な努力と周囲の協力によって発展してきたが、コンピュータ時代を迎え、図書の利用・検索・保存の方法なども次第に変わりつつあり、筆者はその未来を予測することは出来ない。北大でも従来の図書カードの作成が中止され、コンピュータに書誌データが入力され、検索されるようになって間もなく10年を迎えようとしている。今後は文献目録や百科辞典もCD ROMで刊行され、コンピュータによる検索が普通のことになるかもしれない。そして文献情報の入手は世界中を結んだコンピュータ・ネットワークによって一層容易になると思われる。とはいえスラブ研の図書コレクションの価値はそのことによって減じるものではなく、ますます高まるのではないだろうか。

終わりに、この小文を書くに際してご協力いただいた鳥山先生はじめ、多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

— 注 —

* 「スラヴ研究室」、「スラヴ研究所」、「スラブ研究施設」「スラブ研究センター」等に用いられている「スラブ」の表記には、上記のように‹スラヴ›と‹スラブ›の二通りがある。現在活字で残されている‹スラヴ›の表記は、木村彰一教授の文部省科学研究費機関研究報告の中の‹北海道大学スラヴ研究所›紀要『スラヴ研究』、設立当時作成されたと思われるゴム印2点‹スラヴ研究所›及び図書の基礎カードに印刷された‹スラヴ研究室›の4点である。このゴム印は設立当初に受入れた図書にはすべて押されている。『北海道大学一覧』昭和28~31年版、32年版にはすべて‹スラブ›と記されている。手もとにある資料から、両者二通りの使用を、現実に即して正確に使い分けることは難しいので、ここでは引用の記述はそのままにし、その他はわかる範囲でのみ区別し、のこりのものは全て「スラブ」に統一した。

1 「法学部附属スラヴ研究所」から「法学部附属スラヴ研究室」になった時期はさだかではない。調べてみたがそのころの記録は筆者のまわりには残されていない。『北海道大学創基八十年史』によると、スラブ研については、290頁に簡単な紹介と、沿革年表に「1953年6月24日スラブ研究室規定を制定する」と「1955年7月1日スラブ研究室は、法学部附属スラブ研究所となる」の2項目が記されているだけである。このことについて鳥山先生(スラヴ研究室創立以来スラブ研の研究員であり、スラブ研究施設長を歴任)に伺ったところ、先生の人事記録の写しをみせて下さった。それには「昭和31年2月1日北海道大学法学部附属スラブ研究室主任事務取扱いを命ずる(発令者—文部省)。同2月1日スラブ研究室規定の一部改正により研究所員は、研究室研究員となる(発令欄は空白)」と記されている。『研究所総覧』によると「昭和28年6月24日学内措置によりスラブ研究室を設置。昭和30年7月1日国立学校設置法施行規則の一部改正により、法学部附属スラブ研究施設を設置。昭和53年4月1日国立学校設置法施行規則の一部改正により、スラブ研究センターに転換」と記されている。この記述と鳥山先生の人事記録の写しとはずれがあるように思われる。筆者は、昭和31年2月1日に2度目の‹研究室›となった日付は鳥山人事記録の写しが正しいのではないかと思う。名称の変遷について、ながながと書いたが、最終的に官制化されたものとしては、1955(昭和30)年「法学部附属スラブ研究施設」が設置されたことになっている。しかしこれは後に整理された命名であり、歴史的には「研究所」(1953-1955)の名称も「研究室」(1955-1962)の名称も存在していたことを付記するにとどめたい。スラブ研の名称の変遷及び20年の歴史については、外川継男教授の「スラブ研究施設二十年の歩み」『スラヴ研究』No. 20 (20周年記念号)、1975年、197-210頁参照。

2 『北海道大学創基八十年史』札幌、北海道大学、1965年、290頁。外川教授(現上智大学教授)のメモによると5,000ドルと記されている。当時1ドル360円とすれば約180万円となる。500万円をドルに直すと約1万400ドルに相当する。更に『北海道大学一覧』昭和41年版(120頁)に「本施設は、その設立に当たって、米国ロックフェラー財団から、約五百点の図書の寄贈を受け、また、昭和三十五・六年の二回にわたって関係学術誌および資料集のマイクロフィルムの贈与をうけている」と記されている。

3 鳥山教授談。後日米国訪問の際にヤコブソン氏に会い、礼を述べたとのこと。スラブ研にはその当時議会図書館から送付されたマイクロフィルムの送り状が残っている。現在スラブ研にある古い雑誌«Историк-марксист», 1-52, 56-94 (23 vols.)など5点を含むものであるが、フィルムの単価、コマ数、リール代、外箱代、送料、総金額などすべての明細が記述されている。

4 スラブ研に送られたものとほぼ同じものが日本の国会図書館にも寄贈されたとのことである。鳥山教授談。

5 [昭和28~29年度]文部省科学研究費機関研究報告、[昭和28-29年度] 5-11頁。ついで翌1955(昭和30)年には科学研究費による総合研究「ロシア人民主義の研究」が発足した。

6 鳥山教授からの聞き書きによる。

7 『北海道大学一覧』昭和41年版、120頁。『北大時報』第75号、1960(昭和35)年6月30日、2頁にチェコスロバキア大使ドブロミール・イェチニー氏来学と記されている。Dr. Dobromir Ječnýの大使の在任期間は昭和35年3月28日~39年5月15日であった。

8 当時の職員の在任期間は次の通りである。事務官芳賀柳二(1954年6月~1966年7月)、豊田久馬彦(1956年4月~1963年3月)、大垣徇(1963年4月~1971年3月)、成田京(1963年4月~1967年3月)、助手更科道子(1956年4月~1961年3月)、助手出かず子(1964年8月~1985年5月、のち教授となる)。

9 拙稿「図書室だより」『スラヴ研究』No. 21、1976年、235-237頁。

10 図書定員9名のうち閲覧関係の3名は1年前の1973年に移行していたようである。

11 その要旨は、4項目からなる「人文・社会系所属図書館書庫内の図書」についてと、法学部図書室の図書館への統合の要望であった(「(イ)早急に、法学部図書業務を附属図書館業務に統合(集中化)することで協議する。(ロ)上記(イ)の業務統合(集中化)と同時に、図書掛職員全員を附属図書館に配置換する」)。さらに1975年3月の「法学部図書掛の附属図書館への統合に関する必要な事項についての申し合わせ」の文書の付記の第12項において、スラブ研については次のように記されている。すなわち「スラブ研究施設については、原則として同一歩調をとることが望ましいが、現状では種々問題もあるので、ただちに結論をだすことが困難である。したがって将来に向かって努力することとし、今回の統合と分離して処理する」。

12 この間の事情を筆者は当時の責任者今田事務長(現在北海道情報大学事務局長)にお伺いした。以下はその経緯の要約である。「1974年4月、法学部の今田事務長(在任期間1970年4月から1977年3月末)に斉木附属図書館事務部長から文系図書室と附属図書館との統合の中し出があった。今田事務長は大学図書館の教育と研究の基本的な目的の実現と、今後の図書の増加、それにともなう書庫スペースの問題、定員削減・定員不補充等の現実的な諸問題に対処するためにも統合は合理的な措置であるとの判断に基づいてこの申し出を受けることにした。

さらに今村図書館長からこのことを文系各学部に要請するようにとの依頼があり、各学部事務長を訪問して統合問題への協調を要請した。しかし各学部の事情や事務長の考えもそれぞれ異なっており、同意を得るには至らなかった。そこで法学部がその先鞭をつける以外にないと考え、図書職員と具体的な検討に入ることになった。この問題は図書職員が納得しなければ実現することは難しいとの判断から、統合問題懇談会が再三開かれることになった。会を度重ねるうちに、明らかになってきたことは「総論賛成、各論反対」ということで、討論は結論を見ることなく暗礁にのりあげた。今田事務長は現状の膠着状態を打開するべく冷却期間をおくことにした。法学部内部においては、この統合問題は当時の三代にわたる薮・石川・小暮法学部長、山畠図書委員によってよく理解され、支持され、すべて事務長に一任したかたちで時間の経過を見守っていたようである。そのうちに4年が過ぎようようとしていた。1975年3月、学内に今田事務長の人事移動のうさわが流れはじめたため、斉木図書館事務部長は、附属図書館と法学部図書室の統合の実現を改めて今田事務長に要請した。この時今田事務長の法学部の在任期間はすでに5年に達しており、このように長期に1学部の事務長としてとどまることは異例のことと思われた。今田事務長は長い間宙に浮いたままになってた統合問題には充分に

時間をかけたとの判断から、決着をつけるべく動きだした。図書職員を1人、1人呼んで意見を聞き、さらに移動の希望があればその実現にも努力することを約して、統合実現にむけて各自を説得していった。図書職員全員の了解のあとに残ったものは、法学部教授会におけるこの問題についての報告事項のみであった。しかし法学部教授会でも、賛成・反対入り乱れ、「総論賛成・各論反対」の論理で一元的な賛成は得られなかったが、今田事務長は「この問題は、教授会の審議事項ではなく、事務長の権限下の事務的問題である」と主張し、この場における問題の審議を避けた。かくして5年の歳月をかけた法学部図書室統合問題は決着し、1975(昭和50)年4月1日付けで統合は実現した。この場合、「事務長の仕事は、大学における研究と教育を支えるために支障のないよい環境を作ることである。図書室の統合問題はいわば研究と教育の環境作りにかかわるものであり、事務長の仕事である…」というのが事務長の論理であり、事務長の仕事の分掌による権限の範囲内のこととして理解されていた。

以上は今田事務長からの電話の聞き書きによるものである。ご多忙中にもかかわらず、快く率直にいろいろお話くださった同氏に深く感謝するものである。もし内容に誤解や誤認があればそれは筆者の責任である。

13 拙稿「スラブ研究施設図書室報告(1971): 大学図書館の集中管理制をめぐって」『スラヴ研究』No. 16、1972年、280-283頁。

14 スラブ研では国内のスラブ関係研究者名簿の作成を強く望んでいたが、そのための予算がなかったので、窮余の一策として科学研究費で『わが国におけるソ連・東欧研究の動向』と題して刊行した。

15 その後1976年にはポーランド語講習会中級(伊東・菅原ドロータ)及びポーランド語講読会(伊東)が継続して開かれた。

16 『ソ連東欧研究文献目録』1976~1988。1989年版は『スラブ東欧研究文献目録』と改題され、1990年以後は‹スラブ東欧研究文献データベース›としてコンピュータに入力されている。

17 現在スラブ研の参考図書室にあるものは、レンセン・コレクションの一部である。当時購入したものは大部分が布製の表紙でかなり破損しているため、レンセン・コレクションの中の『ブロックハウス・エフロン百科』と入れ替えて、レンセンの著作とともに記念としてスラブ研に保存されている。

18 前者二つのコレクションに関しては、冊子目録*Russia and Eastern Europe: a List of the George Vernadsky Collection.* Sapporo, 1982. と*Boris Souvarin Collection on Russian Revolutionary Movements*. Sapporo, 1980. がそれぞれ刊行されている。

19 これらのコレクションについては『楡陰』No.50、1984年、4-8頁を参照。

20 ホレツキー夫人を講師に招いてスラブ研と法学部事務室の職員のために英会話講習会が開かれた。

21 拙稿「レンセン・コレクションについて」『スラヴ研究』No. 28、1981年、123-126頁。「北大のレンセン文庫」『北海道新聞(夕刊)』1981(昭和56)年9月2日参照。

22 わが国では一般には考えられないことであるが、世界的な学者の報告にまじって図書関係の研究報告・図書館の紹介・諸問題についての討論などが学会プログラムの中に組み入れられていた。このようにして世界中のスラヴィック・ライブラリアンの交流も生まれ、ライブラリアン同志のネットワークも形作られている。筆者もはるばる日本から来たということで、早速スラブ研究センター図書室についての報告を求められた。Takako Akizuki, "The Slavic Research Center Library, Hokkaido University, Sapporo," *Access to Resources in the '80-s: Proceedings of the First International Conference of Slavic*

Librarians and Information Specialists, ed. by Marianna Tax Choldin, New York, 1984, pp. 50-53参照。

23 *The Collection of Leon B. Bernstein.* Vol. 1-2. New York, Russica, [198-?] 長谷川毅「ベルンシュタイン・コレクションを手にして」『楡陰』No. 65、May 1985、9-11頁。「日本におけるロシア・ソ連研究とベルンシュタイン・コレクション」『北大時報』1986、7月、22-24頁参照。

24 *Acta Slavica Iaponica*, I, 1983, pp. 15-164

25 Jun Matsuda, "Bibliometrical Survey of Japanese Slavic and East European Studies: 1976-1980"; Takako Akizuki, "The Slavic Research Center Library since 1980," *Proceedings of the Second International Conference of Slavic Librarians and Information Specialists*, ed. by Marianna Tax Choldin, New York, Russica Publishers, 1986, pp. 370-385; pp-292-294. を参照。

26 この時のすべての報告は、Marianna Tax Choldin ed., *Proceedings of the Second International Conference of Slavic Librarians and Information Specialists*, New York, Russica Publishers, 1986, pp. 386-505に収録されている。

27 拙稿「アメリカのスラブ関係主要図書館を訪ねて」『ソ連研究』No. 2、1986年、185-195頁参照。

28 この段階で図書情報の入力対象になっている言語は、日本語と主なヨーロッパ言語に限られていた。受入れ図書の半分以上がロシア語で占められているスラブ研究センターの現状を考えると、ロシア語図書はキリル文字で入力するか、アメリカやヨーロッパの図書館のように翻字によるかの決定がせまられた。この結論をすぐだすことは、諸外国の図書館の事情からも明かなように、非常に難しい問題であった。しかし筆者はコンピュータ化の初めにあたって、キリル文字による直接入力の可能性を探ることを強く望んだ。附属図書館情報課に相談したが、始めはとりあってもらえなっかた。しかしいろいろ話し合いを進めてゆくうちに、なんとか可能性の光が見えはじめ、山田課長との度重なる討論の末、同氏の努力によって端末から直接キリル文字を入力することが可能になった。この時ロシア語アルファベットを第1次計画とし、第2次に革命前に使用された4文字、ウクライナ語、白ロシア語、セルボクロアチア語などの特殊文字、第3次に旧ソ連邦の共和国の民族の諸言語に対応できるものを考えていた。しかし残念ながら、この計画が実現される前に同氏は東京工大に転出し、その後間もなく突然の急病で若くして故人になられた。図書分類法の専門家でもあった優れた図書館員山田常雄氏のご冥福を心からお祈りしたい。

29 『スラブ研究のための提言: スラブ研究推進の方法検討会の記録』1987年7月~1988年1月。『スラブ研究センター報告シリーズ』No. 26、1989年参照。

30 拙稿「レニングラード科学アカデミー図書館(BAN)の焼失」『スラブ研究センターニュース』No. 33号、1988年、8-9頁参照。これについては、同図書館にゆかりの深い保田孝一氏が「レニングラード科学アカデミー図書館の火災・その後」と題して『スラブ研究センターニュース』No. 36、1988年、6-7頁に追加記事を寄せている。

31 前者の会議においては、国際図書交換の現状と問題点、及び図書業務の機械化が大きな主題であった。筆者もスラブ研における現状報告を求められた。この会議で一番驚いたことは、ソ連から沢山のライブラリアンが参加したことであった。拙稿:「International Slavic Librarians' Conference (ISLC)」『スラブ研究センターニュース』No. 43、1990年、12-16頁参照。

32 『スラブ研究センターニュース』No. 45、1991年、9-[18]頁参照。

33 拙稿:「ソ連8月革命後の新聞紙名: とくにサブタイトルの変更について」『スラブ研究センターニュース』No. 47、1991年、20-22頁。「新顔の購入新聞・雑誌」『スラブ研究センターニュース』No. 49、1992年、11-13頁参照。

34 「ユーゴスラヴィア関係資料紹介」『スラブ研究センターニュース』No. 46、1991年、15-22頁参照。

35 「チェコ語図書の寄贈」『スラブ研究センターニュース』No. 48、1992年、16-17頁参照。

36 拙稿:「旧ソ連共産党文書マイクロフィルムの販売」『スラブ研究センターニュース』No. 50、1992年、14-16頁参照。

37 「モジェイコ教授の提言 ‹センターの受入れ図書について〜ポーランド、ブルガリア、ユーゴスラヴィアの文学を中心として› その2 ‹チェコとスロヴァキア文学›『スラブ研究センターニュース』No. 47、1991年、17-20頁、同No. 48、1992年、11-15頁参照。

38 橋本聡「詩による20世紀チェコ文化の解読(新着図書紹介)」『スラブ研究センターニュース』No. 55、1993年、10-15頁。

39 拙稿「キエフへの旅」『スラブ研究センターニュース』No. 56、1994年、14-19頁。

40 スラブ研図書室の寄贈・交換図書の現状については、拙稿「寄贈図書受入れの現状」『スラブ研究センターニュース』No.59、1994年、18-22頁参照。

41 Takako Akizuki, *A Descriptive Guide to Russia-Related Research Materials at Hokkaido University: Individual Collections and Russian Language Microform Materials*, Sapporo, 1993, pp. 66.

42 拙稿「ボリス・ニコラエフスキー・コレクションについて」『スラブ研究センターニュース』No. 58、1994年、19-21頁。

43 Ando Atsushi, Urai Yasuo, Mochizuki Tetsuo, *A Concordance to Dostoevsky's Crime and Punishment*, vol. 1-3, Sapporo, 1994.

図書室の現状

秋月孝子

スラブ研究センター図書室の蔵書数は、1995年5月現在でおよそ77,000冊である。このほか図書以外の資料としてマイクロフィルム16,600タイトル(6,800リール)、マイクロフィッシュ5,700タイトル(115,000シート)、地図1点4,504枚を所蔵している。整理済み図書は、約4,500冊の参考図書を除いて、管理替えして附属図書館の西書庫2階に収納されている。マイクロフィルム、マイクロフィッシュはセンター1階のマイクロ室(112号室)に、地図は4階の地図室(417号室)にそれぞ別置されている。

現在継続的に受け入れている新刊の定期刊行物は、新聞100タイトル、洋雑誌350タイトル、和雑誌は35タイトルである。それらはスラブ研究センター1階の新聞室及び雑誌室にそれぞれ配架されている。新聞の国別内訳は次の通りである。ロシア52種、アゼルバイジャン1種、ベラルーシ1種、グルジア1種、カザフスタン2種、キルギスタン1種、モルダヴィア2種、トゥルクメン1種、ウクライナ3種、ウズベキスタン1種、エストニア4種、ラトヴィア2種、リトアニア1種、ブルガリア3種、チェコ4種、スロヴァキア1種、ハンガリー4種、ポーランド9種、ルーマニア2種、旧ユーゴスラヴィア3種、クロアチア2種。これらのうち寄贈・交換で受け入れているものは11種である。センターの定期刊行物の受け入れタイトル数は、1990までは180点以下にすぎなかったが、1990年の全国共同利用センターへの改組に伴い、1991年には多数のタイトルを追加発注し、受け入れ数は急増した。

センターの図書コレクションは、主として旧ソ連邦と旧チェコスロヴァキア・ハンガリー・ポーランド・ルーマニア・旧ユーゴスラヴィアを含む東欧諸国に関する歴史、政治、国際関係、経済、文学の分野をカヴァーしている。蔵書数は多くはないが、基本的な文献が精選されていることが特色の一つである。全体としては、旧ソ連で1953年以降に出版された図書、及び旧ソ連に関する図書が全体の約7割を占めている。革命前に刊行されたオリジナルの文献は僅かであるが、そのなかにはロシア最初の印刷新聞Ведомости времени Петра великого (1703-1719)、Собрание государственных грамот и договоров (1813-1828)、Путешествие на Восток его Императорского Высочества государя наследника Цесаревича, 1890-1891 (1893-1897)、Азиатская Россия (Атлас, 1914) などが含まれている。そのほか19世紀の中葉から革命まで継続出版されたロシアの主要な雑誌例えばВестник Европы, Русская мысль, Русская старина, Русский архив, Русское богатство, Чтения в Императорском обществе истории и древностей российскихなども僅かの欠号をのぞいて、オリジナルで所蔵している。また革命後パリやベルリンで亡命者達によって出版された雑誌Архив русской революции (Berlin), Путь (Paris), Русскиія записки (Paris & Шанхай), Центральная Европа (Paris), Ruski archiv (Beograd) などもオリジナルで、На чужой стороне (Berlin & Praha), Русская летопись (Paris) はリプリントで揃っている。リュブリンで19世紀の後半に出版され始め20世紀中葉まで続いたLjubljanski zvonやГласник Дружтва србске словесностиなども、わが国では珍しい雑誌である。近年特に増加し、その対応に追われているのは、マイクロフィルム・フィッシュの資料である(これらのうちロシア語のものについてはカタログがすでにできている)。1993年度末から翌年度末にかけて受け入れた代表的なものとしてはボリス・ニコラエフスキーコレクション(The Boris Nicolaevsky Collection, 441リール)がある。また昨年度末に購入した特筆すべきものに「旧ソ連邦20万分の1の地図」がある。これは旧ソ連邦閣僚会議測地・地図製作本部発行のもので、従来は軍事目的及び政府のための利用に限定されて門外不

出であったが、最近公開されたものである。旧ソ連全土の陸地部分が網羅されており、地図の総枚数は4,504枚にのぼる。

今年度の図書室の課題の一つは、ソ連邦共産党文書マイクロ版の購入である。この文書は目録 (The Opisi series) と文書 (The Dela series) に大別され、総数は5,000リールまたは10,000リールともいわれ、全体像はいまだ確定していないようである。しかしマイクロ化完成の暁には数量・金額ともに膨大なものになる見込みなので、購入にさいしても緻密な計画が必要であろう。さしあたり目録 (The Opisi series) 部分の購入を目標に検討する予定である。

スラブ研究センターの図書室40年の歩みを振り返る時、最も大きな影響を受けたのはやはり1991年12月のソ連邦崩壊であった。それに伴う多数の共和国の誕生により、従来のソ連邦中心の資料収集の方針の見直しが必要となった。さらに1990年代前半から半ばにかけての研究資料としての情報量の増大と、その情報を取り扱う手段としてのコンピュータ・ネットワークの急速な発展は、研究資料選択の基準とその取扱いに大きな変化をもたらしつつある。最近図書室で受け入れる資料の形態にも変化が見み始め、例えばInterfaxのGeneral Newsのようにコンピュータのネットワーク回線を通してのみ情報を入手するもの、CIS国家統計委員会の統計データベース (База данных Статкомитета СНГ) やOECDの世界経済データベース (Short-term economic indicators : transition economies, sources & definitions) のようにフロッピーディスクに収められているもの、GARANT (ロシア経済関連法令文書集成 Garant : economic legislation of Russia) のようにCD-Romに含まれているものなどがある。それらはすべてコンピュータを媒体として利用されるものであり、特に後者の2点は情報が定期的に更新されることが前提となっている。これらエレクトリック・メディアのさまざまの形態の資料が増加し、すべての情報が世界中に同時に一元化されて利用されはじめたことは、従来の静止している図書資料とマイクロ資料のみを対象としてきた図書館界にとって、情報革命と言えるものである。今後これらの資料形態がますます増加の一途をたどるとき、それらの利用と管理も大きな課題の一つとなるであろう。

6. その他

海外の研究機関との協定

協定に基づく交換研究者名一覧

公開講座

鈴川基金奨励研究員

文部省科学研究費補助金

海外の研究機関との協定

協定一覧

国名	協定締結機関名	締結年月日 (更新年月日)	協定内容
フランス	パリ第三新ソルボンヌ大学国立東洋語東洋文化研究所ロシア・ユーラシア研究センター	1983年9月25日 (1995年1月9日付で協定更新)	共同研究、紀要等の交換
ロシア	ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所	1990年5月9日	研究者の交換、共同研究、研究会の開催、紀要等の交換
ロシア	ロシア科学アカデミーアメリカ・カナダ研究所	1991年9月26日	研究者の交換、共同研究、研究会の開催、紀要等の交換
アメリカ	ハーバード大学ロシア研究センター	1992年11月4日	研究者の交換、共同研究、研究会の開催、紀要等の交換
オランダ	ライデン大学東欧法律・ロシア研究所	1994年1月17日	共同研究、紀要等の交換
中国	中国社会科学院東欧・ロシア・中央アジア研究所	1994年9月19日	研究者の交換、共同研究、紀要等の交換

協定に基づく交流実績

ロシアの2つの研究所との間で、毎年相互に研究者1名の交換を行っている。

協定を結んでいる6つの研究所との間では、紀要等の交換を毎年行っている。このほか、極東諸民族歴史・考古・民族学研究所との間では、相互に地方新聞の交換を行っている。

協定に基づく交換研究者名一覧

(1) 受入れ

協定締結機関名	氏　名	受入れ期間
ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所	Наталя Кузименко	1990年7月24日～8月6日
	Елена Верисоцкая	1991年6月18日～6月28日
	Владимир Кожевников	1992年6月15日～7月13日
	Борис Афонин	1993年10月17日～11月18日
	Александр Ивлиев	1994年11月24日～12月15日
ロシア科学アカデミーアメリカ・カナダ研究所	Алексей Богатуров	1990年8月10日～9月10日
	Михаил Носов	1991年7月10日～8月7日
	Александр Парканский	1992年7月10日～8月11日
	Виктор Супян	1993年11月17日～12月15日
	Анатолий Пороховский	1994年10月3日～10月28日

(2) 派　遣

協定締結機関名	氏　名	派遣期間
ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所	望月哲男	1990年9月24日～10月8日
	望月喜市	1991年9月3日～9月23日
	松里公孝	1992年7月25日～8月28日
	山村理人	1993年9月5日～10月18日
	皆川修吾	1994年7月31日～8月15日
ロシア科学アカデミーアメリカ・カナダ研究所	伊東孝之	1990年9月9日～10月10日
	原暉之	1991年10月14日～11月13日
	田畑伸一郎	1992年8月18日～9月17日
	望月喜市	1993年6月1日～6月8日
	望月哲男	1995年3月9日～3月25日

公開講座

1986年　ロシア(ソ連)・東欧社会と日本

外川継男(センター)	歴史の中の日本とロシア
望月哲男(センター)	歌う詩人オクジャワの文学について
伊東孝之(センター)	ポーランドと日本の近代化
長谷川毅(センター)	ソ連の安全保障政策と日本
望月喜市(センター)	日ソ経済関係の回顧と展望
田畑伸一郎(センター)	最近のソ連の経済動向と経済改革
木村汎(センター)	最近の日ソ関係

1987年　変貌するソ連・東欧社会

長谷川毅 (センター)	ゴルバチョフ改革の歴史的意味
田畑伸一郎 (センター)	ゴルバチョフの経済改革
望月喜市 (センター)	シベリア・極東の開発と対外経済政策
伊東孝之 (センター)	戦後ポーランドの労働者蜂起: 1956, 1970, 1980
工藤正広 (北大言語文化部)	現代ポーランドの若者たち
望月哲男 (センター)	現代ソ連の文学作品
原暉之 (センター)	スターリン批判のゆくえ
木村汎 (センター)	ゴルバチョフと軍備管理

1988年　ゴルバチョフのペレストロイカ

原暉之 (センター)	ソ連史の見直しはどこまで進んだか?
田畑伸一郎 (センター)	ソ連経済のペレストロイカ
木村汎 (センター)	外交の新動向: 内政との関連
工藤正広 (北大言語文化部)	文芸政策における第二の「雪どけ」?
望月喜市 (センター)	中ソの経済改革を比較する
伊東孝之 (センター)	東欧のペレストロイカ: 政治的側面
吉野悦雄 (北大経済学部)	東欧の経済改革
長谷川毅 (センター)	素顔のペレストロイカ

1989年　岐路に立つペレストロイカ

原暉之 (センター)	未来のための過去について: ペレストロイカと歴史の見直し
望月哲男 (センター)	ペレストロイカと現代ソ連文学
伊東孝之 (センター)	ポーランドはまだ社会主義国か?
望月喜市 (センター)	赤字財政と合弁企業: まったなしの経済
長谷川毅 (センター)	冷戦は乗り越えられるか?:「新しい思考」とゴルバチョフ外交
木村汎 (センター)	動きだした (?) 日ソ関係: 現状と展望

1990年　燃える東欧: 変革の奇跡とその将来

伊東孝之 (センター)	東独の革命: 国際政治を動かした民衆運動
沼野充義 (東大)	学現代ポーランド文学の世界
稲野強 (群馬県立女子大)	チェコスロヴァキアの静かなる革命
直野敦 (文化女子大)	チャウシェスク独裁政権とルーマニア
家田修 (広島大)	ハンガリー政治・経済改革の歩みと現状
栗原成郎 (東大)	ユーゴスラヴィアの文化: その多様性と単一性
望月喜市 (センター)	コメコンはどこへ行くのか?
木村汎 (センター)	東欧の変革とゴルバチョフ・ソ連

1991年　ソ連・東欧の崩壊: 吹き出した民族・地域主義と改革の行方

皆川修吾 (センター)	ソ連における政治改革と民族問題
長谷川毅 (センター)	ソ連軍と民族主義
望月喜市 (センター)	ソ連経済と極東経済
望月哲男 (センター)	大きなロシアと小さなロシア

田畑伸一郎 (センター)　指令経済から市場経済へ
家田修 (センター)　東欧での民族主義の再生と再燃
伊東孝之 (センター)　東欧: 東と西、南と北の狭間で

1992年　ソ連邦の解体とユーラシア新秩序の模索

皆川修吾 (センター)　新生ロシアのリーダーシップ
伊東孝之 (センター)　独立国家共同体の苦悩
田畑伸一郎 (センター)　市場経済化と共和国間関係
望月喜市 (センター)　ロシアの対外経済政策と日ロ関係: 極東経済の視点から
望月哲男 (センター)　ロシアの言論界におけるロシア像
松里公孝 (センター)　共和国における国家建設: カザフ共和国を中心に
家田修 (センター)　東欧をめぐる遠心力と求心力

1993年　新生ロシアの一周年: ロシアはどこへ

皆川修吾 (センター)　ロシア政治改革の一周年
松里公孝 (センター)　ロシアは依然「帝国」か
田畑伸一郎 (センター)　ロシアの経済改革
望月喜市 (センター)　ロシアとどうつき合うか
山村理人 (センター)　ロシア経済と農村社会
望月哲男 (センター)　新生ロシアの文学事情
原暉之 (センター)　日露関係史の再検討

1994年　ロシア極東への視座: 隣人を知ろう

原暉之 (センター)　ロシア極東の歴史: 人の流れを中心に
斉藤晨二 (名古屋市立大)　ロシア極東の自然環境
井上紘一 (センター)　トナカイ飼育は生きのびるか
村上隆 (センター)　極東地域開発の可能性を探る
山村理人 (センター)　幻想の「極東共和国」
小森田秋夫 (東大)　司法の窓から見たロシア極東
望月喜市 (北大)　極東から日ロ関係を展望する

1995年　地域からの東欧史: 国家と民族を越えるもの

家田修 (センター)　東欧とは何か
栗原成郎 (北大文学部)　東欧の魔女伝説
橋本聡 (北大言語文化部)　ハプスブルグ帝国と言語
吉野悦雄 (北大学経済学部)　多民族国家リトアニア
百瀬宏 (津田塾大)　環バルト海・環黒海の地域協力
中井和夫 (東大)　「新東欧」の登場
林忠行 (センター)　新しい国際関係と「民族問題」

鈴川基金奨励研究員

1987年度

氏名	所属	期間	研究テーマ
松里公孝	東大大学院	87.7.10~8.6	第一次世界大戦期ロシア政治史
高橋清治	東大助手	87.7.14~8.10	ロシア、ソビエト史
杉浦秀一	一橋大助手	87.7.15~8.10	19世紀後半のロシアリベラリズムの国家論
豊川浩一	早大講師	87.8.6~9.2	18世紀ロシア史
広瀬桂一	筑波大大学院	87.8.21~9.5	第二次世界大戦とポーランドをめぐる外交史
田子健	東大助手	88.1.7~2.4	ソビエト教育計画理論史
月村太郎	東大助手	88.1.11~2.6	クロアティア・スラヴォニアの政治史
大石雅彦	早稲田大講師	88.1.20~1.31	モスクワ・タルトゥ学派の文化記号論

1988年度

氏名	所属	期間	研究テーマ
下里俊行	一橋大大学院	88.7.4~7.31	ピョートル・トカチョーフとその周辺の政治評論、革命運動関係の資料調査
根村亮	一橋大大学院	88.7.8~8.2	カデット右派の政治思想
坂本清	一橋大大学院	88.7.10~7.16	1933~1938年の小協商の政治・経済問題
御子柴道夫	千葉大講師	88.7.14~8.11	スラヴ派思想のロシア・東欧における展開
イレーヌ・ラフィン	フランス国際研究所員	88.7.15~8.12	1975~1985年の日ソ関係
チェ・トンヒ	韓国江原大教授	88.7.18~7.28	チェコスロバキア事態とソ連・東欧関係
定形衛	大分大助教授	88.7.25~8.20	バルカン連邦構想におけるセルビアの役割
栗原成郎	東大助教授	89.1.23~2.3	19世紀におけるロシア・セルビア文学交流
橋本伸也	京大研修員	89.1.23~2.4	帝制期ロシアにおける教育思想史

1989年度

氏名	所属	期間	研究テーマ
清水俊行	一橋大大学院	89.7.4~7.29	ドストエフスキーと19世紀思想
村上孝之	阪大講師	89.7.9~7.22	トルストイ文学の日本・西欧への影響
吉井昌彦	神戸大講師	89.7.10~7.17	ソ連科学技術進歩、生産関数
阿部三樹夫	早稲田大非常勤	89.7.10 ~7.30	ウクライナ近・現代史(ウクライナ統合期)
仙石学	東大大学院	89.7.13~7.28	スターリン以後の東中欧の政治
源貴志	早稲田大大学院	89.7.10~7.22	文学書誌刊行物の種類・沿革
川名隆史	東京国際大助教授	89.7.17~7.31	1870~80年ポーランド社会思想
加納格	東大助手	89.7.13~7.26	ロシア革命前政治動向

氏　名	所　　属	期　間	研　究　テ　ー　マ
加藤志津子	明治大非常勤	89.7.20~7.26	30年代のソ連労務管理
清水昭雄	工学院大非常勤	89.8.5~8.14	スラブ主義と関連思想
高尾千津子	早稲田大大学院	90.1.22~2.10	ソビエトユダヤ人入植計画
越村勲	千葉大助手	90.1.29~2.3	20世紀中東欧の経済史
梶雅範	東工大学振特研	90.1.29~2.14	19世紀後半のロシアの科学史

1990年度

氏　名	所　　属	期　間	研　究　テ　ー　マ
David Wolff	東大研究生	90.6.5~7.3	20世紀初頭のハルビンの都市社会
加藤史郎	麻布高校教諭	90.8.8~8.27	18~19世紀ロシアの貴族と国家
宮廻和男	筑波大大学院	90.8.8~8.31	1920年代のロシア・フォークロア研究
三浦清美	東大大学院	90.8.25~8.31	ロシア中世文学、中世史
河原祐馬	京大大学院	90.8.16~8.31	ペーステリへの西欧思想の影響
中沢敦夫	一橋大大学院	90.9.2~9.16	ロシア中世文学、文化史
笠間啓治	早稲田大教授	91.1.25~2.14	19世紀初頭のロシア・フリーメイスン

1991年度

氏　名	所　　属	期　間	研　究　テ　ー　マ
Chun Hongchan	Pusan National Univ., Assistant Professor	91.7.10~7.24	Soviet Policy Changes toward North Korea since Gorbachev
岩下明裕	九州大大学院	91.7.10~7.29	国連におけるソ連外交の変遷:理論的、歴史的観点からの分析予備作業
崔建永 (Choi Gunn-Young)	東大大学院	91.7.10~7.31	チェーホフと現代作家によるサハリンについての作品資料、バフチン全集に関するドストエフスキィなどの資料収集
中嶋毅	東大大学院	91.8.1~8.22	ソ連邦経済建設における技術専門家と企業経営:1917~1929年
島田孝夫	中央大非常勤	91.8.4~8.31	1917年臨時政府の農業・食糧政策
渡辺孝次	一橋大助手	91.8.5~8.31	第一インターナショナルとバクーニン、第一インターナショナル・ロシア支部
生駒雅則	神戸大大学院	91.8.18~8.31	1910~20年におけるロシア革命のシベリアにおける進展、極東共和国とモンゴル民族解放運動の関連
貝澤哉	早稲田大大学院	91. 8.19~8.30	19世紀末~20世紀初頭のロシア文学、文化、思想の基礎的問題考察のための資料収集
三谷恵子	東大助手	91.9.2~9.10	スラブ語学の比較研究

1992年度

氏名	所属	期間	研究テーマ
伊藤美和	法政大大学院	92.7.3~7.23	エコロジー問題争点化の時期における水利省内の官僚機構の対応・施策研究
黒住宏	神戸大助手	92.7.7~8.3	ハプスブルグ帝国の崩壊過程と南スラブ民族問題
大矢温	中央大大学院	92.7.10~7.24	ゲルツェンが提示した「公開論壇」をめぐる国内の評価
大野雄介	東京外語大大学院	92.7.10~7.20	1950~70年代のソビエト政治思想
戸谷浩	国際基督教大大学院	92.7.14~8.11	オスマン支配下のバルカン社会及びハンガリー・バルカン・イスタンブールの経済的結び付き
桧山真一	立命館大非常勤	92.7.15~7.22	函館とロシア文化、札幌露清語学校、小樽時代のニコライ・ネフスキイ
佐原哲也	東大大学院	92.7.20~8.10	スラヴ世界とオスマン帝国
山下宗久	早稲田大大学院	92.7.24~8.1	シベリア・極東地方小民族に関する研究
矢田部順二	学習院大大学院	92.10.12~10.31	第二次世界大戦期のチェコスロヴァキア対英・対米外交
渡辺克義	東海大非常勤	93.1.18~1.30	独ソ戦がワルシャワ蜂起に及ぼした影響、ワルシャワ蜂起における空輸の実態

1993年度

氏名	所属	期間	研究テーマ
塚崎今日子	早稲田大大学院	93.7.22~8.19	ロシア語および他のスラヴ諸国文献におけるルサールカ資料の精読、研究
小森吾一	神戸大大学院	93.8.2~8.20	旧ソ連・東欧諸国における国営企業の私有化、民営化に関する考察
青木恭子	一橋大大学院	93.8.8~9.4	19世紀ロシア農村社会、A. N. エンゲリガルトの「農村からの手紙」を中心にして
荒島浩雅	阪大大学院	93.8.16~9.4	中部ヨーロッパ地域におけるアヴァンギャルド文学の歴史、また、その中での雑誌*Sovremennik*の位置づけ
宇山智彦	東大大学院	93.8.18~9.4	1905年革命期から1920年代までのカザフスタン政治史、特にその中でのカザフ知識人の役割、中央アジア諸国の近年の情勢
小野左知子	国立国会図書館司書	93.8.29~9.11	ネップ期の農村における文化政策の中での図書館事業の位置づけ
大須賀史和	東京外語大大学院	94.1.10~1.31	20世紀初頭のロシヤの思想的、文化的状況等について

1994年度

氏　名	所　　属	期　間	研　究　テ　ー　マ
髙木美菜子	早稲田大大学院	94.7.13~7.27	「ラーゲリ文学」の歴史的・文化的背景に関する基礎的研究
安野正士	カリフォルニア大大学院	94.7.11~7.22	19世紀80年代から革命前に至る時期のロシア・マルクス主義者及びナロードニキの世界経済の中でのロシアの位置に係る考察
李雄賢	東大大学院	94.7.11~8.7	ソ連軍のアフガニスタン出兵の決定過程、当時の軍の構造と特性
仙保隆行	筑波大大学院	94.7.13~7.30	第二次大戦後のスターリン期、ソ連の外交政策
金廷祐	広島大大学院	94.10.24~11.20	1925年のロカルノ条約をめぐるベネシュ外交の分析

1995年度

氏　名	所　　属	期　間	研　究　テ　ー　マ
石田信一	筑波大学大学院人類学研究科博士課程	95.7.13~8.2	ハプスブルク帝国の、南スラブ人地域における近代ナショナリズムの諸相の検討
大谷幸太郎	東京大学大学院総合文化研究科博士課程	95.7.3~7.28	シベリア鉄道建設による北方の辺境に対するイメージの変遷の検討
久野康彦	東京大学大学院人文社会系研究科博士課程	95.7.10~7.24	19世紀前半のロシア文学と文化に関する文献の調査
藤原克美	大阪市立大学大学院経済学研究科博士課程	95.7.10~8.4	ソ連企業の意志決定権の所在についての時系列変化及び各産業の特徴の検討
松戸清裕	東京大学大学院人文科学研究科博士課程	95.7.14~8.4	50年代後半から60年代前半の一連の工業・農業管理改革についての検討

文部省科学研究費補助金 (1977年以降)

年度	研究種目	研究課題	研究代表者
1977	総合研究 (A)	ソ連・東欧の農民問題の総合的研究	伊東孝之
	奨励研究 (A)	わが国におけるソ連・東欧研究・教育の実態に関する研究	松田潤
1979	一般研究 (D)	社会主義経済における所得循環の実証分析	望月喜市
1980	一般研究 (B)	70年代のコメコン国際分業の現状と80年代の展望	望月喜市
	一般研究 (C)	日ソ交渉の政治学	木村汎
	一般研究 (D)	ユーゴ1974年憲法・1976年連合労働法体制の新経済メカニズムの研究	岩田昌征
1981	一般研究 (B)	70年代のコメコン国際分業の現状と80年代の展望	望月喜市
	一般研究 (C)	日ソ交渉の政治学	木村汎
	一般研究 (C)	ユーゴスラビアとポーランドの労働者自主管理経済システムの比較研究	岩田昌征
1985	一般研究 (B)	日ソ間における相互イメージの変遷 (1978-84)	木村汎
1986	一般研究 (B)	日ソ間における相互イメージの変遷 (1978-84)	木村汎
	一般研究 (B)	ソ連のマクロ政策モデルの作成とその応用研究	望月喜市
	一般研究 (C)	社会主義におけるシステム変動: ポーランドにおける選良補充制度の変化を中心に	伊東孝之
1987	一般研究 (B)	日ソ間における相互イメージの変遷 (1978-84)	木村汎
	一般研究 (B)	ソ連のマクロ政策モデルの作成とその応用研究	望月喜市
	一般研究 (C)	ソ連の外交史料に照らしてみた連合国の戦争目的 1941-1945	伊東孝之
	奨励研究 (A)	ソ連の国民所得の成長と投資動態との関係についてのモデル分析	田畑伸一郎
	海外学術研究	「ゴルバチョフ政策のインパクト」及び「西欧におけるソ連・東欧研究の今後」	木村汎
1988	一般研究 (B)	戦間期のソ連の内政と外交における軍事的要因の研究	長谷川毅
	一般研究 (C)	ソ連シベリア・極東の経済開発と日ソ経済関係の展望	望月喜市
	一般研究 (C)	ソ連の外交史料に照らしてみた連合国の戦争目的 1941-1945	伊東孝之
	奨励研究 (A)	ソ連の国家予算と企業留保資金を中心とする資金循環のモデル分析	田畑伸一郎
	海外学術研究	ゴルバチョフ改革とソ連版「過去の克服」	伊東孝之
	データベース	ソ連経済統計データベース	望月喜市
1989	一般研究 (B)	戦間期のソ連の内政と外交における軍事的要因の研究	原暉之
	一般研究 (C)	ソ連経済統計の整理と経済政策の数理的分析	望月喜市
	国際学術研究	ソ連東欧諸国の改革と世界システムへの衝撃	伊東孝之

1990	一般研究 (B)	戦間期のソ連の内政と外交における軍事的要因の研究	原暉之
	一般研究 (C)	ソ連のシベリア極東開発の地理的研究	望月喜市
	国際学術研究	ソ連東欧諸国の改革と世界システムへの衝撃	伊東孝之
	データベース	ソ連経済統計データベース	望月喜市
1991	国際学術研究	ソ連東欧諸国の改革と世界システムへの衝撃	伊東孝之
	一般研究 (C)	ソ連のシベリア・極東開発の地理的研究	望月喜市
	奨励研究 (A)	ソ連の国家財政と国民所得成長に及ぼすその影響に関する数量的分析	田畑伸一郎
	データベース	ソ連経済統計データベース	望月喜市
	データベース	日本におけるスラブ地域研究文献データベース	松田潤
1992	国際学術研究	旧ソ連東欧諸国の国際システムへの再統合	伊東孝之
	奨励研究 (A)	ソ連の財政・金融システムの機能に関する数量的・理論的分析	田畑伸一郎
	奨励研究 (A)	ストルイピン期および第一次世界大戦前夜におけるロシアの農業組織の発展	松里公孝
	データベース	ソ連経済統計データベース	望月喜市
	データベース	日本におけるスラブ地域研究文献データベース	松田潤
1993	奨励研究 (A)	ロシアの資本形成メカニズムの転換に関する数量的・理論的分析	田畑伸一郎
	データベース	ロシア政治エリートのデータベース	皆川修吾
	データベース	ソ連経済統計データベース	望月喜市
	データベース	日本におけるスラブ地域研究文献データベース	松田潤
1994	総合研究 (A)	黒木親慶文書の研究	原暉之
	一般研究 (C)	ロシアにおける土地改革の経済的・社会的効果の分析	山村理人
	奨励研究 (A)	ロシアの国際収支表と国民所得統計の整合性に関する理論的・数量的分析	田畑伸一郎
	国際学術研究	ロシアにおける地域社会の動態分析	山村理人
	データベース	ロシア政治エリートのデータベース	皆川修吾
	データベース	ソ連経済統計データベース	田畑伸一郎
	データベース	日本におけるスラブ地域研究文献データベース	松田潤
1995	重点領域研究	スラブ・ユーラシアの変動	皆川修吾
	重点領域研究	政治改革の理念とその制度化過程	皆川修吾
	重点領域研究	地方統治と政治文化	家田修
	重点領域研究	地域間及び国家間協力関係の展開	林忠行
	重点領域研究	経済システム転換期における企業の動態分析	山村理人
	重点領域研究	経済構造と経済循環の変化に関する実証的分析	田畑伸一郎
	重点領域研究	民族の問題と共存の条件	井上紘一
	重点領域研究	地域と地域統合の歴史認識	原暉之
	重点領域研究	文芸における社会的アイデンティティ	望月哲男
	総合研究 (A)	黒木親慶文書の研究	原暉之

一般研究 (C)	ロシアにおける土地改革の経済的・社会的効果の分析	山村理人
国際学術研究	ロシアにおける地域社会の動態分析	山村理人
データベース	ロシア政治エリートのデータベース	皆川修吾
データベース	ソ連経済統計データベース	田畑伸一郎
データベース	日本におけるスラブ地域研究文献データベース	松田潤

7. スラブ研究センター年表

スラブ研究センター年表 (1953~95年)

53.04.01　ロックフェラー財団、北海道大学にスラブ研究基本図書を寄贈。
53.06.24　北海道大学スラヴ研究室設置。木村彰一主任 (~57.03.31)。
　　科学研究費総合研究「ロシア人民主義の研究」開始。
55.06.06　ロックフェラー財団文化部長ファーズ博士、スラブ研究について懇談のため北大来訪。
55.07.01　北海道大学法学部附属スラヴ研究所設立。
　　歴史·文学·政治·経済·国際関係の5部門体制 (うち経済のみが官制部門)。
56.02.01　スラブ研究室に改称。
57.04.01　鳥山成人主任 (~69.03.31)。
　　紀要『スラヴ研究』創刊。
59.04.01　法律部門増設、6部門体制に。
60.01.31　ロックフェラー財団、定期刊行物マイクロフィルム収集のため5000ドル援助。
62.04.01　スラブ研究施設に改称。
64.04.01　科学研究費総合研究「ロシア社会の近代化に関する研究」開始。
64.07.01　歴史部門官制化される。
66　法学部研究棟2階に移転。
69.04.01　百瀬宏施設長 (~71.03.31)。
　　科学研究費総合研究「東欧におけるフェデラリズムの研究」開始。
70　法学部研究棟3階に移転。
70.04.01　科学研究費総合研究「ロシアと東欧におけるナショナリズムの諸問題」開始。
70.05.01　北海道スラブ研究会設立。
71.04.01　外川継男施設長 (~75.09.30)。
72　『ソ連·東欧研究者名簿』初版発行。
73.04.01　特定研究「ソ連社会の変遷と対外関係」開始。
75.07.15　施設創立20周年記念祝賀会。
75.10.01　木村汎施設長 (~77.09.30)。
77.04.01　政治部門官制化され、さらに客員教授1名が措置される。
　　特定研究「ロシア·ソ連の東方進出と文化摩擦」開始。
77.10.01　外川継男施設長 (~81.03.31)。
78.04.01　北海道大学学内共同教育研究施設スラブ研究センターに改組。
　　文化·経済·政治の3系体制。運営組織として運営委員会を設置。
78.10　外国人研究員プログラムによる招聘開始。
79.02.02　ポリャンスキー駐日大使、センターで講演。
79.03　『スラブ研究センターニュース』創刊。
79.04.01　情報資料部増設。
79.09.22　『スラブ研究センター研究報告シリーズ』刊行開始。
80　『ソ連東欧研究文献目録』単行冊子として刊行開始。
　　レンセン·コレクションの購入。
81.04.01　伊東孝之センター長 (~83.03.31)。
81.03　研究棟増築、1階、4階、5階を使用。
81.04　基本図書整備5ヵ年計画開始。
82.04.01　スラブ研究センター長、北海道大学評議会メンバーとなる。

82.09.10　第11回ソ連東欧学会、センターで開催。
83.03.31　欧文紀要 *Acta Slavica Iaponica* 創刊。
83.04.01　望月喜市センター長 (~85.03.31)。
83.08.23　初の国際シンポジウム Order Orientation & Liberalizing Tendencies in Soviet & East European Societies 開催。
83.09.25　パリ第三新ソルボンヌ大学国立東洋語東洋文化研究所ロシア研究センターと交流協定締結。
84　ベルンシュタイン・コレクションの購入。
85.04.01　木村汎センター長 (~87.03.31)。
研究生受入れのための規定を制定。
85.07.01　鈴川正久氏よりスラブ研究センターへ2000万円の寄付。
85.07.10　札幌夏季スラブ研究セミナー The Soviet Union at Crossroad: Foreign Policy, the Economy, and the Military 開催。
86.04　ソ連経済統計データベース (SESS) 作成開始。
86.05.12　第1回公開講座「ロシア (ソ連)・東欧社会と日本」開催。
86.07.15　札幌夏季スラブ研究セミナー The Soviet Union Faces Asia: Perceptions and Policies 開催。
87.03　ソ連テレビ受信装置設置。
87.04.01　伊東孝之センター長 (~89.03.31)。
87.04　鈴川基金奨励研究員制度発足。
87.05.25　シュミット元西独首相センター訪問、懇談会開催。
87.10.21　スラブ研究推進の方法検討会、神田学士会館にて開催。
89.04.01　原暉之センター長 (~92.03.31)。
90.05.09　ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所と交流協定締結。
90.05.17　第5回公開講座「燃える東欧—変革の軌跡とその将来」に143人の受講生。
90.06.08　全国共同利用施設北海道大学スラブ研究センター設置。
地域文化・国際関係・生産環境・社会体制の4部門体制。
従来の運営委員会を協議員会に改組、新たに学外委員を含む運営委員会を設置。
90.08.29　国際シンポジウム The World Confronts Perestroika: The Challenge to East Asia 開催。
90.10　5つの共同研究プロジェクト開始。
91.01.24　全国共同利用施設北海道大学スラブ研究センター設置記念特別講演会及び祝賀会開催。
91.04　欧文単行論集 *The World Confronts Perestroika: The Challenge to East Asia*、北大図書刊行会から出版。
『スラブ地域研究文献目録』のデータベース化開始。
91.05.23　センター専任研究員セミナー開始。
91.07.11　国際シンポジウム Re-Institutionalization of the Soviet Political System and Its Impact upon the World System 開催。
91.09.26　ロシア科学アカデミーアメリカ・カナダ研究所と交流協定締結。
92.04.01　皆川修吾センター長 (~94.03.31)。
92.07.17　国際シンポジウム New Order in Post-Communist Eurasia 開催。
92.11.04　ハーバード大学ロシア研究センターと交流協定締結。
93.04.01　民族環境部門増設、5部門体制に。

93.04　ロシア政治エリートのデータベース作成開始。
93.09.02　国際シンポジウム Transformations in Eurasia and Emerging New World Order 開催。
93.09.06　ブルブリス元ロシア国務長官センター訪問。
94.01.17　オランダ・ライデン大学東欧法律・ロシア研究所と交流協定締結。
94.03　センター点検評価報告書『スラブ研究センターを研究する』刊行。
94.04.01　望月哲男センター長。
94.04　センター研究棟改装、1~5階全体を使用。
94.06.23　センター研究棟改装記念見学会及び祝賀会開催。
94.07.14　国際シンポジウム Empire and Society: New Approaches to Russian History 開催。
94.09　中国社会科学院東欧・ロシア・中央アジア研究所と交流協定締結。
94.11.15　センター創立40周年記念『講座スラブの世界』全8巻(弘文堂)刊行始まる。
94　旧ソ連邦20万分の1の地図購入。
95.04.01　科学研究費重点領域研究「スラブ・ユーラシアの変動—自存と共存の条件」始まる。
文部省中核的研究機関(COE)支援プログラム開始。

スラブ研究センターの40年

印刷日　1995年7月　7日

発行日　1995年7月15日

編集者　望月　哲男
田畑伸一郎
松田　　潤
野原　美香

発行者　北海道大学
スラブ研究センター
札幌市北区北9西7

印刷所　（株）アイワード